コロナ禍同時進行執筆

カリー屋 ナマステ別館堂主人

二年目の「ニューノーマル探索サバイバル日記」

二〇二一年度（合本）

物書き
うときゅう いっき うとQ

コロナ禍同時進行執筆

カリー屋 ナマステ別館堂主人

二年目の「ニューノーマル探索サバイバル日記」

二〇二一年度（合本）

本書は、

今（こん）コロナ禍、二〇二〇年一月からの

「外国人従業員ばかりのネパールカリー屋」おやじによる

同時進行執筆、現場レポートです。

副題は「mission impossible ニューノーマルを掘り起こせ」

最終巻が第何巻になるのかは、コロナ次第ですので、現時点では不明であります。

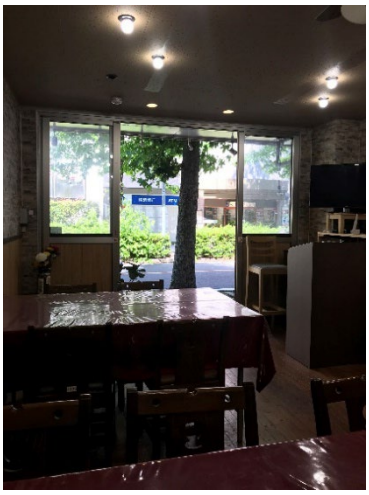
二〇二〇年八月三〇日

本書「二年目のニューノーマル探索サバイバル日記（合本)」は、同上シリーズの二〇二一年一月の巻から十月の巻 最終巻の総集編で御座います。

序

今を去ること、およそ二年前の　2019/7/29

（「ナマステ別館」堂の主人）



　ろくすっぽお客さんの来ない、カリーレストラン「ナマステ エブリバディ」のお隣、ナマステ別館ですが、たまにお食事をするでもなく、ドリンクをお飲みになるでもないお客様が結構、ふらり、ふらりとお越しになります。

　団地再生機構のエージェントの方だったり、タウン誌の記者さんだったり、新聞屋さん、お弁当屋さんや退職された方々など、来られると大体小半時くらいは、よもやま話をしていかれます。

　今日は、目の前の通りに車を止めて道を聞いてこられた方が、折り返してきて立ち寄って行かれました。

　聞かれたのは近くにある「うさぎ専門店」の場所でした。
珍しいお店なので、飼っているウサギのトリミングにわざわざ高津区から来られたとか。

　で、その方がスマホの中にとってある「うさちゃん」の写真を見せるからと（ウサギはトリミングでお店に預けてあったので）スマホを取り出し、その写真を探し始めたまではよかったのですが、何を思われたのか、突然電話をし始め、きくともなく聞いているとなんと「借金の取り立て」だったのです。

　スマホを握っている手元を見ると約一本指がありません。
「えっ、なんやの？何話してはるの？えっ、こんな話聞いとって、ええのん？ヤバないの？」

　兎に角世の中にはいろんな方がいらっしゃいます。

　しかし、そうした方々に門戸を開放して、得になるのか損になるのかわかりもしない話を

聞いて楽しむ。

自分は本来、そういうことをしたかっただけなのかもしれないのかなぁ？と、ふと思いました。

でなければ、ろくすっぽお客さんも来ない開店休業状態がもう１年半も続いていて、丸々大損もいいとこの、こんなお店を続けられるわけがありませんし。

多分自分は、この「ナマステ別館」堂の主人役が、大層、気に入っているのだろうなぁと思いました。

二〇二一年一月の巻

（黒い予兆）

朝、前日が日曜日だというのに、コロナ渦と気候変動由来とおぼしき突然の強大寒波で激減してしまった「悲しき売上」の整理を終え、自転車でお店から帰宅する途中、どこにいるかは分らなかったのですが、一羽のカラスが、やたらと大きな声で「カァーカァー」鳴くので、何事だろうと思いながら自転車を先に進めました。

朝日を浴び、反射で白っぽく光る道の真ん中に何か黒っぽい物が置いてあるのが見えました。

何だろうと、目をこらしながら自転車の速度を落としてその脇まで行ってみると、カラスでした。

お腹を天に向け、体の真ん中で両脚が縮こまっていました。

死骸でした。

そうだと分った瞬間、一瞬ドキッとしました。

カァーカァー大声で鳴いていたのは、それを悲しんでのことで、恐らく番い（つがい）だったのでしょう。

犬が死んだのを見たことはあります。飼っていた愛犬が亡くなったときに。

猫もあります。道路で車にひかれて「ぺしゃんこ」になったのを。

雀もありました。子供の頃、空から子雀が落ちてきたのを拾って、弟と二人で看病したのですが、翌朝には目が灰色になって死んでしまったのを。
しかしカラスは「生まれて初めて」でした。
獰猛且つ狡猾なカラス。
無意識にも「不死」だと思っていた、そのカラスが死んでいる。
しかも、密かに隠れることなく、生き物の死に方の作法に反し、おおっぴらに「人間の眼前」で。
そういったつかの間の慌ただしい比較対照算段がよぎった後、ある言葉が脳裏をよぎりました。
「異変」
尋常ただならぬ事態、の到来。
自転車の進行方向、照り輝く朝日の中にカラスの「真っ黒」
その残像が蘇ると、
未来に対して何か言いようのない不吉さを感じ、自転車を漕ぎながら、沖合彼方で急速に立ち上がり、あっという間に何もかも飲み込んでしまう津波のような「不安」に、気分ごと押し流されてしまい、しばらく自転車を漕ぐ先の景色が目に入っていませんでした。
それが、危ない運転だと気づいたのは、家にたどり着いてから後のことでした。

2020/12/24

（「ニーズ」考 ）

弊社提携の編集者さんから
「貴方の書いている物は、一般受けする type の物ではありません。ですから数を求めても無理です。どうせ一般受けしないのなら、書きたい事を書いていく方が良いと思います。そうして「長い時間をかけて fun を作る」それに徹した方がよいでしょう」
との advice を受けました。
「一般受けしない」というのは前から気づいていました。
まず、書いている内容による効果の発現に即効性がない。いずれも最低、発現に 1 年以上はかかる。長いものになると平気で 10 年単位の物がゴロゴロ転がっているような有様。
次に、その発現による leverage（レバレッジ=テコの効果）が 50 倍や 100 倍とか言う物ではなく、せいぜい 1.5 倍から 2 倍程度と少ない。
当然
「すぐに 100 倍の効果を」
という needs には全く合致しない。
なので「一般受けしない」という事になるのでしょう。
しかし、自分の経験と観察を繰り返した処によれば
「そんなうまい話はこの世にはない」
という結論しか出てきませんでした。
見えてきたのは「毎日の練習の繰り返し以外にヒットを生む手立ては何一つない」
というイチローの格言同様の物。
数式を用いて表せば
（A）発現までの所要期間 12 ヶ月 x 成果 1 x レバレッジ（テコの効果倍率）1.5=成果 18
（B）発現までの所要時間 1 ヶ月 x 成果 1 x レバレッジ 100＝100
一見（B）インターネットなどのお手軽簡単、直ぐさまお金がっぽ、ガッポ base の方が良いように見えます（勧誘広告ですから当り前です）
しかし「成果」の基礎実力（裏付け充実度）が（B）の場合、もし 0.1 だとしたら
100 x 0.1＝10
で、もうこれだけで 1 ヶ月より遠回りした 12 ヶ月、レバレッジも 100 ではない 1.5 の方が勝っている事になります。
そうして実際には基礎実力は 0.1 もない。下手をすれば 0 の場合も、です。
それでは、何故自分は（A）という迂遠な方法を手間暇かけて敢えて取っているのか？
といえば
これはもう
「自分の常態（normal）は何か？」

或いは
「世の中の常態（normal）を自分はどの様に捉えているか？」
に由来しております。
即ち
世の中にあるのは、自分にとっての
「不都合だらけ」「不条理だらけ」「不測の事態だらけ」「失敗の素だらけ」「誤解の素だらけ」
だからです。
一言で言えば
「うまい話やおいしい話に何一つ縁がない（なかった）」
からです。
needs は分っている「おいしい話に直ぐさまあり尽きた」という。
しかし、分ってはいても「そのニーズ」に敢えて従いたくはないのです。騙すことになるからです。

2020/12/25

（コロナ渦クリスマス特別寄稿「超ホラー世界史奇譚」）

柄にもなく今日は過去の世界史を、ざっとおさらいしてみました。
一つ目
国の為政者は自国益を最大化しようとして国家間で争いを繰り返してきた。
その裏には、自国民を食べさせなければならないというやむを得ない台所事情もあった。
二つ目
その国が発行するお金の信用は、その国の武力に裏付けされていた。覇権国通貨が強いのは、その国の武力が世界最大であるからという場合が多かった。
三つ目
ところが、武力によらず高い信頼性を得た通貨が出てきた。武力の代わりに経済力（国の借金よりも国民の返済能力の方が高い）に裏打ちされた「円」という通貨。
四つ目
それにヒントを得たのかどうかは分りませんが、武力の裏打ちによらない方法で世界を牛耳る事ができる事に気がついた集団が出てきた。
GAFA
五つ目
国が多くの自国民に食い扶持を提供するという、ある意味やむを得ない動機で動いていた事実（尺度）をこのGAFAに当て嵌めてみると、自社社員に食わせるだけにしては、余りに多くの富を得すぎている。最早そんなに稼ぐ必要はない筈なのに。
となると国の古典的な意味での権益確保に当て嵌まらない彼らの「新しい目的」とは何なのか？
六つ目
しかも、彼らは情報、AI、物流、量子コンピュータ等の超最先端技術を独占的に用いることで、どこの国民と言わず「人々の脳」まで支配することが可能になりつつある。
七つ目
今コロナ渦による分断（グローバリゼーションであるか否か）すらも最早、彼らには関係がなくなっている。
その証拠に、今コロナ渦でむしろ逆に大幅に利益を伸ばしている。
八つ目
彼らは「無償の利便性提供」という今迄にない方法で知らぬ間に、国家対国民で国家に対峙してきた国民の側に寄り添う振りをしながら「ひとびとの生活奥深く」に既に入り込んでい

て、抜き差しならない状態になり、人々はそれが途切れた時の「禁断ショック症状」に最早耐えられなくなってしまっている（結果只ほど高い物はない、の好例に）

結語

さて彼ら GAFA は武力を持った国家すらも超越して、何をしようとしているのか？

かなり怖い結論しか思い浮かびません。

追記）

ぞぉーっとしています。

特に今コロナ渦こそが、彼らにとって、人々の巣ごもりという又とない好機を得て「ひとの脳の操り」の為の「超絶ビッグシャンス」を掴んだという「ホラー奇譚」の可能性については。

（自分の妄想である事を祈ります）

2020/12-25-2

（親の教え「ご迷惑をおかけせざるを得ない時の為のご迷惑料貯金」の勧め）

自分の親がよく言っていたのは
「人様にご迷惑をおかけするな」
という事でした。
しかし、他の親御さんが言っていたのとは、いささか趣を異にして、そういった後に、長めの注釈がついておりました。
「人には他人様にご迷惑をかけたくなくても、どうしてもかけざるを得ない場合が必ずある。何かをしようとしたら必ずそうなる。
だから、普段は成る丈人様にご迷惑をかけるな。
その、日頃おかけしない分を貯金として積み立てておけ。
それは、いざ事をなす時、多大なご迷惑を皆様におかけせざるを得ない場合に使う、皆様へのご迷惑料としてな」
と。
要するに何でもかんでも、人様に一切ご迷惑をかけないように縮こまっていろと言うことではなく、一切かけないことなどあり得ないから、ご迷惑のかけ方を相互互いに許し合える範囲になるよう、工夫をしなさいと言うことでした。
我が親ながら
「うまい事を言う奴だ」
と思っております。
祈念、冥福、於天上界。

2020/12/26

（疲労困憊 家庭内外交交渉会議をやめてスポーツチャンバラでもしてはいかがでしょうか？）

子供のご機嫌取りをしている親を何故子供は嫌うのか？
親にしてみれば
「これほどまでに、気を遣い低姿勢でいるのに、何故だ？これ以上何をしろというのだ、何が不満なのだ」
という事になりますが、その不機嫌の理由がとんと分らず、オロオロする反面、内心では
「わがままもいい加減にしろ」
と密かに思ってしまう。
しかし、思いのほか、理由はとても簡単なような気がします。
子供は見抜いてしまっているからです。
「俺（わたし）のことを思っているわけではないよな（でしょう）自分の人気取りしているだけでしょう。嫌われるのを恐れているだけでしょ？愛情からじゃなくて保身からでしょう？目が顔についているんじゃなくて、背中についていて周りの目線を気にしているだけでしょう？」
だから子供は益々いらつくのでしょう。
「いい加減に猿芝居はやめろよ（てよ）
むしろ、言いたいことがあるならはっきり言ってくれた方が余程清々するぜ（するわ）ドッカン！！と」
ですが、子供の方も、本当にドッカンと言われると困るし、却って今のちやほやの方が、利得の大きい面が多々あるので、それを天秤にかけて、今ひとつはっきりとは言えない。
本当にドッカンで「ならば勝手にセイ！！」と放り出されては困るからでしょう。
なので、今しばらくは「温存待機」の様子見を決め込んで、ずるずると一日延ばしに先送りにしてしまう。
そんな相手の出方を待ち、牽制し合うような外交交渉さながらの腹の探り合いや駆け引きが家庭内で延々と続いているのだとしたら、居心地が良いわけがありません。
一仕事終えて、疲れを癒やしに帰る家庭に、仕事よりきつい「外交交渉会議」が帰宅後、休む間もなく毎晩、毎週金曜日の夜から日曜日の就寝時間まで待ち受けていのだとしたら、それこそ、お互い疲れるばかりのような気が致します。
今コロナ渦、家庭内感染対策もかねて、淀んだ空気の中で過ごすよりは、いっそのこと、庭に出て（お庭がないなら近所の公園で）風船竹刀で本気で体毎ぶつけ、汗だくになって戦うスポーツチャンバラでもされてはいかがかと、思う次第です。

2020/12/26-1

（大至急ご連絡　ウルトラ超絶天文学的大失態の件）

明日 12 月 27 日正午
「カリー屋ナマステ別館堂主人
　冬のひまわり
　コロナ渦の、こんな冬にもひまわりは咲く」
発売のお知らせを致しましたが、肝心要の
「掌編小説　冬のひまわり」
を載せておりませんでした。
というより、書いてすらいませんでした。
他の掌編は全部そろっているのに、肝心の表題作が載っていない大失態。
それに気づいて、今書き上げたのですが、もう明日の発売には間に合いません。
ですので、一旦明日、未掲載のまま発売をし、年末ギリギリに「改訂版」を
発売しようかと思っております。
当初（初本）とつけたのは（次本）（続本）（終本）などの連作集をイメージしてのタイトル付けだったのですが、発売前から次が（改訂版）いや（修正版）になるとは、お恥ずかしい限りでございます。
本日も自転車にのって買い物に行き、帰りはバスで帰ってきてしまう始末。要するに自転車をスーパーに置き忘れてきた。なので、又歩いて取りに行くような天然ぼけをかまし続けている一環の出来事のようでございます。
とりあえず発売は致しますが、ご用途お急ぎがなければ、表題作入りの年末版（予定）の方をお読みくださいませ（正月明けになるかもしれませんが）

（冬のひまわり）

　夏のある日、お店に向かうのに公園墓地を抜けていくのですが、その公園に入る手前、左手遠方の工事に使う重機置き場の銀色のスティール塀の前に一瞬ですが何か黄色い帯のような物が目に入った気がして
「んっ、何？」
そして
「歳で黄斑変遷症が更に進んだか」
と憂鬱になりかけました。
　しかし毎日自転車ばかり漕いでおりますと、年の割には存外動体視力が上がっていることにも気づいておりましたので、
「気のせいではないかもしれない」
と、これまた瞬時に思い直して、自転車を止め、彼方に目をやると、間違いなく鮮やかな黄色に染まった広がりが見えました。
「こんな処にそんなものあったっけ？」
と、自転車を左の道に切って近づいて見ると、それは辺り一面のひまわり畑でした。
自分には知識がないのでよく分りませんでしたが、恐らく一夜にしてひまわり畑の花々が一気に開花したのでしょう。
「へぇー、スゴイ！！良い物見つけた！！」

それからというもの、雨の日以外は少し寄り道をして、毎日ひまわり畑の様子を見ながらお店に向かいました。

お店の休日には、何時までにお店に行って事務処理を終えなくてはならない、という縛りもなかったので、自転車を降りて、気ままに写真を何枚か撮ったりもしました。いろんな角度や思いついたいろんなテーマに沿って。

ところが夏も終わりかけたある日、あまり立ち枯れのひまわりが目立つわけでもなかったのに、ひまわり畑の脇を通ろうとすると、これまた一夜にして全部のひまわりが消えておりました。

「えっ、何？なんで？」

理由は分りませんが、恐らくこの土地の持ち主さんが一晩で全部のひまわりを刈り取ったとしか考えられませんでした。

一体、あれだけの本数を咲かせて、これまたあれだけの本数を刈り取った。

何のために？

そう言えば、時たま車で乗り付けてしばらく眺めていく人たちも何組かはおりましたが、その数は少なく、とてもその人数や訪問回数に合わせて植えられていたのだとも思えません。

ところがそれから数日後、刈り取られたひまわりのない裸の畑に鳩や名前の分らない鳥たちが朝から集まり、多分ひまわりを刈り取ったときに落ちた種だと思うのですが、畑のあちこちで気ぜわしく地面をつつく姿が見受けられました。

「鳥のためのひまわり？ひまわりの種作りの畑？」

益々このひまわり畑が何のために「豪勢なプレゼントでもあるかのような、あの盛大な偉容を誇っていた」のか分らなくなってしまいました。

ところがそれから数ヶ月後、裸だった畑に緑が広がり始め、あっという間に成長していきました。

「今度は何が生えてくるのだろう？」

何か謎めいていて、だんだんこの道を自転車で通り過ぎるのが面白くなってきました。

そして初冬にさしかかろうとしたある日、その畑は再び黄色く染まりました。又々一夜にして。

冬のひまわり畑だったのです。

「ひまわりって夏だけじゃないんだ。冬にも咲くんだ。そんな事ってあるんだ」

大変な驚きでした。

「あり得ないことがあり得る事も世の中にはあるんだ」

そう思うと、訳も分らず、なんだか、急にうれしくなってしまいました。

コロナで、冬で、風前の灯火の自分たち。

それでも「あり得ないことだってあるんだ」

というこの冬のひまわりは、いろんな物を示唆してくれる大切な宝物のように思われました。

　自分は自転車を降りて、お店の準備が遅れるのも忘れ、無我夢中でいろんな角度から冬のひまわり畑をスマホでとり続けました。

（完）

2020/12/29

（地球様のお怒りに耳を傾けては？）

戦争でもないのに、世界大戦が起こったかようなレベルの数の死者がでている。今コロナ渦で。
死者の数から言えば、明らかに今は「戦時下」といえそうです。
しかも目に見えない物との戦争ですから、厄介です。
目に見える大砲や鉄砲の代わりに無色透明な細菌ガスでもばら撒かれているような物だからです。
その為どちらの何に向けて「盾（たて）」を構えたら良いのか分りませんから、あっちを向いたりこっちを向いたりで、落ち着きがなくなります。右往左往になります。
そのせいばかりでもないのでしょうが、最近「政」「経」「教」「法」「医」とも大混乱で何か「軸」がなくなってしまったように感じます。
「出かけろ」といったり「出るな」といったり「儲かっている」といったり「破産だ」といったり。
将又「対面で」といったり「online で」といったり「遵法」といったり「法律を変えろ」といったり、指定病院の病床は逼迫しているに、開業医は閑古鳥が泣いて「閉院」するところが続出したり、アンバランスのアンマッチで「軸がない」気がしているのです。
そんな状態で 1 年が経とうとしておりますが、これはまだ後もう 1 年は続くでしょう。
何故なら「人間の活動」に対する「地球様のお怒り」は相当なる物で、コロナを使ってなんとかその「ワガママ過ぎる」人間様の活動を抑え込もうとしている様にも思えるからです。
その第一標的が人間様以外の生態系が最も乏しい「都市部」です。
ここの人間活動を地球様はコロナを使い躍起になって押さえ込もうとしているかの様です。
人間様の「政」「経」「教」「法」「医」の混乱と悲劇など意にも介さず押さえ込みにかかってきています。いやむしろ「以前の様な回復を求めるのは間違いだ、何故そのことに気づかないのか、この愚か者め!!」と言っている様にも聞こえます。
人間世界の回復、立て直しは逆に地球世界の悪化、崩壊と利害関係が完全に相反しているようです。
さてどうするのか？この相克を。
余談ですが「政」「経」「教」「法」「医」のうち「経」に当たる「経済」の出自は
「経世済民」から来ているのだそうです。お金儲けではなくて
「世を経（おさ）め、民を済（すく）う」から。
ところが今の経済は「世を混乱させ、格差で民を苦しめる」物となっている様です。原義から大幅に逸脱している、その事にも地球様はお怒りになられているような気もしております。

2020/12/30

（初年度末２年目突入前の中間報告）

「ニューノーマル探索サバイバル日記」と題してこの１年間、自分なりの探索を書いて参りましたが、１年目最後の締め括りとしては以下の様な中間報告となりました。
曰く
「new normal（新常態＝新しい当たり前）等ありはしない。只、思い込みや思い違いを極力排し、実際の「状態」を可能な限り正しく認識する不断の努力があるだけだ」と。
どういう事かと言えば一例として
「街を人が歩いている」というのは誤った認識で
「街を歩いているのは男か女か男モドキ、女もどき、と両性具有の少なくとも５種の違った種族が歩いている。人等という抽象的なものはどこにも歩いていない」
という事です（以前の記事で既出）
その誤りがどんな結果を齎しているかと言えば
「男として或いは女として、といった言い方や考え方が taboo 視され、何でもかんでも「人として」という様になった結果、男の個性や女の個性がどんどん薄れて、中性的になってしまい、男から見て女が、女から見て男が非常に近似化した反面「類似平等」から来る弊害、即ち似て非なる物が隣にいるだけで、少しも面白くもおかしくもない、魅力のないものになってしまった」
様な気がするのです。
近頃の言葉で言えば「友達夫婦」とか「友達以上恋人未満」
まるで「煮え切らない生米みたいな関係」
これでははっきり言って「退屈至極」です。
権利としての男女平等には全く異論はありません。
しかしそれを「人」という「架空平等存在」を持ち出し、男女が「相互平等理解の為」同じような個性でならなくてはならないという思い違いが無意識に発生した結果、本来差異があって興味津々な筈の異性が、将に興味関心も湧かない、魅力のないものになってしまっているのだとしたら？それが「少子化の真因」かもしれません。
「人として」という裏側には「同じ platform に立っているのだから「完全に」解り合える筈だ」という幻想認識があるような気がします。
男女は脳も体の造りも全く異なります。同じ物が全然違って見えている訳ですから完璧に解り合える筈がありません。
「解り合えっこないけれど、分り（分ち）合える部分だけは共有しよう。不明は不明でいいし、魅力にもなるから、一緒に暮らそう」

完璧に解り合えるのが「常態（当たり前）」だと思っている誤認識から完璧に解り合える事等ないのが「常態（当たり前）」と認識を改めるような作業を、他の「それが常態（当たり前）」だと思い込んでいる分野にも広げ検証し規定し直していく。
それを「常態（当たり前）」にするのが、前の言を借りれば「new normal（新常態＝新しい当たり前）」なのでは？と思った次第。
以上が中間報告でした。
年改まって来年は、その辺を探索したいと思っております。
では皆様、良いお年を。
（中間報告につき 1000 文字既定大幅超過、御免）

2020/12/31（コロナ渦の年、大晦日）

（余談　「出る釘」のおはなし）

我が国のことわざに
「出る釘は打たれる」
というのがあります。
出しゃばってはいけません。しゃしゃり出るのもおやめなさい。位の意味ならまだ良いのですが、
最近はどちらかというと「見ざる言わざる聞かざる」「触らぬ神にたたり無し」的に解釈されている場合が多いようです。
しかし、その同じ動作を、少し言葉を換えて
「出る麦は踏まれる」
と置き換えてみると、少し良いことのように聞こえる気がします。
つまり
麦の成長（反発力の引き出し）を促すための「麦踏み」のイメージが出てくるからです。
だとしたら冒頭の「出る釘は打たれる」のことわざも、少し前向きに変えて
「出る釘は打たれるが、出たとこ勝負でやってみよう」
とか
「出る釘は打たれる。が、成長したいならどんどん打たれよう」
とかに変えてみてはいかがでしょうかね。
或いは
「出る麦は、踏まれてなんぼ、やで」
とか
「出る釘は、打たれてなんぼ、やで」
もありかと。
また、自作ながら自分が気に入っているのは
「子の成長を願う親は、子に嫌われてなんぼ、の商売やで」
でございます。
はずかしながら、相当嫌われておりましたので、自己弁護か自己正当化かもしれませんが、最年末に付、お許しを。
（余談の余談）
そういえば「麦踏み」の話は小学校の国語の時間に教わったことを覚えております。
その当時「踏んづけて伸ばすなんてまるで反対のこと、昔の人は良くそんなこと思いついたな。どうやって思いついたんだろう？気づいたんだろう？」と実に不思議に思った記憶があるので覚えていたのです。
（更に大余談）

外国語でも何でも、単語を覚えるのに、その単語や対象物に何かしらの「感想」を持つと意外と簡単に覚えられます。というより時間がたっても簡単に「引き出しやすく」なります。良かったらこの方法、お試しくださいませ。

では、また来年も宜敷お願い申し上げます。

ナマステ別館堂主人 敬白

2021/1/1

（お正月寄稿　「そこそこのほどほど」蕎麦、米談義 ）

明けましておめでとうございます。
当店の外国人従業員の言葉を借りれば
「ゲンキ？」
でしょうか。
元旦のご挨拶はこのくらいにして、昨日大晦日は、年越しに「海老天そば」ならぬ「海老天丼」を作って食べました。
お隣のお惣菜屋さんの大将から良いお値段で分けてもらった海老天があまりにうまそうなので、なんだか海老天そばよりも海老天丼にした方が、よりおいしく戴ける気がしたからです。
なので、今年は「細く長く」というよりは米粒にあやかって「まるくもっちりと」ということになりましょうか。
お米、特に餅米は叩けば叩くほど「粘り」が出て参ります。しかしその粘りも放っておくとカチンコチンに堅くなってしまいます。
ですので、人に例えれば、叩かれて粘りが出たら成果を早々に「つるっと」戴いて（呑み込んで）しまう方が良いのかもしれません。
叩かれて粘りが出たら呑み込む。で又最初から新たに初めて、それも叩かれて粘りが出てきたら、それ「をも」呑み込む。そうしてそれをずぅーっと飽きることなく、繰り返していく。
なまじ、叩かれた方がより粘りが出るだろうとばかりに、叩かれることに耐えに耐えているワンパターンを繰り返していると、却って堅くなって手に負えなくなってしまうような気がします（イメージとしては日にちのたった鏡餅がコテンパンに堅くなっている絵姿）
頑固一徹の偏屈じいさんみたいになってしまいます。
なんでも「一」がつくと碌な事がないような気がします。
一等、一丸、一貫、唯一、均一、一方的等など。
そういえば今日は元旦。
別の言い方をすれば
「一月一日」
でダブル「一」
ですので、元旦と雖も（いえども）あまり「気負いすぎた出発」をしない方が良いような気が致します。
まぁ、決意も「そこそこのほどほど」になさっておいた方が、蕎麦ではありませんが、それこそ、長続き致しますから。

2021/1/1-2

（ お正月特別寄稿「ニーズに応える」だけでいいのか？ 寂しき「個客」 ）

「食卓はゲノム編集で作られる　ほしい食べ物自在に設計」「“個”客時代の幕開け 小売業は「私だけの店」へ」「お一人様ニーズに応える」
これはインターネット上のある電子新聞に載った今日の記事からランダムに取ったタイトルです。
これを見て自分は薄ら寒い気分になりました。
そう思ったのはその新聞の別の処にこんな記事のタイトルが載っていたのを見たからです。
「あの頃、もう虚構だったホームドラマの「伝統的家族」」
コロナ渦で世の中の流れが巣籠りのせいもあって、社会、都会、職場から地域へ、地域から家族へ、家族から個へと向かっているのは分るのですが、それに上下流の相互性、可逆性がなくなり、個という一方向のみにどんどん細分化されていくと、人々はこの先どんどん孤立していくのではないかな？と思ったのです。
在庫は一個から持てるようになり、死蔵品がなくなったネット通販は画期的であった反面、それと組み合わされて開発された「好みに合った広告だけが自動的に表示される AI 広告」の影響で、自分の好みや世界観と相反する物の存在が加速度的に遠のいてしまい、世界が知らない間にゆがんで見えているようになっているにも拘わらず「之が世界だ」という誤認識を抱くようになってしまった。
それが何を生んでいるかと言えば「分断」
隣との意思疎通や異なる趣味、好み、価値観の受容や共有機会、共通基盤「部分」の喪失です。
前の記事でも書きましたが、ニーズとして存在するのは分りますし、商売から見れば家族単位の購入数より個単位の購入数の方が圧倒的に多いのでうまみが多いことも分ります。
更に今は“個”客から進んで個客の中の「場面（シーン）客」の開拓にまで来ているのも分ります。
売る側の広告のせいもあって個客は
「ワガママである事は（経済活性化上）善」「主役は私、個人なのだからそれは当然」
という風になります。
しかしそうなるとますます現実の世界での「個々人間（かん）の分断」が増していくような気がするのです。
「現在」の「ニーズに応える」のは、マーケティング上は正しい。

しかし、それが遠い将来「本当に顧客に幸せを齎すのか」という命題を忘れているニーズだったら、目先の利益を追ってそれに与（くみ）することは、商売人として絶対にやってはならない商法だと自分は思っております。
お客様も、何でも好みの物があっという間に手に入る今（こちらからで向かず全部向こうから玄関先までやってくる今）を、心の底ではさみしい、つまらない、ありがたみがない、わくわくしない、と感じているのかしれません。
「あの頃、もう虚構だったホームドラマの「伝統的家族」」
というタイトルから感じるに。
追記）
本年より 1000 文字既定を原稿用紙 3 枚の 1200 文字に拡張致します。

2021/1/2

（「誠に残念」にならぬよう願います）

我々が住む神奈川県内で､年末年始二日間でおおよそ 1000 人のコロナ新規感染者が発生し、病床数の逼迫、医師看護師の対応能力越えでの医療体制の崩壊の瀬戸際にあると、知事が「危機感をあらわにして」会見を行いました。
それに従い、当店でも昨年末、年末年始休暇に入る前の指示を改めて従業員に電話連絡致しました。
「同じ事を何度も言うが、人混みには絶対近づくな。できるだけ家にいてくれ」
と。
一方自分は、少し前の記事で、以下のような事を書きました。
「感染症指定病院（というのでしょうか）は病床数、医師看護師数とも逼迫し、疲労困憊しているのに、それ以外の病院や開業医院はお客さん（患者さん）が来なくなって潰れているところが多々あるアンマッチが起きている」
とも。
であるなら、素人考えですが、
プレハブでも何でも良いので、逼迫都道府県の国有地に臨時の感染症対策病院を大至急建て、買い上げた医療器具を設置する。
呼吸器系、感染症系の開業医を臨時国家公務員として雇用し、感染症指定病院に派遣し、感染症指定病院のヘッド医師の管轄下で助手医師としてサポートを行うようにする。
そうして、その他の開業医は、コロナ感染症以外の急を要する病気の対応に当たるようにする。
そうすれば、閑古鳥が鳴いている開業医院は臨時収入が入りますし、一部の医師看護師や病院に集中している過酷な負荷が分散されて良いと思うのですが。
それを何故、医師会は国に提案しないのか？国は何故それを医師会に提案しないのか？
医師法？医事法？厚労省行政？厚労省医官の抵抗？
法律や行政の壁？改正のための「十分な議論の時間」の問題？
ですが、現下は平時ではなく「戦時下」同様ですから、それこそ「特措法」を持ち出す条件下にいる訳です。
それすらもなかなか進まないとなると行政以前にそれを司る「法律」とは何なの？
という事になってしまいます。
自分の解釈では法律とは「交通規則の拡大版」だと思っておりました。
震災時、信号機が停電で動作せず、交通整理ができずに矢鱈と衝突事故が頻発した。
なので、法律とは、お互いが余計なぶつかり合いをせずに、スムースに暮らせるようにする物だという風に解釈して遵守してきた訳です。
外国人従業員にもそのように説明してきました。

しかし、上記のような非効率的なアンマッチな事例を見ると「じゃぁ、法律って何なの？」という疑問がわいてきます。
「法」という字は自己解釈ですが「氵（さんずい）」に「去る」と書くからには、水難水害を去らせる物ということになります。恐らく「治水」から出た言葉だと思うのですが、それからすると「法」とは「御難を去らせる物」でなくてはならない筈です。
もしそうでないなら、自分は当店の外国人従業員に自信を持って
「我が国にいたいなら、我が国の法律をきちんと守れ」
といえなくなってしまいます。誠に残念ですが。

2021/1/3-2

（危ない予感）

コロナ渦における最近の我が国の混乱や言い争いを見て感じたのは
「結局我が国国民は内心、善王の専政を求めている」
のではないか？という事でした。
絶対に誤解して戴きたくないのは、自分がそれを欲していると言うことではないことです。
観察の結果、そう見えてきたというお話です。
スーパークリーンで非の打ち所のない、全国民を利する善政を瞬時決断して超法規的に実行する善王。
民主主義などと言う手間暇コストのかかる面倒な物をしなくてすみ、全て任せておけば自分たちにとって最良の結果を齎して（もたらして）くれる存在（それを願うのは一種の思考停止状態による「疲弊からのくつろぎ））
それは、丘の上から民のかまどの煙が立ち上っている数がすくないのを憂えた古代の王の故事から連想される物のような気もします。
しかし王とて、人の子。善王がいつ悪王に代わるとも限りません。
そうなると悪王の超法規的独断専政ほど最悪な物はなくなってしまいます。
そうなりやすいのは、ひとえに全ての民にとっての善政などあり得ないからです、民同士の利害が相反するからです。それを全包含した善政などありよう筈もありません。
それで、どうなるかと言えば、一部の民の利害と結びついた場合、その民にとっての善王が、他の民にとっての最悪王になってしまうわけです。そこまでは行かなくとも少なくも「分断の素」となります。
それを防ぐために、民主主義という面倒くさいが監視をし、交代を促すシステムが生まれたような気がします（ただし民主主義というのは最大公約数（許容共通項）を求める物であって、完全無欠でも一点の非の打ち所のないものでは決してありません。ある意味欠点だらけ不備だらけです）
その面倒くささと不備を嫌って、今コロナ渦の混乱の中で「善王による専政」への内心の希求が高まっているのだとしたら、とても危険なことのような気がしてなりません。
民主主義を初め、AI による思考代替など、ひとが手間暇、面倒くささ、不断の努力を厭い（いとい）始めた途端、堕落や人間の能力の低下が始まる危ない予感がしてなりません。

2021/1/4-1

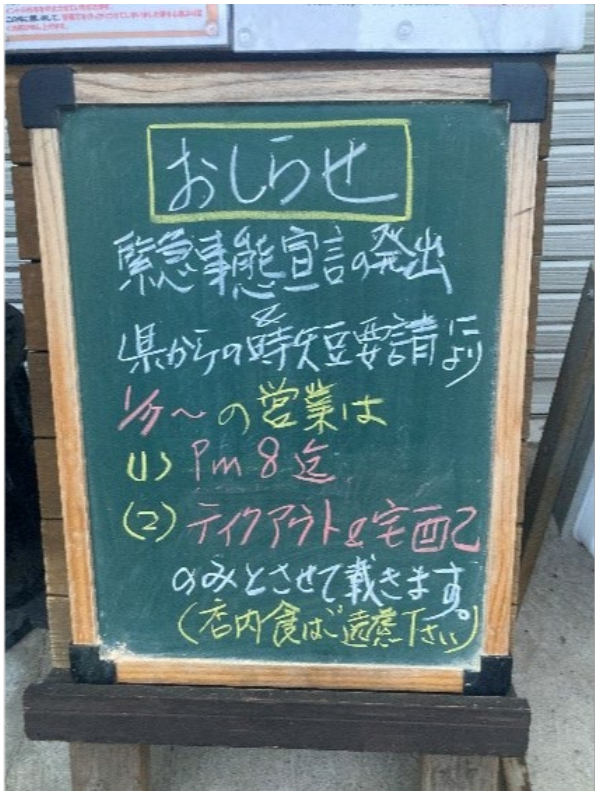
（大変失礼ながらここにて「お年賀御礼」申し上げます)

謹賀新年、天与人多幸（謹んで新年のお慶びを申し上げます。皆様にとって良いお年でありますように）
皆様方からお年賀を頂戴しながら、お返事がかけず、大変申し訳ございません。
略式ながら、この場を借りまして、お年賀の御礼を心より申し上げます。
正直申し上げまして、書く気力（集中力）がございませんでした。
書く以上は、お一人お一人に、何かコメントを手書きで書くことにしているのですが、書きたいこと、話したいことが余りにありすぎて、それをコンパクトにまとめるだけの集中力がなかったのです。
ありきたりの印刷物だけならできはしたのですが、それでは自分の気持ちが許しません。
ならばいっそ、とご無礼を承知で出さなかったのです。
その辺りの周辺環境事情は、ネット記事をご覧の方にはおおよそ察しがついているかと、勝手に想像しておりますが、ご覧になっていない方は、お時間があればネット記事をお読み戴き、それをお年賀にまとめきれなかった「コメントのご挨拶」だと見なしていただければ誠に幸いでございます。
とまれ、お年賀をくださった方々には失礼をお詫び申し上げますとともに、厚く御礼申し上げます。

カリー屋ナマステ別館堂主人　宇都宮一貴

2021/1/5

（目に見えない真っ黒な大津波の襲来 ）書庫版



10 年前同様、黒い津波が沖合彼方から、みるみるうちに足下近くまで押し寄せてきました。違っているのは、それが目に見えないことです。

1 月 18 日の国会で審議、2 月特措法改正が、1 月 9 日緊急事態宣言発出に変わり、続いて 1 月 8 日から時短要請が加わり、とうとうそれすらも待ちきれずに 1 月 7 日緊急事態宣言発出及び 1 月 8 日からの時短要請のダブルパンチとなりました。

これら営業時間短縮に、外出自粛のダブルパンチで、当店は将に風前の灯火となりそうです。

なりそうと言うのは、従業員有給休暇取得のために、1 月 6 日迄、年末から 7 連休を取らせて戴いておりますので、まだ営業していないからです。営業は 1 月 7 日からです。

しかし、とにもかくにも目に見えない津波を抑えなくてはならないので、本日、休み中ではありますが、店の表に看板を出しました。

曰く

「1 月 7 日からの営業は

夜 8 時まで。

営業形態はテイクアウトと宅配のみ。

店内での飲食はご遠慮ください」

と。
そうして、最後の頼みの綱であるテイクアウトと宅配に備えて、本日 9 時、問屋さんが開くと同時にテイクアウトボックスを大量発注しようと考えております。
現在午前 7 時過ぎ。9 時になったら速攻で電話です。間髪入れずに。
でないと、たちまち問屋在庫が払底（ふってい）するからです。再入荷未定になってしまうからです。
で、そこまでしても、売上がガタ落ちになれば、お店を閉めるしかありません。協力金を待っている時間すらないからです。
さて、この目に見えない大津波の中、乗組員とともに、どう波を乗り切るか？
海軍少尉だった船乗りの親父すらも経験したことのない、難しい舵取りを迫られております。

2021/1/5-2

（怖い想像から導き出された思いもよらぬ結論「大言壮語」のお話 ）

ちょっと怖い想像をしてしまいました。
何かというと
「コロナの変異種が出たというが、変異の変異が出たらどうなるのか？或いは、変異の、変異の変異が、つまり変異のｎ乗がでたらどうなるのか？」
と
「ロックダウンと言うがロックダウンしてもコロナ渦が収束しなかったらどうなるのか？」
と考えてぞっとしました。
ここまで想像してみると、今のロックダウンをするかしないかの議論すらも「甘い」様な気もします。
まずは「変異」次の「変異の変異」が出る前に押さえ込まないことには、とても枕を高くして眠ることができません。
自分は飲食業者なので、上記の考えに基づいてロックダウンがされれば店が潰れることになるかもしれませんが、いつまでもだらだらと対症療法を続ける「いらだち」よりは、ズバッと「手術」をした方が、精神衛生上良いような気がしてきました。
それというのも、今の店が潰れたとしても、又新しい商売を始めれば良いだけなのかもしれないと思い始めたからです。
坂本龍馬ではありませんが
「道はひとつではない。十も百も千もある」
らしいですから。
その時、今の外国人従業員さん達には「その新しい商売」を覚えてもらえば良いだけですから。
そう思うのも、人材というのは「スキル」ではなく「人柄」だと思うからです。
この人材を見つけた苦労に比べれば、新しい商売の創出の方がまだしも簡単なような気もしております。
本日はかなり大言壮語となりました。
でも、結構本気です。

2021/1/6

（「誤解を覚悟で」シリーズ第 6 弾「経済」と「多幸感」）

敢えて、本日は誤解されるのを覚悟で。
緊急事態宣言に営業短縮の時短。即ち「経済」活動の「抑制又は萎縮」
しかし、以前お話致しました様に「経済」が単に「金回りや生産消費の拡大」だけを指すのではなく、より広範により深く「経世済民」つまり「世を経（おさめ）民を済（すくう）事」であるなら、拡大方向以外の手立てがあっても良いのではないのだろうか？
そういう「解法」を探すというやり方「も」あるのではなかろうかと思い始めました。
何故そう考えるのかと申しますと、自分の中での優先順位、換言すれば今回の「渦」の因果関係の最深は「コロナよりもむしろ気候変動（温暖化）」の方がより根本的な問題である」という認識があるからです。
即ちコロナは「気候変動（温暖化）が齎す災禍の一部」にすぎない。
それが証拠に、コロナと同時に水害、異常高温、大雪も同時多発に起きている。
又、気候変動（温暖化）に歯止めをかけないと、或いは歯止めをかける新しい価値観や指標を見つけないと、コロナ以外にも災禍が次から次へと起こり続けるであろう、と。
もっと端的に申せば「今の経済（金回りや生産諸費拡大）」の縮小にこそ価値や幸福があるという考え方、または社会 system の発見と発明をすること。
それを考えていた時に、ふと浮かんできた keyword がありました。
「電気」
以前は、人口爆発や産業革命、internet 等の keyword に目がいっていましたが、その奥に見え隠れしている別の言葉をなんとなく感じていたのですが、その正体が先程見えた気がしたのが、この「電気」という言葉でした。
もし「電気がなく」なれば、internet も大量生産も AI も大規模 data も電車や飛行機による大量輸送や遠方移動も近代医療もへったくれもありません。成り立ちません。
電気による灯りがなければ「夜の活動」すらなくなってしまいます。
夜の繁華街、コンビニ、信号機もヘッドライト、夜間残業も。
簡単に言うと「江戸時代に逆戻り」です。
江戸時代には灯りを得る菜種油や蝋燭には限りがあり、お金のない庶民は、夜は早々に床についていた様です。その分、現代に比して夜の経済活動分は結果、抑えられていた訳です。
但し、他にやる事がないので自然と「貧乏人の子沢山」にはなった様です。
（逆に今は夜が明るいのと活動選択肢の拡がりで子作り時間が減り少子化の元になっているのでは？とも）

要するに「電気の発明と普及」が経済活動の爆発や人口爆発、その結果として気候変動（温暖化）の重大要因になったのではなかろうか？の keyword として見えてきた訳です。
電気が時間軸空間軸双方の人間活動を一気に爆発させた張本人。
しかし冒頭の経世済民の考え方に基づいて「電気のエネルギー（発熱）量 ≠人間が持つ本来の活性化量（＝多幸感量）」だと考えると、何やら「別の解」があっても良さそうな気がしてきました。
今年はその辺も考えてみたいと思っております。

2021/1/7

（修正版　我が意に反して AI、どうせ AI を使うなら）

まず、自分はどこの宗教団体にも属しておりませんけど。
ですが、自分が観察するに、
天は往々にして、我々が想像したり、望んだりする分かり易い、見えやすい、気づきやすい形で、その「解」を示すことは殆どないように思います。
逆に殆どが、思いもよらぬ、全く違った形や方法、現わし方でその「解」を示すよう泣きが致します。
例えば
「きれいな花が欲しい時」に「地中に花の。種」という形で、もう答えが出されているような場合です。
この例のように既に「解」や「ヒント」は鼻から示されているのに、我々はそれに気づかず「ない、ない、天は我を見捨てたか」と騒ぐことに。
天と言っても別に上方からそれが示されるとは限りません。喩えで「天」と言っているだけで、その何ものかは下方かもしれませんし、右方、左方、斜方、どこから来るかさえ分りません。
なので、四方八方、行住坐臥の常時「めっぱって」いなくてはなりませんし、従来の観念に囚われていてもいけません。
ですので、こういった作業は、とても AI にこそ向いているような気がします。それこそ、big data や機械学習、深層学習なんかが水を得た魚のように効果を発揮する気がしてなりません。
その AI に全くの門外漢ジイサンである自分のかすかな裏付けとしては古来より申し伝えられている
「天網恢々疎にして漏らさず」とか
「袖ふれあうも多少の縁」とか
「瓢箪から駒」や「ひょんなことから」
等の教えの数々です。
要するに「投網は大きく打て」「何が役に立つか分らん」「それはひょっこりやってくる」の世界。
ところが人間様は、その AI の力をたった一点にだけ絞り込んで使っているかのようです。
その一点に全ての data 解析能力を集中している。
曰く
「お金儲け」

即ち、経世済民、世を経（おさめ）、民を済（たすける）ではなく悪い意味でのそれを「経済活動」と称して。
之では使い方が反対です。「投網的使い方」ではなく「漏斗（じょうご）的使い方」
注ぎ込む先の検討を十分しないままこんなことをすれば、碌な事にはまりません。
AI の本領は、膨大な data 野中から注ぎ込む先とその優先順位の探索に効力を発揮することにあるのに。
言わずもがなの事ですが、誰かの都合という色めがねによる恣意的な物に対して AI はねじ曲がった指示の通り「変な答え」しか出せません。
之は有名な話ですが Amazon の採用試験で AI が面接官を行ったところ、男性応募者ばかりを優先的に面接させた結果、AI が採用主に「忖度」してしまって、男性にばかりに受けの良い質問をするようになったとか。
AI を自分は好きではありませんが、どうせ使うなら忖度抜きの「大投網的」に使って欲しいです。

2021/1/9-3

（新経済のあり方を生物界から得てはいかがでしょう）書庫版

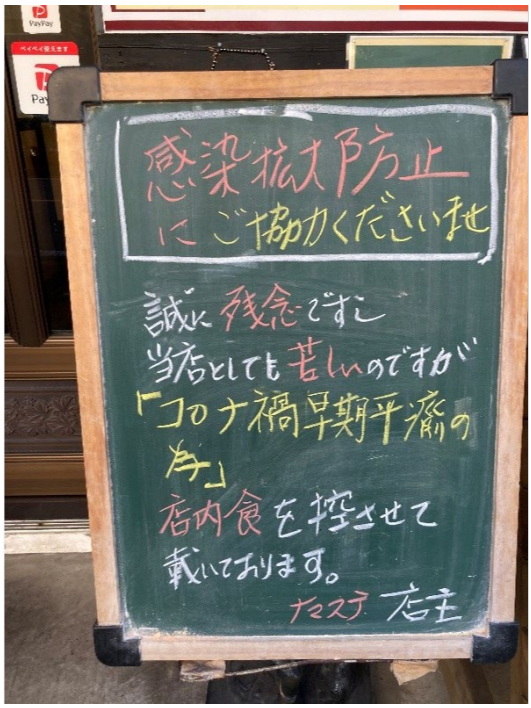
（上記訳：GDP＝国内総生産は誤った尺度です。これによる成長の追求が地球を滅ぼします　マーク・バンクス　グラスゴー大学文化経済学教授 ）

人間様と地球様がともに和する為の経済指標を考えるに当たって、ある点に着目してみました。
人間は人間である以前に地球上の生物の一種類である。ならば人間界だけを見ていたのでは分らないことも生物界（なかんずく動物界）を見てみれば何かヒントが得られるのではなかろうか？
と。
それで動物を見てみると三つの特徴に気づきました。
第一番目が、必要最低限の獲物しか捕らない
二番目が、無益な殺生はしない。
そして最後が、獲物を捕っても貯め込まない（例外的には少しあります。例えば百舌（もず）の刺し忘れのように）
でした。

之を人間界流に言い直すと
第一番目が、必要最小限生産と消費
二番目が、拡張主義に基づいた戦争はしない。
そうして最後が、過剰蓄財を持たない。
この中で、二番目の話をするとややこしくなるので、一番目と三番目の話を「経済」としてお話してみます。特に最後の三番目について。
人間の「貯め込み」の始まりは狩猟生活に於いて「狩猟した肉の保存」だったと思います。干し肉などです。
次が稲作や麦作等穀物を作る農業での貯め込みです。
それでこれら保存、ストック、貯め込みに共通していると思われる概念が何かと言えば「未来の不慮に対する備え」でしょう。或いは「安定と安全と安心」
ここで重要なのが「人間には他の生物にない時間という概念がある」ということと「その中で未来を想定するという想像力があった」という事、そうして「それに向けて計画立案する企画力」があったことの3点です。
更にこの3つを大雑把にひとくくりの概念にすると、全てが「想像力の産物」であることだと思われます。
では、その想像力とは何か？
一言で言えば「無いもの（或いは未だ無いもの）を思い描く力」
です。
ですので、想像力は「未来を見据えて前進する強力な推進力」にもなる反面「無いものにおびえて「あらず、もがな」の愚行を侵す妄想力」にもなり得るわけです。
端的に申しますと
「過度の不安に怯えて、絶対的安心安全を求めて過度の貯め込みをする」事もあるわけです。
安心安全志向というのは、実は「怯え」の裏返しなのです。失う物が大きいもの達の怯え。
ここで一足飛びに現代に戻って、その心理を経済に当てはめてみると
例えばGAFAにそれを当てはめてみた場合
「もう社員を食わせるには十分な蓄財を得ているにも拘わらず、将来何が起きるか分らないので、枕を高くして寝るためには、もっと備蓄を増やさなくてはならない」と思い始め、それがいつしか「自分が本来得るべき蓄財を奪う奴は、芽が出る前に潰してしまおう」となって、それが最後には先に申し上げました二番目の「無益な殺生の極地」である今後芽が出そうな競合潰しや覇権主義に基づく戦争やらにつながるような気がした次第。
ここは一番、人間界の今後のあり方については、生物界の有り様を少し見習ってみてはいかがでしょう？

2021/1/9-4

（この考え方はうちのお店だけ？）書庫版



戦時下、身を賭して、迫害を受けたユダヤ人 1000 人に通行許可を与えて命を救った杉原千畝。
それまで国内にだけ目をやっていた商務省を世界に目を向けた通商産業省に、これまた身を賭して一大転換させ、その後その長につくかと思いきや、あっさりと身を引いた白洲次郎。
いずれも
「かっこいい」
筋が通っている。筋を通している。
しかし、筋を通すというのは、何が何でも真一文字に通っているわけでもないようです。
遠くから見て一本、一筋に見えるものも、近寄って顕微鏡的に見ると、実は右に左に細かく蛇行していたりします。右にかわし、左にやり過ごしていたりします。
現場では、或いは当時は「風見鶏」「日和見（日和を見ながら態度を決めること）」と揶揄されていたかもしれません。
しかし、時間軸を取り、鳥の目になって俯瞰してみると、遠くからは「一本の線」「一筋」が通っているように見える。
恐らく之が「歴史の答え」なのかもしれません。
そこで話は変わって、今コロナ渦。
この時間軸視点を取っていない結果、何でも同時に両立させようと焦っているようです。

詰まり常にパラ指向（パラレル指向＝併走指向）。経済と感染防止の両立という建前。
しかしこれに上述の時間軸視点を取り入れると、シリーズ指向（同時ではなく、順番、優先順位を取り入れた縦つなぎ指向）がうまれ、まずは感染抑止、次に経済再建という立て方が「解」として浮かび上がってきます。
今のパラ指向は、二兎を追うものは一兎を得ずで、時間ばかりがたって結局トータル損失で見ると、却って被害が甚大になる気がします。
確かに、前段の話からすると、コロナ渦は初めてのことなので、ある程度の右往左往、試行錯誤は仕方ないでしょう。ですから、我々も施策について、一挙手一投足毎にあれこれ言っても仕方がない気もします。余り細かく言い過ぎると却って施策実行側が萎縮してしまって思い切った手が打てなくなるのも自分の経験則上よく分ります。
しかし、反面、いくら何でも、我々飲食業者も、今を生きている生身の人間です。
一体いつまでこんなことだらだらやっていりゃ良いんだ？いっそ三ヶ月売上ゼロ。しかしその後 1 年以内に売上復帰という目の子勘定がたった方が、終わりも見えず生きながらえるより精神衛生上も、借り入れ計画の立案上も良いような気がするのも事実。
ですが、この考え方は自分の店だけなのでしょうか、ね？
当店の場合は感染抑止最優先で、店内食中止、テイクアウトと宅配のみに致しました。
売上推移は、これからチェック致します。

2021/1/10-2

（当店流の「宣伝法」ネパールカリー屋ナマステ亭主激白の巻）

その端緒が現れ始めたのが昨年 2 月からだとすると、この 1 月で既に 1 年、曲がりなりにも今コロナ渦の中で数々の危機を交わして参りました。
結果的にそうなっただけかもしれませんが、駅前にも出店せず、大手との提携もせず、店も大型化しませんでした。
「メイン（中心）より少し離れて、コンパクト（身の程、身の丈）経営」
その根底にあったのは「お客さんとも、従業員とも、つかず離れず、でも密に交流が実感できる範囲」というのを無意識にも求めていたからのような気がします。
駅前に行くとお客さんが不特定多数になり顔が見えなくなる。大手と提携すると「下請け」になって、思ったことができない。店を大型化するとお客さんに目が届かなくなる。等など。
そうして、その先にあったのが「短期の利益最大化」より「持続的サービスの提供のための存続優先」の経営でした。
つまり「派手さはないが、いつ行ってもそこにちゃんとあるお店」
そうじゃないとやる意味も感じないし、第一面白くなかったからです。
話は変わって、これまたたまたまの偶然からですが、上記のような姿勢もあってか、売上減がお国の助成、補助、支給制度の適応範囲外となり、その給付金も戴けず、又仮に範囲内だったとしても、当時の給付までのスピードでは「援軍来たれども、時既におそし」の結末が予想されて、それにも手を出しませんでした。
しかし、敢えてそれを行わなかったのは、これまた根底に「お上なんぞにゃ頼りたくない。あとあと、言いたいことが言えなくなる」という負けん気みたいなものからでした。
もう少し科学的（経営学的）に言うと「借りた物はいずれ返さなくてはならない。やっと当座の難をしのいでも、その後取り立て苦から倒産するのでは、単なる延命にしかならない」という考えからでした。
そもそも第一番目からお上を当てにするというのは「筋肉質経営の放棄」みたいな物のような気もしました。鼻から「他人依存の贅肉経営は御免だ」と言ったら怒られるでしょうか。
まとめて言うと「借金ジャブ漬けのブヨブヨ体質」にはなりたくない。
もちろん未だ中間地点、下手すると未だ三合目地点（という事は、コロナ渦は後 1，2 年続くとの認識なのですが）の話だとすると、後々には「背に腹は代えられぬ。やっぱりお金貸して頂戴。今までのええカッコしいはなかったことにして」になるかもしれませんが。
とまれ、先々にはそういったことも起こり得る可能性は十分ありながらも、現時点では前半部分 2 点の考えを素に当店の経営を進めたいと思っております。

以上
ネパールカリー屋ナマステ亭主激白
に姿を借りた、当店の「宣伝」でございました。
陳謝。

2021/1/11

（逆転）

人間は感情の生き物です。
そうして、ものは何でも「考えようで取りよう」でもあります。
同じものが考え方、取り方で、全く正反対の感情を引き起こすことが多々あるようです。
例えば、今コロナ渦での「外出自粛」
自粛と言いつつ「禁止、抑制、中止」と全てマイナスのイメージです。
或いは経済に関しては成長「鈍化」や温暖化に関して排出ガス「規制、抑制」と全てマイナス表記。
これだと「本来100円もらえるところを70円で我慢しなさい」とか
「100の能力があるのは分っているけれど、7割方で抑えておきなさいね」
といわれたような不平、不満、不完全燃焼の感情を抱いてしまいます。
しかし同じ「抑制」でも、マイナスのイメージではなく、それをする事にプラスの、或いは前向きの意味を感じられたら、我々は「喜々として」それをするようになる事もありそうです。
その例をいくつか挙げてみると
我が国では「苦労を避ける」又は「失敗を恥じる」傾向がありますが、逆に外国では「苦労や失敗を経験しないとgreatにはなれなれないから、成る丈多く苦労や失敗の経験を重ねよう」という前向きな捉え方をしていますし、
アジアのある小国では、我が国に介護要員として就労しに来るのを「その仕事で人助けをする事で、来世への徳を積む」とこれまた前向きな評価をしています。
これらは前者冒頭の部分が「抑制」であるのに対して、同じものが後者では、積む事（累積）による「到達」や「達成」と全く逆転している事に気づかされます。
この考え方、捉え方に倣えば
外出「自粛」や「禁止」は「生存、存続率up」「今後の生活や事業のあり方の見直しのgood chance」とも捉えられますし、
温暖化「抑制」や経済発展の「減速」や「制御」による「7割経済」も
地球環境への「適正化」や無駄や過剰の整理整頓による「適者生存率upの適合経済」
即ち「GDP（国内総生産）を追い求めることを「成長、発展」と名付けた背丈の成長ばかりに目をやる「我が子のみ可愛がる未成熟な大人の経済」ではなく、
経世済民（世を経（おさめ）民を済（すくう）という定義下での経済である「存続の為の経済」
換言すれば「成長と発展」ではなく「発展」に換えて「発達と適応進化」に置き換えた中身の成熟度が求められる「大人同士の隣人経済」の確立ともなり得ます。

と、このようなご提案させていただきますのも、我々が経験してきたように、不満や愚痴や怨恨は何も生み出さずに。破壊と暴力しか残しませんが、逆にその中に内在する「怒りのenergy」を浄化（前向きに捉え直し）する事で「多大な推進 energy」にもする事ができる様な気がしております。
少なくとも「良い事が何一つなく、御難続きの連続だった自分の過去の行程を、曲がりなりにも生き残ってこられた」経験則からは、その様に思えます。
簡単に言うと
「全てを逆転発想」し、pinch を chance と捉え直す見方を「考え出す」しかなかったのだろうと、思っております。

2021/1/12

（コロナ渦短期集中決戦のご提案）

コロナ感染の拡大が止まりません。
爆発してしまった様です。
当店のある神奈川県でも、一昨日の新規感染者が 1 日で 999 人と 777 ではありませんが、slot machine みたいな数字になってしまい、びっくりしました。一頃の東京都の新規感染者と見まがうばかりの数字。
で、案の定 takeout と宅配に絞り込んだ対策を打ったものの、一昨日と昨日は何とか良いところまで言ったのですが、昨日、三連休最終日は、いつもなら一番売上が高いはずなのに売上は大幅減でドッカンのドボン。
このきっかけとなったとおぼしき原因は、南米からの帰国者に第三番目の、変異 corona virus が見つかった事から来る、感染者数爆発の恐怖を後押しし、終わりが見えなくなりつつある事に対する無意識の恐怖の拡がりがある様な気がします。
自分の憶測では、第一番目の corona で 1 年。
二番目の、変異 type の出現で 2 年。
今回の三番目の、第二変異 type で 3 年、と変位数と収束に必要な年数が同一であるのではないかと考えております。
つまり、第四、第五、第六が出てくれば、4 年、5 年、6 年と長引く訳です。
なので、以前の記事で 3 番目が出てこない保証はないのだから、2 番目に留まっている内に lockdown した方が、経済のトータル損失は、少なくなるだろうとご提案した訳です。
過去の歴史を紐解けば、欧州のルネッサンス期に黒死病（ペスト）が蔓延し、当時の欧州の人口の三分の一の命が失われたとか。
当時の欧州の人口が 1 億人だとすると実に 3000 万人もの人々の尊い生命が失われる大惨禍だった訳です。
勿論、当時は感染症の知識も、それに対応する医療体制もなかった訳ですから、そうなるのは必然なのですが、現代に比してマシだったのは、移動手段が徒歩とか馬車に限られていた為、その他の地域への伝播が抑えられた事です。
ところが現代は globalization 初め交通等、移動手段の発達で、その伝播力は格段に高まっております。
医療というキャッチャーミットはしっかりしてきたが、移動手段の多様化、大容量化、遠距離かという「飛んでくるボールの数」は矢鱈目ったら増えてしまっている。
ところがミットの数は早々急には増やせない。
であるならここはもうボールの数を減らすしかない訳です。
で、そのボールが何かと言えば「交通」
このボールである感染爆発地域の交通量を当時の欧州レベルに一時戻すしかない、と。

即ち
国内外の旅客機、クルーズ船、電車、バス、自家用車、バイクなどによる移動を一時完全に止め、貨物飛行機、貨物船、貨物トラック、宅配車両、バイクなどの物資輸送の交通手段及びパトカー、救急車、介護施設送迎車、消防車等の緊急車両のみ移動を許可する。
但し、期間は１ヶ月限定。
その間の loss は政府が「集中的に財源投与」し全面保証する。
という案しか浮かんできませんでした。
国も資源を一時一点に集中し、国民も一時控える。
それしかない様な気がしております。

2021/1/12-2

（「巣ごもり時間の有効活用」にコロナ渦後のビジョンの具体策を考えてみることにしようかな、と）書庫版

どうせ「当たるも八卦当たらぬも八卦」なので、思い切って書きましょう。
一都三県、緊急事態再宣言発出後、初の週末の渋谷の人出の多さが感じられる写真を見て、何か妙な差異（又は差違、分離）感を覚えました。
インタビューを聞いたわけでもないし、話の中身も当然写真からはうかがい知ることはできないのですが、一言で言うと
「女子の楽観、男子の悲観」
とでも申しましょうか。
女性、特に今コロナ渦でも比較的ダメージの少ない裕福な家庭の女性は
「何があっても、私だけは大丈夫よ」
という意味不明の多幸感による、これまた全く根拠なき自己特別存在視観
から、
男性は「コロナ中もその後も、どうせ良いことないし」
という、言ってみればある種のヤケクソ観から
無言のメッセージを体全体で発信しているように感じたのです。
ですので、コロナ持ち込みによる家庭内感染防止の意味では、まだまだ女性に訴えるのは効果がありそうですが、男性の場合はともすると逆効果になるや、もしれません。

若い男性には「コロナを超えたところで、その先、良いことどころかもっと恐ろしいことが待っているに決まっている。無駄だよ、コロナ予防なんて。罹って死んじゃった方がマシかも」
で、家族持ちの男性は「仕事から家に帰ったところで、どうせコロナ持ち込みの張本人か真犯人、という白い目で見られる。第一日頃から家に帰ったところで異端のちん入者扱いの上、あれせい、これせい、の奴隷状態で、気が休まらなかったし。外にいた方が楽だよ」
と。
中には男女ともに子供の頃、台風が来るのにわくわく感を覚えたようなタイプの人もいるのかもしれません。要するに怖い物見たさ派の人たち。
では、こういった男性陣が外出を控える気分になってもらうにはどうしたら良いのか？
自分なりの答えとしては、
特に若い人には「コロナ渦後のビジョン」
家族持ちの男性には家庭内の現在の「女高男低」（特に裕福家庭）ポジションを「男女平等」ポジションに変えるという「実に迂遠な方法」しか思いつきませんでした。
之を平たく言うと
「抜本的改革とその後のビジョン」
恐らくこのコロナ渦は、こんなペースでいけば、年単位の長丁場になるでしょうから、自分の場合、その余りある「当店閉店後、常習にしていた外でのチョイ飲みが出来なくなった夜の巣ごもり時間」の有効活用策として、上記「お題目」をお題目で終わらせない、真面目な具体策を考えてみることにしようかなと思い始めました。
見た目はうんちゃら会系ナンチャラ組風、強面（こわもて）の銅鑼声（どらごえ）ですが、根は結構真面目なんです、ワタシ。
注）
掲載写真は日経電子版からダウンロード　1 月 11 日渋谷駅前交差点風景です。

2021/1/12-3

（コロナ渦の役割？ド派手な「胡蝶の夢」からの覚醒 ）

連日記事をいろいろ書いている中で、いくつかのキーワードが出てきました。
勿論自分なりの、ですが。
曰く
「お金」「肩書き」「カッコ付け」「電気」「インターネット」「仮想」それと「過剰」など。
そうして、少なくとも前の三つがコロナの前では、何の役にも立たないことが判明した。
一方後者三つは、今まで、前者三つのブースター（増幅器）として働き、最後は地球サイズに対して「過剰」になり、アンバランスになってしまった。
それに対して対局のキーワードとして
「地球」「生物」「環境」の三つが出てきて、最後は「適者生存」という言葉にまとまりました。
これらを簡単にまとめると
「過剰」を「最適サイズにしよう」と言うことになります。
或いは「仮想」を「現物サイズに戻そう」と言うことにもなります。
要するに「apple to apple」「お互いの真水の部分を出し合っていこう」
という事に。
そう思い始めたのは、働く女性が、外出する機会が減って「お化粧」と「外出着」にかける出費をまず控え始めた事と、タワマンの没落、地方への移住、ブランド卒業証書、ブランド会社社員証の風化、そうして極めつけは「コロナの前では政府首脳の肩書きは役に立たなかった」ことでしょうか。
我々はひょっとしたら産業革命以降、夢を見ていたのかもしれません。
ド派手な「胡蝶の夢」を。
コロナはそれが夢であったこと、を気づかせてくれているのかもしれません。
注）
「胡蝶の夢」＝豪華絢爛から醒めると、それは夢で、結局何も変わっていなかったという故事

2021/1/13

（(続）ド派手な「胡蝶の夢」からの覚醒）

直前の記事でお話ししました「胡蝶の夢」の中の「夢」がわかりにくい方もいらっしゃると思いますので、少し紐解いてみます。
その「夢」とは何か？
ここで指す夢とは「経済成長」の事です。
通常では「経済」はGDP（国内総生産）」とか「お金儲け」を意味します。
しかし、これが我々の「通常認識」「通常語使用」になってしまったのが問題の様な気がするのです。
というのも、本来は「経世済民」即ち「世を経（おさめ）民を済（すくう）」のが経済の意味するところであり、本来の目的だったからです。要するに「和する（分け合う、分かち合う）」という意味だった様です。
それがいつの間にか「環境破壊」と「社会内格差」の増幅器になってしまった。
なので、前者の夢、即ち「GDP 信仰」「お金儲け」の誤解や誤認識、取り違いから醒めて、後者、即ち本来の意味である
「経世済民」に立ち帰り
「地球と和する」必要がありはしないだろうか？
という意味で「ド派手な胡蝶の夢からの覚醒」と著（あら）したのです。
「経世済民による、人間社会の成長と成熟」こそが「経済成長」の名に相応しい有り様（ありよう）ではなかろうか？という意味で。
夢を illusion(幻想)から本当の dream（夢）へ、です。
そうした中、又新しいキーワードが出てきました。
「downsizing」
です。
之も単に「縮小」と捉えるのではなく、プラスの意味を込めて
「物理的な拡大、拡張を抑え、心の豊かさや充実、充足感を深める」という意味で使います。
downsizing というのは、現在の物理的拡大、拡張に対して「down」と言っているのであって、本来なら
「Just-sizing（身の丈）」
といった方が良いのかもしれません。
但しそれは地球様に対して。
格好よく「Just-sizing」などと言った処で、現実問題としては物理的に「downsize」せねばなりません。当然苦しみが伴います。
具体的に言えば「限られたπの奪い合い」が起こり、そこから生まれる「苦しみ」に遭遇するでしょう。

しかし、ここからが「ものは考えよう」です。
どうせ限られたπであるなら、逆に限られたπをシェア（分け合う、分かち合う）してはどうでしょうか？
之には、今度は地球様と人間がではなく、人間同士が「和さなくては」なりません。
しかし、これまた限られたπを「限られた市場、職場、利益」と捉えるのではなく「限られた範囲（地球、地球資源）」と読み替えれば、今度はその狭い範囲の中で和するコミュニケーション能力がもとめられる事になります。
つまり、狭く限られているからこその「和するコミュニケーション能力」が。
ですので、今言われている ICT(information and communication technology)ではなく、CA(communication ability＝交流能力)こそが、求められているような気がします。
ICT は CA の一手段に過ぎない話でしょう。
また、現在三「密」は良くない事とされていますが、今後のコミュニケーションにおいては、逆に「密」はとても良い事に変わっているかもしれません、ね。

20210115

（自分としては「結構深刻なレベルの焦り」）

以前の記事の中で「適者生存」という言葉を使いましたが、その語が出てくる前行程というのは、自分で書きながら少しビビってしまうのですが、一気に言ってしまうと
「淘汰」
です。自然淘汰の大労（おおなた）
なので、適者生存とは、その大労をよけるすべを身につけたものだけが「生き残る」という意味になります。
この大労は大変非情なメカニズムで、あらゆる生物の上に同様に動作します。
万物の長、霊長類の人目人科の人間様と雖も、例外扱いはされません。
病床が逼迫しようが、飲食店が潰れまくろうが、又、そこに巻き起こされる悲劇や悲喜こもごもの感情等には一切耳を貸さず、目もくれずに、その労はオートマティカルに動作し続けるようです。
善悪とか正義不正とかのレベルではないようです。
その選別原理は、只ひたすら
「設定された条件に合うか、合わないか」
だけです。
「環境保護」などと人間が主役面して言っておりますが、それは主客が反対なのです。
環境が我々を選別しにかかってきはじめた、というのが真相のような気がします。
あくまでも環境があるじ（主）で、人間を含めた生物全ては、その選別される駒（客）でしかないと。
之の主客に関する認識に「人類の最大の誤認」があるような気にさせられたのが、今コロナ渦での経験でした。
曰く
「環境保護」などという人間の傲慢ではなく、一刻も早く人間の側が、一歩下がって謙り（へりくだり）「環境適合」しないといけないのではなかろうかと。
でないと、環境側から人間社会は「選別後存続却下」されてしまうかもしれません。
曰く
「No need any more!! You, Human beings!! We will delete you from the planet!!」
もし、自分の説が正しいとすると、今コロナ渦後の「ニューノーマル」はとんでもなく抜本的な大転換意識改革の産物でないと、その後に人類が続くことは最早「相当に困難なもの」となるような予感がして、結構毎日
「時間がない」
と個人的にはかなり深刻なレベルで、焦っておりまする。

2021/1/15-2

（本日の第２弾「常識突破の試み」）

前記事以降、本日トータル４本。この記事を含めてあと３本続きます。
まず初めに、自分は科学者でも医学者でも浪花節愛好家でもないことをお断りしておきます。
ただ、かなり科学や医学（特に脳科学）に興味関心を抱き、浪花節にシンパシーを感じているのは確かですが。
そうした自分は以前
「義理人情」はかなり科学的であるという意味の記事を書きました。
それは、決して「義」と「理」を一本にした「義理」というある種の貸し借りから来る「負債感」や、果たさなくてはならない「義務感」「責務感」とは違うよという意味でもありました。定義のし直しによるイメージの転換の試みでした。
どういうことかを今一度おさらいしてみますと
「義理人情」の「人」を天秤のはかりの軸にして左に「義」と「理」があり、これが頭に当たる。又「人」を挟んで右側に「情」があり之が心に当たる。そうして天秤の軸の「人」が身体にあたり、身体を挟んで頭と心がバランス良く保たれているのが理想の姿である」
といった意味でした。
あと、今少し追記すれば
「左右バランスがとれる値としては「義」と「理」がそれぞれ 0.5 で、足して 1．右の「情」が一つで 1．それで 1＝1 で左右均衡。なので、比率配分から見て「頭」より「心」の方がより重みがある。
又身体を基にして頭と心を均等且つ円滑にバランス良く働かせるのが元気の素になるであろう」
とも書きました。
しかし、科学的に言えば「心」も「頭の中の産物」です。もっと言えば頭（或いは頭部、脳部）とて、身体の一部に過ぎません。
ですので、ここでは少し言い方を変えて「義」と「理」を「理性」又は「顕在化された思考野」とし「心」を「感情」又は「顕在化されていない思考野」平たく言えば「感情の世界」とか「言葉にならない、捉えようのない世界」或いは又「秘められたるマグマ」とでも言いましょうか。
ところが最近は、この「義」と「理」の世界や力、或いは扱われる「価値比重」が大きくなりすぎ、古来より「心」と言われてきた部分の「潜在野」の感情のもつパワーが押しつぶされてきた嫌いがあるような気がします。
もう少しポンチ絵風に言いますと

「AI に代意表される義と理、即ち「論理」が肥大化し、その結果、生物としての人目人科が本来持っている「不可思議なエネルギー」を圧殺し封じ込め、その活躍や躍動の場を奪い、元気の素を失わせている」
ように見受けられました。
これは科学、医学、浪花節愛好家としての自分の観察から来る直感です。
ですので、数値的な立証は出来ませんが、それこそ自分の非論理思考野はそのように申しておりますので、本日はご報告させていただきました。
「常識」とは「顕在思考野」の産物なので、この際「非常識」つまり「潜在思考野」先導で「常識」を突破してみてはどうなのだろう？とおもっております。

2021/1/15-3

（本日の第３弾「最近うんざりした事」）

電子新聞の、コロナ渦緊急事態宣言における飲食店の時短にどう対応するかのアンケートで８割の飲食店が、時短要請に従うと回答して言うのにちょっと驚きました。
何に驚いたかというと、まだ８割の店が少なくとも２月７日迄は持ちこたえる体力があるのか！！という事に対してでした。
それというのもnet news記事上では「売上減８割で悲鳴」とか「我々に死ねというのか!!」とか言う記事が踊り、すぐにも８割の店が潰れる様な印象を抱いていたからです。
そういえば、余り活気があるとは言えない、駅から大分距離のある我が町でも、まだ「閉店します」とか「長い間ご愛顧、有難う御座いました」という張り紙は未だ一つも出ていません。
Net news 記事もこれ又商売ですから、人目を引くキャプション付けはある程度は理解できます。
がしかし、こればかりでは、一体世の中の実相、実態がどうなっているのか、却って分らなくなってしまいそうです。
事実と興味対象は違うからです。
読者に苦い事実もあるからです。
という様な「疑問点」ないしは「違和感」の視点で見てみると、ある日は「医療現場逼迫」「医療崩壊」「医療壊滅」外出自粛、出歩かないで、という記事が出たかと思うと、その同じ日の夕方には同コーナーに「飲食店恨み節」「ふじゃけんじゃねぇ」「ラーメン店地獄絵図」みたいな正反対の記事が載り、全ての真犯人は「外出自粛」にあるかの様に書かれています。
確かにone side報道はいけませんが、読んでいる方としては
「えつ、何？どっちなの？どうしろって言っているの？」
と困惑してしまいます。少なくとも自分は。
そうかと思えば、前の記事でも書きましたが、政界、財界、芸能界を問わず、こと有名人については、その一挙手一投足に対して「あれが悪い、之が悪い。ここが変だ。之もおかしい」と、もし自分が事ある毎にそう言われたら「ノイローゼ」になってしまいそうな程いろいろ言われ、叩かれています。まるでnetいじめみたいに。
まぁ、自分も政治家や芸能人は好きとは言えませんが、それにしても之では
「チョット言っただけで、これほど叩かれるなら、何も言わないに超した事はないな（声を上げまい）」
という風潮が逆に出てきてしまっても不思議ではないでしょう。
で、これらをまとめて俯瞰してみると、今日もまた叩かれることを覚悟で申せば

「民主主義崩壊の隠れ真犯人は、清貧の image とは正反対の高給取りで、その既得権だけは絶対に死守するために、部数至上主義編集長の意向に忖度しまくった記事を書き「書いた責任は全く取らない」文屋や」
と言いたくもなります。
なので、最近、internet 記事は、政経、社会関連はパス気味で、天気、スポーツ、料理、科学関連にばかり目がいく様になってしまいました。
それでも偶にパスした分野で目を通すのは、冒頭の様な経済記事のチャート（図表）位のものになっております。

2021/1/15-4

（本日の第４弾「どうせするなら前向きに」）

さて、本日の抽象的なお話は、前回までにして、本弾は当店での具体的な取り組みのお話です。
その前に本日当店の現況報告を少しばかり。
本日はかなりの冷え込みからか、ランチタイムの売上合計額がなんと 2500 円。
一週間前の同じ金曜日の昼間比 10 分の 1 でした。
この状態が続き、それこそ「常態」となれば、とてもではありませんが、存続は無理です。
何故ここに来てこれほどまでに落ち込んだのか？
それでネットの経済記事にのっていたチャートを見てみました。
すると、感染者比率が 20 代から 30 代がぐんと増え、60 代以上がグッと減っていることが分りました。
詰まりそこから類推できるのは、ご当地のメイン人口帯である年配者達がであるかなくなってしまったという事です。出歩かないから感染者が減っているのだろうと。
では、何故急に出歩かなくなったのか？
それは寒さだけではないような気がしました。
明日から始まる全国共通テストは、年齢的に関係がありません。
年金暮らしなので、給与ダウンも関係がないでしょう。
では、何故？
そこで思い当たったのが「病床逼迫率の上昇」と「その他医療を受け入れる余地がない」という記事や「自宅待機中の死亡者が 144 人になった」という記事から
「病気に罹っても看てもらえない。罹ったら最後だ」
という恐怖感で外出に足がすくんでしまったのではなかろうか？という推測でした。
はてさて、どうしたものか？
こんな心理の時に無理に引っ張り出すような戦略は却って逆効果だし、こちらから出かける宅配も車両一台では、限りがあるし。
で、ここはもう回復後の顧客獲得（詰まり当店を選択していただける事）の種まきに徹するしかないと思い始めました（以前にもそんなことを申し上げた記憶がありますが）
それで、思いついたのが現在当店の主力販売筋であるテイクアウトの袋の中に「丸めロールタイプのちょっと高級感ある紙おしぼりを注文人数分お入れするサービスの開始」でした。
一つには「衛生や手洗いの訴求」の意味で。
一つには「他業種他店がコストダウンでそういった物を省く中、全く逆の発想で、ちょっとしたコストをかける事で、何かしらのインパクトを残そう」という意味合いからも。

要するに、どうせ感染防止策で外出自粛やら時短というなら、いっそハンディと捉えるより、一歩前向きに捉えてやろうという、ヤケクソの非常識展開戦略とでも申しましょうか？
他には策がないので、とりあえず来週開けからやってみることに致します。
なんせ、紙おしぼりは初めて扱うので（店内は布おしぼりでした）入荷に 3，4 日を要するからでございます。

2021/1/16

（特集レポートのデータを読む「若い人の、コロナ後遺症の現実」）

昨日のニュースの中の特集で、とても興味深いレポートがありました。
「何故若い人は外出自粛をしないのか？」
理由で多かったのが
「罹っても重症化しない」と「外出して仕事をしないと食べていけないから」
でした。
後者は、食べていけないのなら、致し方ないでしょう。
しかし、前者は考えようがあるはずです。
そこで、そのレポートでは、若い罹患者のこんな現実を報告しておりました。
曰く
「罹患後の症状そのものは軽かったが、後遺症が酷く、かつまた長期にわたって悩まされている。しかも終わりが全く見えない後遺症に、です」
と。
それで、どのような後遺症かというと
第一位が、倦怠感
第二位が、気力の喪失や鬱状態
それから少し飛んで、脱毛
一位、二位は複数回答で 70%以上。脱毛でも 50%以上でした。
特に二位では、気力が続かない、だるくて身体が動かない、等の理由で、休職せざるを得ない例も。
脱毛については、若い女性なら美容上の観点から「自信喪失」や「引きこもり」にもつながりかねません。
しかも、このすべてに「終わりが見えない」恐怖。
「自分はこの先どうなってしまうんだろう？」
この事実を若い人には知ってもらいたいと思います。
気力もなくだるいままで生きながらえるほど、つらいことはありません。うつ病歴 12 年だった自分には痛いほどそのつらさが分ります。
自分は男ですが、若い頃薄毛に悩んだ経験からも、女性の脱毛に対する不安も理解できます。
一時、じじばばの昼間カラオケや富裕層じじばばの go to travel でコロナが拡散されまくりまくりましたが、今は自宅待機死亡率の急上昇の恐怖から自粛行動に変化しているようです。

なので、次はコロナ罹患快復後の後遺症に悩まされないための、若い人の「正しい知識」に基づく行動変化が求められている気がします。
そうして、それでもだめなら緊急車両、貨物運搬車両以外の全交通機関と自家用車両の一時全面ストップくらいをしないと、コロナ封じ込めのための指標である、コロナ「実行再生算数」が早期に 1 以下、希望的には 0.5 以下にすることは、まず不可能かと思われます。
そのような過激な策の実行にまで至らないですむようにするには、今度は若い人の後遺症の重大さに着目した行動変容が必要かと思われます。

二〇二一年二月の巻

2021/1/18-2

（SNS 非公開「恐ろしい話」回避のための超弩級難問のご提示）書庫版

今日はちょっと恐ろしい話。
ひとによっては、生半可なホラーより恐ろしいかもしれません。
１０年ほど前にあるのみ屋さんで偶然隣に座った厚生省（当時の名前）あるお役人さんが
「問題は少子化ではないのです。高齢者が死なないことなのです」
とびっくりするようなことを言いました。
（この意見に賛同するという意味で掲載しているのではなく、そういう事実があったと言うことです)
しかし、本日は敢えて之を少しもじって
「問題は、天候不順やウィルスにあるのではない。地球上に人間が増えすぎた事だ」
これをいつもの連立方程式風に立て、その解法の試みをするのに以下のようなイメージを描くと分かり易いと思いますので、ちょっとやってみます。
「医療技術を持った体長３０メートルのプロントザウルス（恐竜）属が、その技術のおかげで地球上に繁殖、繁茂したらどうなっていたか」
です。

そうしてもう一つ連立方程式を立てて三連立方程式風にすると
「恐竜の持てる医療技術のおかげで寿命は延びたが、食べる草もなく、かといって死ぬことも出来ない。只寿命が延びただけだったとしたら。寿命が延びたはいいが餌も、やることもなく暇なだけだったとしたら、どうなるか？」
こんなことを書くと、先走りをしたり早とちりをしたりする一部の人は、早速にも
「優生保護」だの「人工的淘汰（選別のこと）」だの言い出しそうなので、釘を刺しておきますが、自分の目的は当然そんなことにはありません。
自分の目的は
「地球様と相反する利害関係者になりつつある我々人目人科」は地球様とどう折り合っていけば良いのかを考えざるを得ないときになっておりませんでしょうか？」
という問題提起をしたい。そうして一緒に、この超弩級の難問を考えてみましょう。ということだけでございます。決して上述の様な選別という変な考えをしませんようにと言う付帯事項も付けて進言申し上げたいので、ございます。

2021/1/20

（「運」論考）修正版

今日は、自分には殆どない「運」について少し考えてみました。
「運（強運）も実力の内」
の「強運」とは「好運を引き寄せる力」と言うより、悪い運（困難、危機）が来ても難を逃れ、生き延びる事が出来る、そうしてその後訪れる好機の到来を見逃さない事ではないかなと思いました。
つまり
「運と言うものは偶（たま）にしかやってこない。しかも来るのに随分と時間が掛る。なので、いつ来るか分らず且つ来るのがずっと先になる事のある運をまてるだけの気力、アイデア、資金源確保の信用を保てる者だけが不確定要素だらけの運に巡り会うタイミング迄生き延びていられる力。そうしてその後、一見何でもない出来事のように見える物の中に好機を見いだす見識眼。それを実力と称している」
と「一見非科学的な言説に科学的根拠を与えそうな」推論が成り立ちました。
その要素として三つあげたものの中で、取分け大切なのは第一番目にあげた「気力」の様な気がします。
というのも「気力」がなければ、アイデアも資金源確保の信用維持も出来ないからです。
それこそ「アイデアを出す気力」「資金源確保の信用を維持し続ける気力」という位、全てのスタートは気力になっています。
その気力を維持させるのに有効と思われる方法は、
「いつ来るか分らない運という不確定要素の到来」即ち「運の到来」を「ずっと先においておく」ことです。
間違っても、明日あさってレベルや起業２年目などに置かない方がいいようです。
分りづらければ「運」という言葉を「成功」という言葉に置き換えてみると理解し易いかもしれません。
そこで、それに多少アレンジを加えて言い直してみますと
「自らの事業の成功を起業２年目には既に手中にしている」と無意識にも思い描いている人は、例えば今コロナ渦の様な事態が突発的に起こると「内心の予定が大幅に狂った事」に動顛し「とても後１年ではその内々の目的を達せられっこない」と早々に諦めてしまうのに対し、
「成功」を「かなり、先の事になるだろうな」とぼんやりとも想像している人は、そのスパンの長さの中で、今コロナ渦を初め、他にも起り得る落ち込みの変動幅が、脳内イメージとして自然と平準化（衝撃緩和）がなされ
「長いうちにはいろんな事があって当然だわ。まっ、之は序の口、気長に行きまっか」
になる可能性があるという事かなと。

２年間の上下幅だと、結構暴れているように見える波形も、今後１０年と、上下に波打つ禍福はあざなえる縄の如き組紐を長手方向に伸ばして考えてみると、その変動の波は穏やかに見え、重圧が軽減される心理的効果があるのではないか？
そうして、そうやって長いスパンで遠くから俯瞰する事によって、好機を見いだす違った角度からの視点を持ち、それが見識眼に変化する可能性があるのでは？と思った次第。
今日も又当たるも八卦当たらぬも八卦の論でございます。

2021/1/22-2

（今日はちょっと変な独り言）

今日は、ちょっと変な独り言です。
経済の仕組みもかなり分ってきた。
成功の法則らしきものもずいぶん見えてきた。
であるなら、儲かっていても良い筈だ。
だのに、毎月の従業員給与や家賃の支払に四苦八苦している。
要するに出て行く物に対して入ってくる物が圧倒的足りていない。
それでも、今ひとつお金儲けや、その手段として著名になることに一向に気が向いていかない。
「なんで？」
と考えてみたところ
「いまいち、前向きになれる、積極的な意味が見いだせない」
「よし行くで、と迷うことなく進めない」
となりました。
平たく言うと
「勝ち組とか負け組というような判定基準で、勝ち組となって浮かれることを「よし」とすることが出来ない」
のです。
今の「経済」の中での「お金（もうけ）」は何だか嘘の塊の産物のような気がしてなりませんし、どうも知らぬ間に人様を不幸のどん底に蹴落としているような気もします。
そんなことをしてまでお金儲け（今の経済システムの中でのお金）をしていいのか？勝ち組なんかになって良いのか？
或いはまた、その手段として著名になると、表を歩くにも苦労をして不自由なことこの上ありません。
昔であれば、現代に於いて世界的に著名なレオナルドダビンチさんにせよ、我が国の松尾芭蕉さんにせよ、その当時は写真もビデオカメラもなかったので、顔を知られることなく街中や野原を自由に観察しながら誰の目線に気遣うことなく歩ける幸せがありました。
わざわざ窮屈になるために著名に中になってどうするんだ？
更に広告に関しては、昔は広報、告知止まりだった物が、いつの間にか宣伝主体になってしまいもしました。
これは例えばおいしいから五つ星になったのであって、五つ星だからおいしいわけではないのに、後者を矢鱈と吹聴し、それガ反感を買うと、今度はその「宣伝」を巧妙にすり替え、カモフラージュした「イメージ広告」などと言う妙なものまで出てくる始末。

これって、ザックリ言って見てくれやセンスは磨かれてはきたが、何のことはない「相手を押しのけて、実は俺が一番なんだぜ」と言っているだけじゃないの？」
とか。
そうなると、なんか、そうしてまで苦労して行っている数々の事どもが面倒くさいやら鬱陶しいやらになってしまい、どうしても「家業目掛けて一気呵成に本腰に入って行かない」のです。
それで気がつくと、本業以外の、従業員の私事の手伝いやら趣味の書き物やらにばかり時間を費やしてしまっている。
「だったら（本業を）やめれば？」
といわれそうですが、一つには最早自分一人の身ではなく、今お話しした従業員達の生活がありますし、今ひとつは、前向きになれる新しい「経済とお金」のシステムを探したいと思ってもおりますので、ここはそう簡単には
「はい、やめます」
とも言えないのです。
結構、辛いものがあるのです。
毎日の目覚めから、夜、床につくまでの間、ずっと。

2021/1/23

（「経済」と「経営」の混同混乱）

言葉の成り立ちを調べてみると結構面白いです。
例えば
「経済」と「経営」
既にこの場で何度も書きましたが「経済」の出自は「経世済民」です。
即ち
「世を経（おさめ）民を済（すくう）」もの。
一方「経営」は、対象が「世」ではなく「組織（体）」と一段狭く、行いは「済（すくう）」ではなく「営む」で「経（組織運）営」です。
イメージとしては前者が、丘の上から釜戸の煙が立ちのぼるのが少ないのを見て民を憂えた古王の「統治（ガバナンス）」であるのに対し、後者は、営利、非営利を問わず「一企業体の、それこそ経営、営業、生産活動」を連想すると分かり易いかと思います。
そこで、かねてから自分の抱いていた疑問や違和感の正体、つまり
「元々経済は経世済民（世を経（おさめ）民を済（すくう））物であった筈が、どうして最近では金銭の偏りから格差、不平等、対立を生む物の代名詞になってしまっているのか？」
にありましたが、冒頭の二つの単語「経済」と「経営」を比較対照し俯瞰してみると、ある仮説浮び上がってきました。
曰く
「経営（一部に有利な組織運営）」が「経済（国民の幸福を願う目的の統治）」を呑込んで、最優先され、実態はそうであるのに、その「経営優先の事実」を隠しているのか、将又気づいていないだけなのかは分りませんが、未だに「経世済民である経済と混同したまま間違って使っている」のではないだろうかと。
だから一部に富が集中し、多くの民は貧しいままなのではなかろうか？という仮説です。
もっと平たく言えば「特定企業」がボーダーレスで「国家国民」を上回って広がった「異形のグローバリゼーション」
或いは「生産消費（国民生活の水準決定源）」の実態を上回って実感なく一人歩きし、高騰を続ける「株価（個別企業の経営評価結果）」
しかも中銀が前者（国民生活の生産消費）の活性化目的で金融緩和すればするほど後者（一部特定企業）にお金が集中し、返って富の偏在を作り出してしまっている真逆の結果も、これまた経営と経済を混同したまま、経済の蘇生に役立っているのだと誤解している事が原因なのではなかろうか？　又は「経営」優先が経世済民の「経済」を歪めてしまったのでは」と思い始めました。
「経済」も「経営」もその指標が「お金」だとすると「お金自体」には罪はなく、その「人による運用」にこそ問題がありそうな事も併せて感じ始めました。

であるなら弊社としては従業員を食べさせる為のお金儲けにどういった前向きな意味を持たせて経営するのか？」
が問題になってきます。
そこで思い当たったのが、現時点は大赤字ですが、
「利益が出、規定上限を超えた折には、その利益の 50%を寄付に回わしてはどうか？」
と。
だって社員が十分だと思える給与を超えて迄、必要以上に溜め込む必要を感じないからです。
その分を循環の為に世に流し出せば良いと思うからでございます。

2021/1/25

（ 苦渋の選択 ）

英語で「Warning」日本語で「警告」
英語の「Warning」は、察するに語根は「War」即ち「戦争」から来ていると思われます。
曰く
「そんな事をすると戦争状態と同じ事が起こりますから、おやめなさい!!」
で「警告」
しかし戦争というのは何も鉄砲や大砲を撃つものだけとは限りません。
「疫病」との戦いも将に「戦争」
太平洋を挟んだ大国のコロナ渦による犠牲者が 40 万人を超えた事で、第二次世界大戦のその国の戦死者を上回ったとか。
因みに我が国のその大戦における犠牲者が 300 万人。
方や、100 年前のスペイン風邪の全世界の犠牲者が 5000 万人とも言われております。
更に 14 世紀に起こった欧州での黒死病（腺ペスト）の犠牲者が当時欧州の総人口 1 億人弱に対して 3000 万人だったそうです。
最早戦争の犠牲者数の比ではない事が分ります。
しかも相手は通常の戦争と異なって、その姿が見えません。どこに向かって鉄砲や大砲に類するものを撃っていいのかさえ、わかりません。
かてて加えて、この目に見えない相手とは意思疎通の手段がないので、和平条約や講和条約を締結する事も、一時休戦や無条件降伏を受け入れてもらう事も出来ません。
ですので、之はもう強制的に止めるしかない、ようです。
14 世紀の欧州で、それを止めたのは膨大な数の犠牲者だったのかもしれません。
要するに疫病から見た「餌場でもある無賃乗車バス（伝播者である人間の事）」が急減した事で、感染、伝播が押させられたのかもしれないと言う事です。
100 年前のスペイン風邪では同じような事と同時に、その間に免疫を獲得する事によって終息に向かったのかもしれません。
恐ろしい話ですが、両者に共通しているのは「多大な犠牲者が防波堤になって免疫獲得までの時間稼ぎをし、結果的に伝播を防いだ」という事実推測です。
しかし、今回それを繰り返す事はいくら何でも許されません。
では、どうすれば良いのか？
自分流の言い方で恐縮なのですが、対応策は
「疑似大量死に体」状態を人為的に作り出す事です。
即ち「社会的距離維持」と国民合意の下（もと）「揺り戻し期間を計算に入れた断固たる行動制限」です。

前回のスペイン風邪は第 2 派後に強固なロックダウンを行って歯止めが掛ったらしいのですが、今回のコロナ渦は既に第 3 派に迄突入しております。
一刻も早く「新たな経済」回復を為すには、ここは一旦強固なロックダウンをするしかないような気もしております。
飲食業の自分にとっては将に苦渋の選択、命取りにもなりかねない選択なのですが。
追記）
第 2 回緊急事態宣言以降、１月半ばより当店の売上は激減致しております。お国からの支援金も支給されず、新たな借入も断られる中、人件費と家賃の支払いは待ったなし。
将に風前の灯火「以下」の状態。
「過度の利益はいらぬ。存続のみ願う」事すら叶いわぬ状況であります。
兎も角、お客様が安心されない事には、その後の経営は成立ちません故。

2021/1/25-2

（特別寄稿　コロナ渦景気談義　「いつか来た道」を歩くのだけはもう沢山）

なんか乗っていて座り心地が極めて悪い。まるで左右の車輪の大きさ極端に違いすぎて平衡感覚を欠いているような感じ。
金融緩和政策の継続で株式市場にはどんどんお金が流れ込み、株価はうなぎ登り。
だのに、一方では生活困窮者が巷にあふれ始めている。
一部の資産価格はバブリー臭プンプンなのに、期待インフレ率や物価はそれほど上がっていないし、給料や年金なんかはむしろ減っているアンバランス。
之を過去の事例に当てはめれば、自分も若いときに経験した例の「バブル崩壊」とその後に続く失われた３０年のデフレ不況が見えてきます。
しかし、常に上がり続ける株価はないし、下がり続ける株価もない事から、常に価格が下がり続けるデフレもないはずです。
いつかは反転が起りインフレになる時期のような気もします。
今回そのインフレの可能性として考えられるのは、以前の「バブル崩壊」と決定的に異なる「コロナ渦というサプライチェーンの破壊要素」がある事です。
どういうことかというと、特に農産物に於いて、コロナ渦の影響で全世界的に労働力が不足するため、食料品原材料価格が上がる可能性があるのです。
詰まり基本物価指数の上昇、即ちインフレです。
ですが、上記二つの要素を例の連立方程式的に解いてみると、資産価格のバブル崩壊により不景気になると同時に、物価が徐々に上がり始め不況下のインフレ即ち「スタグフレーション」が起きる可能性が高いような気が致します。
こうなるともう、完全なド壺です。
不景気で実入りはないのに、物価ばかりが上がり、回転方向が逆の車輪の間に挟まってすりつぶされてしまいます。
では、こういった最悪の事態を避けるにはどうすれば良いのか？
それには一にも二にも「コロナ渦の早期抑制」です。
過度のインフレを抑えるために、まずは世界の農場で人々が作付けや収穫が出来るようにしなくてはなりません。
お金があれば食い物だけはなんとか手に入る、生活の最低限の状態を維持するためです。
次にはバブルを生む資産価格の高騰を招きかねない「コロナ渦救済」の名目で続けられている長期金融緩和の早期終了でしょう。
貧者には一向に回らず、バブルのみを助長するだけの資金の流入を一刻も早く止める為です。

どのみち全ては「コロナ渦平癒」が何よりも最優先されてしかるべきかと。
そうでないと、コロナ渦の後に、かつて第二次世界大戦に連なったと同じ未曾有の「経済渦」が訪れても不思議はないような気が致しております。
「いつか来た道」を又歩くのだけはやめましょう。

2021/1/26

（矛盾多きに見える発言のご説明 副題「公理公道につけ」）

コロナ渦での緊急事態宣言による時短要請、外出自粛要請で
「店が風前の灯火「以下」の状態」
と言っておきながら、一方で
「一刻も早いロックダウン（都市封鎖）と行動制限が必要」
というのは、明らかに矛盾。一体こいつは何を言いたいのだ？
という声が聞こえてきました。
確かに「大矛盾」です。
しかしこれは「今だけ」を捉えるとそうなのですが、時間軸を取って逆照射し、パラレル（同時併走）思考ではなくシリーズ（時間差立て繋ぎ）思考をしてみると成り立つ話です。
即ち二兎を追わず、一兎をかたづけて次に二兎目に移るという考え方です。
又「現在の自店にとってのみ都合の良い視点」を一旦脇に置き「最適解（コロナ渦最速収束）は何か」を見つけることを第一に置いて、その範囲の中で「自店に取っての最良を見つける」
方が結果的に社会も自店も良い方向に進むという考えから、上述の様な意見を申し上げた訳です。
それというのもお客様側に於ける「自粛馴れ」という言葉が示すように、お店側も
「乗り切ったら又」「再度乗り切ったら又々」の自粛要請では、だんだんやる気もなくなってくるからです。
むしろ「この一回は死ぬほど苦しいが、その次の要請はない」
と割り切れた方が、余程踏ん張り甲斐がある気がするのです。
それでもし、その一回すらもたないなら、それはコロナ渦のせいではなく、日頃の経営努力不足としか言い様がないのかもしれません。
かくいう我が社も、先日の資金借り入れを信金さんから断られた理由が、担当の方曰く
「御社の業績が悪いのは、コロナ渦以前からですよね。之では融資のしようがありませんよ」
でした。
なので、この際、それ以前からある経営課題も含めて、むしろコロナ渦をその「改善の良いチャンス」にしようと考えている次第なのです。
それが出来ないなら「自然淘汰の波」に従って消えるしかありません。
そういう意味では我が社は現在まさしく「ゾンビ企業」そのものです。
大切な国税をそんな企業にまで渡す必要はないと思います。

なので、なんとしてでも我が社はこの際「ゾンビ企業からの脱却」を計るべく最善の努力を断行する所存でございます。
追記）
死んだ親父がよく言っておりました。
「公理公道につけ」と。
（公理に従って公道を歩め、の意　含意 公私混同すべからず）

2021/1/27

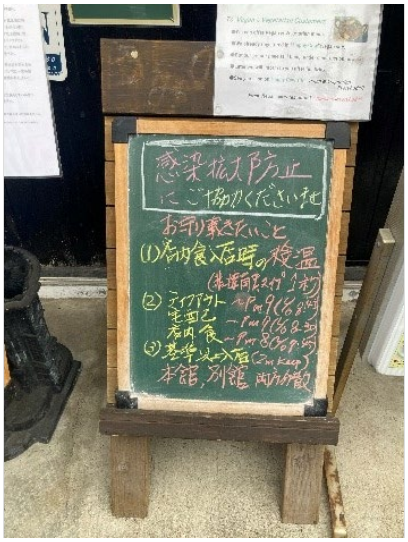
（難問好きの難問疲れの原因 ）

年明け以降、風向きががらりと変わりました。
この地域では、恐ろしいほど需要が蒸発し始めております。
需要と書いたのは、何も突然、お客様の懐から現金が消えたというのではなく、先行き不安からお金が全て胎蔵（たいぞう）されたしまったと、推察されるからです。
というのも、統計からは最近異常なまでに預貯金率が上昇しているからです。
昨年３月の折の緊急事態宣言の時よりも、今回の方が需要の蒸発率は明らかに高いのです。
恐らく、昨年の３月には「この期間自粛すれば、その後は回復するだろう」という楽観が先に立ち、なおかつこの地域では目立った感染もなかったことから、自粛期間中及び解除後の需要蒸発率はそれほどのことはなかったのだろうと推測されます。
しかし、今回は「何回自粛してもコロナ渦は終わらない」という悲観や諦観から「之は相当に長期戦になるだろう」と将来に対して金銭の備蓄を始めたせいかもしれません。
それにしてもこの需要蒸発率は「ものすごい」です。
具体的に言えば売上４割５分減。
人件費を払うと、仕入れ費用、家賃、光熱費、その他店舗維持費分がまるまる赤字という状態です。
この赤字拡大スピードアップから、手元資金の維持期間が大幅に前倒しになり、下手をすると会社寿命があと３ヶ月あるかないかのレベルにまで急速に悪化しております。
テレワークで昼間滞在人口が増えているにも拘わらずにこの有様です。
昼夜間を問わず滞在人口の減少が顕著な都心部での悲惨さがよく分ります。
勿論、売上減の原因として、感染拡大の積極的な防止の観点からテイクアウトと宅配だけに絞り、店内食をストップしたこともありますが、ここ１週間では、お客様の来店数減よりもお客様単価が激減しているのが響いています。
これは、恐らく家族単位でのテイクアウトが減り、シングル需要だけになりつつある事を示しているような気がします。
つまり自炊を余りしない若い人の「必要に迫られた需要」だけになりつつあり、不要不急の「家族内プチパーティ気分の需要」が蒸発してしまったのではないかな？と。
あと、人間心理は天候に左右されがちです。
コロナ渦と同時にその勢いを増している地球温暖化起因の天候不順や荒天模様も相まって、お客様心理は相当なるレベルで「マインドダウン」していることが見て取れます。
さて、こんな折に当店は何をすれば良いのか？
結果論ですが、政府や自治体の「感染防止と経済の両立という温情政策」が返って事態を悪化させ、コロナ渦を長引かす結果になってしまったようです。
「危機下において温情は無用。事実と科学に即して鬼となるべし」

が今回の教訓のような気も致します（生意気ですが）
それにしても、
難問好きの自分にも、そろそろ「難問疲れ」が目立って参りました。

2021/1/28

（自粛下、当店の見いだした「解」とは？）書庫版



「戦いすんで日が暮れて」

とは言いますが、日が暮れても、戦いは終わりません。

前の記事で

手前どもの地域の需要蒸発を目の当たりにして

「さて、こんな折に、当店は何をすれば良いのか？」

と申し上げた超絶難問の解を考え出さなくてはならない仕事がのこっているのです。

で、行き着いた解が

「店内食の再開」

でした。

しかも２月７日に

「緊急事態宣言が解除されようがされまいが」
です。
但し、無論のこと
「お国と県の自粛基準はきっちりと守った上で」
です。
それというのも、当店は公理公道に徹し、お客様の健康保護の観点から、自粛基準以上に厳しい条件を設定しておりましたので、そのやり方を少し「アレンジ」することにしたのです。
まず、より厳しい当店の自粛基準とは
「８時までに閉店はおろか、店内食を中止する」
というものでした。テイクアウトと宅配に徹し、成る丈非接触状態にするという。
それというのも、亭主である自分自身が、呼吸器系疾患を二つ（COPD＝慢性閉塞性肺疾患と睡眠時無呼吸症候群を）抱えており、仮にコロナに感染、発症したとなれば、当選確率９割９分９厘で、半日とは持たない状態だからです。
ですので、そのレベルでお客様の健康維持基準を設定したわけです。
ですが、やはりお客様も人の子。人恋しいのだと思いますが
「店内食再開の声」
が複数組から複数回あり、当店のサービスは味だけではない事もあって、再開を決意した次第。
それに健康維持回復は何も身体だけでなく、メンタル上の健康維持回復もありますし（例えば孤立感や孤独感からの）
勿論店内食は午後８時まで。お酒の提供は午後７時までです。
但し、テイクアウトと宅配は午後９時お届け分までの営業は変更せず、です。
そうしてお客様の健康維持のために新たに設けた新基準が
入店時の非接触型１秒検温
と
２メートルディスタンスを超える前に、お隣のパーティー会場の開放（２室運営）
による分散着席ルールです。
又、テイクアウトと宅配には、雑菌除去のために、之までしていなかった「大判の紙おしぼり（ロールタイプ）」をお持ち帰り袋に挿入してお出しすることに致しました。
実は、これらの施策はかなりのコストアップになりますが、なんと言っても
「公理公道に付け」
（公理に従い、公道を歩め）
です。
これが、当店が見いだした「現下の解」でございます。

2021/2/1

（「ほんま、ええ加減に、せぇよ」）

コロナ渦でお金がありません。
「時短するのだから給付金よこせ。その代わりとして、お金、寄こせ」
といっているうちは、未だ「かわいい」ような、気がします。
いよいよお金がなくなってくると
「もうえぇわ、お金の話は。
なんか他（お金以外の他の尺度、価値観）に、ないんかいな？
お金、お金って、もううんざり、やわぁ。
金の話は」
迄いってしまいます。
トドの詰まり、勝ち組だの負け組だの、イノベーターとして名高いアップルのスティーブ・ジョブズさんにしたって、他の GAFA の大成功者さん方にしたって、結局はお金の世界の話でしかないじゃないですか。
アジアの小国の国軍クーデターの話にしたって、某国の五輪の話にしたって
「自粛求めて自粛せずの夜の銀座の下半身事情」にしたって
結局全てはお金がらみの話じゃないのでしょうか？
なんか、もうそんな話はいい加減うんざり、です。
「そろそろなんかお金以外の、他の話（尺度、価値観）はないんかいなぁ？」
ですわ。
それが何であるのか？
自分には未だ皆目、分りませんが、どうせあの世に行くなら、せめてそのヒントくらいは見つけた上で、後代に託して、他界したいと思っております。
「ほんま、ええ加減に、せぇよ」
でございます、わぁ。

2021/2/2

（「物の気持ちになってみると、あらら、あらま!!」）

ちょっと「へぇ〜」と思う記事を見かけました。
ネットに載っていた記事なのですが、元はどこかのテレビ局の特集の一部だったようです。
その記事というのは
「使い捨てカイロが思わぬ働きをする」
というのです。
大抵の人は「使い捨てカイロ」と言うだけあって、そのまま直ぐに捨ててしまうようなのですが、その特集では、そこからが又「お役立ち」になるというのです。
使い捨てカイロの中身は活性炭、その他なのですが、その活性炭を袋から出して、お皿にのせておくだけで「消臭剤」として使えるというのです。
さらには洗濯物干しに一緒につるしておくと「除湿剤」（即ち早く乾く）にもなるし、部屋干しの匂い消してくれる消臭剤にもなるのだそうで。
そうして最後の極めつけは、使い捨てカイロの成分の中の「鉄分」を取り出してキューブ状にして海や川に放り込んでほったらかしにしておくと「可なりの浄水効果」があるというのです。
無論多数のキューブが必要らしいのですが。
之を見て「全然違った物（商品）でも、その素材や成分に全く別の角度から光を当ててやると、思わぬ効果や再利用が出来る、のだなぁ」
と思いました。
そうしてここからです、更に思ったのは
「自分にはもう用がないから」捨てる。
之というのは、言い方は悪いのですが「自分の事だけ」「人間の事だけ」のお話です。
しかし、ちょっと視点を変えて
「物の立場になってみたらどうだろうか？」
というのが今日の思いつきです。
曰く
「物生（物の人生）一度限り。もう一花を咲かせたい。もう一度お役に立ちたい」
という「もの君（さん）」の気持ちにひと様がなることが出来たら、
「自分のご用だけで終わらせるのはこの子（もの君、さん）がかわいそうだ。もう一花咲かせてやろう」
という発想が生まれ、捨てないで人に譲ってあげたり、他の用途を自分で考え出したりするようになって、思いがけなく遠方の、そのまま捨てていたのでは生涯遭うことすらなかった

であろう、人たちとのコミュニケーションが始まったり、新たな用途を考え出そうという知的冒険が始まったりする、あらら、あらま!!
のきっかけにもなるのではないのかなぁ？
と思った次第です。
本日のお話は、人間界の「相手の立場に立って」をもう少し広げて
無生物界の「物の立場にまで立ってみては？」
というお話でございました。

2021/2/3

（ピンポイント価値観が齎す悲劇）

自分の若い頃の、つまり昭和の時代の TVCM に
「大きいことは、いいことだぁ」
というのと、冒頭のフレーズは忘れましたが
「み〜んな、悩んで、大きくなったぁ、でっかいわぁ、でっかいわぁ」
というのがありました。
要するに大きくなる（成長）過程で、悩むのは当たり前の事なんだという暗黙のコンセンサスが視聴者側にあった訳です。
自分も 12 年間、重度のうつ病を患いましたが、自ら命を絶たずにすんだのは、恐らくそんな無意識のコンセンサスが自分の中にあったからだと思います。
そんな目で見ると、最近コロナ渦で若い人の、特に女性の自殺が急増しているという記事を目にすると、強い心の痛みを覚えます。
何となくその時の心の風景が想像されるからです。
しかし、それは単に、非正規の女性が置かれている経済的な困窮状況による物ばかりではない気もするのです。
そこに気づいていれば、何人かの人は自殺せずにすんだのではないのかな？と。
何の事かと申しますと、
一つには、一度失敗したからと意って決して終わりではない。
また、道は一つではない、百も千も万もある。
そうして、価値観は何もお金や幸せな生活だけではない。気がつけば周りには他の価値観が可成ある（勝ち組負け組と騒いでいるのは上の 2 つを指しての話でしかない）
という意識が少しでもあれば、死なずにすんだのではないのかな？と思うのです。
無論制度設計上、最低限の困窮生活のサポートはされて然るべきです。
要するに上述三点に気がついてやり直しが出来るだけの時間を確保するという意味での金銭的サポートは。
それにしても何故こうまで若い女の人が自殺に追い込まれ易いのか？
思うに、昭和時代からあった「俗言」で
「30 歳過ぎたら売れ残り」「パセリの君」「行かず後家」などの非常に狭いピンポイント価値観による縛りが暗黙のうちに今も生きていて、それが心理的に非常に高いハードル、詰まり過重圧となって、自殺への背中を押しているのではないのかな？と思う次第。
何故なら、外国人女性の中で「30 歳過ぎたら自分の価値が減じる」等と言う話を聞いた事がないし、シリアやロヒンギャの難民が自殺したという話を耳にした事がないからです。

その狭すぎる、ちょっとでも外れると「もうあとはないわよね」というピンポイント価値観の狭さが齎す「選択肢のなさからそれ一点にしがみつくしかない」悲劇が起こっているのではないのかな？とも。
今の若い人に、嘗ての人々のような「耐性がない」と聞くようになって久しいのですが、その耐性を奪ってきたのは、それ以前のわれわれジジババ世代が押しつけてきた、ピンポイント価値観だったのではないのかなと思い始めております。
繰り返しになりますが、
選択肢が狭ければ狭いほど耐性が減じるのは当たり前です。なぜならそれにしがみつくしかない。殆ど「この一発が最後の賭け」みたいなものになってしまうからです。

2021/2/3-2

（与太話）

昔、自分が未だ新入社員の頃、親父がネクタイを何本か「それを使えと」複数回にわたって自分に差し出して来ました。
ところがそれが又「とんでもなく素晴らしい柄」で。
例えば虎と大蛇が青竹を挟んで絡み合った絵柄とかピンクと赤いバラが黒地に咲き誇っている奴とかで。
あまりのセンスの「良さ」に、受け取りはしたものの、締めないでほったらかしにしておくと親父が
「せっかくやったのに、なんでせぇへんねぇや？あん？」
と言ってきます。
「いくらなんでもこれじゃぁ、のぅ。
わしは元々がヤクザみたいな御面相なのに、こんなんしよったら、警察に公序良俗違反でしょっぴかれてまぅで」
「これはわしが大変お世話になっておる御方からの賜り物じゃ。悪かろぅ筈がない。己のセンスが外れとぅのや」
せやったら、おとんが、自分で締めて出社したら良かろうが、と余程言い返したかったのですが、何となく板挟み状態であろう事も察せられたので、黙って引き下がりました。
で、こんなエピソードを思い出しながら二つの言葉が浮かんできました。
一つは「義理人情」の「義理」
と、今ひとつは最近はやりの
「忖度」
で、この場合は頼まれもしないのに、慮って（おもんぱかって）する「忖度」ではなく、日頃のお世話に、返すに返せない国語辞典的な使い方での「義理」の方だろうなとはおもったのですが、
元々「義理人情」の「義」と「理」はアタマの働きで「情」はこころ「人」が「身体」で、それが「人」（身体）という字を天秤の軸として、左右にバランス良く成り立っているのが「義理人情」の科学的にも、理にかなった本当の意味で、それを三方満遍なく（偏りなく）うまく回すエコサイクルこそが、人が元気に生きられる秘訣だと思っている自分からすると、
この場合の義理とは「された丸投げの処理に困った時に起きる感情」または「さらなる、その又先への丸投げをした時に生じる、バツの悪さ」のことなのかなと、改めて思った次第でございます。
ほんまに、本日はどうでも良いお話で。
失礼つかまつります、るぅ。

2021/2/4

（本日は割と真剣な「連想ゲーム」を）

地球の上に人間は住んでいる。
その順番（包含関係の先>後即ち台>柱）を、人間の都合でひっくり返そうといったって、それは土台身勝手というものです。
人間様にとって、それがどんなに大変でも、順番は順番でしょう。
例えば誰かが、無理矢理横入りしてきたら、みなさんだって、怒りますでしょう？
横入りされて怒っているのが地球様初め自然界の面々だと考えると分かり易いかもしれません。
そこで、どうやったら地球様と人間様が折り合うことが出来そうなのか？「数」を元に考えてみました。
人間の人口は、産業革命以降急速に、更に第二次世界大戦以降益々急速に、そうして 21 世紀になってから人口増加のカーブは殆ど垂直上昇に近い物になっております。
単純にこのグラフから地球様に「視点忖度」してみると、産業革命以降の人口増加分が、余計なことになり、ざっくり言えばその出っ張り分だけ「人間の数が多すぎる」と言うことになりそうですが、だからといって、人間の自分としてみれば、その分消えてくれといわれたのでは、たまりません。
どうしたってそんなことを「はい、そうですか」と素直に受けいられっこないので、なんとかならないものかと更に真剣に考えてみました。
まず、現在の人口数が地球全体で 75 億弱。
生き物（主に哺乳類）の中で、これ程の数が多い生物は他にはいません。
しかも図体がデカイ。
デカイというのは人間より遙かに数の多いウィルスやバクテリア、そこまで行かずとも、例の「ゴキブリ君」に対してです。
その分温暖化を促進してしまう CO2 の排出量も格段に多いわけです。
しかも人間様は生物の中で唯一「火」を使います。
「火」または現代では「電気」は CO2 拡大のレバレッジ（梃子＝てこ）の役目を果たします。
ですが、之がないと人間は生きていけません。
ここからは幾分 SF 調になってしまうのですが、例えば
人間が CO2 ではなく、体質改変で O2 を吐き出すようになれないか？
とか
人間はゴキブリ君サイズ（ゴキブリになるわけではありません）になれないだろうか？
とかが思い浮かびます。
或いはもう少し科学的に

「燃焼」という概念を「火」を使わずに成り立たせられないだろうか？
とか
O2 を燃焼させないことで CO2 にならないようにする
とか
O2 が燃焼しても C と結びつかないようにする
とか
高温ではない「低温、又は常温燃焼」という技術は出来ないのだろうか？
とか。
要するに合理的で退行的、或いは抑制的、抑圧的ではない「ダウンサイジング」
言い方を前向きに置き換えれば「ジャストサイジング」
未だ、解は見いだせないのですが、本日は思いつくままに、しかし結構真剣に、その解の模索をしてみました。
これはとても良い頭の体操になりましたので、皆さんもおやりになられてみては、いかがでしょうか。

2021/2/11

（「くわばら、くわばら」 続編出版の顛末）

仮想世界というのは「物理的実態」のない世界のことです。
現実世界で我々が直接触れて得る情報を一次情報とすると、仮想世界で得る情報は二次情報で、全てが加工されたものです。意図的に「ある視点で構築された」ものと言っても良いかもしれません。
全てが悪意からとは思いませんが、作成する側は時として無意識に、その情報を閲覧する者の「誤解」や「錯覚」「思い違い」「思い込み」などを利用していることがあります。
的確かどうかは分りませんが、比喩として
「孫悟空が広大無辺の世界を觔斗雲にまたがって飛び回っていたと思ったのは、何のことはない、お釈迦様の手のひらの上だった」
というのを思い起こさせます。
それがちょっと古ければ、
「旦那さんが好き放題やって、いい気になっていたのは、実は女将さんの手のひらの上だった」
というのが現代版かもしれません。
早い話が
こちらの意図とは全く別に、相手の思惑にはまったのも気づかず
「いい気になって、踊らされていた」
という事です。
何の話をしているのかと申しますと、実はここ 3，4 日余りで拙著（電子書籍版）掌編小説集「子、親を選べず」の続編と続々編 2 冊をアップロードしたのですが、それにまつわる顛末で、そのような感覚を痛切に抱いたからです。
詳細については一切書けませんが、本人が気づかないまま、目も届どかず、実感もし得ない処で、事が勝手に進行している電子の（仮想）空間世界というのは「非常に怖い世界」だと言うことだけは、改めて身に染みて痛感した次第。
率直な感想を申し上げれば
「くわばら、くわばら」
という感じでございます。
追記）
ですので、未だ「まともな形」での出版に至っておりません。
ご迷惑をおかけして、大変申し訳ございません。深くお詫び申し上げます。

2021/2/11-1

（「あぁ、くわばら、くわばら」）

仮想世界というのは「物理的実態」のない世界のことです。
現実世界で我々が直接触れて得る情報を一次情報とすると、仮想世界で得る情報は二次情報で、全てが加工されたものです。意図的に「ある視点で構築された」ものと言っても良いかもしれません。
全てが悪意からとは思いませんが、作成する側は時として無意識に、その情報を閲覧する者の「誤解」や「錯覚」「思い違い」「思い込み」などを利用していることがあります。
的確かどうかは分りませんが、比喩として
「孫悟空が広大無辺の世界を觔斗雲にまたがって飛び回っていたと思ったのは、何のことはない、お釈迦様の手のひらの上だった」
というのを思い起こさせます。
それがちょっと古ければ、
「旦那さんが好き放題やって、いい気になっていたのは、実は女将さんの手のひらの上だった」
というのが現代版かもしれません。
早い話が
こちらの意図とは全く別に、相手の思惑にはまったのも気づかず
「いい気になって、踊らされていた」
という事です。
何の話をしているのかと申しますと、実はある作品をアップロードしたのですが、それにまつわる顛末で、そのような感覚を痛切に抱いたからです。
詳細については一切書けませんが、本人が気づかないまま、目も届どかず、実感もし得ない処で、事が勝手に進行している電子の（仮想）空間世界というのは「非常に怖い世界」だと言うことだけは、改めて身に染みて痛感した次第。
率直な感想を申し上げれば
「くわばら、くわばら」
という感じでございます。

2021/2/11-2

（「Oh My God」）

仮想世界というのは「物理的実態」のない世界のことです。
現実世界で我々が直接触れて得る情報を一次情報とすると、仮想世界で得る情報は二次情報で、全てが加工されたものです。意図的に「ある視点で構築された」ものと言っても良いかもしれません。
全てが悪意からとは思いませんが、作成する側は時として無意識に、その情報を閲覧する者の「誤解」や「錯覚」「思い違い」「思い込み」などを利用していることがあります。
的確かどうかは分りませんが、比喩として
「孫悟空が広大無辺の世界を觔斗雲にまたがって飛び回っていたと思ったのは、何のことはない、お釈迦様の手のひらの上だった」
というのを思い起こさせます。
それがちょっと古ければ、
「旦那さんが好き放題やって、いい気になっていたのは、実は女将さんの手のひらの上だった」
というのが現代版かもしれません。
早い話が
こちらの意図とは全く別に、相手の思惑にはまったのも気づかず
「いい気になって、踊らされていた」
という事です。
何の話をしているのかと申しますと、実はある作品をアップロードしたのですが、それにまつわる顛末で、そのような感覚を痛切に抱いたからです。
詳細については一切書けませんが、本人が気づかないまま、目も届どかず、実感もし得ない処で、事が勝手に進行している電子の（仮想）空間世界というのは「非常に怖い世界」だと言うことだけは、改めて身に染みて痛感した次第。
率直な感想を申し上げれば
「Oh My God」
という感じでございます。

2021/2/13

（それこそ「杞憂である事」を望む事柄）

うろ覚えですが、確か太宰治が
「電車とプラットホームの間に落ちて挟まってしまうのではないかと常に怯えているようなものだった」
と書いてあったのを読んだ記憶があります。
こうした話を耳にすれば、
「滅多にしかあり得ないことを気にし過ぎだ。杞憂だ」
と退けます。
話は変わりますが、これまたうろ覚えなのですが、新聞記者の先輩が新人に「ニュースとは」或いは「ニュースの見いだし方」の件で、
「猫がネズミを捕ってもニュースにならないが、ネズミが猫を捕ったらニュースになる。滅多に起きない事を探せ」
といったような話を聞いた記憶があります。
同じように滅多に起きないことが、方や「杞憂」として退けられ、方や「希少価値（ネタ）」として珍重される訳です。
その違いは何か？
と考えてみるに、人々が、それが自分の身に起こること、或いはそれに臨場する事を望むか望まないかの違いによって生じているように思われます。
電車に乗り降りするのに、その度に電車とプラットフォウムの間に落ちるのではないかと怯えていたら窮屈で仕方がないので、その「滅諦にない事」を望まず、退ける。
一方、ニュースの方は非日常的で、面白く、人より自分の方が先に知っていたことを多少なりとも自慢できるものとして、その「滅多にない事」を、むしろ積極的に吹聴伝播する、という違いです。
まぁ、受け手である自分からすると、この傾向は人情としてはよく分ります。
しかし、送り手側が、このような事ばかりしていると、話は変わってきます。
つまり
「可なり例外的な事を、あたかも普遍的な新事実」として伝えたとすると、又それが何回も、いや毎回そんな形で伝え続けたとすると、受け手の眼前には「興味津々の願望でしか無いものが、あたかも実在する真実」であるかのような「妙な世界」が浮かび上がって見えることになってしまう可能性があるからです。
之はちょっといけません。まずいでしょう。
いくら受け手に「珍しいことを求める潜在的なニーズがある」からと言って、そんな需要を満たすことを第一にしたり、それが幾分過ぎて、でっち上げてしまう「ヤラセ」をするよう

なことをしたりすれば、いずれ受け手側も、送り手側も、最後は碌な事にならない様な気がしてなりません。
それこそ、自分はそれが「杞憂である事」を望みます。

2021/2/13-2

（「めげないスピリット」の勧め 改 ）

選択肢が狭いと、どうしても「失うまい」として、限られたそれに「すがりついて」しまいます。
例えば卑近な例で申し上げますと
選択肢が「お金持ちになる事」だけだとすると「お金を得られなかったら」或いは「お金を失ったらどうしよう！！」とお金にすがりつき、失わないためなら悪いことやずるい事も平気でするようになってしまいます。
（他には地位や名誉、肩書きなんかもその類いでしょう）
だって、この世に生を受けた直後からそう教え込まれたのか、はたまた、生後の経験の中で、自分で勝手にそう決めつけるようになってしまったのかは別として、結果的に、他に選択肢がないんですから、そうなって当然です。
人情としては、とてもよく分ります。
しかし、もし、選択肢がもっと他あったら
「お金はだめだけど、他を当たるか」
とか
「今はお金に見放されているけど、しばし他のことで繋いで、機運が訪れたときに又お目に掛るとするか」
という余裕が生まれてきます。
なので、子供の教育は「どうやったらお金を得られるか？」又は「維持し、失わずにすむか？」に重きを置くより
「お金がなくてもへこたれない」「家を天災で喪失して気落ちしない」「職を失っても又探し始める」
そういう「めげない」教育、即ち選択肢を多く持たせるか、又は多くの選択肢が存在している事に気づかせる（気づいてもらえる）教育をしたいと思っております。
親として残したいのは「お金や家や株券等」の有形財産ではなく、それらを全て失っても、又立ち上がる「めげないスピリット（never give up spirit）」と、それを成り立たせる知識＋経験＝知恵いう無形財産を、この世への置き土産にしたいと思っております。
そのメリットは何かと言えば、親に掛る物理的コストが限りなくゼロに近いこともありますので、手前どもと致しましては、一度お試しになられることを、心よりお勧め申し上げる次第でございます。

2021/2/14

（苦手）

（以下、当時の言葉をそのまま使っているだけで、特に差別の積もりはございません）
平成の初めの頃のお話です。
大企業在籍で、高等教育迄受けているのに車の免許がなかったので
「平成のいざり」と言われ
当時導入初期のパソコンも「天敵」状態で
「平成の文盲」「デジタル難民」更には部下から「パソコンが全然似合わん」と迄囁かれる始末で、いい加減ノイローゼ気味になっておりましたが、暫くして、その無能ぶりから今で言う上司のパワハラに遭い、とうとううつ病を発症。
親会社では「役に立たたん」と子会社に転籍させられました。
が、行ったその先で、全く畑違いの営業の仕事で客先に赴き、見積書を提出した処、自分より遙かに若い女性担当者から
「あんた、資本主義の一から勉強して来」
と公衆の面前で罵倒され、見積書を粉々に引き裂かれた末、ドサ廻り大衆演劇の紙吹雪の如く、見積書が客先フロアに天高く舞うのに接し、
「こんな姿を妻子に見られたら」
と思うと「消えてしまいたい」「死んでしまいたい」気分になりました。
それが子会社の新上司の知る処となり、結果、外回りからは外され、仕事も与えられず、やる事無しで一日中「パソコンで仕事をしている振り」の「暇過ぎ無限生き地獄」を味合わされました。
当然帰宅しても、元気のある訳がなく、自棄酒を飲むと奥さんから顰蹙を買いそうなので、仕方なく煙草ばかりをパカパカ吹かしていると、奥さんばかりか子供にまで嫌われ、会社に行くも地獄、家に帰るも地獄状態となっておりましたが、その地獄より、先に申し上げました「暇過ぎ無間地獄」の苦しさの方が結果的に他を圧し、
「どうせ時間が腐る程あるなら、一層一から分らない事を全て自分なり解る迄考え直してみようか？」と半ばや自棄気味に思い立ちました。
「どうせ直ぐになんか解りっこないから、時間潰しにはもってこいだし。解れば御の字。解らなくても暇よりはマシ」
と始めた訳ですが、案に違い、之が暫くする内に一進一退ながらも、解き方のバリエーションが拡がり、いつしか夢中になっておりました。
そうして、ほぼ偶然からだったのですが、最初の「解らない事」が自分なりに解けたのが、始めてから約半年後の事。
その時の喜びたるや。

「出来た。自分にも。自分のような者にも時間をかけて諦めさえしなければ、半分は偶然の他力本願だが、それでも曲がりなりにも出来るのだ」
と驚いた次第。
その時思ったのは、得意な事でうまくいく喜びよりも
「苦手を克服した時の喜びの方が遙かにデカい」
と言う事でした。
得意な事でうまくいくだけだと、それ以外の方法を得られないので、苦手に対する認識も遭遇時の対処法も得られませんが、苦手を克服すると「鼻から捨てていた選択肢」を思いがけず拾う事になるので「お得感」と共に「避けていた地雷原の範囲」が狭まり世界がグググッと拡がって「自由往来度、劇的 up」の感がございました。
では又。

2021/2/17

（「多様性」前編）

「なので、多様性の尊重がこれからは、何よりも大切になります」
という話を聞いて、
「又、言ってらぁ。大げさだ、わ」
という言葉が、つい口を突いて出てしまいました。
「それって、応用が利かないとか、融通が利かないとかのレベルの話じゃないの？」
今日お話しするのは、ジェンダー等々のレベルの話は含みません。
極めて日常的な事柄と、マスメディア等で使われている「何でもかんでもAIと宣伝するが如く「多様性という言葉」を使いたがる」事にかんしての話に限定致します。
それでは本題。
帝国大学法学部を出、その後海軍経理学校を出て、大手メーカーの家電事業部長迄した親父が、定年退職後、ビデオデッキの操作一つ出来ない事に驚きました。
その後、母が入院をした折り、ご飯を作れないことは知っておりましたが、洗濯機を使えない、暖めるだけの電子レンジも使えない事をしって益々驚きました。
電子レンジなどは、親父が理解し易い様に、改めて多機能タイプから単機能に買い換えたほどです。
まず、一番目の話については、法学部出身ながら海軍経理学校を出たおかげで、スタッフ部門トップの総務系、即ち法学系とライン部門トップの事業部系、即ち経済、経営系の両方をオペレートできた為にかなり出世をしたようです。当時としては珍しく両刀遣いだったからです。
しかし、いずれも文系の分野での両刀遣い。文系（文書系）と理系（技術系）の両刀遣い（クロスオーバー）とまでは行かなかったようです。
次に二番目の話に就きましては、親父の息子である自分や弟、自分の息子達も、最低4年間は女手無しの一人暮しをした経験がありますので、家事全般一通りは出来ますが、親父の世代は「男子厨房に入いる、べからず」の教育だったので、それらをする事は御法度（御法度）行為として退けられ、当然ながらそれを身につける事も出来なかった訳です。
要するに折角電機メーカーの「家電事業部」という機会があったのに、HA（ホームオートメーション）からAV（アダルトビデオではなくてオーディォ・ビジュアル。まぁ、親父がアダルトビデォ分野に進出していたら、それこそ本物の「多様性」だったでしょうが）分野に、「男子厨房に入いる、べからず」から「どんどん入ってみよう」へと融通も応用へも視野が広がらなかった訳です。
でも、もしこれらを「多様性の欠如」というなら、より高次の話である「多様性」と言う言葉を「●●のカリスマ」「▲▲の達人」の様に手形乱発的に使っているに過ぎません。

単に「もったいないなぁ」という程度の話で、融通性と応用力の無さから、今までに何回も繰り返されてきた「日常茶飯な機会損失」の話の一つに過ぎません。
この様に中身を丁寧に見てみると、大概がタイトルキャプションの付け方で、新規性を出しているだけの話で、単なるレトリック上の話にしかなっていない事が多い様な気が致します。
（後編へ続く）

（前編の続き）
2021/2/17-2

（「多様性」 後編）

「それでは、ジェンダー以外の事で、お前の考える「多様性」は何か？」
と訊かれれば、尤も身近な処では
「語学（教育）に関わる事」
でしょう。
「最近、我が国の国語が乱れている。実に嘆かわしい事だ」
という話を耳にする度に、之また
「又、言ってらぁ」
と思ってしまうのです。
無論、新聞記事や学会論文、外交文書、学科教科書、受験学習時は正しくあるべきでしょう。
しかし、会話においては「現場を優先する」必要性を感じております。
現場優先を別の言葉で言えば「コミュニケーション優先」と言い換える事が出来ます。
ここでは、言葉は「文法や慣習上正しく使われる対象」ではなく、コミュニケーションを円滑且つより親密で実のあるものにする為の道具」として使うという考え方の方が、より的確だと思うのです。
英語を引合に出せば、世界公用語である英語について、今までの経験からは、英語が母国語である外国人や、母国語ではないがよく使う国々の人たちから「最近、英語が乱れている」という話を聞いた事が一度もないのです。
カナダの英語圏地域の友達によれば
「英語はその国の数だけある。余り気にするな」
といいますし、文構成順が、我が国と同じS,O,C,V（英文法上はS,V,O,Cが正しい）の国の人達は英語をS,O,C,Vにこちらが並び替えて使っても、違和感なく聞き入れてくれますし、アジア系のある国の人達は「行く」の過去形「went」を使って話すと何の事か解らず改めて文法的には明らかに間違いである「Yesterday I go to restaurant」と言わないと解らない事すらあるのです。彼らは同じ「go」という言葉だけを覚え、それを状況に合わせて「will go」だったり「go」だったり「went」に置換えて使っているのです。
こんな場合、正しい英語は何の役にも立たないばかりか、事項未伝達で言った人間の自己満足でしかない場合もある事を知っておく必要があります。
正しい英語が話せれば世界各国何処でもOKではないのです。
当店では更に「うとQ語」といえる言葉でないと通じない時もあるのです。
ここで話は一転。
先の文理、男女クロスオーバーとこの言語、コミュニケーションクロスオーバー。

それらをひっくるめて全体を多様性（ダイバーシティー）というなら、その獲得の元は、それらが混在している、将に「義務教育期間」と「学習方法（場面）」の中にあって
然るべきなのではないか？
と最近強く思っております。
文理や男女の多様性も話題としては結構なのですが、その前に基幹部分である義務教育時の語学、コミュニケーション法こそ
「まず多様であって然るべき」
だと自分は考えております。
「世界では、何処でも正しい文法で喋らないと全く通じない」
というのは、完全な誤解はおろか誤謬ですらある気がします。
「ミスリードの極地」
（皆さんが一人残らず外交官志望なら話は別ですが）
以上、多様性を四語熟語にすると
自分は「臨機応変」
相手は「不寛容自戒＝許容優先」
かと。

二〇二一年三月の巻

2021/2/20

（すべからく人間社会というものは）

アジア系外国人のお友達から
「この国ではワイロがないのでビックリした」
という感想を聞いて、こちらの方がビックリしてしまいました。
別に政治家レベルの話をしているわけではありません。
その友達が言うには、この国（我が国）以外は、税関にせよ、おまわりさんにせよ、場合によっては病院の窓口から軍人さんまで、兎に角ワイロだらけと申しますか、一事が万事お金と申しますか。
なので、それが世界の常識、ワールド・スタンダードだと思っている外国人さんの中には、我が国国民から善意でサービスされたり、好意での提供をされたりすると、逆に
「そんな筈はない。きっと何か裏がある」
と勘ぐって、そのサービスや提供物を敬遠することもあるようです。
一方うってかわって我が国国民は、お金に対して、少なくとも庶民レベルでは、結構潔癖なのですが、これまた逆に対人関係において、我が国国民同士の間では、遠慮なく本心を口にする外国人さんとは正反対に
「自分が本心を言わないのだから、きっと相手も本心等言うはずがない。自分と同じように本心とは反対のことを言っているに違いない」
と勘ぐるようです。
それが我が国国民同士間なら、経験則上解りもしますし「まぁ、やむなしだろう」ですむのですが、そんなことに全く馴れていないアジア系外国人さん方始め、欧米系の外国人さん方は
「何で来ます、来ますって言っていたのに、来ないの？」とか
「まぁステキ、是非欲しいわ、といっておきながら、置いて帰っちゃうの？」とか
その言行不一致ぶりに困惑混乱してしまうようです。
もし自分が冒頭のアジア系外国人であったなら、この国（我が国）に降り立った途端
「この国では、正反対の事を言うので、ビックリした」
となりそうです。
兎も角も、全世界中、お金であるか対人関係（交流術）であるかは別として、物心共に
「under the table world(テーブルの下、水面下の世界)」になっているようです。
少し舌足らずで端折った言い方になりますが

「守るも攻めるも、我が身大切」の恐怖心から、というのが
すべからく人間社会（イヤ、生物界全体）の有り様なのかもしれません。
追記）
上記の「守る」は敬遠や言行不一致である事は想像しやすいのですが、少しわかりにくいかもしれない「攻めるも」については「周りが皆ワイロを受け取っているのに、自分だけ乗り遅れては大変」からのワイロ強要は一見「攻めの姿勢」に見えますが、実は「乗り遅れては」は「貧乏くじを引いては」或いは「取り残されては」という恐怖心に根ざしている事を指しております。蛇足ながら。

2021/2/22

（かえ時？）

自分は数年前、地元住宅街の自治会で交通防犯部長をしておりましたが、その目で見ると、この地では交通規則等「在って無きが如し」の感があります。
歩道をチャイルドシート付自転車が追い抜き様、呼び鈴も鳴らさず、声かけもせず全速力で走り去るのは日常茶飯。
偶に自転車がちゃんと車道を走っているかと思えば、車道の右側で、対抗する左を走っている自分の自転車に気づいても、絶対にどかず、こちらに向かってまっしぐら。
車は、それが車というだけの理由で、特に外車と高給国産車が、これ又対抗する自分の自転車に対して、センターラインを大幅にオーバーして向かってくる。
腹が立つので、それらに対し、反対側に寄れという合図を手ですると「この俺様（私）に向かって何だ（何よ）」とばかりにとてもイヤな顔をする。
或いは、道の真ん中で立ち話やキャッチボールをしていてどかない。子供だけだとどくのですが、却って親がいると気づいているのに、その方がどかない。
か、と思えば昼間「お前の処はガチャガチャうるさい」と匿名の苦情が入る。
それが夜ならそう言われても仕方ないのでしょうが、昼間仕事上の電話を各５分位、多くて数本する位の話です。
自分の感想では、こちらがうるさいのではなく、反対に周りの家が不気味なくらい静かすぎる感じがします。
まるで通りを「戦時下のゲシュタポ」が、摘発のためにしらみつぶしに犯人狩りをするのを怖れて、家の中で物陰に隠れ、ひっそりと息を押し殺しているような絵姿しか浮かんできません。生活音がまるでしないのです。
顧みればそれは、今コロナ渦の自粛生活で始まったのではなく、それ以前からそんな感じだった気がします。
或いは又、当店傍の UR 住宅の階上にすむ、弊社従業員の外国人一家の話ですが、３才の子供がどんどんと床を踏んでうるさいので、階下の老人が腹を立て、ステッキで天井を突き上げたり、壁をどんどんと叩いたりして怖いので、引っ越しをすることにしたそうです。
うるさいと言ったところで３才の子供が床を踏み鳴らす音などたかがしれていますでしょうに。
それに、ステッキで壁を叩く音の方が余程隣室の人にはうるさいし、怖いような気もします。
しかし、その一家は、下手に反論して入国管理局にあらぬ事を言われても困るので、泣く泣く引っ越す事にしたようです。
兎に角何だか変なのです。
何かがずれている。そんな感じがしてならないのです。

無論自分の意見が「一方的な記述」である事は分っております。
分っておりますが、どう思い直してみても「何か変」
「一体何、これ？」の感
が否めません。
自分の家のある区と、商売をしているお店のある区は互いに隣接していて、県内でも有数の「インテリ層」の多い区なのですが、下町の区に比べて、何かとても「おかしな状態」になっている気がしてなりません。
お店は移せませんが、住居は親の遺言に反し、下町の方へ移そうかなぁ、と。

2021/2/22-2

（暇地獄）

商売をやっていて、最近人からよく訊かれるのが
「儲かりもしない。女にももてない。苦労ばかりを押しつけられる。一体何が面白くて、商売なんかしているの？」
とかです。
それに対して
「苦労マニア」
と冗談めかして答えているのですが、正しく言えば
「暇地獄を知ったから」
なのです。
以前、うつ病で、仕事が回ってこず、回ってきても何も出来ず、怖くて逃げてばかりいたときがありました。その後ろめたさ、たるや。
しかし、それ以上に机に向かってパソコンを開いても、何もする事がなく、ただひたすらチャイムが鳴る迄「残り後、何時間何分」と数えてばかりいた時の「暇である事のつらさ」
それをイヤというほど味わわされ、そこから派生して、定年後、仕事がなくなったら同じような状態になる事を想像し、
「そんな思いだけはもう二度と味わいたくない」
と思ったからです。
「それを避けるためなら、大損でも大けがでも、大苦労でも良い。その方がよっぽどマシだ」
と思ったのです。
しかもその苦労が困難であればあるほど、簡単には暇にならないという、たったそれだけの理由から
「敢えて難問に取り組む様になった」
というのが正確な理由、即ち正解かもしれません。
うつ病までは行かずとも、想像してみると解るのですが
「大手術を終えて、やっとの思いで生還したのに、その先元気になってもやることが全くない」時の絶望感を。
毎日が「日曜日でありすぎる事」からくる「生命力や活力の長期暫減傾向」に歯止めの掛らない「チョロチョロ漏水感（老衰感、とも）」や、何をしても良い筈なのに却って何をして良いのか解らない、戦う相手を特定できない「徒手空拳感」
結果、そのうろたえや狼狽の姿を見せまい、見透かされまいとして「ありもしないリア充実や威厳」を維持する為の「虚勢の日々と、そこから来る言い様もない疲労感と虚しさ」
に覆われ、益々本当の解決から遠のいていく誤り。

国民救済の筈が却って富の偏在を招き、格差拡大しか生まない金融緩和の如き相反乖離。
その心理的地獄に比べたら「大損や大けが、大苦労なんて、まだカワイイもん」です。
言い方に語弊があろう事は十分承知の上ですが
「所詮人生暇潰し」
（であるなら、楽しく面白いと感じられる事をやった方がいい。例えそれが困難に満ちており、苦労の連続ばかりで、休む時間すら無かったとしても）
「休むのはあの世に行ってからでも遅くない」
という（訳ですから）、我が国の偉大なるコメディアンの言葉に尽きるような気もします（括弧内は筆者の言説）
追記）
例えば、難事件解決に大活躍中の杉下右京さんや榊マリ子さん達が定年退職したあと、どのような心理状態になり、どんな生活を始めるのか？それを想像してみるのも良いかもしれません。
才能ある人が、その天職が終わった後どうするのだろうか？という
それこそ「暇地獄対処法」という超難問を今から解いてみるのも面白いかもしれません。

2021/2/23

（大いなる不安？）

なんと、このコロナ渦、従業員の子供達がやってくることになりました。ネパールから最低３人。今後の申請審査如何では、最大５人。
「呼ぶのはいいが、来たら学校とかの事、考えてぃんのやろぅ、な？」
と訊くと
「ボスが考えるからイイ」
「アホ、そりゃ、親の仕事やろぅが。それに来てから考えとったら、その間、子供さん、どうすんねぇや？暇で、こまるやろぅ」
「だいじょうボ。その辺、走り回ってイル」
「ハイ？」
一事が万事この調子。そもそも子供の誕生日を覚えていないのは序の口なのですから。
しかし、このように書くとかなりいい加減な親のように思われるでしょうが、それはそれなりに納得のいく面もあるのです。
彼らの考え方は
「子供なんて言うものは、ほっといても雨後の竹の子か「岩場の多いヒマラヤ」の雑草のように育つ」
で、その根拠はというと
「自分たちがそうだったから」
なのです。
そんな彼らから見ると、チャイルドシートにビニールテントを被せた風防付電動自転車が行き交うのを見ると
「なんで、親子で乗っているのに、子供さんは jail(監獄＝檻)の中にイルノデスカ？子供さん、カワイソウ」
という事になります。
そう言われてみると、中の子供さん本人は狭苦しく且つ息苦しいだろうし、傍目から見るとなんかちょっと過保護な感じがします。
過保護のイメージは「ビニールハウス内の温室育ちのイチゴちゃん」という処でしょうか。
これでは、冬の嵐でテントが吹き飛ばされるような事態になったら、中のイチゴちゃんは到底生きてはいけません。
ある程度風雨にさらされても大丈夫な「野いちご君（さん）」位にはしておかないと、でしょう。
それにしても、３人はおろか５人も子供がやってくると、扶養手当（家族手当）の増額だけでも、大変な額になります。給与アップ額が。

「おのれらぁ、子供さん呼ぶんはえぇが、その分売上上げんと、この店、潰れるでぇ。わかっとるの、かいな？あんっ？」
途端に彼らは目を白黒させて黙ってしまいます。
何だかこの先どうなるのか？とっても不安になってきました。
果たして我々はこの難局を今回も又、いつも通りに楽しむことができますでしょうか？
この先や如何に、乞うご期待、とかで。

2021/2/23-2

（続 大いなる不安？ 語学篇）

先の記事の続きで、ネパールから子供達が大挙してくるとなると、子供達をどの学校や保育園に通わせるかを考えなくてはなりません。
基準は簡単で、英語を話せるようになる学校か、日本語を話せるようになる学校か、ネパール語だけ話せればすむ学校なのか？という選択肢です。後はそのバリエーションの組み合わせですが、
何よりもまず之が第一番目の優先事項です。
何せ放っておいたら、ヒマラヤの雑草さん達は、伸び放題の育ちっぱなしで、風に吹かれてその種子が何処に飛んでいくか分りません。
なので、ある程度は我が国の事情を知っている自分が、仮初めの道筋くらいは付けてやらないと、いけない気もしてきました。
そこで、どの学校に通うにせよ、このお店の従業員、最低限の共通語である英語だけでもこちらで教えないといけないかなぁと思い出しました。
で、その折り、どういう教育法が最適だろうかと考えていたところ、当のネパチャイルドとは直接関係の無い、我が国の子供達への英語教育について、偶然にも、ある仮説が浮かびました。
以前、弊社語学教室の案内で
「英語は覚えるものではなく、考えて作り出す（創造する）ものだ」
と書いて、いい加減なでたらめを言うな、と可成の顰蹙を買いましたが、それについてもう少し分かり易い説明方法が浮かんだのです。
曰く
「漢字は、その文字の組み合わせによって、辞書にない造語をいくらでも作り出せ、相手はその漢字文字の組み合わせを見ればおおよそ本人が何を言いたいかの察しがつく。例えば流氷は有名だが、押し流される川の岩を「流岩」と書いて、辞書になくとも多くの人が何の事か分るだろう」
「英語も同じで、動詞＋前置詞の組み合わせ方次第で、その場に合わせた造語がどんどん出来る。いちいち idiom（成句）として覚える必要は無い。組み合わせ方はその場の雰囲気で自由。余り考えなくても良い。但しイメージだけはしっかり頭に入れておく事。
例えば
前置詞のイメージは
At はピンポイント。On は上と言うより積み重ねる、連続するイメージ。Along は何かに沿ってで、off はぱっと離れる感じに対して away は徐々に離れていくイメージとか。Up はテンパるというイメージで、out は出かけると言うより居なくなるイメージ。
これらを動詞と組み合わせると

Look at　は、そのポイントを見る。
Go on は続けて先に進む。
Go along は道に沿ってで「道なりに」
Take off はぱっと取るだし、take away はゆっくり離すように取り去る。
Fill up なら記載することをテンパるで「記入し上げる」だし
Get out だと「居なくなれ＝出て行け」となるとかです。
後はこの前置詞の持つイメージを任意の動詞にどんどんくっつけて喋れば、一丁できあがりです(前置詞をイラストにしておくともっと分かり易くなります)
なので、英語は考えて（その場の状況に応じて）作り出すものだと申し上げた次第だったのです。
今まで説明不足で、大変申し訳ありませんでした。

2021/2/23-3

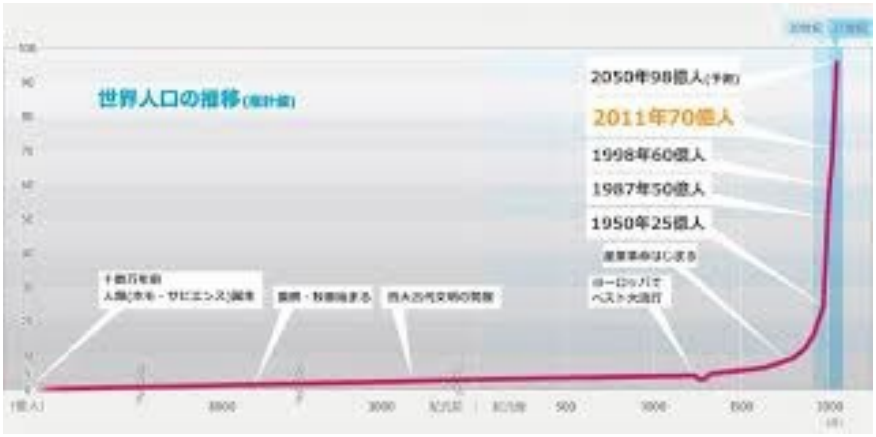
（続々 大いなる不安？終篇）

来日するネパールの子等を含め
「子供は地球の宝」
だから、我が子も他人の子も分け隔て無く大切に育てなくてはならない。という筋立てと本日の展開は一寸違う運びになります。
臍曲がりとか奇を衒ってではなく
「んっ、それってどうなの」
と何かが引っ掛かったからです。
「子供は地球の宝」といって大切に育て、その数（人目人科の数）が増える事は少子化対策や産業活性化上、大変好ましい事ではあるのですが、果してそれは地球様の立場からして同様に好ましい事なのかどうか？
更に具体的に申せば「環境破壊防止＝環境維持」の観点から見て、プラスなのかマイナスなのか？同一方向に両者のベクトルが合っているのか否か？
という疑問でした。
ひょっとして今迄我々は
「子供の増加と地球の繁栄は同一」であると無意識に見做していただけなのではないか？
もう少し分かり易く言えば
「子供はやがて成長して大人になる。その成長した大人の活動は、地球にとって好ましいものだったのかどうか？」
を考えず、それが人目人科の立場のみの範囲である事にも気づかず
「子供は地球（上の人目人科にとっては）宝」の括弧の分を抜いていたのではないのか？と思い始めたのです。
無論、子供の数を産児制限せよ等と言う積りは毛頭ありません。
強引な産児制限の結果、一人っ子ばかりになって、精神年齢の成長に齟齬を来してしまった実例を既に見る事が出来るからです。
かといって野放図に「神の見えざる手」を、諸手を挙げて鵜呑みにした（或いはさせた）誤認識やミスリードもどうなのかなぁとも思います。
（神の見えざる手というのは、別に神様が悪い訳ではありません。その様に論理的飛躍（端折りと土壇場のうっちゃり）を神様の名を借りて行い、又根拠なく納得した人間の側が悪かっただけです。その点は誤解無きよう）
それにしても人間の此れら「思い込みの威力」には凄まじいものがあります。
歴史を振り返ってみると
エジプトのファラオ墓、ピラミッド。

死後の再生を信じて２８年間延べ数十万人の労働力を使って、死の世界から蘇った折、まとう衣となる肉体のミイラを安置する場所として、このピラミッドを作った訳です。
生涯を通しての監督官が 30 歳でこの任に就いたとすると 58 歳まで、ほぼ現役時代の全てを費やしてこの仕事に従事した事になりますし、延べ人数を 28 年で割った数が仮に 1 年間の実数だとすると約 1 万人がこの仕事に日々従事した事になります。
それが負の面だとすると、正の面は土木工学や組織、物流。交易術の発達、即ち。建設資材輸入の他国外交、運搬、動員 management の発達。
現代医学からみれば、事実無根の誤認識による暴挙ですが、現実にはその「思い込み」が、そう迄してピラミッドを作らせたのですから「思い込みの威力」たるや…
良くも悪くも人類史というのは、今に於いても「途方もない思い込みの歴史作物」である様な気がして成りません。

2021/2/24

（大いなる不安？重要なオマケ篇）書庫版



どうも 1200 文字以内という範囲の中では、自分のような冗長型人間には、話の内容の展開に無理があるようで。
要するに舌っ足らずになるか、論理の飛躍が起きてしまうようです。
で、前回の記事に対しても
「一体何が言いたいのだ？」
「何の話だ、これは？」
というご意見がございました。
なので、今一度簡単に付け加えさせていただきますと
「人類の繁栄は、青天井である、というのは完全な思い込みなのではないでしょうか？」
というのが疑問の核だということです。

人間の側から見るとわかりにくいのですが、自然界の側（相手の立場の側）から見ると、近年、人間の数が異常に膨張し、共存可能な均衡点を超えてしまっている様に見えるからです。
増えすぎたものはいずれ淘汰され、減少に転じ、均衡可能な点まで縮小する、というのが自然界の法則です。
これは人間にとっては極めて恐ろしい事実です。ある意味今後は「悲惨なことの連続」が起きる可能性があるからです。
なので、そうなる前に何か自然界とうまく共存できる手立てはないのか？
それを探る第一歩として、正しい現状認識に立つ事が肝要ですが、
その点に立つには、まず
「人間の繁栄は青天井である」
というのが「単なる人間の側から見た、根拠のない思い込みなのではないか？」
という疑問を持つ必要が無かろうかという趣旨だったのでございます。
そのことを最近では、拡大と縮小をうまくコントロールした社会という意味で
「サスティナブル社会」即ち「持続可能型社会」と言い表すようになっているようですが、この探求を、それこそ可及的速やかに、且つ大胆に試行錯誤して、その解を見いだす時期に来ているような気が致します。
将に 2030 年迄のこの 10 年間が、勝負（人類の存続の可否）の期間となる最重要時期ではないでしょうか。

2021/2/24-2

（人生は長いのか？短いのか？さて…）

「人生は長い。何度でもやり直しがきく」
といったり
「人生は短い。つかの間の夢だ」
と、言ってみたり。
では。結局人生は長いのでしょうか？短いのでしょうか？
とまず言っておいて
次に
「一度か二度の失敗の後、必ず成功する」
といったり、もっとスゴイ奴は、
「誰でも一回目からホイホイ成功」
の、様なものまで色々ありますが、現実には 100 回トライしてうまくいくのがせいぜい 3 つから 5 つくらいが関の山です。
そのことに関して、かの有名なイチローさんくらいのレベルの人が
「魔法の杖はない。日々の地道な練習があるだけだ」
といえば
「それはそうだ。その通りだ」
といった翌日に、ネット検索で
「あなたにだけ特別 offer。開業して 1 年で誰でも黒字達成」
の、様な記事をあさる場合も多々あるようです。
結局開業して 1 年の記事のようなうまい話に釣られて、うまくいかないこと 50 回。20 歳から始めていたらなんと 50 回目の空振りスィ時には、御年 70 歳になってしまっている。
で、ようやく 70 歳にして
「そんなうまい話は、やっぱりなかったんだなぁ。じゃぁ、これからイチローさんの言葉に従って、地道にコツコツやりはじめようか」
と思い直したときには、もう地道な「コツコツ」をやるに足る余命が全然足りなくなっている。
「あらまっ、どうしまショ!!」で「0h My God!!」
「こんなことなら、20 歳の時からコツコツやっておくんだった。100 回は出来なくても、仮に半分の 50 回やっていれば、1 つや 2 つはあたったかもしれないなぁ」
で、最初のお話に戻って「人生は長いのか？短いのか？」
は、
「何もしなければ、とても長く感じる」
「失敗をやり直すには十分とまでは行かないが、かなりの猶予はある」

「うまくいくか行かないかは分らないが、夢中になってやっていればとても短く感じられる」
という様々な取り様があると言うことだけ、分りました。
じじぃの戯言。
ハイ、お粗末様、でした。

2021/2/25

（名状しがたい疲れと悲しみ）

自分は子供の頃から「結構素直な子」ではなくて「結構素直に反応する子」でした。
1 対 1 の対称形と申しますか、刺激が来ると直ぐ様、何らかの反応を示していた様です。
大人になってもそれは余り変わらず、人によってはその反応の良さを好いて下さる方もおりました。
本日のお話はその自慢話ではなく、そんな自分から見ると「表情一つ変えず、何も反応しないという有様が不思議に見えてならない。一体どうなっているのだろう？」という疑問のお話です。
兎に角街を歩いていると老若男女を問わず、この「無表情、無反応」に多く出くわします。
人間を生物としてみると、死体でも無い限り全く反応がないと言う事はあり得ません。
だとすると刺激を受けて生起した反応は何処へ行ってしまっているのか？
自分にはその対処法の見当がまるでつかず、不思議でなりません。
どこだかの廃炉の汚水ではありませんが、生起した反応を溜め続けておくと、そのうち耐えきれなくなって爆発してしまいます。
そうならない為には反応を分解処理するか、又は反応を誘引する刺激体を遮断又は回避するしかありません。
それで追々、観察を始めた処、前者は目立たぬ意地悪等でチョロ出し分解をし、後者は「兎に角見て見ぬ振り」や「無関心スルー」でやり過ごしている様に見えてきました。
で、次の疑問が湧いてきました。
「ならば何故そんな事をしているのか？」
親から
「簡単に本心を見せてはいけない。本心を読まれたが最後、お前はその人に一生弱みを握られる事になるのだから」
とでも言われているのでしょうか？
或いはその「無表情、無反応。無関心スルー」は負の価値ではなく「事に於いての不動の落ち着き」とか「立派な人間の品格」として捉えられているのでしょうか？
もしそうなら、もっと堂々としていても良さそうなものなのですが、どうもその様にも見えません。
だったら、一体何によるのだろうと考えてみた末に、思いついたのが
「隣と同じ横並び」
でした。
兎に角目立ってはいけない。違ってもいけない。差があってはいけない。
「隊列を乱したら、先生から笛を吹かれて叩かれる」
刺激の吸収どころか、刺激を感じる体内全器官　を破壊されてしまうから。

しかし、それでも未だ分らない処が残ります。
一方で「目立ちたい」という願望も明らかに見て取れるからです。
いや「目立ちたい」というより「関心を向けて欲しい」「忘れて欲しくない」そうしてそれこそ「無関心スルーだけは御免だ」という方が正しいかもしれません。
「私は、外からの刺激を受けて小さく丸まってしまう「玉虫」です。でもスルーだけはしないで下さい。気づいて下さい。お願いだから」
（でも声掛は、こちらからはしませんから。そちらからまず、ですから）
という二律背反。
一体何でこんな複雑な事になってしまっているのでしょう、我が国は。
何だか言い様もなく疲れ、悲しくなってしまいました。

0221/2/26

（「格差」という言葉を読み替えてみると）

格差というのは、何も経済の話ばかりではないような気がします。
「格差」という言葉を「断絶」「疎外」「排他」「敵対」と読み替えると、詰まり格差が生み出す結果に置換えると、少しはイメージしやすくなるかもしれません。
そういった目で辺りを見回してみると、日常的な行動の中に、それらの断片が散見されることに気づかされます。
例えば
仲間内に対しては異常なまでの気の使いよう。
その褒め言葉や過剰な感謝の言葉を耳にしていると、殆ど
「隷従隷属」「下僕（しもべ）」「奴隷」もっと言うと「魂まで売り渡してしまった」かのようにさえ聞こえることがあります。
ところが、仲間内以外、例えば見知らぬ通行人に対しては「恐らく利害の内、その中の最重点項目である「利」を齎すことはないであろう」という憶測だけで「よいしょ」「手もみ」と同じレベルの熱量を一転、手のひらを返したが如くに、正の記号から負の記号に反転させたような「冷視」「無関心」「無愛想」な態度を見せる。
将に「対仲間内 如 菩薩（紳士ジキル博士）、対仲間以外 如 夜叉（冷血漢ハイド氏）」
の二枚看板(double standard)状態。
しかも、その仲間内として認める許容幅は「非常に狭い平均台またはタイトロープ程の幅」で、それを少しでも外すと、途端に相手を「ぞんざい」に扱うか、自分がその相手に属していれば「ぞんざい」な扱いをされる羽目に陥ってしまう様になっているようです。
結果、そう言った極端な「周りへの態度変化」は、まさに「断絶」「疎外」排他」そして「敵対」をうみだす元になっておりませんでしょうか。
或いは、そういった言葉に置換えることが出来るレベルの「格差」となっておりませんでしょうか。
自分のような経済の専門家ではないものにとっては、こちらの「格差」の「K 字乖離拡大と相反」の方が、遙かに身近で深刻な問題のように感じるのですが、皆様方はいかがでしょうか？
呼吸器系疾患のある自分はそのせいか、こうした中での生活に、大いなる息苦しさを日々感じるようになっております。
我が国国内、之に類したことは、他にも数多散見されるのですが、我々はお互いにこの「仲間内だけ」という「純化（高純度での均一化）」という美名（美意識）の「不寛容（排他、排斥）をやめ」お互いの段差を今少し縮めて、
もっと、相互寛容で相互往来可能な「大らかさ」を持てないものでしょうか、ねぇ？
というのが、ここしばらくの自分の偽らざる感想と、切なる願いでございます。

2021/2/28

（「デジタル・データの時代」雑感）

データの世紀といい、データ社会といい、データ経済といい、DX（Digital Transformation=デジタル（デジタル技術によるデータ処理）が齎す大変革、大変容）といい、最近データ、データのオンパレードですが、何となく又

「之って戦前の大本営発表と同じ事なんじゃないの？」

と思ったりします。

要するに反対意見が何もない「大政翼賛会」現象と申しますか、

横並び同調圧力による「反対側に就くべからず」症状と申しますか、

ブームに乗り遅れまいとする「ダッコちゃん、フラフープ」現象と申しますか（喩えが古くて申し訳ありません）

しかし、少し冷静になって考えてみると人や経済等、人間活動に関するデータというのは、もっと言えば「そのデータ上の人」というのは

1. 完全に人が記号化されている
2. 人間が属性別（例えば男女別、既婚未婚別、職業別、年収別、学歴別、世代別、実年齢別、嗜好別、購入履歴別など数値化、記号化できるもの）アイテム毎に完全に切り刻まれる

事になる訳でもあります。

平たく言えば、そこに収まりきらない「生身の人間（の全体像）」が、一部の自然科学分野を除き、社会科学分野、特にマーケティング分野では、どんどん消えていく、或いは「むしろ捉えにくくなっていく」可能性がある様な気もします。

データ活用やその権化であるAIのイイ面も多々ある事は十二分に分っておりますし、我が国がデジタルやデータ活用の国際位置的には大幅に遅れており、それを速やかに catch up する必要性も大いに感じてはおります。

が、しかし、もっと長期的、もっと俯瞰的に見る視点も重要かとも思います。

これ又それを簡単に申し上げますと

「生き物としての人間、生身の人間、生活者としての人間」がどんどん消えていく、必要なくなっていく事を暗示しているのではないのか？な、と。

なので、ここは、データ活用、AI 活用は諸刃の剣である事を十二分以上に理解した上で事を進める必要がある様な気がしております。

その見極めの為の重要な判定、評価基準として、それが

「お金儲けのためなのか、それとも人助けのためなのか」

がとても役に立つ判断材料になり得るのではないかなと、思っております。

追記）

何故こんな事を申し上げるかと申せば、何の事はない、上記のデータを「お金尺度」で判定してみると
「自分や自分の会社」は、確かに今は儲かっていない「ゾンビ会社」とその責任者ではありますが、志はあるとおもっておりますので、それを無視されて「クズか、カスか、ゴミにしか当たらないよ、あんたら」と弾き飛ばされる事が想像されたからです。
「一寸の虫にも五分の魂」
故、そんな事をされては大いに心外であり、困るとも思ったからでございます。
で、ありますので、最後に一言、
我々の住処が、今は社会の底辺、辺境と雖も
「どっこい、おいらは、生きている（おります）」
し、同時に皆様方には、それを知って戴きたくもあるのでございます。

2021/2/28-2

（うとQ的ホラー劇場）

以前にもこのタイプの記事を書きましたが、時々自分の頭の中を「うとQ的」に怖いと感じられる思い付がよぎる事があります。
本日の副題は「衰退退場勧告」
最近、出生率の低下が取沙汰されております。
未婚率 up とか、夫婦間の sexless 傾向とか、気力の衰え等原因不明の無気力症状や、潜在的なうつ病予備軍の増加とか、いろいろな原因が考えられます。
或いは、その総合値が出生率の低下に繋がっているのかもしれません。
（今回は、話を見え易くする為、敢えて経済的な理由は脇に置く事にします）
この「出生率の低下」という言い方は、生物界に当てはめてみますと
「繁殖力の低下」即ち「種としての衰退（衰え、下り坂）」と言い換えることが出来そうです。
そうして今ひとつは、コロナ渦、台風雪水害、山火事、異常気温現象、巨大地震などの自然災害の増加が近年急激に増えておりますが、これを人間以外の視点、即ち地球様視点に成り代わって見てみますと
「人類への地球、表舞台からの主役退場勧告、引退勧告」とも取れる気もします。
「碌な事しないし、（特に先頭集団＝先進国は）精力も衰えてきたのだから、そろそろ消えたらどう？」
という訳です。
しかし人間様である自分は、
「ですよね。はい、分りました。消えます」
とは絶対に言えません。なぜなら人間である自分は
「そんな寂しい人生（人目人科生）は真っ平御免」だからです。
ならば、どうすれば良いのか？
単に、成長や活動を「我慢して忍ぶ」という負の加圧一点収斂封鎖力学方向ではなく、
「生き生きとした生命力（繁殖力）を持ち、元気に活動するけれども、地球の邪魔にはならない又は有用な存在となれる生き方、暮らし方、楽しみ方」
という正の減圧多方向開放発散推進力学方向での、です。
そういった地球様との折り合いを付け、尚且つ自分自身も生き生きと楽しい、相互扶助的で調和されたあり方。
それこそが、ニューノーマルと言える「新しい価値観」なのではないかなぁと思っております。

今後、覇権国家がどこになるか？とか、DX 等でテレワーク等の働き方改革はどうなるのかとか、GAFA の後の勝者はどこか？等と云ったレベルでの、ニューノーマル模索と喧伝されているのは、将に今までの延長線上の議論でしかないような気が致します。
この「思い込み」を正し、それ迄に解決実効策の成果の端緒を出すようにしておかない限り、2030 年からは、恐らく全世界的に今まで人類が経験した事のない「スペシャルホラー劇場」を目の当たりにする事になる様な気がしてならない昨今でございます。
自分としては、それ迄の時間の無さに相当量「ビビって」おる次第でございます。
一方「サバイバルの極み」である軍事兵法の理（ことわり）によれば「その極意は相手（自然界も）をねじ伏せ、消し去るのではなく、味方に付け、役立てる事」に尽きるそうで。
さて 2030 年迄に我々人間は、その極意を発揮できますでしょうか？

2021/3/1

（これからは「新 切り分け法」で）

結構大変な事があり、話を聞いて貰おうとすると
「自分ばかり大変な顔をしないでよ。私の方がもっと大変なんだから」
という答えが返ってきました。
一回目も、二回目も、何回そんな事態があって、話を聞いて貰おうとしても、まるで訊いて貰えませんでした。
この話は、そんなことも一つの原因となって既に分かれた、元奥さんとの話です。
しかし、その折り、之は元奥さん特有の話なのだと思っていましたが、そうではありませんでした。
年代を問わず既婚女性に於いて、なかんずく 60 歳代以上の既婚女性においては顕著に、同じような反応示すことが分ってき来たのです。
一方、若い独身の女性はというと、余りそうした傾向は見られませんでしたが、積極的に耳を傾けると云うこともありませんでした。
ところが、外国の女性となると、既婚未婚を問わず
「へぇ〜。大変だったのねぇ。で、その話、その先どうなったの？ねっ、聞かせて、聞かせて、聞きたいわ」
と、大いに関心を示してくれたのです。
そんな訳で、言葉は同国人女性と話すのに比べて、遙かに不自由でありながら、ジェスチャーや表情、イラストや図表を使う工夫を覚え、話を聞いて貰い、随分とカタルシス（溜飲を下げる思い）を得る事が出来ました。
そうした経験から、近親者であるか否か、或いは同国人で同言語を話すか否かより話を聞きたがるか否か、という切り口の方が遙かに大切で、有用だなぁと認識が変わってきました。
云ってみれば、今まで上下の区分けを横に切っていたのを、縦に切って左右に区分けした方が良いのかもしれないといった切り替えです。
そうした経験から、認識切り替えの適用対象範囲を拡げてみると、例えば、位が上か下か、又は男か女か、さらには同国人であるか外国人であるのか、という区分けには余り意味が無くて、ただただ接する度の一例毎に「まともであるか、そうじゃないか」（人のこと「も」考えられるか、自分の事「しか」考えられないか）を見分けていった方が、すっきりと分かり易いなぁと思うようになりました。
高位の中にも変な人も居れば、女性に中にも立派な人も居る。同国人の中にもおかしな人も居れば、外国人の中にも素晴らしい人も居る。
一回一回、一人一人につき手間暇は掛りますが、その人の属性（肩書きやクラスター要素）を一旦可能な限り取り去って面と向かい合って見極めた方が良いコミュニケーションが出来、それが齎すものの中に、遙かに良い結果が埋まっている。

そういったことが最近分って参りました。
長いこと生きている割には、かなり遅い時期の発見でしたが、未だ幾分余命がありそうなので、この切り分け法で、これからの人生に臨んでみようと思っておりまする。

2021/3/1-2

（これからは「新 切り分け法」で その２）

前記事に続き、本日 2 番目の「新切り分け法」の事例です。
「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」
という諺がありますが、これをやり過ぎると、大変な遠回りをすることになるか、又はとんでもない袋小路に陥ってしまう場合があることに気づきました。
嘗て在籍していた会社とそこからリストラで飛ばされた先の子会社の、それぞれ上司さんと先輩さんは「ものすごぉぉっく、ヤな奴」でしたが、云っていること自体には一理ありました。
例えばパワハラ上司さんは
「プレゼンは起承転結ではなく「起承結」でやれ。「転」など入れて話を緩めずに、一気呵成に「結」に行くのが正しい」
とか
「云いたいことは山ほどあっても、一つに絞れ。多くて三つだ。それ以上は相手の頭に入らない。今日覚えて帰って貰いたいことだけに絞れ」
又、行った先の子会社の陰険一言居士の先輩さんは
「後工程はお客様だ。後に受ける人が、仕事がし易い様に渡すのが仕事というものだ」
とか。
前者さんに対しては
「まずは、云っている本人が実行してくださいよ、ね」
と思い
後者さんに対しては
「よく言うよ。自分は全くしていないよな。時に意地悪を混ぜ込んで渡している癖しぁがって」
と反発を感じましたが、云っていること自体は間違って居なさそうだったので、臆面も無く云っている本人の顔にはズボッと「紙袋をおっかぶせ」云った本人とは切り離して、頭の中の「使えそうな素材集の、と或る 1 ページに記録」しておきました。
と申しますのも「盗人にも一分の理」
居直り説教強盗が垂れる「説教」の中にも何がしかの「聞き得」内容がある様な気もしていたからです。
何故なら「完全悪」も「完全善」も無いのが常ですから。何事も一方が 100%は、ないはず、という考えから。
そうして、そこまでこちらが一旦は譲歩した上で、それでもやっぱり悔しいので、素材集の書庫に放り込んだ後は「お達者でぇ～」とばかりに心の中で、連中を遙か遠くに蹴っ飛ばしておきました。

しかし、こうした素材集はその後、いろんな面で大いに役に立ちました。
もし、これを「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」で、言われた理を採用する事を、あたかも敷設された地雷を踏まない様に、避けて通る大幅な迂回をしたり、それも面倒だからと消し去ったりしていたら、恐らく同じ手法や結論の代替品を見いだすのに、とんでもない時間と労力を費やさなくてはならなかったでしょうし、それも出来なかった場合は、ひょっとしたら真逆の結論に辿り着いて、妙な事になっていたかもしれません。
あの時「言ったのが誰か」と「言われた道理そのもの」は全く別物ではなかろうか？というある種のひらめきがなかったら今頃どうなっていたか？
今としては、あの時「偶然のそれ」がなかったらと思うと、ちょっと怖い気がしております。
些細なことが決定的な分かれ目になる場合が多い事が、よくあるからでございます。

2021/3/1-3

（過ぎたるは及ばざるが如く、にて）

大企業での会社員時代に、事業部でのコンセンサス取得と意思決定を行う会議の資料作りをしていた折、上司から
「上程資料に当たっては、常にマトリクス思考を忘れるな。縦横斜め、どこから見てもほころびや矛盾がないことを必ず確かめてから、もってこい。厳しくチェックするから」
と散々言われました。
確かにおっしゃる通り。
しかし、これを普段の生活に当てはめてみると
「何かを行うことで後先に引き起こされると想定される結果を常に事前に確かめ、左右からの人の目線をも気にしながら、現在位置での一挙手一投足に「責め」が降りかからないように恐る恐る歩く」
姿しか浮かんできませんでした。
役所内の「そこここに言訳が矛盾無くちりばめられ、誰にも迷惑が掛らず四方八方丸く収めて、一同めでたし、めでたしの会議」（之はコロナ渦前のお話ですから、誤解無きよう。現在はいっかなお役所と雖も、そのようなことにはなっていようはずがありませんでしょう、けれど）に上程する資料の準備心得としてならいざ知らず、イノベーティブな案件については、そもそも初っ鼻から、前後左右矛盾無き三方両得などと言うことはあり得ないはずです。
大抵は、一カ所が突出していて、後は平均以下の得点で、ヒトデ型グラフにすれば、槍型ないしは不格好な異形グラフなる事が普通だからです。
平たく言うと「とんがっている」と。
換言すれば
「矛盾だらけで不整合だが荒削りな野人の如き不格好の魅力」
となると、日常生活のみならず、事業戦略会議に於いても、前後左右矛盾無く、突っ込みようのない「綻びゼロ提案」などと言うもの自体、おかしいのではないのかな？と最近になって思い始めました。
つまらないところで引っ掛かって、その正誤確認に無用の時間を費やすのは確かに愚の骨頂ですし、それを回避するための技術論としてのマトリクス思考（ステップ）は必要な気はしますが、それが事業戦略や生き方にまで拡大されて縛られてしまうようであるなら、之は百害あって一利無し。
将に我が国に特徴的な、余りにも安全確保ののりしろを取り過ぎる、それこそ日常茶飯に起きている「過ぎたるは及ばざるが如く、にて」の代表例のような気がいたします。

「安全安心は当たり前」も度が過ぎると反対に「いざ安全安心が失われた時の危機への耐性力、まるでなし」にもなりかねません故、ほどほどになされますよう、お願い申し上げまする。
「過ぎたるは及ばざるが如く、にて」の過剰保護を。

2021/3/2

（脳進化に見る人類の曲り角）

或著名な博学氏によると人間の脳は 1 万年前以降進化していないのだそうで。
「ええっ？こんなに色んな発明をしたり発見をしたりしているのに？」
と疑いましたが、そうであるらしいのです。
1 万年前以前に人間が何を発明したかというと（ここでは発明を人間の脳の進化の尺度としました）一つには「火」を扱うようになった事から始まって、矢尻や石斧、石包丁等の「道具」を作り出す様になった事が上げられます。
後は 1 万年前より若干現代に近くなりますが「お金」の原型等も発明されております。
他にも宗教や国家の原型も発明されておりますが、話が複雑になるので、この紙幅では割愛させて戴きます。
その代わり「お金」「宗教」「国家」を纏めて（というと怒られるかもしれませんが）「概念」の発明とさせて戴きます。今少し分かり易く換言しますと「信用（価値）」と言ってもいいかもしれません。
つまり人間の脳の進化がとまる以前の大発明というのは「道具」と「概念（信用価値）」だった訳です。
その発明に比べれば、それ以降の農耕や活版印刷、蒸気機関、電気、computer、internet 等は、その比ではない事になります。
しかも面白い事に、最初の大発明である「道具」の発明は氷河期という大困難時代に発明されている事です。因みに信用価値（概念）は、それより緩い環境だった、その後に到来した間氷期の大発明でした。
そうして、その二大発明、即ち「道具」と「信用価値」以降の発明は、その細分化ないしは深化発展発達レベルの話に過ぎない、と言う事でしょう。
道具で言えば火、矢尻、石斧、石包丁以降、活版印刷、蒸気機関、電気、車、飛行機、コンピュータ、そうして IT, AI という現時点の最終形に至っている。
一方信用価値（ここではお金に代表させます）の方は、石貨、トークン（粘土状の物）、金属貨、紙幣、小切手、credit card、仮想通貨（bit coin 等）と深化を辿り現在に至っている。
しかしいずれもそれらは「深化（発展、発達）」という深掘りであって「進化」という一歩前へ、一歩全く違った世界へというレベルの飛躍ではない様です。
言い方は悪いのですが「進化」が前へ進むイメージなのに対して「深化」（深掘り）は、その場に留まって、先に進まず、その地点での作業を繰り返しているイメージなのです。
なので、その博識多才の方は「人間の脳の進化は 1 万年前から留まっている」と言ったのではないか？と勝手に推察しております。
最後にもう一つ。

即ち「道具」も「信用価値（概念）」も生物としての人目人科、人間そのものの外に存する産物です。
その事に対して注意しなくてはならないのは、人間の外にある派生物に頼りすぎて呑み込まれ「人間本体が弱体化する事態」
庇を貸して母屋を取られるが如き「適者生存能力を浸食される危険」
それらを思うと今、人間自体に宿る本来の、そして未知の力に今一度目を向ける必要性を強く感じる様になりました。

2021/3/2-2

（続 脳進化に見る人類の曲がり角）

前記事続編です。
1 万年前に進化が止まった人間の脳。
その 1 万年前以前の大発明（脳進化の産物）は「道具」と「概念」だというお話が前回でした。
その後の発明はどんなに現代人には有用に思えても、上記大発明の派生形乃至は深掘りに過ぎず、超俯瞰的に見れば深掘りとは同じ処に留まって其処を深く掘り進む訳ですから、それは「脳の足踏み」即ち「進化の停止」という筋書でした。
では今回はそこから何を導き出せば良いのか？
色々考えた挙句に、以下の様に整理してみました。
それは、
カレーのお師匠様である Nepali Boss が嘗て言った言葉で、
「この世で大切なものは 3 つの H だ。Hand の H。
　Head の H
そして Heart の H だ」
之を自分の重用している例の連立方程式に当て嵌てみますと、
Hand は「道具」
Head は「概念」
となり、残りの
Heart が「こころ」
と導き出されました。
しかし、ちょっと科学的知識があれば「こころ」というのは、実際には「脳の中」にあり、いや、あると言うよりは「脳の働き（方）」のことを指している事は直ぐに理解できるかと思います。
「こころ」が独立して胸の心臓の辺りにあると昔の人が考えたのは、人間が興奮して「心臓器の鼓動」が高鳴って、そこに別物が存在すると思いなしたからに他なりません。
しかし現代科学上は「こころ」も脳（機能）の中にある事は既に自明の理となっております。
ならば 1 万年後の第三の大発明は、その「こころ」に関連してどの様な物になりそうだと言う事が想定されるのでしょうか？
そこで思付いた言葉は自分でも珍妙に感ずるものでした。
曰く
「人の心は金では買えない」
「こころ」は他に「気持ち」でも「情動（emotional one）」と読み替えても良いかと思います。

ここで再び例の連立方程式です。
「お金」とは上述の「道具」と「概念」の掛合せの産物とも言えます。
金属貨や紙幣が「信用価値」と結びついたもの。
近年では物理的貨幣のない記号貨幣等も出現して少し紛わしくなっていますが、それは単に手続上の問題で、バックには「信用価値」が厳然として存在（裏打）しております。
いずれにせよ、1 万年前にされた大発明「道具」と「概念」の現代で最強の姿は「お金」と言う事になります。
となれば、1 万年前の人類の大発明で、現在最強の「お金」を超える大発明のヒントはこの
「人の心はお金では買えない」
の中に存在する可能性が高いのでは？という連立方程式上の「解」が想定されます。
一方「こころ」とは「脳機能」だと前段で仮定義致しました。
となれば文言上の「解」は
「脳機能の充足感」が「お金を超える」と、なります。
しかし脳機能の「充足感」というのはどうも曖昧。
そこで今回はそれをこの様に置換えてみました。
「脳の働き（欲求ではなくメカニズム）に可能な限り素直に従う」
事の中に「第三の大発明のトリガがあるのではないか」と推測しております。
「こころ満つる（満たすではなく）には？何を」です。

2021/3/2-3

（続々 脳進化に見る人類の曲がり角）

表題記事の第三弾です。
今回は自分でも何を言いたいのか分らない部分が幾分ありますが、その点はご容赦を。
まず「意外な見方」というのがあります。
例えばデフレとインフレ。
物の値段が下がるのがデフレで上がるのがインフレ
というのが我々の通常感覚です。
ところがある人曰く
「お金の単位当たりの価値が上がるのがデフレで、単位当たりの価値が下がるのがインフレ」だと。
「んっ？反対じゃないの？」
ところがその人は
「全く同じ物に対して、デフレは単位当たりの貨幣価値が高いから少ない額で買えるし、インフレは単位当たりの貨幣価値が減るから沢山お金を出さないと買えない」
「更に言えば、物よりお金の方が、単位当たりの価値が上がって魅力が増えるので、それを貯め込んで出さなくなり、価格を下げないと物が売れなくなるのがデフレで、物よりお金の方が単位当たりの価値が下がるから、相対的にお金の魅力が減り、単位当たりの価値が減ったものを持っていても仕様が無い。ならば、物の購入に充てようという事の結果、物獲得争奪戦が起きて価格が上がるのがインフレ」
だ、そうで。
之を聞いて色んな見方があるものだなぁと正直ビックリ致しました。
で、これを先般の二大発明「道具」と「信用価値（概念）」の別の側面照射に用いてみますと、
「色と欲」
の解釈にも使えそうな気が致しました。
即ち
「道具＝実物＝異性＝色」と「信用価値＝架空＝貨幣（お金）肩書・地位＝欲」
そうしてこの式を見ながら、更にある事に気づきました。
「色＝異性＝実物（いずれも人）」と「欲＝お金・肩書・地位＝架空（いずれも人以外）」で、どう見ても実物（人）の方が架空（人以外）より比重が重い。
となれば、早い話「金も肩書も地位も人の気を引くのが目的の存在」が真相なのではと思いました。
ところが最近このバランスが狂ってきてのではないのか？というのが次に思い当たった事柄でした。

詰まり
「色（人の魅力）が減って欲（人以外の魅力）が増えた」
換言すれば
「実物を追い求めなくなり架空の物に入れあげ始めた」
という事ではないのかな？と。
平たく言えば
「異性又は人より金と肩書と地位が先」
何故なら前者より後者の方が気まぐれではなく、却って御し易いからです。
現実世界よりゲームの方が扱い易いからです。
という訳で出生率は下がり、肩書きや地位すらも面倒になれば「拝金指向」に特化して行く事になる訳です。
デフレインフレの意外な見方を二大発明の角度から色と欲に当て嵌めてみたら、同じく「意外な結果」が出てしまいました。
さてどうしましょう？
少なくとも此処での結論は「人間の二大本能、色と欲のバランスは最低限、以前のイコール位には戻しておいた方が良さそうだ」という事でございましょうか。
二大本能は、二大本能が大らかでありさえすれば、余り目鯨を立てる必要は無い様な気が致しますので。
自らの経験則からは。

2021/3/3

（続々続 脳進化から見た人類の曲がり角）

前回の記事で
人間の脳の進化が止まる 1 万年前以前の二大発明である「道具」と「概念」を「色と欲」に置き換える試みをするにあたり
「自分でも何が言いたいのかよく分らない部分がありますが、ご容赦を」
と書いて、書き始めたのでしたが、案の定
「色と欲」って「女とお金」と言うことじゃないの？」
とか
「色は異性を差しているのは分りますが、欲って何の事ですか？概念（貨幣システムとか国家とか）？」
とか、とか、とかの大混乱。
そこで今一度 reset 致しましょう。
正しく書けば「異性（人）と概念（人そのもの以外）」
ですが、そう書くと何だか面白くもおかしくもない無味乾燥な表現になる気がして、ついつい「色と欲」という、馴染みの言葉を使ってしまいました。
相済みません。
そこで改めて言いたい事をご理解戴く為に、次の様な視点を考えました。
曰く
「動物との比較で見てみる」
です。
蛇足ですが与謝野晶子の
「柔肌の熱き血潮に触れもみで、寂しからずや、道を説く君」
というのを頭の隅っこに置いておくと以降の話が、より実感が出来るかもしれません。
では始めます。
人も動物、というか生物の一種属です。
この点では、我々ひとも牛や犬猫同様に「柔肌の熱き血潮」を「感じ」ますし「触れる」事も致します。
しかし動物は火を使いませんし、一部の霊長類を除いて道具も全く使いません。抽象思考も致しませんから「概念」というものを持ち得ません。
当然動物の世界では「お金」もありませんし、群れや恐怖心はありますが「国家」や「宗教」もありません。
それらは人間だけが持ち、人間だけが理解し価値を見いだすものです。
そうしてそれがいつの間にか膨大なものになってしまった。

と同時に「いかにも人間的」である、そちらの方に価値比重が移れば移るほど、動物と共有していた感覚や世界が「粗野で野卑なもの」としてないがしろにされる様になってきた。
話は変わって人間世界の中で嫌われる思潮があります。
「選民思想」の中の「選民、選ばれし民」という視点です。
もっと現代風に言えば
「勝ち組と負け組」
という線引き思考といっても良いかもしれません。
自分は非選民ですし、負け組所属なので、あからさまにそんな事を言う奴がいたら蹴っ飛ばしてやりたくなります。
ですが、我々人間は知らず知らずの内に他の生き物や環境に対して、この選民ならぬ「選種属思想」に染まりきった蛮行をしていないでしょうか？
「我々は生物界の長である。全ての生物は我々の為にある。だから我々の決断、選択、価値観に従え。益虫はよし。害虫はダメ。そう言う事だ。分ったな」
という様になっていないでしょうか？
だとするなら、先の記事の１万年後の第三の大発明の前に、脳進化が止まる前の二大発明のその後の有り様を今一度真摯に総点検してみる必要がありそうです。
否、それ抜きでは第三の大発明等、結果ちゃちなものになりそうですから。

2021/3/4

（この期に及んで、恥も外聞もなし）

今を遡ること７年前に起業する前年、つまり今から８年ほど前に起業コンセプトとして以下を草案致しました。
「世の中で就業している期間が中心の社会、それを就業期間社会と名付ける。
その期間内に位置する人々は、仕事で忙しくなかなか耳を傾けてもらえそうもないので、むしろ就業期間社会という中心部ではなく、そこから離れ、又は疎外されている「辺境部」に位置する（或いは位置せざるを得ない）人々に着目して事業を興そう。
というのも、渦中である中心にいるより、辺境部の方が却って者がよく見え、聞こえている可能性が高いであろうから。
そうして目的は、辺境部にいる我々（と呼ぶ事由後出）の目を通して、その目に映る「どう考えても、何となくおかしくなりつつある様に思える今の「拝金社会」の流れを変えたい。
自分個人のレベルで言えば「この不快感と、ある種の義憤のようなものを解消したい」という思いからである」
としました。
当時、その辺境部に位置する（或いはせざるを得ない）立場の人、即ち事業対象層として社会から脇にどかされたうつ病罹患者さん（というのも自分自身が１２年間うつ病を罹患していたからです）、就業期間社会に入る前の学生さん、就業期間社会から退出した退職者さん、それと可なり酷い条件で就労している欧米系以外の在日就労外国人さんらを想定いたしました。
そうして、それぞれの対象分野でコンサルタント業務等の事業経験をした後、現在では、今コロナ渦に於いて在日外国人就労に関わる仕事をしております。
具体的には「カリー屋という飲食事業（での雇用創出）」です。
スローガンは
「国際間、世代間、たまたまあなたのお隣にいる人との間の交流（コミュニケーション）事業」
です。
之を一里塚として、何となくおかしく感じられる今の世の中の流れを変えていこうという事です。
それはさておき、今コロナ渦でいろいろな経験をし、又いろいろな困難に遭遇する中で、事業対象と言うより視界範囲をもう少し拡大する必要性を感じ始めました。
どういうことかというと、就業期間社会という中心部に向ける辺境からの目線に、今挙げているうつ病罹患者さん、学生さん、退職者さん、在日就労外国人さんらの目線、視野、視界に加えて
こどもさんと動物（人間以外の生き物）くん達の目線、視野、視界

を加える必要性です。
誤解を招くといけないので、言われる前に申し上げますが、上記追加の二者は事業対象ではありません。あくまでも目線、視野、視界の拡大のためです。
そうして「なんか変な世の中の流れを変えてみたい」という目的そのものは、一向に変えてはおりません。
こういった考え方やに対言辞して、それが大風呂敷と言われようと大言壮語の誇大妄想狂であるといわれようと、一向にかまいませんので。
なにせ、既に棺桶に片足突っ込んでいるじいさんですから、恥も外聞もなくなっているのです。

2021/3/5

（男のおばさんの「見誤り」改変版

最近、とみに思うのは、受け手、例えば読者であるとか話の相手（聞き手）であるとかの想像力や感得力が、送り手（物書きや話し手）が思っている以上に備わっている、のだなぁと言う事です。
この受け手の想像力や感得力の潜在能力を送り手が、認識不足による目測のずれから、安易に軽んじたり侮（あなど）ったりし、気づかない恐れがあるから、ちゃんと理解できるように懇切丁寧に説明してあげないと、等というお節介な「見誤り」を犯すと、押しつけ構しさが全面に出た大きなお世話になったり「こちらはこんなこと迄気づいているんだぞ」と言った、これ見よがし臭がぷんぷんする嫌みになったりして、却って信を失う事になるようです。
「もう分っているのに、くどいわよ」
とか
「いわなきゃいいのに。スパイダーマンの格好しているのだから、何も言わなくても一目見りゃスパイダーマンだって分るのに、そこから更に「オマケの爆弾テロ」みたいに「スパイダーマン証明書」とか「スパイダーマンハンドブック」とかを、次々見せられる様なもので、鬱陶しいだけだ」
の類の反応に切り替わってしまう事になってしまいます。
昔、自分の息子に、今になってやっと分ったその気づきを、先取りしたかの様な事を言われた経験があります。
「そんなこと分っているんだから、いちいち説明なんかすな。うっせぇんだよぉ」
と。
それで、最近は成る丈、この説明を控えて相手の想像力、感得力に委ねたり任せたりする努力を致しております。
「努力をしている」と進行形で書いたのは、お喋りで説明好きの自分の本来からするとかなり苦しい作業で、いつ又自分の本来に戻ってしまっても不思議はない、という大いなる危惧があるからです。
少なくともものを書く時には、この「只今努力中」である事を意識するのですが、日常会話ベースとなると、すっかりそれを忘れて喋りっぱなしの説明しっぱなしに、なってしまっています。
この辺の折り合いをどう付ければ良いのか？
お喋りでお節介焼きの「男のおばさん」は日々悩んでおりまる。
余談）
脳天気に産んでくれた事に対しては親に感謝しておりますが、
男のおばさん体質に産んでくれたことについては、いささか不便を感じております。

結構お喋りだった親父は分ってくれるでしょうが、無口だったお袋は
「我が子ながら、うっせぇやっちゃ。
なんで、ウチみたいに静かなのから「壊れた蓄音機」みたいなのがでてきたんやろぅか？産まれてくる畑、間違ごぅたとしか思えん」
と思っていたのかもしれません。
推測ですが。

2021/3/5-2

（「Hand Society」を「Hand carry（持ち運ぶ）」）

手を眺めていて
「よく出来ているものだなぁ」
と独りで感心してしまいました。
「何かとても象徴的だ」
人の手は、手のひらと５本の指で出来ています。事故その他でそうではない方もいらっしゃるかと思いますが、そうしたご不幸に遭わなければ大抵はそうなっております。
（後段の話を進める為にこのような書き方になってしまう事をお許しくださいませ）
哺乳類も比率の差こそあれ、おおよそその様です。
自分がそれこそ「手」前勝手に感心したのは、
「手のひらの部分が社会の人々の意思疎通が図れる共通概念や「生き物としての人」に直感的理解を齎す相互共有や相互交流が出来る共通根幹部分に見え、指の部分がその社会に暮らす（或いは生きる）それぞれの人々の、おのおの独立した個性に当たる様にも見え、それが互いに相互互恵に基づいて邪魔する事なく、時にはくっついたり、時には離れたりも、自由に出来る」
「又は手のひらの部分が地球で、指の部分がその上で暮らす（或いは生存する）人間を含めた生き物の様に見える」
偶然を得たからです。
「実に良いバランスだし、良い社会の、将に「手」本のようだ」
しかし、この手の、手のひらと指の比率が刻一刻変わっていくとしたら、どのような事が起きるのか？
特に前段の「」（括弧）の点に関して。
それがそこから起きた疑問でした。
例えば手のひらばかりになって指がなくなってしまったら？
或いは反対に手のひらが無くなって指だけになってバラケてしまったら？
手のひらばかりになるのは個性のない社会でしょうし、指だけになって手のひらがなくなってしまうのは、お互いに共通する部分がない「意思疎通を欠いた絶対的に孤立して疎遠な」社会でしょうし、その中間（ちゅうかん）で手のひらはあるが、指が一本だけだと争いこそ起きないものの、選択の余地のない「金太郎飴社会」にしかならない様な気がしました。
なので、コミュニケーションできる手のひらという共通部分もあり、お互いの差を差としておのおのが認め合う指の部分もある。しかも手のひらと指同士が協力しあえば何かをしっかり掴む事も出来る手の成り立ち方が
「実に良いバランスだし、良い社会の手本のように」思えたのです。

その調和（harmony）と和（collaboration）があってこそ「新しく何かを掴む事」ができるのでしょうし、後段の「」（括弧）内に示した様に「地球とその上で生きる生き物たちがお互いを活かし合って生きていける」ひとつのビジョン（vision）を示している様にも見えて、結構感心したり驚いたりしました。
「うぅむ。実によく出来ている。しかもこんな身近なところに今後の社会のビジョン（在り方）を示す大きなヒントがあり、それを毎日 Hand carry（持ち歩いて）いて、時間のあるときに何時でもしげしげと眺める事が出来るのだから、何とうまく出来ている事か」
重ね重ねこの偶然の発見に驚いた次第でございます。

2021/3/6

（「逆も又、真也」では）

生活が便利で安心安全であればある程、人間の生物由来の力（生命力、生存能力、危機対応能力）は相反反比例して「弱体化」していく。
反面「無意識に感じる万が一の到来」への「内在的恐怖心」は「便利、安全、安心」に寄りかかる加重度合に比例して、気づかぬ内に徐々増幅し、高まっていく。
弱体化の例をちょっと挙げてみます。
聞き慣れたところでは
「日常生活で車を使えば使う程、足腰は弱まっていく」
昨今では
「AI に頼れば頼るほど、脳の働きは衰える」
等が挙げられるか想定されます。
暫く前の話ですが、ある新参 EC サイトの代理店から「御社も代理店契約をしませんか？」という話が持ちかけられました。
それによると、自分傘下の代理店が増えれば増えるほど、傘下からの実入りも増え、かなりの金額になるとの話でした。
「なんだかネズミ講みたいだな」
と思いましたが、その勧誘者は更に続けて、傘下の代理店を増やす「有望な商品」のプレゼンテーションを PC 上で行いました。
その商品は「現代の健康志向にとてもマッチした、天然素材由来のエアコン専用洗浄液で手に優しく、エアコン素材も傷つけず、オマケに奥様方が尤も気にする除菌、殺菌効果が抜群であるのに、人体への悪影響は殆どゼロ。価格は一本 8000 円とかなり根が張るのですが、それにも拘わらずニーズを捉えて健康志向やお子様の安全を気遣う奥様方に飛ぶ様に売れている」
との事でした。
で、その時、瞬間的に自分が思ったのは
「過剰防衛だな。この話を食うや食わずの非衛生極まりない環境で、避難途中のシリアやロヒンギャ族の難民家族が耳にしたらどう思うだろう？」
でした。
そしてそれとは反対のイメージとして
「1 本 8000 円洗が生活の必需品である親子が、突如ワープして泥水や牛馬の糞尿が散乱する難民避難街道に舞い降りたら、一体どうするのだろう？1 週間生きていけるのだろうか？」
何も平時の我が国（今はコロナ渦で戦時下も同様ですが）日々サバイバル訓練や、それに近いサバイバル生活を送れ、等という気は毛頭ございませんが、今少しは平時と危機時の距離

を縮め、もう少しバランスの取れた、どちらにでも身動きできるライフスタイルを取っても良いのではないのかな？思うのです。
少なくとも「万が一の到来」に怯え、更に「便利、安全、安心」方向へと、更に穴蔵奥深くに潜り込むように、外の日差しとは反対の方向を目指すよりは、その正反対へ踵を返し、チャイルドシート付自転車の例に例えれば、雨風よけのビニール風防を取り去って、外の風や日差しに直に当てる方向への転換は必要なのではないのかな？と思った次第です。
「逆も又、真也」
である場合もあります故。
追記）
その伝に従えば、家庭内教育も又然り、では。
日頃家庭内でちやほやされて育った子が、突如面接会場に降り立ったらどうなるか？
「パニック」
でしょう。
日頃から「時には褒め時には叱る」事も肝要かと。

2021/3/7

（SNS 世代間事情 自分はさて置きじじぃの「リア充」談義 ）

大人世代の参加比率が増え始めると、若い世代は他の SNS メディアに移り始める、という傾向があるそうです。
「国際間、世代間、たまたま隣にいるひととの交流事業」
を目指している自分としては、この話を聞いてまず、
「同世代ではないと「通じ合えない」と思っている事は大きな障害になるな」
と思い、一方そう思ってしまう原因として
「通じ合えない事は鼻から分ってはいるけれど、その垣根を越えてまで色々と学び取りたい」という様な魅力的な先輩世代が存在していないらしい」
事が、その他の意見から感じ取られました。
原因をそのように連想想起させたのが以下の言葉でした。
「大人が入ってくるとリア充話ばかりになるから」
という言葉。
ですが、リア充自体は悪い事ではない筈です。
では、何故若い世代は大人のリア充話を嫌がるのか？
いともたやすく想像できるのは
「自分たちはちっともリア充ではないから」
という理由ですが、自分が更に想像するに
「そのリア充話が嘘だから（単なる見せ合いっこだから）」
というのがあるのではないかと思うのです。
要するに張りぼて自慢話のオンパレードだらけ。
「俺（私）はこんなに満たされている（のよ）どう？スゴイだろ（でショ）」
にいい加減うんざりしている。
例えば「ちょちょいと作った」と言いながら、舞台裏の演出が見え見えの、完璧に飾り付けられた「自作弁当」や「自作お酒のおつまみ」
とか
「何気なく」といいながら「その瞬間を載せるには、予めもう一人、別に待機していないと成り立たない投稿」
とか。
では、何故若い世代は「仰ぐに値しない」と感じるのか？といえば、之は少し冷静になれば直ぐに想像がつきます。
曰く

「本当にリア充だったら、SNS なんかにわざわざ UP したりしない」
からです。
当然そんな事ばかりしている大人の世代は魅力的には見えないでしょう。
そうして若い世代は直感的に見抜いている様です。
「リア充じゃないから、リア充のお墨付きを貰う為に SNS にわざわざ UP している」
そんな事なら
「自分ら、全然リア充じゃないよね、今」という話を素直に出来るメディアに移行する。いちいち、言い争うのも面倒だから」
となる訳です。
しかし、例え同世代であっても、そういった本音本心の話が出来ない同世代であれば、かれらはそこからも逃げ出して、他のメディアを探し出す様です。
そんな彼らは、自分には、居住地を確保するために、踏み留まって「戦う民」ではなく「手垢」から逃れてさまよう「流浪の民」の様にも見えます。
「張りぼてリア充世代」と「若き流浪の民」
まぁ、それにしても自分たちの前には、少なくとも、これら二つの「大きな断絶の壁」立ちはだかっている様です。
今のところ未だ、一歩も前に進む事が出来ておりません。
追記）
で、そう言っているアンタは誰？と問われれば
自分はさて置きの「偉そうな大言壮語じじぃ」
と言う処でしょうか。

2021/3/9

（「リア充」再考）

暫く前の記事で「リア充」に関する事を少し書いたのですが、想像以上に多くの方の購読があったようです。
それで本日は今少し「リア充」について書いてみたいと思います。
前の記事でも申し上げました様に「リア充」（リアル生活（人生）が充実している事）自体は全く悪い事ではありませんし、むしろの我々の生活や人生がそうあったらとても素晴らしい事だと思います。
で、ここからが本日のお話。
我が国では、お金持ちであるか否かに関わらず、人々が「自分以外の人間がそれを持っている事に対して最も羨望し、それが自らの手に入らないとなると最も「嫉妬」するもの」は、上述の「リア充」なのではないかな？
というのが本日の記事が提示する「仮説」です。
その現象としては
自分以外の人間が「リア充」であると苛立つ。認めない。欠点を探して揶揄する。
その反面、対抗意識とでも言うのでしょうか
自分が「リア充」である事を「さりげなく」を隠れ蓑にして、
その実実態は「大々的アピール」
という例が散見されます。
此処で重要なのは「何故か「本当にリアル生活（人生）が充実した、まっとうな意味での「リア充」を探す方向には向かわず」ある種の代替品（言い方が変かもしれませんが「リア充ショー」の演出）へと向かってしまっている事です。
何故この様な「一種の掛け違い（足の踏み出し間違い）」が起こるのか？
それを考えてみたのですが、
「まっとうなリア充を求めて動き出す「設定ハードルの初期値」が高すぎる（或いは自ら高く設定しすぎている）事から来る重圧感により無意識にその選択肢を鼻から棄却してしまっているのではないか？」
という推測が生まれました。
もう少し具体的に申上げますと
求める「まっとうなリア充」を手に入れる為には
「お金がなくてはならない」
「国家資格を取らないといけない」
「自他共に認める実績を打ち立てなくてはならない」
「誰もが知っている著名な職場（公私いずれの企業でも）に職を得なくてはならない」
「スタイル抜群でいい男、いい女でなくてはならない」

等、本来「最終目標（その最終目標が妥当であるか否かは別にして）」であるものを、又は最終目標としての達成すら出来るかどうかも分らないレベルを、なんとスタートラインについた時点で「事前に兼ね備えていなくてはならない」
それが出来ない事には「スタートすら出来ない」
という全くの勘違いや「目的と目標」の掛け違いをしているのではなかろうかという気がして参りました。
自分は中学生時代、剣道をやっておりましたが、その時の経験から申しますと
「剣道がうまくなりたいから入部した」筈が「入部するには、その資格として既に段位を持っていないといけない」
という錯覚をしていないでしょうか？という事です。
その錯覚の元は、
「格好良く見せるには」
という最深層部での目的の勘違いだったのです。
自分が主ではなく他人目線が主だったのです。

2021/3/10

（弊社「苔、下草的地味経営」）

弊社の考え方というのは
「欲しいものが手に入らなければ、作れば良い」
と
「拡大発展を第一とするのではなく、存続を第一とする」
です。
そういう視点からすると「目立ちすぎるのは最悪」であると言う事になります。
「んっ？どういう事？」
と思われるかもしれませんが、そういう事になったのです。
それを少し解きほぐして説明させて戴きますと、PC 業界とスマホ業界の OS では M 社、G 社、A 社が三大巨頭です。シェアは現在 M 社が圧倒的ですが、A 社が新 OS を開発したり、G 社が枯れた安い技術をうまく使って安価で機動性の高い OS を拡大したりして熾烈なシェア争いを繰り広げております。
之は別に上述の業界だけではなく、殆どの業界で「限られたπの喰い合い」が起きているからです。限られているので、相手を引きずり下ろそうとする事になり、共存共栄が成り立たず足の引っ張り合いになる訳です。
こういった場合、それらの争いに巻き込まれない為には、まず相手にとって自社を「脅威の対象外」に置く事です。要するに「認識外」のポジションを取る。
潰れない程度に 10 位か 15 位くらいでも良いと思います。
そうして、そういった範疇の領域を複数 field 持って分散的に根を張っておく（network 化）しておく訳です。
ですので、自社を存続させるに当たって認識外に身を置く為には
「目立ちすぎは最悪」
という訳です。
美しい花は人目について摘まれてしまいますが、苔や下草（雑草）は目立たないので生き延びられる訳です。
余談ですが、最近の研究では、高山にある美しい花が鮮やかな色から目立たない色に変異していると。これも生き延びる為に摘み取られない様にする方策を「美しい花が学んだから」だと言えるかもしれません。
それはさておき、冒頭に記した二つの内、二番目に関する話として、ここまでが一つ。
二つ目は冒頭の一番目の話で
「それがなければ、作れば良い」
の件です。
之は何も「世界一」である必要も「世界初」である必要もありません。

要するに今、世の中にあるもの（或いは手持ちのもの）をうまく組み合わせて代替利用できる様に「再利用、再蘇生を発明」すれば良いだけです。
なまじ、世界一とか初であると目立って標的にされ易いですし、その追随者を追い落とす為に余計な防御投資も必要にもなりますので、長期的に見れば、却ってコスト高になってしまう可能性があるからです。
なので、一と二を併せて、兎にも角にもワンポイントのセンセーショナルを避け、世間体や聞こえの良さである、名を捨てて「実を取る」
「苔や下草の如く目立たない地味経営」
これこそが弊社が掲げる
「存続第一経営」（サスティナブル経営）」
の意味する処でございます。
之ですと、新たな資源を余り必要としないので、地球様にもご負担をおかけしないのでは？と、思っておりまする。
結果、それが偶々「世界一」（高効率高効果）であるのはやぶさかではありませんが。

2021/3/11

（3.11 の事「続 弊社「苔、下草的地味経営」）

今を去ること十数年前、2008 年から 2009 年にかけてのリーマンショックから 2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災に続く 3 年間程の出来事が自分の人生観、世界観を大きく変えてしまいました。
ひとつは
「安全、安心、平和が常態などではなく、危険、危機、争い（何も鉄砲を打つことだけが戦争ではない。争いは何時でも何処にでもある）こそが、常態である。天災人災こそが常態」
という 180 度の認識転換と
いまひとつは
「如何にじぶんが選ばれる人間になるか、ではなく選ぶのは自分である」
というこれまた 180 度の認識転換でした。
言ってみれば
「不確実だからこそ、自分がしっかりしなくてはならない」
という一種のサバイバル意識に目覚めたとでも申しましょうか。
はじめの項につきましては
「だからこそ平和が有り難いのであり、又それはつかの間のものでしかない。つかの間のものをつかの間としないためには、とても大変で面倒くさい不断の努力がいる」
事が解り、続いて
「危険、危機の中で、それでも安心、安全を得るためには、如何に正しく新鮮な情報を継続的に手に入れるかが生死を分かつ重要なファクターである事を痛感」し時々刻々の情報収集に対する緊張感（観察眼）が格段に変化致しました。
二つ目につきましては
「家族や会社から如何に選ばれる人材になるかばかり考えていた。言い方は悪いが如何に「気に入られるか」だった。自分への殺生与奪の権限は常に相手側にあった。特に会社に対於いては「社員としての商品価値」という事で、気づかぬうちに自分をみずから進んで商品（お金基準の産物）に貶（おとし）めていた。人は商品ではない。人はお金では計れない」
という事で、甲斐国、武田信玄公由来の「武田節」の一節ではありませんが「人は石垣、人は城」言うことで、思い切って「人本基幹」の会社を設立する運びとなりました。
それが現在の
「国際間、世代間、たまたまとなりにいる人との交流事業」
の弊社でございます。
あれからほぼ 10 年、現在はコロナ渦に見舞われております。
聞くところによると歴史の大きな節目は 20 年を一単位として動いているのだそうです。
だとするとこの激流はあとおよそ 10 年､つまり 2030 年頃までは続くことになりそうです。

さて、我々は前半の 10 年間の知恵（知識＋経験）を活かして後半 10 年間を生き延び、新しい世界（世界観）という次の島まで泳ぎ着くことが出来ますでしょうか？
さてもさてさて、何事もそうですが
「やってみないことには分りません。だからやってみるのでしょう。やってみるだけの価値は十二分にあると思っています」

2021/3/11-2

（3.11 の事 終編 弊社「苔、下草的地味経営」新 globalism のご提案）

International と Global

我が国では一般的な傾向として、殆ど同義語に捉えられているか、又はその差が判然としない場合が多い様です。

かく言う自分も外国人従業員を雇用して仕事をする迄は殆ど気にも留めていませんでした。

せいぜい

「外国とのお付き合いに関する事」

位の曖昧なものでした。

それで特に困った事もありませんでしたし。

ところがここ 3 年の内に、その違いが朧気ながら分ってきた気がします。

自分なりに申し上げますと前者 international は

文字通り「国と国の間で」であり、まず前提として「国家」という枠組みが最初にあります。

一方後者 global は「地球レベルの」という意味で、別の言い方をすれば「国を超えて」又は「国を意識せずに」となり、むしろ borderless「国境が無い」という方が適切な気がします。

之を更に分かり易く言えば、文化人身交流に於いては「国家、民族の差」を意識しないとなり、交易、ビジネスにおいては「国家や民族に縛られず、企業単位で独自に動く」と言う事になります。

前者はとても良い事だと思います。

ところが後者は色々と問題を起こしてしまいました。

一番目が、何処に行っても同じ物ばかりになって、その国その地域その民族固有のものがどんどん消えてしまいました。

例えばどの国に行っても「スマホ片手にうろちょろする風景ばかり」とか。

二番目には、商品や物資の水平分業やら物資の供給網が複雑に絡み合い、今コロナ渦の様な事態がちょっと起こるだけで、大混乱を来してしまうリスク負担の拡大でしょう。

その反動として、自国自社の垂直統合による保護主義が台頭し、そればかりではなく、良かった筈の前者、即ち「国家や民族毎の囲い込みナショナリズム」や自由闊達であるべき企業の悪しき独立、即ち「独占」に傾きかけて居るように見えます。

自分が思うに global というのは、何も人間界のそう言ったいざこざに巻き込むレベルの矮小なスケールのものではなく、むしろ globe(地球)の上に暮らす、人間もその一員に過ぎない動植物界、自然界、環境界レベルで今一度「globalism」の再定義をする必要があるのではないだろうかと思い始めております。

そう思うきっかけとなったのは「ネパールカリー屋」という飲食業を始めたからです。

そこで分ったのは「国や民族、文化風習、階位」の違いよりも「その人、個人、個人がまともであるのか、そうではないのか」の着眼の方が遙かに有効な視点である事。
今一つは「食べ物」という具体的な「ブツ」の方が「国家はじめ貨幣制度」等の「信用価値（概念）」より、遙かに手応えを感じるパワーが内在しているのだと言う事でした。
ですので、最後になって幾分飛躍してしまいますが、今後弊社は我が国全体の復興に際し「バイオテクノロジー」や「農業」に目を向けてみたいと思っております。
動植物や自然界、環境界とうまく付き合っていく為に、そうした方向「も」模索したいと思い始めました。

2021/3/12

（内外（うちそと）合せ）

「誰かに見られているから、こう振る舞わなきゃいけない、こう思わなくちゃいけないというのは、もうやめたいものです。心にもなく、或いは心とは裏腹に」
「こうやったらこう思われる。こう振る舞ったらこう取られる、と害の及ばない着地点ばかり探して、手も足も出さない生活はもう止めたいと思います」
昔、プロ野球の或選手が連続逆転打を打った後に、インタビューアーから
「今の調子はいかがですか？」
と訊かれ
「絶好調です」
と答えて以来「絶好調男」と呼ばれる様になったのですが、それを境にその選手は絶不調が続きました。
当時自分は、それを見て
「余計なこと言わなきゃ良かったのに」
と思いましたが、今ではそれとは反対に
「あれで良かったんだ」
と思う様になりました。
思い返すと「余計な事を」と思った時の「守り主体の自分」感覚では
「絶好調と言ったが最後、常にそうでなくてはならなくなる。ところが一旦不調になれば、先の宣言が重圧になって、益々不調の度合が上がり、抜け出せなくなってしまう」
「だから安全ののりしろを取って黙っておくに越した事はない」
というものでした。
しかしその後、そんな考え方ばかりしていた自分は長期に渡りうつ病を罹患し、その経験から、
「うつ病も同じかもしれない。活躍し、一旦期待されたが最後、常に活躍し続けなくてはならないと思い込み、それが出来なくなると（うつ病等になると）活躍した事や期待された当時に戻ろう、なんとか応えようという気持ちが重圧になり、益々うつ病の度合いが悪化する」
という前述のメカニズムと全く同じものに依る事が分りました。
それで同じく前述の最後の部分、即ち
「だから安全ののりしろを取って黙っておくに超した事はない」
という部分を換えて
「だから希望と実態が乖離しないように内外（うちそと）を成る丈合わせよう」
と思う様になりました。
どういう事かと申しますと

「良いときはイイと言い、悪いときは悪いと言う。要するにありの儘を素直に公言した方が余計な負荷や内外（うちそと）の辻褄合わせに奔走する必要もなくなるのでリカバリー（回復）の確率や速度が上がる」
という事です。
先般の記事でも申しましたが
「世の中何が起こるか分らない。一寸先は闇、が常態」
であるならば、
「分っている今だけでも「濃い時間」を過ごしたい。その為には、人目や結果が当たり障りのない様辻褄合わせにばかり時間を割いて、大切な時間を無駄にし、結果、生活を中身の薄い、水っぽいものにしない様、生活態度を変える事が何よりも先決。まずは内外（うちそと）を合せ、成る丈正直に事実を言う。その結果被る損は止むなし」
そう思ったのは今から 16 年前のうつ病が底を打った日の事でした。
認めるべき最初の事実は「自分はたいした人間ではない」事
訊かれたら、笑って明るく正直素直に「わてに、上等は無理ですわ」
それが内外（うちそと）合せの初仕事でした。

2021/3/12-2

（（続）「内外（うちそと）」合せ）

子供の頃、アメリカの TV ドラマ、例えば「パパは何でも知っている」とか「奥様は魔女」なんかを見ていて
「アメリカの住宅街の家には垣根とか塀（へい）は、ないんだぁ」
で、それこそ
「へぇ〜」
と驚いた記憶があります。
「泥棒とか入らないんだろうか？」
というのが驚いた原因でした。
後年、或事情から見ず知らずの男女数名に、ある日突如、家を丸ごと占領され、破壊、略奪から帰宅困難となって、やむなく自らは、数ヶ月にわたって流浪の民となった後「いつまでも逃げていても仕方が無い」と、民事不介入で手の出せない警察の支援のないまま、武器を持たずに一人で乗り込んで自分の家を奪還してから、或ご縁があって地元自治会の交通防犯部長に推挙されました。
その折りに地元警察で受けた「防犯講習」の中で意外な事を教わりました。
曰く
「防犯の第一は自身が泥棒になった積りの目で見る事です。
彼らが怖れるのは入って物品がない事ではなく、捕まる事です。
なので、表に人通りがなく、塀や庭木など隠れる場所が多くあると安心して仕事が出来るので、彼らはそういった家をまず標的にします」
言われてみればその通りでした。
事実、我が家が占拠されてから、ご近所がその異変に気づくまで優に 1 ヶ月は掛ったのです。
それでその講習を聞いた後、直ぐに植木屋さんにお願いして、垣根と庭木をほぼ全て取り去り、子供の頃見たアメリカ TV ドラマ張りの open な庭に改装致しました。
「守る積りが却って御難を呼び込む」我が国
「さらけ出した方が却って安全な」外国
で、この発想の差は何に由来するのだろうか？
ふと、そんな疑問が湧きました。
それで思い当たったのは、外国はともかく、我が国では、まず
「見られる。隠す」
が根底にあるような気がしました。
要するに
「見られたくない。見ないで」

で、それは何に依るのか？と考えてみたところ出てきた答えが
「内外（うちそと）の差（違い、不一致）」
でした。
家の前の通りで雑談しているときの顔や振舞と、家の中でいるときの顔や振舞が正反対になっている事実の差、違い、不一致なんかを、知られたくない、見られたくないという不都合隠しのための生け垣や塀を作った文化。
そうして泥棒さん方は、その不都合隠しの生け垣や塀を逆手にとって荒稼ぎをしている。
そうして更にそれを再逆手に取って庭をオープンにして以降、自分の家は御難には遭っていない。
それにつけ、内外（うちそと）さえ合っていれば、何も隠すものはないので、それが却って身の安全につながる。
それに反し、内外（うちそと）が合っていなければ、それを隠すために殻の奥へ奥へと逃げ込むか、殻をどんどん厚くする結果、災難に遭うか、遭う前に窒息してしまう。
それを比較してみれば、一目瞭然に、我が国国民は、何事に依らず生活態度全般を、速やかに前者の方向に切り替える必要がありそうだなぁ、と思う次第でございます。

2021/3/13

（出所不明の「スッポン魂」）

我が国で起業した者の内、およそ 95%の事業者が 5 年以内に消えてしまっているのだそうです。６年目以降、残っているのは、たった 5%だけ。
この数字は案外知られていません。特に起業者そのものに顕著のようです。
起業するつもりのない時には、この数字を耳にして
「そりゃ、そんなもんだろう」
と思っている人でも、いざ自分が起業するとなると、この数字に対する感覚が何故か突然、瞬間蒸発し、無意識の内に
「（自分の場合に限っては）95%、1、2 年以内に成功するだろう」
と思ってしまうようです。
ところが実際蓋を開けてみると、とてもじゃないが、そんな状態ではない事に突如気づかされます。そうして、それから程なく、休業又は廃業か撤退。
「見通しが甘いから」でしょうか？
その通り。
ですがこの場合の「見通し」とは何でしょう？
この文学的表現を今少し科学的数理を用いて申上げますと
「認識設定又は想定数値の過ち」
即ち
「達成迄に味わう（経験する」失敗の数と達成までに掛る時間の設定間違い」
ではなかろうか？と。
具体的に申上げますと
達成迄の失敗経験数１，２回で、それまでの苦労（忍耐）期間１，２年の認識でいれば、失敗第３回目以降、期間３年目以降というのは、もうあり得ない事態な訳です。
しかし、以前の記事でも申し上げましたとおり、成功出現率等というものは 100 の内、ほんの 3 から 5%程度のものですし、その出現時期というものは大抵が 5 年目以降 10 年位は平均的に掛ります。
だとすると、それを知らずにか、それを待たずしてかのどちらかで、休業又は廃業、撤退してしまっている事になります。
出口を見つける前に引き返してしまっている訳です。
それが「見通し（誤認）」の正体。
もし上述の正しい出現率や出現迄に要する期間についての認識が起業者にちゃんと備わっていれば撤退率はひょっとすると半分以下になっているかもしれません。
特に冒頭の 5 年以内に 95%撤退の傾向に関しては
「失敗は恥じ。一度の失敗が命取り」思考の我が国に於いて顕著な様です。

「失敗しないと great になれないから、失敗はどんどんする」
思考の海外の人達との差が、こういった処にも現れる様です。
何故この様な事を言うかと申せば、かく言う自分自身が失敗続きだからです。ある意味自己弁護による自己正当化とでも申しましょうか。
しかし、失敗する度に思う事があります。
それは
「やろうとしている事が間違ってさえなければ、いずれ時は来る。只、まだそれを活かす chance（天が与える偶然）に巡り会っていないだけだ。仕方が無いから「自分の努力ではどうにもならない残り半分のそれ」が来る迄、今暫く待っていよう」
という事です。
起業して既に 7 年。
その chance は未だ来ていませんが、諦める積りもありません。
未だ後 3 年あります。
この根拠無き確信の出所は不明ですが、
数理的には合っていそうだ。後の根拠は
「仇名がスッポンだから」
位かな？

2021/3/13-2

（がっかりさせたら、ごめんなさいね。の「告白」）

ちょっと前の記事で「内外（うちそと）合せ」の続編は、家を占拠され一人で乗り込んで追い出した話なんかを書いたせいか「なんやら、こいつ、物騒なやっちゃなぁ」という事でしょうか、その前の「内外（うちそと）合せ」の反響から読者数が激減を致しました。
余計なことを書いたものだと大いに反省をしておりますが、前編の方はかなりご興味を持って戴けたようなので、もう少しリアルに書いてみようと思います。
人には転機というものがなにがしかあります。
例えば、3．11 の大震災や終戦、経済危機等など。
しかし、人の転機がこのような大事件や大きな不幸をきっかけにしてしか起こらないという事になると、大きな問題になってしまいます。まさか、自分の転機を迎えるために、そんなことが起きるのを待っているわけにもいきませんし。
で、大抵の転機はちょっとしたことがきっかけで起こるようになって居るようです。
前にも書きましたが、成功者の成功話の中に出てくるような「特筆すべきイベント」などと言うのは、話を面白くするための「脚色」が殆どで、実際の転機のきっかけというものは、実のところ全く取るに足らない、日常の、ほんの一瞬の中に存在している気がします。
それで、内外（うちそと）合せの元になったうつ病の「克服（敢えて此処ではこう言います）」に関して、そのきっかけ、それを今までは例の脚色によって
「どん底についた。後はもう下がない。下がないという事は、逆にこれから先は上に行くだけだ」みたいな「劇場型ドラマ」に仕立て上げて参りましたが、実のところはこんな感じだったのです。
曰く
「なんかもうつかれちゃったな。面倒くさ。もうどうでもいいや。どうにでもなれ。おっさんが一匹、死のうが死ぬまいが、大勢に影響があるわけでもないし、代わりはいくらでも居るだろうし。ほっときゃ良いのよ。ほっときゃ。あとはもう知らん。勝手にしてチョ」
というような感覚が一瞬過った後、何かが変わって「すーっと」気が楽になったような。
一言で言えば
「気が抜けた（ら、楽になった）」
とでもいいましょうか。
で、そのこと自体は今まで、まったく思い出しもしなかったですし、意味がありそうな気もしなかった、というのが本当のところだったようです。
実に、実に
「たいしたことない「心のスリップみたいなもの」がきっかけで、知らぬ間に、いつの間にか、スイッチしていた」
のが、実話。

まぁ、これでは文章作法上、余りに盛り上がりに欠け、盛り上がりを期待する読者の気持ちを裏切ることになりそうだったので、今までは大げさに書いておりましたが、実際は「取るに足らない出来事（スリップ＝揺らぎ）」がきっかけだったような気がしましたので、今日は「告白がてら」真実をおはなしさせて戴きました。
がっかりさせたら、ごめんなさいね。

2021/3/14

（うつ病の項 捕捉篇 がっかりさせたら、ごめんなさいね、の「告白」）

前回の「うつ病からの脱出」（克服ではありません）の今少しの詳細を記してみます。
「なんかもうつかれちゃったな。面倒くさ。もうどうでもいいや。どうにでもなれ。おっさんが一匹、死のうが死ぬまいが、大勢に影響があるわけでもないし、代わりはいくらでも居るだろうし。ほっときゃ良いのよ。ほっときゃ。あとはもう知らん。勝手にしてチョ」
と書かせて戴いた中身の更に正確版とでも申しましょうか。
「おんなじ処の堂々巡り。いい加減うんざり。なんかもうつかれちゃったな。面倒くさ。もうどうでもいいや。もうどうにでもなれ」
が再書き直しで、
実は、もう少し正確に書くと
直ぐ上の独白は、言葉にならない言葉で、なんとなくぼやぁんとそんな感じがしただけで、
その後、暫く眠って起きたら、最後の部分の
「もうどうにでもなれ」
が
既に「もう、どうにかなっていた」（知らぬ間に切り替わっていた）
というのが一番近似的な説明になりそうです。
之を後日談的に「解説」（解説好きで申し訳ございませんが）申し上げますと
「うつ病とは、別な言い方をすれば、実の処「整理のつかなくなった状態」とも言えそうで、明けても暮れても 12 年間、片付けベタの子供のおもちゃ箱みたいな、ごちゃごちゃ状態にいい加減うんざりして、一時ほっぽり投げて床について眠ったら、脳には寝ている間に、緊張がほぐれた時（つまり今回のほっぽり投げ状態のような時に）、知らぬ間に物事を整理する機能が備わっているようで、目が覚めたら、何のことはない、克服とか克己とかとは全く関係の無い別次元の要因（元々人間が生まれたときから万人等しく持っている脳機能）で、頭の中の整理がつき、結果既に「もう、どうにかなっていた（既に整理がついてスイッチングしていた）」
というのが上述のお話の理論的解説編です。
これに関する記事は以上でおしまいです。
追記）
昨日みたテレビ番組で、或る保健医さんが言っていたのですが「人間にはぼんやりしている時間が大切」なのだそうです。「そのぼんやりしている時間に「デファクトモードネットワーク」というのが働き、ひらめきや知らない間に物事の整理が出来たりする」と申しておりました。

そうして「このデファクトモードネットワークが損なわれたり、働かなくなったりすると、うつ病になる場合が多々ある」とも申しておりました。
自分の場合も之に該当したのかもしれません。

2021/3/14-2

（ある日、突然）

それは 11 年前のある日、突然起こりました。
久振りに地元駅前の遊歩道を歩いていたのですが、ふと何か妙な違和感を覚えたのです。
若い男女が腕を組まずに手を繋いで歩いている（まるで幼稚園児のカップルみたいだ）あっちでもこっちでも（大人のカップルがいない）
若い奥さんが先頭を切って歩き、旦那さんがその後、ベビーカーを押しながらついて歩いている。日本人夫婦も、奥さんが日本人で旦那さんが欧米系外国人夫婦も。
若いお母さんが人の流れの中に出ようとした小さな子供に向かって
「危ないから、こっちへ来なさい」
と、キツイ口調で言った。
「通る人のお邪魔よ、こっちにおいで」ではなくて。
いつの間にこんなに変わってしまったんだ。何が起こったのだろう？
そう思う間もなくの、その夜、行きつけの飲み屋さんに行くと元小学校の先生で、今は生け花を教えているという老婦人が
「私は、自分の言いなりになる男が好きなの」
といい、
その後別の場所で、別の老婦人が
「同じ外資系の職場で知り合った主人と結婚したのは、当時ベルギーへの赴任が決まっていたので、この人と結婚すればあちこち世界を回れると思ったからよ」
といい、
更には、又別の処で知合ったデザイナーだという老婦人は
「息子がベネズエラの女性と結婚したの。とっても綺麗で一緒に歩くのが自慢だったけど、子供を産んだらもうブクブクのトドみたいになってしまって。そんなのを連れて歩くの、恥しいから一緒に外出するの、止めてしまったわ」
これらの発言は全員、当時で 70 歳以上、今では 80 歳を超えている我が国のご婦人方の意見です。
当時これらの発言をほぼ同時期に耳にして、かなりのショックを受けました。
「一体いつからこうなってしまっていたんだろう？」
そうして最近では、11 年前のプロムナードの光景は地元だけではなく、同じ区内と隣接する区内のあちこちで散見される様になり、今では 80 歳になっている世代の夫婦の日常では、旦那さんが会計をし、手荷物を一杯抱えているのに、奥さんは入り口で待っているだけ。
旦那さんが近づいてくると、手助けもせず、くるりと踵を返して後ろを振り返りもせず、とっとと先頭を切って表に出てしまう光景を何組か見ました。
これらの光景や話を耳にして思い浮んだ言葉がありました。

「陰の実行支配者」
特に、統計上、裕福なインテリ層が多い近隣二区の奥さん方に接しての感想から出た言葉でした。
面白い事に下町の方では未だ、こう迄酷くはなっていない様です。
貧しい層や公的権利の不平等に関する「女性の地位向上」には大賛成ですが、反対に「敢えて女性という弱者ポジション」を利用して、目に見えない「陰の実行支配者」の闇力の上に更に権力を積みます様な「逆男女不平等、女性間同士不平等」があってはならない気もします。
その辺をきちんと切り分けないと、今後我が国は実に妙な国になってしまう様な気がしないでもありません。

二〇二一年四月の巻

2021/3/16-2

（修正版 生きにくさ、息苦しさの正体？）

「我が国は、物は揃って居て便利だが、心理的には物凄く暮らしにくい社会だ」
というのが、この歳まで生きてきた自分の率直な感想です。
感覚的な表現で言えば、もう学校はとっくの昔に卒業しているのに、そこと言わず、此処と言わず、行住坐臥あらゆる処で、あらゆる角度から、未だに毎日毎時毎分テスト期間が続いているような、或いは列最後部の先生から、厳しい目線で列の歪みや、姿勢の揺らぎをチェックされている長い、長ぁい体育館での朝礼がずぅっと続いているような感じでしょうか。
そういえば、テストと言えば「点数」
「点数」と言えば「数字」
しかし数字にはどうやら 2 種類ある様です。
元々の数字は「緯度経度」のように特段の意味は無く、只、位置や状態を表す「科学的乃至は数学的な」自然科学上の尺度でしたが、
いつしかそれに「価値的な意味合い」が備わり、単なる記号としての数字が「等級（レベル、ランク、序列）＝その人の価値」を意味する様になりました。
例としては、昔よく言われた「お金の額」「背丈の高低」「学歴（偏差値）」以上が結婚相手選択の要求基準である「3 高」（今は却って邪魔の様ですが）
その他には「敷地面積や LDK の数字」或いは「A5 ランクの和牛肉」とか「三つ星レストラン」等々です。
この中で幾つかを例に取ってお話すれば、
「お金は我々の層が飲食で豪遊をしたとしても、日に 10 万もかからないでしょうから、1 年でせいぜい 3650 万。それ以上ン十億稼いでも使い切れないか、争いの元になるか、気の休まらない日々を送るかで、碌な事はない。単なる安心の為の「保険料稼ぎ人生」
ともいえますし、
「3 つより 5 つ星レストランがいいとの伝で、長い時間待たされてようやく入店したとしても、その味が本当に自分の好みに合っているのかどうか？
であれば、風聞に惑わされず自分の舌に合う、並ばなくて済むお店を気儘にハシゴした方が楽しい」
とはいえませんでしょうか？

「数字」特に「等級と化した数字」に当て嵌まる様あくせく暮らすのではなく、自分の欲する生活には幾らあれば十分なのか？
或いは自分の舌に合うお店は何処なのかを「自分自身が決める側」になる様に心がけないと、結局は「心理的に物凄く生きづらい（暮らしにくい）一生」を過ごす事になりそうですので「大切な一生を台無しにしたくない」自分は、それだけは止めたいものだと思っております。
追記）
この傾向は全世界的ですが、特に我が国に於いては更に「型（形）信奉の美学」とでもいうものが存在している様です。
之は喩えて言えばフィギアスケートや体操の規定演技の様に「要求基準に寸分違わぬもの程、高得点」と言う意識が支配的です。
この二つ、即ち数字に「価値を付加した」尺度と「規定演技の要求基準」の尺度によって、がんじがらめの常態化が我が国での「生きにくさ、息苦しさ」の正体の様な気が致します。

2021/3/17

（インテリ性って私用目的？）

最近ふと、思った事ですが、それは
「我が国の裕福なインテリ層家庭では、産まれてから社会に出る迄、その子供が社会に出た折に再現可能率、又は出現可能率ほぼゼロの様な状態で育てているのではなかろうか？」
という疑問でした。
昔風の言い方をすれば「温室育ち」「過保護」「ちやほや」
こうした環境の下で育った子供が、突然、風よけも温度コントロールも定期的栄養供給もない環境下に放り出された場合どうなるか？
突然就活面接会場にワープしたなら「不適合拒否反応を起こし自壊する」
か
「言っていたことと全然違うじゃないか」と親を恨んだり「ちやほやしてくれない社会に対して恨みを持ったり、すねたり、八つ当たりしたりする」か、又は
「社会の中でも、今までの家庭内同様にちやほやしてくれそうな一部の特権階級に、何の苦労もなく、お手軽簡単になれる方法を夢見て探そうとするか」
のいずれかになるような気がします。
どの道、本人にとっても社会にとっても良い結果は出てきそうにもありません。
一番目は引きこもりや自殺、二番目、三番目は犯罪や不正義の温床にもなりかねません。
こうしたことが生起する原因の一つとして、良いか悪いか、それが妥当か妥当でないかは別として、現時点では事実としてそうなっている「社会のリーダー層である、インテリ層」の子育てに大きな問題があるのではないかとも思っております。
叱ることを「非民主的な、インテリにあるまじき行為」と考え、一切叱らず「褒めたら褒めっぱなし」か、逆に「言う事を聞かせよう、自分のコピーを作ろう」と「合法的虐待まがいの家庭内蟄居幽閉生活（実際には外出している折にすら遠隔コントロールで）の隷属隷従を強いる」かのいずれかになっていはしないでしょうか？
要するに「褒めるばかり」「叱るばかり」の一面的な偏り。
どうして「時には褒め時には叱る」の両面的、複数的な交互換性を持たないのでしょう？
どうして家庭内で「状況を一元的に纏め上げよう」とするばかりで「時には之、時にはあれ」といった「状況変化」を敢えて持ち込んだり、認めたりしないのでしょう？
「変化の受容」を一貫性の欠如は「恥」と見做すのでしょう？
おまけに折角高等教育まで受け、獲得したその「インテリジェンス（知性）」を公の為に供せず、自分個人のお金儲けや栄達、又はその家族、一族への便宜供与にばかり明け暮れてしまうのでしょう？
或いは又、言うだけで実行もせず責任も取らない。
言うだけなのでどんな綺麗事でも言える。綺麗事であればある程人気と価値が高まる。

その言を恰も「存在しうるもの」として我々が信じ、到来しないと落胆を感じて不満を抱く。
それが結果的に我々の中に実態以上の不幸「感」を醸成させる。
此れ等の件に関しては、今のインテリ層の「視野の狭さと無責任さ」の中に重大な過ちがある様な気も致します。
May I ask you? Intelli san
「Isn`t it 私用目的？uh?」

2021/3/18-2

（最大の投資効率？（「投資」の原義？改題））

両手一杯に物を抱えていて、新しいボールは取れません。
一旦抱えている物を地面に置いた上で、新しいボールをキャッチ（手に入れる）し、それから地面に置いた今迄の物の中から必要な物を抱え直す。
之が物事の自然な動作（道理＝メカニズム）でしょう。
しかし現代の教育や思潮は、両手一杯に物を抱えた儘、新しいボールを取る方法ばかりを教えているか推奨している様に思われます。
そうして、両手一杯抱えた物を、地面に置く事を「時間の無駄」や「動作の無駄」にカウントして、その無駄を犯さない時間や動作の短縮のことを「効率的」だと称している様な。
しかし自分が思うに、それは「効率的」なのではなく、道理の捉え方の、単なる「勘違い」でしかいない気がします。
この「効率的」という言葉を「既得権」に置換えてみると分り易いかもしれません。
即ち
「新しい物を手に入れるには、一旦「既得権」を手放し、新しい物をキャッチした上で、既得権の中から、その後も有用な物を取捨選択して抱き直す」
と。
どの道一旦裸にならないと「新しい物は手に入らない」のが、物事の道理（自律的メカニズム）の様な気が致します。
（それをせずに全てを端折る（「効率」の別名）事は、却って遠回りする時間の無駄（結果的な非効率）を招く様です。之を故事では「急がば回れ」と諭（さと）しております）
この、新しいボールを手に入れる為に、それに先んじて一旦裸になる（捨て身になる）事を別の言葉で「投資」と言います。
文字通り、新たな資産を手に入れる為に、既存の手持ち「資産（過去の遺産）」を前もって一旦「投げ出す」事です。
それを古（いにしえ）の先人達が「（既得）資産を（再び戻らぬ事に腹を決めた上で、前もって）投じる」事の短縮形として「投資」と名付けたのではなかろうかと推測しております。
話を元に戻しましょう。
ですので、本当の意味で「新しいものや価値」を手に入れる最も「効率的」手段は、何の事はない「急がば回れ」で、まずは既得権を捨て、それに縛られないフリーハンド（発想や立場）を得た上で、フットワークを軽くし、様々なトライをする機動性を獲得する。
これが、自分のあらゆる経験則に照らし合わせてみた値からは、時間や手間の量的カウントを「無駄から有用（有効実験数）」という質的カウントに切り替えた場合、手間暇かけない事で、当初は一見効率的に見えたものの、実際には失敗を重ねる無駄な回数合計の時間を勘

案すると、当初遠回りに見た迂遠な方法の方が、結果的には「投資効率」が高く「投資効果」（その最大成果）も良い結果がでる、と言える様な気が致します。
以上は「机上で弾いた数字」ではなく「度重なる失敗の実測値」ですので、生起率は、そこそこあるのでは、とも思っております。
将来、手間暇かけて待っただけの事はあった「かも」
位に、思って戴けると嬉しいです。

2021/3/19

（何故、かくも臆病であるのか？）

我が国の、我々はなぜ、かくも臆病であるのか？
対応の仕方が分らないからかもしれません。
では、何故対応の仕方が分らないのか？
経験歴が殆ど無く、そのせいで、自分が持っている対応能力や対応手段の幅が物凄く狭いか少ないからの様な気がします。
では何故経験歴や経験数が少ないのでしょうか？
失敗が許されない風土があるからかもしれません。その為、手も足も出ず、経験数が極端に少なくなるの。
その経験不足から、対応手段として持っているそれ以外の物が来たらどうしようもないことが、薄々分っている為に、そこから逃げざるを得ないからでしょう。
何故逃げざるを得ないのでしょう？
勿論危害に遭いたくない事もそうですが、遭わなかったとしても「恥だけは、掻きたくないから」です。特に「利害関係のある人前」に於いては。
そうしてこの「利害関係のある人」というのが、今度は対応能力の幅の狭さに反比例、又は逆比例して「とても多い」気がします。
喩えて言えば「通りすがりの人まで含めた全国民、一人の例外や取りこぼしもなく全員」位多いのです。
だから、浮き足だって腰が落ち着かず、鼻から「逃げ腰逃走モード」詰まり「追跡捕縛恐怖モード」になるので、四六時中（しょっちゅう）おどおどしてしまう。
そうして、ここからが厄介なのですが、それを見透かされない為に今度は「虚勢を張って居丈高」になったり「格好を付けて、すかして」みたり「大人（たいじん）ぶって不動を装って」見たりするので、我ながら益々訳が分らなくなってしまいます。
この「虚勢」「格好付け」「不動を装う」処が導き出す同一の行為として、最も顕著なのが「見て見ぬ振り」逆を言えば「こっそり盗み見」でしょうか。
なので、交流が生まれず、皆が皆孤立無援の疎外感地獄を歩くに事になってしまう。
お互いがお互いを「存在消去し合い」お互いがお互いを「スパイし合う」様な事が時々刻々と繰り返され、攻撃と防御で息つく暇も無く疲弊する事を避けたいからかもしれません。
では「之に対する対処法、特効薬はないの？」と問われれば、こういうしかないと思っています。
曰く
「一度で良いから失敗して満座の中で大恥を掻いてみましょう。初めは苦しいでしょうが、それを繰り返す内、次第に馴れてきて、そのうち何でも無くなりますから。兎に角まずは一

度失敗して恥を掻いてみてはどうでしょう。これでいっそ、可成すっきりして格段に落ち着くと思いますが」
と。
何の事はない
「経験の幅の狭さと数の少なさからくる対応能力の幅の狭さと手段の持ち駒不足」
の由来は
「失敗と大恥を掻く経験数の少なさ由来」
以外の何ものでもない様な気がしておりますので、上述の様な言となった次第でございます。
ですので、まずは一歩踏み出す
「勇気」
換言すれば、一種の
「開き直り」
が必要なのではないかと思っておりますが、
皆様方は、如何思われますでしょうか。

2021/3/19-2

（「暮らす」という言葉を紐解いてみる）

家でたまたまチラシをみていたら、ある食品会社のチラシの中にあった英語のキャッチフレーズで
「eat well, live well」
というのが目に留まりました。
和訳すれば
「よく食べ、よく生きる（生活する）」
という事なのでしょうが「よく食べる」は兎も角も「よく生きる」とか「よく生活する」では何となく重たいし、語呂も悪いので「よく（＝元気に）暮らす」に置換えてみました。
そうすると何となく落ち着きました。
で、なんで落ち着いたのだろうと考えてみたところ「語呂合わせの良さ」や「暮らす」の「音感の柔らかさ」以外に、もう一つ、別の何かがある事に思い当たりました。
それは「暮らし」の中で使われている漢字の「暮」からの連想で
「日暮れ」
でした。
どのようなイメージを連想したのかと申しますと
「もう夕暮れかぁ。お日様が沈むなぁ。今日も一日よく働いた（子供なら、遊んだ）。家に帰ったら、ゆっくりお風呂につかって、皆でご飯を食べて、その後（大人なら場合によって、ちょっと一杯引っかけてから）布団に入ってぐっすり寝よう」
という様に、頭と身体を十分に使い、心が満たされた張りのある日々が続く状態こそが「暮らす」の意味する処ではなかろうか？と。
単に息をして「生きているだけ」では勿論ダメだし「生活費、生活費」とお金や実入りにばかり目が行く「生活」でもダメで、やはり
「健康で文化的な生活」は「心身共に健やかで、心身共に張りのある暮らし」でないといけないのではなかろうか？という意味で「暮らす」という言葉を使ったのかなぁ？と。
それでふと、この、我が国憲法で記されている文言が、文明に押し流されすぎて空洞化、形骸化してしまった事によって、虚仮（こけ＝仮でうつろな姿）にされ風化したまま、忘れ去られてしまっているのではなかろうか？と言う思いに駆られた本日丑三（うしみつ）時の出来事でございました。
今一度「暮らし」を「暮らす」その「暮らし向き」を考えてみるのも大切なことのような気が致しました。
余談）
「暮」という漢字は「くさかんむり」の下に、横棒線を挟んで日が二つあります。

これは自分の想像では、草野原の向こうに、上の字の「日」が水平線下に沈み、下の「日」になって隠れるという様を表した物ではないのかな？と勝手な想像をしております。
お粗末。

2021/3/20-2

（「人類史大絵巻最末端」の崖っ淵）

「祇園精舎の鐘の声
諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色
盛者必衰の理をあらわす
奢れる者久しからず
只、春の夜の夢の如し」
之は、確か中学の時に習った文です。
とても印象的だったので覚えておりました。
しかしこの理に倣えば、豪族や将軍、国家や民族のみならず、人類も同じ理の下にあってもおかしくはありません。但し、時間的尺度のスケールが大分違いますが。
その時間的尺度のスケールをグンと伸ばしてみると、嘗て地球上を跋扈し栄耀栄華を極めた恐竜。
まさかこの天下無敵の巨大生物が滅びるとは誰も考えもしなかったでしょう。
が、それにも拘わらず、一時を頂点として、隕石衝突か何かの突発事態で気候変動が起こり、餌となる草が減少し、暫くの後に絶滅してしまった事実があります。
だとすれば、地球の長い悠久の歴史の中で、我々人類もそうなってしまう可能性があると思われます。
最近ニュースで気候変動問題（地球温暖化）と我が国の風水害、南海トラフ首都圏直下型地震の予測等とコロナウィルスの話がそれぞれ独立した話として別々に報道されておりますが、自分にはその根っこにあるものは「全く同一起源のもの」なのではないのか？という気がしてなりません。
要するに数的に巨大化しすぎた人類へのバッシング、押し戻し、間引きの始まりなのではないのか？という予感です。
自分で言って自分で震える程の恐ろしい予感です。
天地運行のメカニズムというのは
「完全に人類からは独立していて、必ずしも人類の都合に合せて作られている訳ではない。人類の都合に忖度を全くしていない」
というのが自分の予感の元になっております。
この人類の都合に全く忖度しない「自然の猛威」に対して、古代から人類は「お祈りをして諫めたり、戦ったり、ねじ伏せたり」して参りましたが、産業革命以降は最後の文言にある「自然のねじ伏せ」が多くなり、直近では「破壊してでも利得を得る」様になってしまっている気がします。
それに対してとうとう「自然界が怒りだした」

結果が、前述の気候変動、風水害、巨大地震、ウィルス渦と言う形を取って、様々な巻き返しを、図り始めた。
「最早「警告」の域を脱し、封じ込め掃討作戦に打って出てきた」の感があります。
であるにも拘わらず、この実際の構図に気づいたとしても、相変わらず、大学生の頃に読んだ西域小説の中の
「大河の氾濫に対して弓矢、槍を持った兵馬を差し向け、その大河の反乱を平定しようとしたが、結局はその度毎に兵を失うだけの愚を犯した」将軍同様、今もその愚行を繰り返しているのではないか？
という気もします。
その愚を犯さぬ為には、何よりもまず「発想のコペルニクス的 180 度大転換」が急務ではないでしょうか？
何度も申し上げて参りましたが 2030 年、その最大猶予期限迄「あと 10 年」
我々は今「人類史大絵巻」最末端の「大崖っ淵」に立たされているのではないでしょうか。

2021/3/21

（最近とても腹が立つ事）

最近とても腹が立った事の
第一番目は、
物事の順番。後先の事。
何の上に何があるのか？
その上にあるものは、何がないと成り立たないのか？
全ての生物は地球の上で生きています。
地球がなくなれば（死ねば）その上で生きている生物は全て消えて無くなります（死滅してしまいます）
今起きている悪しき事象への「最適解発見」の starting point は、上述の認識が、まず初めにあって然るべきで、それを、限れた人間界内部で「足の引っ張り合い」をやっている場合なのか？と。
二番目は
あり得ない公式の連呼。
両論併記は、もう片方の論や意見がある事を、もう片方の人々に知って貰う為にするのであれば意味もありますが、
「取りあえず、言うだけは（警告するだけは）言ったからね（したからね）聞くか聞かないかは聞いた者の責任だからね」
という、何のことはない、発した者の責任転嫁か単なる知見披露でしか無いのであれば、全く無意味で混乱を招くだけの雑音（noise）にしかなりません。
例として、ある同一 media 会社の、若干の時間差をおいての、ほぼ同一紙面の記事を引き合いに出してお話ししますと、今 Corona 渦で
昨日迄、目にしていたのは
「飲食業界から悲鳴。保証体制は万全か？」
「失業者急増。雇用対策は万全か？」
の 2 本で
今日目にしたのは
「（宣言解除後の）第 4 派への感染対策は万全か？」
の、合計 3 本の記事。
見てお分りになられる通り「万全（か、近似文言）」が 3 つ。
初めの 2 つを 1group とし、3 番目を次の 1group とすれば、この 2group で「万全＝100%」の合計数値が 200（そもそも万全=100%等あり得ませんが）
一方、世の中の最大実行可能指標（割合）は 100 が通常ですから、この 100 のキャパ(capacity)中に 100+100＝200 を入れる事は「不可能」です。

大抵は、万全等あり得ないので、第 1 の group の「保証、雇用対策優先」度を 90 とするなら「感染症対策」度は 10 になりますし、その反対に「感染症対策優先」度を 90 とすれば、当然「保証、雇用対策優先」度は 10 にならざるを得ません。
であるのに、全くの同時期に 100 のキャパ(capacity)に対して 200 の同時実行実現を求め「俺は言ったから。後はそっちの責任だから」
というのは「いかにも」でしょう。
少なくとも此れ等を両立させたいのなら、100 が 2 つ成り立つ様に、時間差を置いて、その時間差の順番付け（どちらが先で、どちらを後にするか）をする必要性があるのは明々白々。
即ち
「3 ヶ月集中的に Lock Down をお願いします。その後「鬱積した反発力」を活かして経済の急回復を一気に成し遂げます（ましょう）但しその後の New normal の経済は今迄のものではありません。大きな痛みを伴う大変革の覚悟は必須でしょう」
という story を明示するのが役目の様な気がするのですが。
以上その様になっていない世界の leader と media に、最近、とても腹が立っております。
「いい加減に、せぃ」
以上は
「あっち向いてホイ、こっち向いてホイ」に苛立つ
実際に苦境下の一飲食業者、現下直近の意見でございます。

2021/3/22

（「思惑疲れ」吸い取り装置 ）書庫版

以前にも書きましたが、自分は毎朝徒歩か自転車で、草樹木や小動物が多く、遮るもの無く、視界がひらけて広々とした墓地公園を通り抜けてお店に来ます。
もし、こういった周りをぐるりと自然に囲まれた場所を通り抜けるような生活がなかったら、遠に自分は事業を続ける意欲を失っていただろうと思います。
例えば都会の直中（ただなか）でのお店の運営であったなら、といった場合です。
（以前そのように書きましたところ「如何にもの、作り話」と揶揄されました）
確かに自然は問題を解決してくれる訳ではありませんし、お金を立て替えて呉れる訳でもありません。
愚痴を聞いてくれる訳でもありませんし、慰めてくれる訳でもありません。
冗談も言わないし、励ましの言葉もかけては呉れません。
ですが、何も言わないのが却って良いのかもしれません。
そして、何よりも自然には「思惑」というものがないので、こちらも相手の「思惑を読んだり、それに対してのこちら側の「思惑」を準備したりする必要も無く」本当に「気の抜ける安堵」を得ることが出来るからかもしれません。
喩えて言えば
「思惑疲れ濾過フィルター」とか「思惑疲れ吸い取りスポンジ」

みたいなものでしょうか、ねぇ。
「思惑疲れ」がフィルター効果や浸透圧効果で「すーっと」浄化されたり、吸い取られたりしていく感じ、とでも申しましょうか。
ですので、こちらからお願いした訳でもないのに、この通り道を抜けることになった「偶然の差配様」には、誠に感謝申し上げておる次第でございます。
（追記）
尚、本日は定休日でございますので、春風の下（もと）日がな一日、ぼんやりと過ごさせて戴くことにいたします。
（写真は去年の初夏のものです）

2021/3/23

（世界に己だけの孤独）

ネット閲覧中に或記事が目に留まりました。
「個人情報漏洩」
我が国の或 SNS の記事内容が、考え方を異にする他国内の委託先に閲覧可能になっていた事が原因で、我が国の自治体の多くが、その SNS 以外に切り替え始めたというのですが、その理由の一つに
「コロナ渦で急増している若年層の自殺相談窓口に寄せられた「家族にも言えない」極めて個人的な情報が含まれている為」
というのがありました。
「相談窓口の中で信頼関係が成立する第一要件は「秘密厳守」故、切り替えざるを得なかった」
との事。
しかし、この記事を読んで「んっ？」と思った事があります。
「家族にも言えないから、赤の他人に相談する？」
「何故？」
「恐らく家族との間に利害関係が存在するから」
「どんな？」
「それは千差万別だから考えても仕方無い」
「何故存在するのか？」
「力関係が生じている、詰まり勝ち負け関係が生じているから。そもそも利害関係ゼロというのはあり得ないから、そのバランスが悪い事になる」
「バランス？」
「利害の遣り取り（give and take）が消滅して、「利」側と「害」側が固定してしまう関係。天秤で言えば、どちらか片方に傾いたまま動かなくなっている状態」
どうやらそれを逃れて赤の他人に相談に行っている様な気がします。
しかし自らの経験からすると
「それは一時のガス抜きにしかならない。一時的に気は落ち着くが、家庭に帰れば元の木阿弥」
あく迄も解決を望むなら
「利害関係当事者と直接話をしないと何も解決はしない」
というのが自分の経験則上の答えです。
無論それは「家庭自体が自殺の原因の一端」である場合です。

しかし今の我が国では、色々な問題の発端原因を突き詰めていくと「家庭内問題、特に親子関係に端を発するもの」が極めて多い気が致しております。それで、この様な書き方になってしまったのですが。
先にも申しました通り、利害関係というのは決してゼロにはなりません。相手が誰であれ必ずや、その相手との間に存在するものです。
なので、それを消す努力を幾らしても「骨折り損の草臥れ儲け」になるのが関の山で、後は
「利害関係のバランスをどう取るか？」
でしかない様に思われます。
之又先の例で言えば、天秤の一方的傾き固定状態を「偶には右、時には左で、結果多少揺らぎながらも釣り合う状態を保つ」様にするのが理想。
ですが、常時均衡は難しいので「ぎったんばっこ」のシーソー的交互入替状態が現実的かもしれません。
この相互均衡、主客交互入替状態の別名が「コミュニケーション」
処が今、その主客の入替がありません。
「客」が存在していないからです。家庭内ですら。
「目の前の相手は自分色に塗り替えられた架空のアバターで、結果世界はリアルと自己都合の二重構造となり、行けども、行けども生身の人間に出会わない、世界に己だけの孤独」
それは相手も同じ。
互いに相手を追い出し合っている結果なのかもしれません。

2021/3/23-3

（ため息）

「正しいものには矛盾がない。だから統一しなさい。出来ないものは排斥しなさい」
という考え方もあれば
「そもそもが、矛盾だらけなのだ。矛盾したものが平気で併存することはよくある事だ。いちいち目鯨を立てていたら切りがない。何が正しいか?よりも、何が実態、事実か？を捉えた方が、話が早い」
という意見もあります。
この一つだけをとっても、その後の生き方が全然違ってきます。
こういった場合以下の言葉は余り使われませんが、これも
「ものは考え様」
の、紛うことなき一例でしょう。
そして、この「考え様」によって、同じ世界が全く違って見えてくるのですから、結構怖いものがあります。
そういえば以前、息子から聞いた話で「牛さんと虎さん」の話を思い出しました。
「お互いに相手に感謝を込めて、自分の最良の物をプレゼントしようと、牛さんは虎さんに草を、虎さんは牛さんに肉をプレゼントしたのですが、貰った方はお互いに大迷惑だった」
というお話。
要するに「相手の取り様」
世の中っていつもこんな感じでしょうか、ね。
結構疲れます。
二つ考えただけでこれほど怖かったり疲れたりするのに、これ以上考えると、もっと訳が分らなくなりそうなので、今日はこの辺で止めておきます。
ため息。

2021/3/24-2

（「熱烈なる食欲」のかわし方）

お金があって美味しいものを食べに行く生活ばかりしていると、お金がなくなった途端、美味しいものを食べに行けなくなります。
普段からお金がなくて、たいした材料でも無いものを美味しく作る工夫をしていると、相変わらずお金が余り入ってこなくても、美味しいものに「食い逸れる」ことは余りありません。
この場合の「美味しいもの」というのは「極めて美味（びみ）」という事ではなく「そこそこ、幸福感を得られる」という意味です。
要するに「作って貰う」のではなく「作れるようになる事」と
「期待値やハードルをうんと下げておく事」
そして
「工夫をする楽しみ」
之で結構幸せになれる気がします。
之が、自分が自炊をする理由でございます。
（追記）
勿論、たまには「死ぬほど旨いもの」を食べたくなりますし、お金があれば今すぐにでも食べに出かけますが、生憎、当面「そういった事態」は起こりませんので、上述の考え方で「いなして、すかして、かわして」おります。
この「熱烈なる食欲」を。
（注）
写真は鮭の切り身を一切れ入れて炊き、混ぜただけの「鮭ご飯」です。

2021/3/27

（ニューノーマル考 「裸の王様」）

ニューノーマルを探せ。
「ニューノーマル探索日記」と題して、この稿を起こしてから既に１年と３ヶ月が経ちました。
それで、でしょうか、今ふと、
「ところで、ニューノーマル、ニューノーマルとお題目のように毎回書いているが、そのニューノーマルって、一体何を目安に、又何を想像してそう言っているんだ？自分は」
と考え込んでしまいました。
これじゃぁ、まるで
「この丘を越えさえしたらその向こうにユートピアが拡がっているよ」
とか
「その角を曲がりさえしたら、今迄に見た事もない御殿でのお出迎えが待っているよ」
とか言っているのと変わりがない気がしてきました。
簡単に言うと一昔前の古びた宣伝手法の広告。
「一粒食べたら、夢の世界」
の様な。
大嫌いだと言っている「その宣伝」もどきを自分自身が行っている。
そう思いました。
それで今度は、例の「行き詰まったら、その正反対を考えてみる」という自分流の方法に従って、未来に向けていた目を 180 度反転させ、過去に目を向けて、今暫く考えてみると
「ニューノーマルって言い出したのは、ひょっとしたら過去のある時点からが「アブノーマル（異常状態）」だった事の裏返しなのではないか？」
と思い出しました。
なので「ニューノーマルというのはアブノーマルの修正形で、実は「ノーマル（正常状態）に戻せ」と言っている事なのでは」
と。
そう考えてみると、過去のある時点から
人は、生物界等どうでも良くなった。
人は、人の事など「しったことか」とどうでも良くなった。
人は、事実実態がどうであっても、それもどうでも良くなった。
その裏返しで
人は、人間界にとっていい事だけを考えるようになった。
人は、自分にとってのみいい事だけを考えるようになった。
そうして

人は、事実実態よりも「記号（価値）、情報（価値）、宣伝（効率効果）」を重視し、踊らされる様になった。
その迷妄が、事実実態を、たまたま隣にいる人（隣人）を、最後は「生物界を含めた地球環境」を浸食破壊してしまった（してきた）
そうして今、我々は、その「アブノーマル」に対して「ノーマル」から「警告」「お仕置き」「逆襲」を受けているのではなかろうか？
とも。
そう考えると、大分分かり易くなってきました。
要するに上述の部分で書いた
「記号、情報、宣伝」
この部分。意図をせず図らずも書いてしまったこの部分。
これは将に現代の「IT」という言葉に置換える事が出来るのではなかろうか？
と。
その「information（情報）x（と） technology（技術）の 持つ意味（位置づけ）と在り方（価値レベルの設定基準）」又はそれが生み出す「格差の是正の仕方」の話だと言う事ではなかろうか？
という気がして参りました。
早い話が「IT 様の、持ち上げすぎ」
その結果、信奉者である我々自身が知らぬ間に
「裸の王様」
（価値がある、あるといって着せられているものに何の価値もなく、踊らされていただけ）
になっている様な。

2021/3/28

（「帰還者のお花見」考）

以下は５年前、手術入院２ヶ月しての帰還直後に、家族に捨てられ「捻くれてしまったかもしれない」自分の目を通して見ると、なのですが
「お花見の季節、再びコロナ感染拡大。第４波到来の予測」
というイタチごっこ。
単にお花見をしたいだけならご近所でもできるでしょうし、人出の少ない地場の公園でも出来そうなのですが、何故か我々は、桜の名所と言われる「密になり易い」処へ出かけていきます。
何故？
話は少し変わりますが、人を含め生き物には一般的に「向日性」というものがあるのを感じます。植物が光合成を求めて日の光に向かって伸びていくあの現象です。
それでは、人間の場合の「光合成」とは何かと考えてみますと
「幸運」「好機」「好事」「興奮高揚」
という言葉が浮かんできました。
では何故この４語が出てきたかというと、外出できない折にネットであれこれ探し回り、結局詐欺被害に遭ってしまう事例の元になっている要素が「これら」だからです。
自分自身もこの２週間で３度そんな機会に遭遇しました。すんでの所で難は逃れましたが。
もとい。
いずれにせよリアル世界で、それらに出会う確率が高い処と言えば人出の多い場所、即ち「密な」処でしょう。
それでわざわざ「危険を冒してまで」出かけていく。
「夜は日の光がないじゃないのよ」
といわれるかもしれませんが、こちらは「飛んで火に入る夏の虫」同様「灯火の光」
を求めて盛り場に出かける。言ってみれば虫の「向光性」といえそうです。
もう少し簡素化して言うと、お日様にしろ、灯火にしろ、それが意味する処は「今よりもマシな出会い」又は「今を塗り替えて呉れる新しい出会い」を求めて、とも言えそうです。
或いはそこまでは行かずとも「今よりも、より密な関係との出会い」とも言えるかもしれません。
仮に「今よりも、より密な関係との出会い」が最低限の目的で、尚かつ感染の危険を冒さなくて済む「そういった場所」は他にはないのか？と考えてみると、唯一あるのが「家庭内」です。
つまり「この災禍を機に逆に家庭内で、今よりもより密な関係を再発見、再構築する（試みよう）」という訳です。

ところが何故か多くの場合に於いて、この「家庭内で」が最初から、そのターゲットとして外されている事例が処々方々で散見されている様です。
それというのも、向日性に基づいて春の光の下に曲がりなりにも「家族として」出てきた、その家族連れの表情が余り楽しそうでもないからです。何だか「春の日の葬列」に見えなくもないからです。
以上纏め、今少し大胆に申し上げますと
「家の中にいては却って息苦しいから、心理的換気目的で「家族として出掛けはするが」の、向こう側に幽体の様にほの見える気がするのは、家族以外の赤の他人との「幸運」「好機」「好事」「興奮」を求め、向日向光本能に従って「密な場所」に出向いている」
錯覚かもしれない、そんな何かなのです。

2021/3/29

（ちょっと言訳 ）

昔むかしのそのむかし、自分が子供の頃、
学校では
「人間は万物の霊長」であるとか
「英知をもって健康で文化的な生活を送る存在」であるとかなんとか
「兎に角人間はすごいんだ」と教わり
家に帰ると
「起きて半畳寝て一畳」であるとか
「結局人は食っては出し、食っては出しの肉土管」
「最後の姿は髑髏（しゃれこうべ）」
とかの、都々逸みたいなことばかりを聞いて育ちました。
親父は旧帝大の法学部出身だったので、どちらかというと上半分の様なことを言ってしかるべきなのですが、どうした訳か親父にしろ、叔父さんにしろ、お袋や婆さんに至るまで口をそろえていうのは、下半分のようなことばかりでございました。
かてて加えて、自分の周りというのは「都下」であるにも拘わらず「ド田舎」で、犬、猫は元より牛、馬、山羊、地鶏、土鳩やカラス、雀に始まって、小さいのは玉虫（便所虫）、ザリガニ、タニシ、蛙、バッタや、そのほかにもいろんな種類のトンボや訳の分らないド派手模様の蛾などがそこいら中にいて、何となく
「人間はその中の一種類なんだろうな」
位にしか思っておりませんでした。
兎に角周りは畑、田んぼ、里山、雑木林、朽ち果てた防空壕跡の洞穴みたいなものばかりでした。
夏休みの宿題と言えば、毎年必ず、採ってきた「石ころの標本」とか「押し花にした標本」「虫の標本」ばかりを提出しておりました。
（今では残酷だと怒られるかもしれませんが）
余りに標本作りに夢中になりすぎて、一度など、あやまって「肥溜め」に落っこちてしまったこともありました。
その後、１週間くらいは「わぁぁ、くっせぇ。寄るな、触るな、近寄るな。えぇんがちょぉ、えんが、ちょ、肥溜め野郎」と囃し立てられて、誰も近づいてきませんでした。
そんな訳で、というかそのせいでと申しますか、自分は人間様とそれ以外のものの垣根が非常に曖昧でしたし、自分の所業なども考え合わせると「余り人間を偉い」とは思ってもおらず、将又（はたまた）且つ又そのせいで、我々人間を「普通の（普通に）生物の一種類としてみてしまう」癖がついてしまったようです。

之までの、自分の記事において、人に言わせると「人間を貶（おと）しめるような物言い」と取られるのは、そう言った自分生い立ち環境のせいかもしれません。
本日は之までの記事のいくつかに対する、
ほんの「ちょっとの言訳」
でございました。
（追記）
末筆ではございますが、自分は、本当は、こういうどうでもいい様な事を、だらだら、つらつらと書くのが大好きなのだという事も、最後に併せて付け加えさせて戴いておきます。

2021/3/30

（ニューノーマル探索日記、事の発端と今）

「お客様の立場に立って」
「相手の気持ちになって」
とは言いますが、
相手は全て人間で、
「他の生き物の立場や気持ちになって」
といっているのを耳にした事がありません。
確かに普通に生活している我々が、他の生き物の事迄考えるのは、通常余りありません。特に都会生活では。
では、翻って初めの二つはどうでしょう？
よく耳にする言葉ですが、町内会の「笑顔で挨拶、明るい街づくり」同様、看板を掲げている本人がまずやっていないのに等しく、かけ声ばかりで誰も心底痛感していません。
そして何より悪いのは、痛感していないからでしょうけれど、それをまるで「実行」していない事です。
例えば広告宣伝内容とその実態やら大人の説教とその人の実態等ですが。
言っている事やっている事がまるで違い、言っている事をまるでやっていないのですから何も実行していないのと同じです。
当然実行しない限り、何も発生しません。
残るのは文言と実態の差、即ち「嘘という残滓」だけです。
同種同族の人間に対してですら、こんな状態ですから、歯牙にすら掛けていない「他の生き物に対して」等ありよう筈がありません。
そうして此れ等三つの「相手の立場に立たない事（立ったように見せかけてきた嘘）」の、ある時点からの積み重ねが、今の「アブノーマル」を生み出してきた元凶ではなかろうかと思い始め、それが自分の「ニューノーマル探索」別名「ノーマルへの原点回帰探し」の発端になった様な気がしないでもありません。
（追記 そして今）
話は少し変わりますが、弊社の事業理念（企業理念）の一つに
「国際間、世代間、たまたま隣に居合わせる人とのコミュニケーション事業」
というのがあります。
その達成を考えていくと、この「相手の立場に立つ」事が出来ていない事、
そうして、皆をそうせしめてしまったのは「相手の立場に立っている様に見せかけてきた嘘」
いや、もっと言うと「あなたの立場に立ちますよ、といいながら、その実、相手の立場に立つのではなく、相手の背後に回ってスパイや監視をしようとしていた」目に何度も遭い、結

果、裏切られ失望され続け、相手の立場に立つ事や自分の立場に立たれる事に不信感と恐怖を覚えてきた心のトラウマが原因しているのではなかろうかと、
最近思い始めました。
だとすると、自分はとんでもない課題を背負った事業に手を出した事になるなぁと、
今更ながらに驚いておりまする。

2021/4/1

（弊社（当店）、2020年会計年度の締め括り）

昨夜、2020年会計年度が終了しました。
かろうじて雀の涙程、いやミトコンドリアの涙程の金額を、昨年売上額より上回りました。
硬貨の種類は申し上げませんが、まさにワンコイン一個差レベルの到達分水嶺でした（インチキはなしです）
但し、当初目標額には遠く及ばず、損益も随分改善したとは言え、相変わらず「相当なるマイナス額」で、余裕の持てるレベルには程遠いままです（当初目標に対して、現時点、足を大幅に引っ張っているのは新規事業の電子書籍出版事業、教育事業と在日就労外国人支援事業です）
ですが、屋台骨のレストラン事業部門も、一時３月の会計年度末まで、とても持ちそうもないと思っていた時から考えると、可成り回復を致しました。
そうして何より嬉しいのは、何度申請しても「適用基準外だ」という事で、給付金や支援金を１銭も戴けなかったにも拘わらず、働き者の社員の努力とお客様の有り難いご支持により、今日時点、まだお店が存続している事、及びこれからもまだ、電子書籍出版事業や教育事業、在日就労外国人支援事業も含めて「大好きな商売の仕事」を続けられそうだという楽しみが残った事でしょうか。
もとい。
話をレストラン事業に戻しましょう。
援軍無しの孤立無援状態の中で、かろうじて前年を上回る事が出来たのは、社員の努力以外に戦略的な要因として、
自分が思うに
テイクアウトと宅配のワンコイン戦略が功を奏した事、
社員（パートを含む）の人材育成と本人の持ち味の発揮という面で、適材適所の配置が出きたこと、
それと「あそこに行けば何かいつも少し変化がある。良きにつけ悪しきにつけ、だが」という話題作り戦略が効いたように思われます。そう思うのは、人の流れが車道を挟んだスーパー側から、大分こちら側に移ってきましたから。
しかしなんと言っても最大の要因は、コロナ渦でお客様のライフスタイルが変わって来た事でしょう。大きな街や繁華街に行く時間が減り、地元滞在時間と滞在人口が増えたことが一番効いた様です。
さて、2021年度はどうなるか？
まずはコロナ渦の第４波をどうやって凌ぐか？
予測される実体経済の大混乱をどうやって交わしていくか？

そしてその向こうに見いださなくてはならない「ニューノーマル」を、どうやって見つけるか？
それらの予測や不測の事態に対して、自分たちは何を準備すれば良いのか？
今年度もまたまた、難問続きの年になる事は、恐らく間違いないでしょう。

2021/4/3

（ 第二のルネッサンス（人間復古）期、到来？）

社員をどう考えるか？
「給料（という形で会社の資産）を奪う者」として考えるか、
それとも
「売上をもたらす者」として考えるか、
の間には雲泥の差があります。
今から３０年ほど前のバブル崩壊期に前者の考え方を採った我が国経営者さん達は、多くの人を解雇し、その「二流どころの技術者さん達」が回り回って、他国で一念発起し、第二の人生を始めた結果、安くて良い物が海外から逆輸入され、結果、我が国はそれらの品物に席巻されて、その後「失われた３０年間」を過ごす羽目になりました。
益々解雇の波が襲ってきて、それが定着してしまったのです。
（但し、行った先の他国で、ノウハウを吸い取られ尽くしてしまった彼らのその後は、不明です。向こうでも使い捨てカイロになっていないことを祈ります）
仮に、もし、その当時の経営者さん達（或いは行った先の他国の今の経営者さん達も同じ事が言えます）が、後者の考え方を採って
「今はお荷物になるかもしれないが、そこを踏ん張れば、中には意気に感じて、その先、近い将来、大きな成果をもたらしてくれる者が出てくるかもしれない。今はそれを信じて彼らに賭けてみよう」
という事をしていたら、結果論ではありますが、ひょっとして、我が国はここまで長期のデフレ地獄を味合わなくて済んだかもしれません。
翻って今度は、今コロナ渦で、同じような事態が起こりつつあります。
そうして、次に予測されるのは、保護貿易主義と物流網の寸断によっての悪しきインフレ（物価上昇）下の賃金の伸び悩み、つまりスタグフレーションが起きることです。
そうなると今度は、若い人を中心に、前向きな「海外への頭脳流出」が起きることになりそうです。
それが現実となれば、我が国は先進国の中で、第一番目に疲弊してしまうかもしれません。
さて、どうすれば良いのか？
これはもう「国家１００年の計」レベルの話でしょう。
付け焼き刃で対症療法的な議論や手段を止めて、一から考え直してみる必要があるような気がしております。
将に
「急がば回れ」
で
「肚（肝）を据えて掛る」

必要を、ひしひしと感じております。
「人は神ではない。しかし道具でも駒でもない」
換言すればAIに使われるのではなく、道具として使いこなせる人材を育成する「人本主義」が求められている気がいたしております。
かつて欧州では神中心から人中心へのシフト、即ちルネッサンス（人間復古）が起こりましたが、今回は道具や概念（信用価値＝貨幣や思潮、様式）中心から「本来の生き物として地球環境と和せる元気な人」を取り戻す第二のルネッサンス（人目人科人間復古）の大転換期に当たっているのかもしれません、ね。
（近況・追記）
個人の確定申告と会社の年度末決算作業で、ばたばたしておりますので、しばらくは投稿の間隔が空くかもしれませんが、宜敷お願い申し上げます。

2021/4/4

（やっぱり前の記事「突っ込まれたぁ」ので、いささか付言）

前の記事で「AI よりも人本主義」みたいなこと書きましたら、
「時代遅れも甚だしい」
「アナログじじぃは引っ込んでいろ!!」
「老害をまき散らすな!!」
と大変な突っ込みを入れられました。
「であろう」とは思っていたのですが、矢張り言葉足らずでした。
で、今少し言葉を足さして戴きますと
「デジタルや DX(Digital transformation=デジタルによる大改革)や AI を自己目的化していませんか？デジタルや DX や AI は、あくまでも手段、道具であって、目的でも何でもありませんよ。最後には、それらにのみ決まれ、使われる人間ではなく、それらを道具として使いこなせるようにならないと大変なことになりますよ。それを選択、制御できるのは、ひとが「ちゃんとした人」になる事意外にはないのではないでしょうか？」
といいたかったのを「人本主義」という古めかしい言葉を使って端折ってしまったが為に、お読みになられた方々に、全く異なったイメージを想起させてしまった、という「大ミス」でした。
大変失礼を致しました。
今一度、ご確認をお願い申し上げます。
（近況・余計な追記）
先ほど、ほぼ３日間、半徹して、２０２０年会計年度の決算書を仕上げました。見てみて唖然としたのですが、カリー屋を開業以来この３年間の累積赤字がほぼ累積売上と同額。
大半は、ほぼ全ての私財の売却と金融機関からの私人としての借入れで賄ってきましたが、最早限度、の待ったなし。
（自宅本社の中を見渡すと、向こうに地平線が見えるかの如く、遮る家財なく、ひろびろとした平原のような状態になっている我が家兼本社でございます）
今年度は是が非でも浮上しないと、もう後がありません。
出来ない場合は
「それではみなさん、お達者でぇ」
という事のなりそうで、怖いです。
ですが、そうなると従業員にも迷惑が掛りますので、なんとしても避ける所存でございます。

2021/4/5

（身に染みて）

生れて初めて商売を始めたのが３年前。
そうして、之は誰にとってもそうですが「生れて初めてコロナ渦」に遭っている今現在。
こうも「生まれて初めて」が重なると、当然マニュアルなどあろう筈もなく、日々「来たか長さん、待ってたホイ」の「全ては出たとこ勝負」の連続状態にならざるを得ません。
寝る前に明日の無事を祈っても、そうなっている事など、まずは無く、下手をすると朝昼晩の各々の単元ごとに何かが起こっている事すらあります。
こうなってくると、幾ら「おっとり刀でボンボン育ち」の「総領の甚六」である自分も、だんだんと人柄が険しくなり、いわなくてもいい「憎まれ口」を叩いたりしておりました。
昨日も、お店に出るとスタッフから
或調理器具の
「刃がなまって使えなくなったから、何とかしてくれ」
と突然言われ、そのスタッフ曰く
「以前居た処では、ホームセンターで刃研ぎのサービスがあったから、こちらでも探してくれ」
との事。
それで本日、お店の休日にも拘わらず地元近辺のホームセンターへしらみつぶしに電話をしたのですが
「生憎そのサービスはしてないのです」
と。
次に、その刃のついた本体の購入店に訊いてみると、
「残念ですが、うちもやっていないのですよ」
とのお返事。
それで止むなく出費覚悟で本体の製造元のサービス窓口に問い合わせると
「刃のついたユニット部分だけでなく本体毎送って下さい。こちらで換装しますから」
との回答。
が、しかしです。
ホームセンターの担当者さんは、次に買った処かメーカーさんに問い合わせてみては如何でしょう？と丁寧な口調で教えて下さり、買ったお店の担当者さんからはメーカーさんに電話することと、自分の処でも、そう言った問い合わせに答えられるように準備をしてみる事にします、と前向きなお言葉も戴き、最後に電話したサービス窓口のオペレーターの方は、相談内容を録音している手前、公式的な返答しかしなかったのですが「コロナ渦の飲食店なので可能な限り安く上げたい。なので、依頼前に運搬費、換装費、部品代トータルで幾らに

なるかの見積もりを先に教えて下さい」というと、これまた公式的な返答しかしなかったのですが、実際には、恐らくサービスステーションの現場に見積もり依頼する時に、内々の事情を伝えたのだと思います。
現場からの見積もり回答は「本体毎送らなくても、交換部分だけで大丈夫です。交換部分は当社パーツセンター以外にもEC サイトで部品商品として扱っている様ですから、そちらを見てみては如何でしょう」
との粋なお返事。
不具合続出のPC のメーカーさんも之又然り、のご対応。
そうしてそれとは別に、お客様からは親身溢れる励ましの「クチコミ」も頂戴致しました。
兎に角何が起こるか分りません。
但し「悪い事も」ですが「良い事も」
前者の方が圧倒的に数は多いのですが、後者は滅多にない分、身に染みて有り難さを感じる気が致します。

20201/4/6

（「焦りは禁物」時間軸を入れよう）

もうダメかと思うような時に
「励ましの言葉を戴いた」
と言って
「そうだとしても、現実的には一銭の得にもならないじゃないか」
といわれるかもしれませんが、
もし、その言葉が元でやる気が再燃し、その先の近い将来に於いて実業を起こし、それが巡り巡って実利や実益をもたらすなら、之は立派に「得」になっている気が致します。
確かに、言葉を掛けられた当初に於いては、得る価値はゼロかも知れませんが、何もその時点で同時発生する必要は無く、将来に於いて発生しても問題は無いわけです（無論「窮を救する」に間に合う期間範囲においてですが）
しかし、我々は受験や就職面接で規定時間内に回答しなくてはならないことや、仕事上、役目上で即答しなくてはならない場合、或いは結果を直ぐに出す必要がある場合に、余りにも取り囲まれすぎて居るために、そういった錯覚に陥っているだけのような気もします。
それから又
勝負に勝つには常に一位のポジションにいないといけない、とせかされるような焦りを抱いている時に、
「何番目でも良いから、レースに出て思いっきり泳ぎたかった」
という、白血病を克服して五輪出場枠一位を得た競泳の池江選手の言葉を耳にして、考えを新たにしました。
「一番、二番の順位が出来るのは、同じゴールを目指して同じ線上にいるから、そう言う発想になってしまう。それがもし、個々人のゴールは千差万別、人それぞれ違うのだと分れば、レース・フィールドが別々になるので、順位は消えてしまう。ランナーは一人で、その人が先頭であり、又ビリでもある。自分に負けたときがビリで、打ち克ったときが先頭。それだけ」
それで恐らく、池江選手は、出場迄の期間、自分に打ち克っていたので、結果の順位を気にすることなく思い切って力を出し切る泳ぎが出来たのではなかろうかと推測しております。
そうして「結果として」他の選手に勝った。
之もそうですが、お金も一緒です。以前にも書きましたが、つまる処お金（成功）は「事がもたらす結果」に過ぎないようです。
「お金は目の先方を歩いていない。お金は必ず後ろからやってくる。蒔いた種（実業）が、巡り巡って、忘れた頃に「只今ぁ」と帰ってくる」
何事も吉報は「忘れた頃に、ひょっこりやってくる」気がしてなりません。

成果は直ぐには出ません。熟成期間や回遊期間があるので、致し方ないでしょう。
何よりも「焦り」こそが「禁物」のように思われます。
後はやることをやりおおせて、機が熟して到来するのを待ち、その時の到来と共に「機と業」が重なりあって、自然と内側から無理なく湧き出るように、力を発揮するのを待つしかないのでしょう。
こちらから歩いて行き、向こうからやってくるのを待つ。
それだけかもしれません。

2021/4/7

（絶好の機会 ）

「甚大な被害」
というのは、気の緩みきったときに起きる場合が多いようです。
ですが、この場合の「気の緩み切った」というのは、何も規律が緩んで「だらけきった」という意味とは違う気がします。
どういう気がするのかと言えば
「想像だに、しなかった」「思いもよらなかった」「全くの想定外だった」という意味での「気にも留めていなかった」に近いかもしれません。
なので、甚大なる被害を少しでも軽減するためには、まずは「気に留めて」「想定内にしておく」必要があります。少なくとも「アイテムとして認識しておく必要」です。
そのためには、可能な限りあらゆる事態を想定する「想像力」が必要になります。
その想像力を広げるに当たって「歴史の探索」というのは大きな力になりそうです。
「温故知新」
という言葉があります。中学で習いました。
之の意味する処は、古（いにしえ）を温ね（たずね）、新しきを知る、ですが、思うに、之は両論併記の並立の位置づけではなく、因果関係に基づく順番の位置づけではないかな、と。
つまり、古（いにしえ）を温ねてみないと、本当に新しいものはみつからない、と解釈するのが妥当なのではないかと言うことです。
詰まり旧弊と新規の対立概念、又は白黒判定の選別排斥概念ではなく、前後の連続概念、白もあったし黒もあったという包含概念として見直す必要があるのではないのか？という事です。
それを後者ではなく前者で捉える弊害（前の全否定）としては、折角古人が見つけた有用な手がかりを、毎回リセットしてしまうものですから、それが連続的に素直に積み上がらず、それこそ毎回一から始め直す時間の無駄、手順の無駄が発生することが考えられます。
（全否定を無駄と考えるのは、物事に完全や100%はないと、考えるからです）
もし素直に耳にし、紐解いていれば、人類はもっと先に進めていたのかもしれません。
その伝に従って、もう少し枠を広げてみると、唐突に発生した様に思える出来事でも、それらの歴史を参考にして「より大きなメカニズムの視点」にたって見る事が出来ていれば、案外あっさりと「予知、予見」出来ていたりするような気もします。
例えば、その時の栄耀栄華を極めた高位層の中で腐敗が常態化すると、その後必ず疫病の蔓延が始まるというのは歴史を紐解けば幾つも見つかるパターンです。
また、少し喩え方を外しているかもしれませんが、川の流れが急峻であるときには、勢い余って片側の岸を削りとり、その土石は反対の岸に積もって、川の流れが蛇行するという様に、

その時の勢いがありすぎるものが、その度を過ごすと、却って右へ左への蛇行、即ち混乱を引き起こすこともありそうです。
歴史や自然界は我々にいろいろなことを教えてくれたり、ヒントを授けてくれたりします。
今一度、この第四波において、冷静になって我が身、我が生活を振り返ってみるには、絶好の機会かもしれません。

2021/4/9

（世の中何が起こるかわからない。一寸先は闇、かもしれないし、出口、かもしれない ）

「世の中何が起こるかわからない」
これまでの経験則、そうしてここ数日の出来事から、この言葉に対して自分は、可成の実感をもって申し上げております。
話はいきなり飛びますが、昨今のコロナ禍で猛威を振るい始めた「変異株」というのは、遺伝子のコピーミスが原因により発生する様です。
変異と言えば、これ迄よく耳にしてきたのが「突然変異」という言葉。
どんな時に耳にしたかといえば、猿の進化過程で突然変異が起き「人類の祖先」が生まれたという話においてでした。
つまり「人類の誕生」は「予期せぬ重大なコピーミスの結果」起こった、ともいえそうです。
少し悪い言い方をすれば、人類は正統派猿の完全な「出来損ない」
今の人類は「大失敗の結果生まれた出来損ないの鬼っ子」であると言えなくもありません。
そこ迄大きな話ではなくとも、自分の生涯においては、12 年間のうつ病の果てに
「こんな筈はない。何としても元に戻らねば」
と思い詰めていたのが
突如
「あぁ、面倒くさっ。もうどうでもいいや。出来損ないで結構」
という全く反対の想いが芽生え、その何分か後には既に回復軌道に乗っていた事もありました。
これも、それ迄の自分からは「全く予期せぬ出来事」の故、からでした。
又、ここ数日の話では、その全く逆に、今コロナ禍の激闘の中で、やっとどうにか光明の手掛かりが見え始めたと思っていた矢先、主要スタッフの、かねてより気にはなっていて、その不摂生を再三注意はして参りましたが、突然の健康状態悪化による加療の為の退職で再び大ピンチに陥る羽目になってしまいました。
これも、またまた想像していたストーリーからは思ってもみなかった「全く予期せぬ出来事」でした。
いずれの場合にせよ
「通常の論理展開では考えらえない飛躍が突如何の前触れもなく起きる事」
それが「世の中何が起きるかわからない。一寸先は闇」
の意味するところでしょう。
しかし、人類規模の話と、直近の自分のお店の話の間に登場する、自分の「うつ病消滅」物語の話から言えることは、その正反対に

「一寸先は出口」
と言えなくもありません。
その確率は五分と五分。
幸福期の一寸先は闇かもしれませんが、困難期の一寸先は「出口」かもしれません。
それは、通常の論理的展開では計り知る事のできないメカニズムが働いての事です。
そうした事はこの世の中、まま起きる可能性がありますので、好調だからと言って油断をしすぎてもいけませんが、かといって過度に悲観して、そんなに簡単に諦める必要は、あまりないような気もしております。
なにせ
「世の中何が起こるかわからない。一寸先は出口」
かもしれませんから。
その確率は丁半の五分、必ず残っているわけですから。
要するに、世の中は危険とチャンスに満ちている、ということでしょう。
侮るなかれ、諦めるなかれ、でしょうか。

2021/4/10

（余程 ノーマル、だと思うけど）

上手くいかなかった時の原因分析とかケーススタディーをする話は結構耳にするのですが、うまく言った場合の原因分析は余りなされていない様です。
「よく分らないが、兎に角うまくいったんだからいいじゃないの」
という訳です。
しかも、こうした傾向はインテリ層の間程多く見られる様な気がします。
上述の話を更に進めて、インテリさんの原因分析として「内心の声」曰く
「インテリジェンスのある自分だからさ」
で、それが更に進むと万能感に浸され、それが永遠に続いていく様な無意識の錯覚に陥ってしまう場合もある様です。
しかし、実のところ「なぜうまくいったのか？」の原因が分らない場合、それは「単なる偶然の産物」と殆ど変わる処がありません。
原因が分らない事には、その再現が難しいか、又は不可能だからです。
それこそ、再現不可能な「一回こっきり」の出来事、まさに「偶然」そのものです。
そもそも現実世界において「一回でうまくいく」事など、まずありません。
大抵の場合、50 回、100 回の失敗や不運は当たり前で、それでも諦めきれず、その先更に進んで、やっとこ初めての幸運がやってくる位が普通です。
なぜなら失敗の 50 回、100 回は「幸運獲得」への助走期間だからです。大きな跳躍には長い助走が必要です。
その助走期間の内に、様々な困難との遭遇を逆に「そのすり抜け方やかわし方、制御術」として身に着るチャンスにする。
そうやっているうちにターゲットのフォーカッシング（狙いの絞り込み）が出来「幸運獲得の確率」が格段に上がります。
そうして成功の後に、再び不運に見舞われても、それ迄に積んだサバイバル訓練の成果で、一度の成功ではない「成功の反復」即ち「存続」が可能になるサスティナブルサイクルに入れる訳です。
しかし原因も分らずに「一回目で上手くいってしまった人」には、もうそんな手間隙のかかる話は「論外」になっています。
そうなると次に「初めての失敗」をした場合、短絡から
「社会の方が馬鹿だ。俺の偉さが分らないだけだ」と逆恨みをしたり
はた又
「そんな筈はない」と混乱に見舞われるか
更には、これ迄とは真逆の心理になって
「もうおしまいだ」

になったりします。
つまり助走の始点にすら立てない訳です。
なので「原因も変わらず初回からうまくいってしまう」のは、世間の常識とは正反対に、その後日談を考えると、実は「大変不幸な事」の様な気もします。
それというのも、世の中の大抵の事柄は「蟻の穴から堤が崩れる」が如く、ほんの小さな「とっかかり」を始めとして「山を動かす」様になる迄には途方もない時間と労力がいるのが普通だからです。
それを「端折ってしまわせる初回からの成功」は、まさに「不運そのもの」としか言いようがない気もします。
そして、その方がニューノーマルを見つけるには、余程ノーマルな考え方、
だと思うのですが、皆さま方はいかがでしょうか？

2021/4/11

（圧倒されたいスケール感、待望巨大欲求）書庫版

飾り棚の上に置いてあった地球儀を仕事机の上に移した後、見るとはなく見ていたら
「地球って、こんなもんだっけ？」
と、ちょっと自分でも意外な気がしました。
いつも目にしている平面の世界地図に比べると、ずっと小さく感じたのです。各大陸の大きさや大国と言われる国々の大きさも。
その後、今度は、無意識にその反対を探すかのように、広大な絵姿が目の前に浮かびました。
北海道積丹半島の最突端、カムイ岬へ隘路を抜けて崖上に出ると、突如、眼前に出現した大パノラマ。
余別の崖上から見た左側男海、右側女海が一挙同時展開する、自分にとっては「前人未踏」の世界。
息をのみ、打ちのめされる程の圧倒感。
この世の果て。何か見てはいけないものを見てしまったような気がしました。
そうして、続けて浮かんだのが、ハバロフスクからモスクワに飛ぶ飛行機の窓から見た地平線が丸く見えるほどの眼下のユーラシア大陸の広大無辺な拡がり。
青いというより黒々と見える大樹海と鈍色に光る大河のうねり。
「国境などどこにもないじゃないか」
と思うと同時に
「この下に今降りる羽目になったら、怖、っ」
という思い。
いずれの話も大学生時代に体験したものでした。

それまでの頭の中の思考サイズを遥かに超え、混乱困惑を招くほどに圧倒凌駕する、そのスケール感。
今思っても鳥肌が立ちます。
ですが、その後、偶然の差配で、意図せずある企業に勤めることになり、金勘定だ、手柄だ、昇給、昇進だのと「うつむいた世界」の中に明け暮れ、結果、心とアタマを病んで端に飛ばされ、飛ばされたことが逆に幸いして、自然治癒したのち、再び戦列に復帰はしたのですが、どうも肌に合わないことがいよいよ明確になり、最後は自主退職して、今の仕事を開業しました。
最後「肌に合わない」と申し上げたのは、前述の「スケール感」だった様です。
今になってみると、ですが。
但し、何も自分自身が「途方もなく大きなスケールの持ち主」で
「そんなスケールの自分には合う筈もなかった」
ということでは無論、全く之なく
「自分を打ちのめしてくれる程のスケール感」が
「それらの世界には感じられなかった」
という事でございます。
それというのも
「前人未踏」「圧倒凌駕」「打ちのめされ恐怖を感じる程の、いっそ人知を寄せ付けない了解不能」なスケール感が自分には「爽快」をもたらす
のです。
それら「目を見張って見上げる世界」に接していると
「実に気分がよく」「愉快になる」
のです。
そうした体質からは、子供の頃、親や祖母が言っていた「起きて半畳、寝て一畳」どころか冒頭の
「地球って、こんなもんだっけ」
というのが、矢張自分なりの実感で、そういうものに今後出くわしたいが為に、儲かりもせず巨大損失ばかりの商売を続けている気がしないでもありません。
（注）写真とは違い、当時自分は海岸伝いに進み、下から岬突端に出ました。

2021/4/11-2

（「蟻の穴」から）

前の記事。
自分を知っている方には、ある程度伝わった様なのですが、初めての方には矢張、何の事やらさっぱり分らなかった様で。
文章力や構成、伝達能力のなさを痛感致します。
そこで、改めて今少し分かり易い様に書いてみたいと思います。
簡単に申し上げますと
「途轍もなくドでかいものに挑みかかってみたい」
という事なのです。
小さいもの（又は物事）の上に君臨して、ふんぞり返ってみても詰まらない。
ここでいう小さいものとは、もちろん自分の感じ方の上での話ですが、譬えて言えば世間ではトンデモナク大きく見られている GAFA+M(google, Apple, FACEBOOK, amazon, Microsoft)は、自分には、そんなに大きく見えないのです。
曰く
「いろいろ言っても、詰まる所、お金の世界の住人の話でしょ」
という様な。
自分は人に動いて戴くのに、札束で横っ面をひっぱたいたり、釣り竿に札束をぶら下げて「お手、お手」ばかりをさせたりする様な遣り方も、それする人間も大嫌いです。
どうせ動いて戴くなら「心の琴線」に触れて、納得づくで自発的に動いて戴ける様な方向（システム作り）を目指したい、と思っております。
無論今現在は、何もできておりませんが、向かいたい方向としては、その方向です。
しかし上述の意見に対して、こういわれるのは既に分かっております。
「そんな絵空事で、お金の力に勝てるものか。お花畑思考もいい加減にしろ。いい歳こいて、阿保だな」
と。
しかし、科学的な思考（方法）を用いれば、あながちあり得ない話でもないのです。
以前お話申上げましたが
「蟻の穴から堤が崩れる」
という古人の教えの応用です。
詰まり、堤というのは膨大な水圧に耐える様に設計されております。堤が相互に支えあい、且つまた水圧が分散される様に設計されております。橋がアーチ状になっているのもこの原理に基づいております。

もし、この相互に支えあい、且つまた力を分散させる礎石（corner stone）の一角に「蟻の穴」が開いたら、支えあう力が一転して相手を押しつぶす力に変わり、あっという間に全壊する事もあり得る訳です。
もちろん、そうする目的は、単なる破壊の為ではなく「創造的破壊」のワン・ステップとして、です。
自分はこの「蟻の穴」当たるのが何を隠そう前述の「金銭（きんせん）」ではない、心の「琴線（きんせん）」だと見立てている訳でございます。
その一点が見つかれば世界はオセロゲームの最終手で、黒が白の駒に全部裏返るが如き展開が起こる可能性もありそうな気がしているのです。
無論自分は、その案を提示したいだけで、その胴元として君臨しよう等とは全く思っておりません。そういう事が「大嫌い」なので。
ただその一点は、自分の目にはどう見ても「アブノーマル」にしか見えない今の状態を「ノーマル」方向に流れを変える為だけに見つけ
「無理強いはしないけど、よかったら試してみてね」
と後代に言い残してあの世に旅立ちたいなぁと思って居る次第でございます。

2021/4/12

（scale（尺度））

再びですが、前の記事で、もし飛行機の窓から眼下に見える黒々とした樹海や鈍色に光る大河がうねるユーラシア大陸の只中に舞い降りる羽目になったら「怖い」と書きました。
しかし、それは文明の利器である飛行機から見て、樹海がどの位拡がっているのか？蛇行する大河がどれ位続いているのか、ある程度分かっていてすら、それ程の恐怖を感じるのですから、そのような利器のなかった先人たちは旅立ちに当って、それを遥かに凌ぐ恐怖を感じた事でしょう。
例えば、積丹半島の最突端、カムイ岬の先に拡がる大海原の向こうがどうなっているのか？
でも、大嵐にあって海の藻屑となってしまうかもしれない、とか
行けども、行けども砂の嵐が吹きすさぶ炎天下のタクラマカン砂漠の向こうにはどのような国があるのだろうか？
だが、オアシスに辿り着けなかったら飢えと渇きでミイラになってしまうかもしれない、とか
大樹海を抜け、湿地帯が拡がり、更には凍土となる、歩を進める毎に生活に適さない風景が広がるばかりのシベリアに分け入り、それでもその先にはどんな世界が待っているのか？
しかし、その前に雪に埋もれて凍え死にしてしまうかもしれない、とか。
ですが、我々の先人達は、その恐怖より「その先に何があるのか？」「その先はどうなっているのか？」
を「見てみたい」「知りたい」という好奇心や興味の誘惑に勝てずに、未知の世界に踏み出していった。
いや気が付いたら旅仕度を終え、既に一歩踏み出していた、のかもしれません。
無論、そもそもの動機は「お金儲け」「新たな交易」「新地開拓」「国の安全保障と領土拡大」だったのかもしれませんが、それにしてもこれら先人達のバイタリティには目を見張るものがあります。
そうして、その結果として、積丹半島の先ではありませんでしたが、稚内の先に間宮林蔵はカムチャッカ半島を見出し、隊商の列は、方やアラブ・ヨーロッパ世界を、片や支那（チャイナ）や日本（ジパング）に至り、シシマリョフ大佐は湿原を超えて、ナホトカに着いた訳です。
そこにどんな住民が住んでいるのか？もわからないまま、無論言葉も通じないままに踏み込んでいった訳です。
殺されるかもしれないのに。
そう思うと無名の先人達の計り知れない（out of measurable scale）開拓者魂に対して深く頭が下がります。

それに比べたら、転勤や転職、海外赴任や海外留学などは「旅」ではなく「旅行」
「大自然」ではなく「箱庭」の様に思えなくもありません。
自分もこの歳に至る迄の大半の時期において、散々な目に遭ってはきましたが、それすらも余りたいした事ではない様な気もします。
自分のものの見方の尺度をどのレベルに置くか？
英語の scale（スケール）には尺度という意味もありますので、言い換えれば
「自分の物の見方のスケールをどこに置くか」
という事になります。
それが、自分の言う処の
「スケール感」
で、御座います。
scale のお話は以上でござる。

2021/4/13

（ちょっとした悩み事）

「海のものとも山のものともつかない」
どういう訳か、ふと、そんな言葉が頭の中を過（よぎ）りました。
要するに、得体が知れず正体不明で訳の分からない代物（しろもの）の事です。
思うに、この表現の発祥は、大昔まだ物々交換だった頃か、今ほど情報が発達していなかった時代に、交換場所や市場に持って来られた産物が、海から来た幸なのか、山から来た幸なのか判然としない時代に生まれたことに由来するのではないかと推察しております。
ところが現代の我が国では、そういったものは皆無と言っていいくらいで、反対に食品衛生表示法に基づいて、何が何ｇ、何は入っているが何は入っていないと、たったあれだけのスペースによくもまぁこれだけ事細かに書けるものだと驚いてしまうほど、てんこ盛りの情報記載がなされております。中にはそれを作った人の顔写真まで付いて。
それらの表示を見ていると、
「いったい自分は今から何を食おうとしているんだっけ？」
と混乱が生じてしまう時すらあります。
自分のお店の食材に関しては絶対そんなことはありませんが、自分の私的生活においては、消費期限はある程度気にはするが、賞味期限に至っては「型落ちによる安さ優先」で、むしろそれを狙って買っているほどです。
私的生活においては、物にもよりますが、消費期限すら気にしないで買うものもあります。主に干物（かんぶつ）系やル―などの火を通せばどうっていうことなさそうなものですが。というのも独り暮らしの自分みたいな爺さんが一匹、毒気に当てられて死のうが死ぬまいが、世の大勢には全く影響なさそうだし、第一勿体ないからです。折角この世に生を受けた食べ物が、このまま葬り去られるのも可哀想だし。
それはさておき、こういった表示法や賞味、消費期限の記載は、安全安心、健康志向に基づくものではありますが、その元は単位面積当りの農産物の収穫量を増やす為に除草剤や早成剤等の農薬を矢鱈と使ってきた弊害に対する save and guard として生まれたものと理解をしております。
では、なぜその様なことが起きたのか？
一つには農家の実入りという経済上の問題もありましょうが、それ以前に地球規模で人口が爆発的に増え、それらの食い扶持を賄うには、自然栽培農法が供する量だけでは全く足りなくなった事が第一の原因であろうと思っております。
要するに、早く、沢山、何回も作らなくてはならなくなった。
そのため、農薬以外にも、耕作地を広げる事が求められ、耕作地にどんどん変えていくために逆比例して、森林をどんどん伐採した事が遠因となり、それが CO2 の吸収量を減らし、現代の温暖化傾向の一因ともなっている様な気もします。

そうやって辿っていくと、事の始まりは「人口の爆発的急増」にある様な気も致しますが、無論、だからと言って人道上、人の数を強制的に減らす訳にも参りませんので、どうしたものかと頭を悩ませておりまする。

2021/4/1

（かんら、からから。呵々大笑）

「荒海や佐渡に横とぅ天の川」
「静けさや岩に染み入る蝉の声」
「夏草や兵どもが夢の跡」
いずれも芭蕉の句です。
たった十七文字。
「すごい」としか言いようがありません。
唯々「すごい」
全て初めの句が「や」で終わっている。
まず、どんと言葉を投げつけ、一気に空間、視覚転移を行う。
続く十二文字で、眼前に信じられないような壮大且つ静謐な世界を現出させる。
ひとはどこにも出てきません。出てきませんが、何か心にぐっと迫ってくる深い「余韻」が滲みわたり、風の咆哮のような唸りが耳元で渦巻く気がします。
それが逆に、たったひとり世界に対峙した「自分（ひと）」と、その孤独を感じさせます。
「この絵を見よ。この絵を見て何を思うか？」
それは丁度、学生時代にカムイ岬の崖上に立って、突如眼前に広がった大パノラマを前にして身がすくんだ経験や飛行機の窓から地平線が丸みを帯びる程に悠々と広がったユーラシア大陸の樹海や鈍色に蛇行する大河の流れを見たときに感じた何かに通じるもの「でも」あります。
しかも近代詩歌（しいか）のようなひねりや諧謔が微塵もなく、正々堂々としていて、一切の解説なしに、誰が読んでも直ぐにわかる平易さ。
「いゃぁ、ただただスゴイ」
いっそ、気持ちがいいくらい、完膚無き迄、木っ端微塵に打ち砕かれました。
「かんら、からから。呵々大笑」
気分爽快、空気良し。

2021/4/16

（毎月発刊「ニューノーマル探索サバイバル日記」オマケの掌編・短編小説に替えて、４月の巻から「オマケの英語教室」を始めます）

「辞書を置かない英語教室」
というのが、当店併設「すすき野留学」開業当初のコンセプトでした。
意味は、
「既にみなさん、十分な単語数を頭の中に持っていらっしゃる。アジアの諸外国の人に比べても語彙数は格段に多い。場合によっては「えっ、なんでそんな単語まで知っているの？」というような珍しい言葉まで知っていることもままある。例えば ultra（ウルトラ）「超」の意味ですが、外国の人にはあまり耳慣れないようです。まぁ、幾分大げさなジェスチャーを添えて、語気を強めて great というくらいが、せいぜいでしょうか。
なので、わざわざ新たに単語を追加して覚える必要はそれほどなく、今知っている単語を使いまわしたり、組み合わせた合わせ技で凌いだりした方が、時間や手間の面で、そうして精神的負担も少なく、遥かに効率的、効果的なので、そういうコンセプトにしました。
いや、むしろ新たに単語を覚えることの方が、返って上達の妨げになる場合もあるからです。
折角持っているお宝を持ち腐れにすることなく、活かして楽しむ。
楽しむというのは、覚えるのではなく（これって苦痛ですよね）考え出して使う（発見があって面白いと思います）ことの喜びから来ています。
例えば漢字では、結構その場で即興の熟語を作ることがありますでしょう？
一例をあげれば「始季（しき）」
こう書けば、そんな語句はなくても我々は、何かが始まる季節なのだろう。例えば今なら 4 月の入学入社の季節。と想像がつくわけです。
英語も同様で、動詞と前置詞をその場で組み合わせることで造語が出来てしまうのです。
例えば、kick out で out の「外」のイメージから「蹴りだす」という意味に使えますし、kick away なら away の「次第に離れていく」イメージから「遠くの方に蹴っ飛ばす」という意味にも使えます。いちいち逐一対訳で覚える必要はないのです。その場で考えて組み合わせればいいのです。
上述のように、前置詞や動詞の基本的なイメージさえ押さえておけば直ぐにできてしまうのです。
いやむしろ、英語は「その場その場で生まれる造語の集まり」と言ってもいいかもしれません。

だからますます、辞書はいらない。
なので、辞書を置かない英語教室と名付けました。
ご興味のある方はどうぞお読みくださいませ。４月の巻からの「オマケ」シリーズを。

2021/3/23-2

（（試作）「もの考え様」は結構怖い）

「正しいものには矛盾がない。だから統一しなさい。出来ないものは排斥しなさい」
という考え方もあれば
「そもそもが、矛盾だらけなのだ。矛盾したものが平気で併存することはよくあることだ。いちいち目くじらを立てていたらきりがない。何が正しいか、よりも何が実態、事実か？を捉えなさい」
という意見もあります。
この一つだけをとっても、その後の生き方が全然違ってきます。
こういった場合以下の言葉は余り使われませんが、これも
「ものは考え様」
の、紛うことなき一例でしょう。
そして、この「考え様」によって、同じ世界が全く違って見えてくるのですから、結構怖いものがあります。
これ以上考えると、もっと怖くなりそうなので、今日はこの辺で止めておきます。

二〇二一年五月の巻

2021/4/19-2

（もう止めましょうよ、それ）前記事書き直し版

「物言えば唇寒し秋の風」
という訳で、余計なことは言わないでおこう。
となり、余計な事どころか、必要なことまで言わなくなり、果ては
「見ざる、言わざる、聞かざる」
を決め込み、そのくせ反対に
「何も見ないし、言わないし、聞かないことにしている」けれど、そこはそれ、要するに何もこちらからは発信しないけれど「以心伝心」で、あなた方は私の胸の内をちゃんとわかっていて、然るべき、よね（だろ）」
になっていませんでしょうか。
はたまた、
「出る釘は打たれる」
という訳で、
「正しいか正しくないか、ではなく、みんなと同じかどうか？」
が最優先されていませんでしょうか？
何よりも怖いのが、目立って後ろ指をさされ、仲間外れになる事。
それで、横一線の横並び。ちょっとの差異で、袋叩きの超強力同調圧力をかけていませんでしょうか？或いはかけられておりませんでしょうか？
そうして本日最後は
「赤ちゃんは、王様」
という訳で、
生まれた時が最高得点。
後は年を追うごとにどんどん失点、劣化していく、という考え方。
どこにも経験の年輪とか、年を経て熟す、という価値観がまるで失われてしまっている。
その結果、若い人は
「大人になりたくない」
になり、年配者は
「若ぶる」か「若い人のご機嫌伺をし、人気取りに励む」
ようになってしまった。
そうしてお互い、

「鵜の目鷹の目」
で、あたりの様子を探り、恐る恐る
「息を殺して」気配を悟られぬよう「抜き足差し足忍び足」で暮らす
「相互監視岩盤社会」
になってしまっているのが、コロナ禍以前から既にあった今の我が国の実態。
敵は城外に在らず。城内に密偵冠者として、在り。
何よりも怖いのは、今般のコロナより、歴代以前から厳然として在る「我が同朋の目線」こそ。
これではいくら何でも、疲れますでしょう（ずっと疲れていたでしょう）
でも、もう止めませんか、それ。
「どうせ、人生一回限り。それをこんなことに使っていたら、実に勿体ない」
コロナ禍を機に、もう止めましょうよ、それ。

2021/4/20

（悪いインフレ圧力が始まった、みたい）

いよいよインフレ圧力が高まってきたようです。
玉ねぎ、ジャガイモ、サラダオイル、鶏肉等々の食材がいっぺんに上がり始めた。
水道料金も12%上がる。電気料金も上がっている。
全部が全部同じ原因ではないにせよ、今コロナ禍で外出が制限され、農作物の生産地で労働力が集まらず刈り入れが出来なかったり、物流網が寸断されたりで、需給バランスが需要過多というより供給不足で物価が上がり始めているのだと思います。
かてて加えて今後予測される気候変動や不順により、さらに拍車がかかることも予測されます。
一方では、同じくコロナ禍で、雇用環境が悪化し、大手企業ですら賃上げよりも雇用維持に傾いている関係で、賃金の上昇は見込めそうもないので、下手をすると不況下乃至は景気悪化の中での物価上昇、より厳密に言えば賃金上昇のないままでの、物価上昇という悪いインフレ、別名（疑似）スタグフレーションに突入する可能性が大幅に高まっている気がします。
翻って、当店を取り巻く個別の事情としては、コロナ禍でのお客様生活応援という事で、食材の質を下げることなく、量も減らさずに「ナン付きテイクアウトセット」550円をワンコイン500円に、宅配料金一回260円を同じくワンコインの100円にしているために、売り上げ維持には貢献したものの、その陰では食材の質量ともに下げないことによるコスト削減効果がゼロに等しいので、損益が大幅に悪化しており、且つまた当店は社是として外国人従業員の待遇を日本人並みにしていることもあって、既に入国許可が下り、コロナ禍で入国待機中の従業員の子供たちが本国からやってくれば、扶養養育費を月々4名分、最低でも5万円増額支給もしなくてはならないので、更に経営が苦しくなることが予想されます。
当店の場合は、価格を下げているのでインフレよりはデフレ基調ですし、従業員の賃金は、むしろ上げることにしているので、スタグフレーションも起こしてはいませんが、これ以上の物価上昇インフレ圧力には到底耐えられそうにもなく、ギリギリでも「お客様生活応援価格」を、まだコロナ禍進行中ではありますが、やむを得ず元の価格に戻さざるを得ないかもしれない、と思い始めております。
しかし、どんな理由にせよ「値上げ」というのは、下手をすると商売そのものの「命取り」になる場合もあるわけで、ここは一体どうしたものかと、日々思案に暮れております。
そんな訳で、本日も外は夜が白々と明け始めております。今週も又、自分の「休めない定休日」が終わってしまいました。
（追記）
従業員は毎週、ちゃんと休んでおります。

2021/4/21

（「不健康」の春）

世の中は春。
気分が、ではなくて、季節が。
明るい陽光。ふんわりと暖かい微風、ややひんやりとしたそよ風が入れ代わり立ち代わり。
色とりどりの花が咲いて、小鳥が空に舞う。
もし、街の通りに人が歩いていなければ、精気旺溢して、躍動が息吹き始める春なのですが、どうも歩いている人々に元気がない。元気がないというより
「とても不健康」に見える。
「何故、そう思うの？コロナ禍のせい？コロナ禍の巣ごもりのせい？」
「…」
返答に窮しました。理由は定かではないのですが、自分には間違いなく「そう見える」のです。
そもそも「巣ごもり」なら、家の中での話です。屋外の話ではない。
屋内から逃れて、つかの間にせよ屋外に出ているのなら、もう少し明るい顔をしていてもよさそうだし、今少し面を上げて、胸を張ってもよさそうなものなのに、殆どの人がそういう姿で歩いてはいない。
マスクをしている？
これは今日（きょうび）致し方ないでしょう。
キャップ帽をかぶって、サングラスを掛けている？
これも日差しが強くなってきた事を考えれば、納得がいきます。
ならば何故、そう見えるのか？
思い当たったのは「スマホながら見、歩き」
うつむいている。
辺りに何も注意を払っていない。
周りと隔絶している。
なので、春の景色も、人の様子も目にも心にも届いていない。
「孤独」が歩いているように見える。
何かから「逃避」しているようも見える。
何かから「身を隠して」いるようにも見えなくはない。
その中で、反対に匿名空間の中で「天上天下唯我独尊の仕置き人か帝王」になっているようにも見える。
キャプ帽を被って、サングラスをして、マスクもしたうえで、うつむいてスマホに見入っている、その姿と行動パターンは、何となく「闇の世界の住人」を想起させます。

お天道様と人目を避け、こっそりと「怪しい任務」を遂行する「スパイ」か「ヒットマン」を。
スパイかヒットマンが健康的に見える社会では困るので、恐らく自分は、こういった姿に「不健康さ」を感じているのだと思っております。
不健康という言葉を別の言葉で表すと
日照不足からくる
「退色」「縮萎（ちじみなえ）」「血巡（ちめぐり）不良」「滞留」「淀み」「澱（おり）」
というイメージでしょうか。
そうして最後は
「張りのない黄ばんだ肌」
のイメージ。
因みに、かく申し上げております自分は、身体的、生活的には不健康の権化みたいなものです。
暴飲、暴食、不規則な生活、ワーカホリック、呼吸器系、骨系、眼球系他、各種疾患にまみれております。
自分の身体に積みあがった積年の不健康の重荷度合いがわかっているので、五体には、自分が日々苦しめられている項に関しては、特に問題なさそうなのに、とても不健康に見えるひとさまの様子が過度に気になっているのかもしれません。
なので、そんな自分の目から見ると、他人事ながら、実に
「もったいない」
と思ってしまうのです。

2021/4/22

（新解釈「男子厨房に入る、べからず」）

「秋茄子は嫁に食わすな」
という格言がありますが、之には
「秋茄子等という旨いものを、目下の嫁等には食わせるな」という意味の意地悪説と
「秋茄子は体を冷やすから、若い女人、特に妊婦には毒になるので食べさせない方がいい」
という相手の身体心配説の正反対の解釈があるそうです。
だからという訳でもないのですが、ふと
「男子厨房に入る、べからず」
という格言を思い出して、通説では
「おさんどん（料理）は女のするものだ。男のすることではない」
とか
「男子たるもの、目下の嫁や使用人が入る様な卑しい場所に立ち入るな」
という
「男尊女卑の封建体制ど真ん中」の象徴の様に捉えられ、識者からは目の敵の様な存在の格言なのですが、最近よく言われる様になった「秋茄子は嫁に食わすな」の二番目の解釈、即ち意地悪ではなく善意の気遣いの様な解釈があるのではないかと思い出しました。
それというのも「男のおばさん」である自分は、後半の「おばさん」部分が前半の「男」の部分に勝って「台所（厨房）に入るのが大好き」だからです。
どの位好きかというと、仕事場から帰ってくると、まず向かう先が台所。
台所の冷蔵庫の前に行って扉を開け、お腹がすいている場合は直ぐに冷蔵庫から何かを取り出して料理を始め、そうでもない場合は、何を作ろうかな？と暫く庫内の在庫をチェックして、献立を考えるというのが日課だからです。
そんな自分が思うのは、
「男子が厨房に入ると面白くて仕方なくなるから、嫁さんや使用人（勿論当家にはそんな上等なものはおりませんが）の仕事を奪ってしまい却ってはた迷惑になる」
というのが本当の意味で、虜になってしまう事への戒めの格言なのではないか？と思った次第。
無論、嫁さんが消えてしまった独り者の自分には、そのての人が他にはいないので、何でもかんでも自分でせざるを得ない事情があるにはあるのですが、自分としては毎日思いついたアイデアの実験、し放題、自分の好き勝手のし放題ができる台所が大好きなので、却って気を使わない分、そして又この楽しみを独り占めできる分、この生活が楽しくて仕方がないのです。
英語でいうと「ハッピー」なのです。

まぁ、これは余りに個人的な話なので真偽の程は定かではありませんが、少なくも上述の文言の中の「却ってはた迷惑」という言に着目すれば
「男が厨房に入ると、思い付きの我流改善から、あれはこうしろ、これはこうだろ、とあれこれ引っ掻き回し、女房殿や使用人にとっては、うるさくて仕方がない上、誠に失礼ながら却って邪魔にもなる」ので
「男子厨房に入る、べからず」
即ち、
「餅は餅屋、余計な口出しをせず、相手に任せよ。それがお互い上手くいくコツだ」
という合理がこの格言の本意なのではないかと推察しております。
そもそもいくら封建時代とはいえ、通説の様なレベル内容を、わざわざ格言にするとも思えませんので。

2021/4/24

（基本中の「基」）

モバイルパソコン。
これで、評価されるのは薄さ、軽さ、CPU の速度やバッテリーの持ち時間等々ですが、それら売り文句には全く遡上しない点に足を掬われました。
キーボードとタッチパッド。
文字、動作指示入力系です。
まずキーボードに文字を打込んでも文字が画面上に現れるのに２秒程掛る様なりました。
タッチパッドの方は、コピペの為の文章範囲選択が思う様に拾えなかったり、選択した後マウスの右クリック動作をしてコピーしようとすると、コピーしたい選択範囲そのものが解除されてしまったりしました。
しかも毎回動作加圧のレベルが変わっている様で、ある時は強く押し込まないとダメ、ある時は強く押し込むと、押し込んだ分の時間が、命令実行、解除、又実行とリッサイクリック指示にカウントされているのか、タイミングを間違えると「意図した動作（意思）」とは正反対の結果しか出てこないという状態で四苦八苦しました。
それで思ったのですが、普段出来て当たり前、あって当たり前の、気にも留めていない物が動かなかったり、無かったりした場合、何が起こるのか？どうすれば良いのか？
それを常に想定するのが「危機管理」なのではないか、な？と。
今回の場合は PC でしたが、例えばあって当たり前で、普段気にも留めていない空気や水や電気が無くなったり、入手困難になったりしたらどうするか？という事です。
これは風水害や地震の場合に既にあった事です。
いざとなれば買い貯めた冷凍食品をチンすればいい、と思っていて、電気が来ずに冷蔵庫は温蔵庫になってしまっていたとか、チンするレンジも電気が来ずに只の箱になってしまっていた。水も来ず、トイレも風呂も、鍋と薪でご飯も炊けなかった、とか。
なので、今の我々の生活は一体何を前提に成り立っているのか？今一度それを考え、それが入手困難になった場合の行動計画、代替品調達計画を立てておくのが「危機管理」ではないのかな、とも。
要するに大切なのは目を引く上物の優劣や数ではなく、基底部に在る基本の「基」の字の部分。
今コロナ渦で言えば意外に思われるかもしれませんが「コミュニケーション」
遠隔、対面回避、社会的距離の確保による「コミュニケーションの疎遠化、希薄化」
或いは又、と申しますか、そもそもが、と申しますか、コロナとは取引する事も、説得する事も、勿論会話する事すら出来ません。
「意思疎通手段」や「意思疎通ルート」が全くない「コミュニケーションレス」な相手だからです。

今コロナで図らずも思い知らされたのは「相手とのコミュニケーション（意思疎通）の有無」と、上述由来の「ストレスの有無」でした。
それが基本中の「基」の字でした。
（追記）
代替品不具合も含め大変でしたが、修理後のこのPCは「ストレス・レス」で快適です。
そして本日、コロナ渦で帰国できぬまま、師匠のネパールボスの母上が遠い本国で他界されました。
祈、冥福。

2021/4/25-2

（「異常」も何回か続けば「日常」はたまた「正常」）

本日は、とりとめも無く。
異常なことでも、それが何回か続くと日常になってしまうようです。
三度目の緊急事態宣言が発出されても、本日日曜日の渋谷の人出は余り変わらなかったようで。
話は変わって、語学、特に英語に関して、
中高時代は「文法」が出来ていれば良かった。
大学時代は、
ロシア語なら、インラン・ドスケベビッチ・ゼツリンコフ
ドイツ語なら、イッヒ・フンバルト・デル・ウンチ
イタリア語なら、カンターレ・マンジョーレ・アモーレ（歌って、食べて、愛して）
中国語なら、マーマ・マー・マ（お母さんが馬を馬鹿にした）
位知っていればなんとかなった。
会社員時代は、さすがに中高の「文法」がメインでしたが、
現在の当店では「正しい文法」等、物の見事に役立ちません。
初めは、お互いネパール語、日本語での話は無理な事が分っていたので、せめて英語で意思疎通を図ろうと「正しい英語」を成る丈使うようにしていたのですが、暫くするとそれが全くの無駄、お門違いである事が判明しました。
何しろ、テイクアウトは Tek out。それを正しく Take out と書いてみせ、訂正しようとすると「タケ・アウト？ナニ？」というご質問。
「こんばんは」は「Kanwanba」と書いてメールが来るし「I already went for shopping」は「買い物に行く」「I`ll go for shopping」も「買い物に行く」とおっしゃるし。
あっ、こりゃ無理だわ。
正しい文法は一旦脇に置こう。
と即座に察して方向転換。
今では表情とジェスチャーと声の大小強弱及び黒板への図解板書主体に事を進めております。
いってみれば、ネパール語でもなく日本語でもなく、英語でもない「ナマステ エブリバディ語」とでも申しましょうか。
だらか、というわけでもないのですが、大方、外国の方と打ち解けるには、男ならまずは艶話（他の字を当てると SNS の審査ではねられますので）と冗談。女性なら、さすがに初っ鼻から艶話は出来ないので、まずは冗談主体からが良いことが分ってきました。
それを、いきなり正しい文法で「How old are you?」とか「Where do you live?」とか「What`s your hobby?」

等と訊いたりしたら、
「From which nation`s spy？are you?」（あんた、どの国のスパイ？）
と逆に思われてしまいます。
此処で又飛躍ですが、そもそも、外国の方にとって相手が英語を喋るというのは、我々が思っている様なステータスでもインテリジェンスでも「知性と教養溢れる」博学多才の師でも何でもなく、単に「あぁよかった、英語通じて助かるわ」位の話なのです。
それをどう間違ったのか、我が国ではとんでもなく厳かで重々しいものになってしまっている。
之では、おいそれと語学、なかんずく英語に手など出せないのも致し方ないでしょう。
しかし、この有り様は世界から見れば、明らかに「異常」
それが明治以降１５０年近くも繰り返されれば、我が国では（或いは我が国でのみ）「日常」はたまた「正常」となってしまうのも、事の道理といえなくもありません。

2021/4/27

（そのままでいいの、かな？）

矛盾
「俺の盾が世界で一番強い盾だ。どんな矛でも防ぐ」
方や
「己の矛が世界で一番強い矛だ。どんな盾でも突き通す」
と、辻褄が合わない。
この話が元で「矛盾」という言葉が生れました。
最近では、マイナンバーカードの普及により、データが一元化されれば、今迄バラバラだった社会、労働保険、税金（経費及び事業所得税）全てが一通し、今迄隠しおおせていた矛盾が白日の下に曝け出される事になります。
なので、個々の手続きや報告内容の縦横斜めに事実の矛盾がないよう、気を使っております。
簡単に言えば「嘘があってはならぬ。在っても直ぐにばれる」
イヤもうAIを使う迄もなく、エクセルのフィルタリング機能で「アンマッチ検索」をするだけで既にバレバレなのですが、単に自分の様な零細企業にまで回す手がないだけの「お目こぼし猶予」でしかありません。
一方、矛盾は矛盾であって良いという考え方もあります。
矛盾ゼロの一辺倒、金太郎飴が「退屈」と、却って逆の「偏り」を生むからです。
例えば、身体の健康面を考えれば「油物ゼロ」
ですが、こればかりだと活力が生まれず、我慢というストレスが溜まり、むしろ心の不健康を招きます。
それで心の健康を考えれば「油物はOK」になります。
ですが、之は「矛盾」
では、どうするかと言えば対立概念ではなく、包含概念を持ち込む事を思いつく訳です。
「成る丈油物はなし。でも、時には油物もOK」
という具合です。
つまり
「健康は身体だけではなく、心身の健康バランスが大切です」
と言う考えにたどり着く訳。
そうして前段の話と、後段のこの話にも包含関係を用いると
「矛盾があってはならない。何故なら不正の温床になるから。しかし時には矛盾があるもよし。何故なら、矛盾を許容しないと却って流動性を失い硬直化するから」
の両者併存、共存、両存関係。

ドイツ哲学の雄、ヘーゲルの弁証法で言えば、定位、反定位、そして止揚（レベル・リフトアップ）
之を更に分り易く申せば
「弊害にしか見えない「矛盾」だが、世の中に無用な物は何一つない。皆何かの役に立つ。無用に見える矛盾が新たな視点価値を産むきっかけになる事もある」
という具合に。
「いずれ物は考え様。取り方、捉え方次第。絶望する勿れ。諦める勿れ。必ず道はある」
と。
しかし一方でこの言は、それこそ扱い方次第で「白を黒に言いくるめる」道具にもなりかねません。
事実、「それ」即ち
「人間は事実（真実）に則する生き物ではなく、心理（取り様、捉え様）に則する生き物である」事を傍証する事実が多々ありました。
「事実の生き物」ではなく「心理の生き物」
同じ事が、その時々の「心理のプリズム作用＝気分」で正反対に思えてしまう。
それが度々、歴史的災禍を産んできた。
しかし、良かれ悪しかれ、この「気分の有無」こそが、人間と他の生物を決定的に分けている。
けど、今コロナ渦
「そのままでいいの、かな？」

2021/4/29

本日より GW 感染拡大歯止め掛らず（掛らぬまま）

（「初動の誤り」その責任は自分にもあった）

「平和ぼけ」

「木を見て森を見ず」

「二兎を追う者は一兎をも得ず」

「議論をしている時間が長すぎた」

「事件は会議室で起こっているんじゃない。現場で起こっているんだ」

「犯人捜しは、後にしろ。まず、目の前の、事を片付けろ」

ですが、時既におそし。全ては手遅れになった感があります（本日、朝時点での感想）

我々は、長い間の「安心・安全・お手軽・簡単・便利生活」を過ごす中で「危機とは何なのか」が全く分らなくなっていたような気がします。

危機とはコミュニケーション不能な相手の突然の襲来です。

国も法も善意も嘆願も祈念も、その効力がまるで通じない相手の突然の襲来ではないでしょうか。

「自然災害」「天候異常」「コロナ渦」

相手が会談のテーブルに着くことは絶対にないのです。

それを世界も国も我々も取り違えた。

完全な「初動（認識）の誤り」

「その責任は、自分にもあった」

それが真実のようです。

2021/4/29-2

（AI に関する譬え話）

以下は譬え話です。
厳密な論理展開に、必ずしもなっているとはもうせません。
「AI（からの追尾、呪縛）に勝つにはどうしたらいいか？」
答えは
「ミスを犯すこと」
簡単に言うと（間違いだらけの人間の特性を十二分に活かして）「人間らしく振る舞うこと」
かもしれません。
何故そう思ったのか？
「コロナ変異ウィルス」の出現からです。
変異ウィルス出現の原因は、意図せず偶然に起きた遺伝子の「コピーミス」だそうで。
それが人間サイドの追跡や対応を極めて困難にしています。
だとしたら、AI に勝つには（或いは煙に巻くには）、より正しく精度の高い思考、論理、予測展開で相手を凌駕しようとする「背伸び比べの仕合っこ」方向とは正反対の、「余りにも人間的な、余りにも人間的である」不用意な「伝達ミス」「判断ミス」「タイミングミス」「思い違い」「勘違い」を意図せず偶（たま）に、で且つランダムに「しでかす（やらかす）」ことが、正しく、効率的なことしか考えられない（少なくとも現時点では、ですが）AI にとって、却って混乱の元になり、人間の追尾をしにくくさせる様に思われます。
いずれ AI との「正確さ」比べでは、人間は負けるに決まっています。
なので、人間が得意とする（乃至はしでかしやすい）土俵に持ち込むことが肝要に思われます。
その土俵が、何を隠そう
「人間らしさ」と「人間臭さ」
ではないかな？と。
この人間らしさと人間臭さは、自分が自分本来の特性や特質に素直になればなるほど、効力を発揮します。
但し「間違えてはいけない」ことは「自分の特性や特質」に素直になるのであって、自分のワガママ勝手である「自分の都合」にではないこと、だけは、よくわきまえて置くことが肝心でしょう。
それさえ混同しなければ「自分の土俵に相手を誘い込む」事が AI に対する、現時点での「勝利の方程式」のような気が致しております。

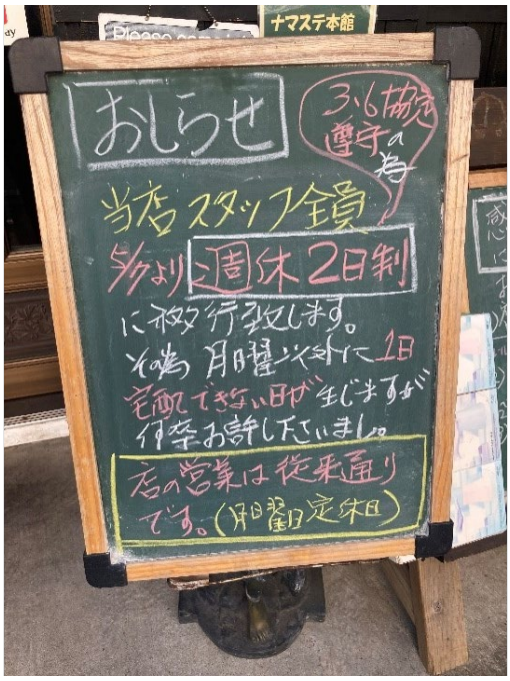
2021/4/29-3

(Which will you take?)

「やったぁ、オリンピックの開催地になったぁ！！」
と大喜びしたのが、数年前。
「日々努力してきたオリンピック候補選手が可哀想。なんとか開催したいものだ」
といっていたのが１年前。
「なんで、そうまでして、オリンピックをやらなくちゃならないんだ？」
というのが今。
別にそうコロコロ変わったからと言って、誰かを責めたり嫌みを言ったりするつもりは毛頭ありません。
ここで申し上げたいのは、時や世の流れというものは、変転極まりないという事以上に、１年前の過程を一旦中抜きにして、数年前と現在の対比から
「最高だと思っていたときが、実は、何を隠そう、地獄の道への一里塚だった」
という可能性もあると言うことです。
ですが、反対にまた
「これ以上の地獄は無いと思っている今が、実は未来から見ると極楽への道の一里塚」
という事も、可能性としては、ない訳ではないという事です。
無論、今が地獄で未来も地獄という可能性は、確率としては５０％ありますが、極楽という可能性も５０％残っているわけです。
さて、このお話を聞いて、前段の部分のみが印象に残れば「世の運びというものは、人知では実に計り知ることの出来ないものだ」と「無常諦観」をきめこむでしょうし、
後段の話の方が印象に残れば
「諦めるのは未だ早い。この先チャンスがない訳でもなさそうだ」
という「無常（固定された「常」などありはしないのだから、逆に）楽観」の気持ちになり得る事もあります。
さて、皆様方としては、どちらのお立場でしょう？
或いは、どちらをお取りになりますでしょうか？
オリンピックでの話ではありませんが、自分の現下の立場状況からすれ、おっぽり出したいのも山々なのですが、自分の好みとしては、後者に傾いております。

2021/5/1

（一巻の終わり？）前記事改題 書庫版



「働き方改革」による新しい「36(さぶろく)協定」（労働基準法第 36 条：法定労働時間外の残業と休日出勤に関する法律）に則り、弊社も 5 月 7 日（給料日）から、外国人従業員の休日を現行の週休 1 日から 2 日に増やすことに致しました。総残業時間抑制の為です。
しかし給料は減額致しません。飲食業である当店は、お店の定休日を 2 日も取れませんので、むしろ時給当たり可成りの増額になります。
定休日は週一日のままで、従業員の休暇を週二回にしますと、現在の定休日以外にもう一日、宅配が出来なくなる日が出来ます（従業員は二人しか居ないので、宅配のローテーションが組めなくなるからです）
コロナ渦での外出自粛で、現在当店の主力はテイクアウトと宅配なのですが、その一翼を担う宅配の実稼働日が 1 日減る事は、それ以上にお客様の心理として「配達できない日が、定休日以外もあるのは、使えないお店になっちゃうわよね」というのが在り、気がつくと「客離れ」が起きていそうで怖いのですが致し方在りません。
当然の話ですが、ローテーションでスタッフが一人だけになる日が 2 日出来るので、2 日分のパートも雇わなくてはならなくなります。
それ以外にも、従業員の子供達の本国からの引受けや、新しい従業員の子弟が未だ学生の身分である等で養育費の大幅増加もしなくてはならず、全部併せると、毎月の人件費増分だけでも二十万円を超えてしまいます。

大企業は社員数が多いので、ローテーションも容易でしょうし、福利厚生費用の後ろ盾資金も潤沢でしょうが、手前共の様な社員２人の処は、その儘ではローテーションすら組み様がありません。
なので、新たに雇わざるを得ません。
しかし当社は「人に関わる事を第一優先」にしておりますので、当然解雇はなしとしても、給与カットすら手を付ける訳にはいきません。
それを知っている従業員達も「今、そんな事をして会社、大丈夫なのか」と逆に心配顔です。
確かに今コロナ渦で非常に厳しい処にもってきて、このハードルは実に高いです。
世の通念では「雇用主」は強者で「被雇用者」は弱者という事になっております。
大企業はそうなのかもしれませんが、雇用主全部が全部その図式に当て嵌まるとは限りません。
むしろ「零細企業または商店」では「雇用主」の方が弱い立場である場合も多いのです。
はっきり言って現下、雇用主の自分は「前門の虎、後門の狼」の間に挟まって、進むに進めず、引くに引けないまま「茹でガエル」状態になっております。
更に食材費、維持費等当店を取巻く諸物価もじんわり上がってきております。
コロナ渦二年目の４月、新会計年度になってから急に逆風が強さを増してきました。
これ迄、難処を何とかかとか切抜けて参りましたが、今回ばかりは、本当に一巻の終わりの様な。
この先未だ道があるのか、それともここ迄なのか？
今の自分には、皆目見当がつきません。

2021/5/1-2

（振り子）

「同じじゃなきゃぁ、いけない」
と思うからテレワークが進みません。
離れていても「一丸」「一糸乱れぬ」「金太郎飴」が、あって然るべき「常態」だと思うから、そうなってしまうのです。
こんなの管理する方も、される方も迷惑です。近くに居たってそんなことで来っこないのに。
「そうまでして、同じにしなくても良いよなぁ」
ということにさえなれば、案外うまくいく気もします。
話は変わって
「何故感染が起きるか？」
人が多いからです。人口密度が高いところほど、感染は起きます。感染だけではなく、争いも事故も起きやすくなります。
反対に人口が密ではないところでは、感染も起きにくいし、争いや事故もそれほどではありません。
是を更に置換えてデータの世界を見てみると、これもクラウド型は便利で良いのですが、自分の情報は常時人の手の中で、オマケに一極集中。何かあれば根こそぎ一気にごっそり、かっさわれてしまいます。
投資や事業経営も一本足打法は怖い世の中。
どうやら、昨今の流れは「集中から分散へ」と向かっていきそうです。
無論それは今時点「正しかろう」という話で、永遠に「分散が正しい」とは言えません。世の中には常に振り子のような揺り戻しの動きがあって、今は「分散」その後は「集中」そしてまた「分散」と交互に繰り返されるようです。
しかし、今現在はやはり振り子の動きからして「分散」方向に向かっていくような気がしておりますし、妥当なことのように思われます。
目的の吟味を良くせず、効率だけに重きを置いた結果「それが一番効率的で便利だ」という事で、上述の都市化、クラウド化、選択と集中経営の「集中化」が起きたわけでしょうが、今は、効率最優先から、元々効率化を求め始めた「そもそもの「目的」はなんだったんだっけ？」を問い直す入り口に立っているのかもしれません。我々人類は、今。
そんな気がしないでもない、今日この頃です。

2021/5/2

（本日は次男の誕生日。それに際し、一筆啓上つかまつる）

本日は次男の誕生日。
息子達やその家族には、今後もずっと長生きして欲しいので、一筆啓上仕ります。
CO2 由来の地球温暖化に端を発した「環境問題」
しかし、これはもはや「環境問題」などと言うレベルではなく「人類存亡」「地球存続」問題と言い換えた方が正しいし、分かり易くもある様な気がしております。
それくらい過激なレベルの問題なのだと。
何を大げさな、と思うかもしれませんが、地球がなくなれば我々も存在し得ないし、地球がなくならなくても、人類や生物が住めない環境になれば、地球がなくなったと同じ事です。
全ての根底的大前提は、我々は皆「地球の上に乗っかって暮らしている」と言うこと。
そのためにはどうしたら良いか？
空前絶後の大転換が必要になるかもしれません。
例えば、科学的喩えで申し上げますと
「人類は皆、酸素を吸って CO2 を出すのではなく、CO2 を吸って酸素を出す様な、根本的大転換」
程のレベル。
無論そんなことは現時点では空想科学小説もどきですが、要は、そのくらい発想の大転換をしないと、我々の息子達や孫達に地球を住める場所として残してやれないような気がしております。
奇しくも、本日は亡くなった親父の誕生日でもあります。
もし、自分たち世代が「住める地球」を後代に残せなかったら、親父達、先代に対しても申し訳が立ちません。
朝一番、起き抜けに思いついたことを本日は、一筆啓上つかまつらせて戴きました。

2021/5/5

（求む、お叱り。我が「ガキンチョ・レベル」へ）

５月５日。
こどもの日。
大人のくせにこらえ性がなくて「ガキンチョみたい」
といわれておりますが。
最近、とみに思うのは、
「してはいけなと思いながら、どうしてもしてしまう」
「しなくちゃいけないと思いながら、どうしてもする気にならない」
そんな裏腹なことだらけの日々が続いているなぁと。
それを自分は疲労故の意志力の弱体化によるものと思っていると、意外にもひと様は
「あんた、近頃、益々のガキンチョ・レベル、アップやね」
と。
それで、改めて考えてみたのですが、
上述の二つの文章の前半部分、have to do, should do, must do の「ねばならぬ」という強要は理性（頭）が司っていそうだ。
しかし、後半の部分の「でも、してしまう」「でも、する気にならない」と本意を翻すのは、一体何が司っているのか。
通常言われるのは「こころ」とか「感情」
でも「こころ」とか「感情」と言われるのも、実は脳（頭）の働き。
では、「禁止」や「督促」を司っているもう半分の「翻意」の部分は何なのか？
思うに、それは各人が個々に持っている（持って生まれた）特質、性向もっと具体的に言えば「傾向」とか「方向性」なのではないのかな？と。
つまり、お上（理性）からの強要は強要として聞きながらも、どうしてもそちらの方向に「流れてしまう」ある種の「傾斜」「傾き」のようなもの。
右 20 度とか、左 8 度とかの「傾き加減」とでも申しましょうか。
（ここで言う右、左は政治的な意味ではありません。別に東に 20 度。西に 8 度でもかまわないのです）
縦横斜め、各方向に正位置で立っているつもり、或いはそうでなくてはならないと思いつつも、生まれつきどちらかの方向に傾斜しているために、どうしても「ズレ」が生じ、思うようにコントロール（補正）が出来ない。
たとえて言えば、一月前に散々苦労させられたタッチパッドの入力指示と動作始動のタイムラグのズレとそこから来る苛立ち（ストレス）の発生。
「なんやねぇん。どうして思うように、行けへんねぇや」
という様なもどかしさとその鬱積。

そして、それがいつの間にか、苛立ちに変質し、苛立てば苛立つほど、苛立ちの傾斜がどんどんキツくなっていく…
最近、自分は可成り暴走しております。
身近に諫める者もおらず、かなり、ガキンチョ・レベルに傾きまくっております。
このままでは、碌な事にならないので、
「どうか、どなたでもよぅございます。手加減せずに「キツく」「ピシッと」お叱りくださりませ!!」
本気で、そう願っております。

2021/5/5-2　ゴールデンウィーク最終日

（「春の心は、のどけからまし」からず）書庫版

時は一月ほど前の景色に戻って
「世の中に絶えて桜のなかりせば（なかりなば）春の心は、のどけからまし」
確か在原業平だったか阿倍仲麻呂だったか、なんかそんな名前の著名歌人の歌だったような気がします。高校の古文で習いました。
意味は
「もし世の中に桜などと言うものがなかったら、春は穏やかな気持ちで過ごせるだろうに。何故なら、桜があると、風が吹いたら淡いピンクの美しい花びらが散ってしまうのではないか？雨が降っても散ってしまい、折角の桜の楽しむ事が出来ない。なので、気もそぞろになって落ち着かないから」
というような意味だったと、記憶しております。
そうして春の次は初夏。
5 月のゴールデンウィークと言えば、今までは毎年決まって、天高く晴れ渡った紺碧の空に鯉のぼりが風に流されて悠々と泳ぎ回る「五月晴れ」が当たり前でした。
ところが昨今、特に今コロナ渦では、6 月から 8 月までが風水害を起こすほどの長雨や大雨。
そうした天候不順が最近では益々前倒しになっているようで、今回のゴールデンウィークも何となく半分はぱっとしない天気（神奈川地方の例）
そうしてそのうち、それが更に前倒しになって、冒頭の「春の悩み」すらなくなる時代がもう間近に迫っているような気がしないでもありません。

ひょっとしてコロナ渦が去っても、この事態が変わらないか、益々進行するようであれば、我々は可成り危ないところに既に立たされているような気もします。
コロナ渦平癒後の、生活様式の変容ありや否や、それによって、もしない場合は、相当な揺り戻しがあり、却って悪化レベルの急進がありそうな気もしております。
なので、春も初夏も、自分の心は既に
「のどけからまし」
どころ、では無くなっておるのです。

2021/5/7

（強烈な「違和感」）

「住めば都」
例えば飛ばされた先が、可成り酷いところでも、済んでいる内に慣れ、そのうち、却って魅力を見いだすようになって、そこが一番良い場所、即ち「都」だと思うようになる。
そういう意味でしょう。
この格言がそのまま使えるわけではありませんが、その中の一部を引用すれば
「人は、どんなに酷い状況にも、時間がたてば慣れてしまう」
特性があります。
そうでないと、その先「遣っていけないから」です。
この特性を知っていれば「三回の緊急事態宣言」の発出というやり方は採用されなかったと思われます。
ましてや海外では、更に強烈な「ロックダウン（強制的都市封鎖）」を行ったにも拘わらずコロナを押さえ込めなかったくらいなのですから、その遙か手前のレベルの「緊急事態宣言」と「蔓延防止法」のランク付けであれこれやっているのも妙な気がします。
一方、太平洋を挟んだ大国では 3000 万人超の感染者が発生し、アジアの大きな国土を持つ大国では 2100 万人が感染し、酸素不足になっていると聞きます。
しかし、つい最近、後者の国で酸素不足で人がバタバタ死んでいると言う現状が伝わってくるまで、いずれの国からも、病床逼迫、医療崩壊という話は殆ど聞こえてきませんでした。
ところが我が国では、病床数は世界有数。しかも感染者数は桁違いに少ない 50 万人なのに、病床逼迫、医療崩壊寸前と毎日のように連呼されている。
「どういうこと？どうなっているの？他の国は、今まで病床と医者をどうやって確保していたの？50 万人で崩壊するのに」
と思っている内に、当店の外国人従業員から
「アジアの大国に隣接する我が国、ネパールでも、隣国と同じ状況になっていて、人がバタバタ死んでいる」
と聞きました。
しかし、そんなニュースは何処にも報じられていない。何年か前の「ネパール大地震」の時には大々的に報じられていたのに。
「何か変だな」
と思ってしまいます。
「何かズレてる」
例えば、大きなものを、敢えて「拡小視」して見、小さなものを敢えて「拡大視」してみている様な妙なズレと申しますか白黒反転の「逆転」現象と申しますか。
或いは又

「何か、大切なものを抜かしている、か、見落としている」
再び、例えば、ですが
展覧会場の入り口から入ったら、展覧会はなくて、いきなり出口だったのに、何となく展覧会を見たような気になった。何か変だとは思ったが、そんなものかもしれない、と疑わなかった様な。
肝心の展覧会を見ていないにも拘わらず。
なんか、そんな「ズレ」「見落とし」そして「強烈な違和感」を感じてなりません。近頃、とみに。

2021/5/7-2

（世の中は「ありっこない」へ進むもの）書庫版

「太平の夢を破る上喜撰（じょうきせん）、たった四杯で夜も眠れず」
是が元の狂歌。
それに隠された隠し文字は
「太平の夢を破る「蒸気船」たった四はい（四隻）で夜も眠れず」
で、
その意味する処は、江戸時代末期、おおよそ 300 年の鎖国の眠りのただ中、突如、浦賀に来港したアメリカ海軍のペリー提督の軍艦四隻。
そのペリー提督は時の幕府に、これまた突如「開国」の要求を突きつけた。
さもなくば「お国を滅ぼす」といって軍艦の大砲を浦賀沖合でぶっ放した。
それを見て、尊皇攘夷派、幕府開国派、幕府攘夷派、そして庶民が上を下への大騒ぎになった慌てふためきぶりの、半ば揶揄。
この狂歌の「蒸気船」に掛けた「上喜撰」とは、当時のお茶のブランド名のようで、それを四杯飲んだら、目がさえて夜も眠れなくなった」とお茶が含有するカフェイン効果に引っかけた「掛詞」だったようです。
時代はそれから 150 年たった今、同じようなことが起きております。
「安全安心お手軽便利」に鎖国の如く鉄壁防御された太平の世を満喫していた最中、突如あらわれた「コロナ提督」
そうして今回、コロナ提督が突きつけてきたものは、
「護地球星（keep the Planet）」

さもなくば「お国どころか、人類を滅ぼす」といって我が国ならず、全世界で数百万人の死者を埋葬してみせた。
それこそ世界は大騒ぎ。大国、小国入り乱れての上へ下への、右へ左の大騒ぎに。
それを今回狂歌にすれば
「太平の夢を破る「感染症」たった二年で墓すら足りず」
と。
（追記）
色々異論はあるとは存じます。
まず「太平の世を満喫」というが、我が国は既に 30 年前から「失われた 30 年」に突入しており、非正規雇用者を中心に、既に、とても太平どころの話ではなかった筈だ。
とか、
或いは
何で突然人類滅亡までの、大げさな話に一気に飛躍するのよ？どさくさにつけ込んで、煽らないでよ。
とか。
ですが、
「今日の常識は明日の非常識。今日の非常識は明日の常識」
コロナ渦など、誰も予想すらしなかった。
なってみれば、或いはこれからの苦難を考えて見れば「失われた 30 年」などカワイイもの。
世の中は常に「思いも寄らぬ（あり得ない）方向」に動いてきましたし、これからも「思いも寄らぬ（ありっこない）方向」に向いていくでしょうから。
それは歴史を紐どけば一目瞭然。只我々はそれを忘れているか、顧みないだけ。
であれば、あながち煽りともかぎらなくはないでしょうか。
そこで最後に都々逸を。
「世の中は、ありっこない、へ進むもの」
ご注意、ご注意。

2021/5/9

（「も、」の話 ）

「海図なき航海」
「グランドデザインなき構築」
「いつ迄という期間の明示なき忍耐」
それが 2021 年 5 月現在の今。その姿。
全ては「未知との遭遇」から始まった。
大変な飲食業者を助けようと「敢えて外食をしていた」人たちも段々元気がなくなってきた。
その飲食業者は、終わりの見えない中、有効な手立てを見つけられない「不完全燃焼の鬱積」の中で、気がつけば「潰れてしまっている」事態。
そうしていつの間にか「戦う相手」を間違えた「犯人捜し」と「非難合戦」に明け暮れる労力の無駄遣いの「蔓延」
平たく言えば「足の引っ張り合い」か「自分の尻尾を追掛けて食べ始める蛇、状態」
或いは「常態」
しかし、考えて見れば、古（いにしえ）の人は常に
「海図なき航海」をし「グランドデザイン無き構築」の中で、遡ってグランドデザインを手探りし、いつ終わるともしれない「期間の明示なき忍耐」にずっと晒されて生き抜き、生き残ってきた訳です。悪条件の中、難解な問題の「解」を見つけてきた訳です。
そうした古の人から見れば、現代の我々は「可成り底上げされた好条件」からの「悪化」や「沈下」を騒いでいるだけなのかもしれません。
それこそ今「常態」は何なのか？を見つめ直す必要があるような気がします。
「常に未知の脅威に晒されている」ことが「常態」だった古の人々。
「常に安心安全快適である」ことが「常態（当たり前）」になってしまった、特に先進国の我々。
今一度、発展途上国や古の人の立場に立ってみる必要があるような気が致します。
「解」はそういう中にしかない様な気もします。
自分も大切だが人「も、」大切。
今の我々は「自分だけ」大切になりすぎて、何も見えなくなっているような気がしないでもありません。
苦しい中で商売をしていて痛切に思うのは「新しい解」を得るためには、何が役立つか、現時点では皆目分らないので、成る丈大きく時空に投網を広げ、却って「急がば回れ」で、
自分だけの利害や視点を一旦離れ（或いは捨て）
「自分が大切なのは当然ですが、人「も」大切にしないといけない」

そういうことが「新しい解を得る為」には必要なのではないか？という気が「強く」致しております

（注）

上記の「人」というのは、今たまたま「隣にいる人」「図らずもハンディキャップを負っている人（苦しく辛い立場の人）」「立場を異にする人」や「古の先達」を指しております。

2021/5/10

（経験則からの自分（の都合）への「絶対的忠告」）

「死んで花実が咲くじゃなし」
「明日は明日の風が吹く」
「Que c`est la, c`est la. Whatever will be, will be（なる様にしかなんない、のよ）」
ならばいっそのこと、
「ドンといこうぜ、ドンとね。あっ、ドンガラガッタ、ドンと、ドンと、行きましょう!!」
と、数ある文句を並べてみても、矢張りお金の力は圧倒的な様で。
只「爪に火をともす」様な生活だけをしているのであれば、何なんですが、事業を遣っていると、そうはいきません。
先を見た「投資」もしないといけないからです。是ばかりは「時」も「時機（タイミング）」も待っては呉れません。
「それはアンタの都合でしょ？私共「時機（タイミング）」には、関係ございませんから」
と。
例えば、例として、
前の前の借主大家さんから約 20 年余り、使い続けてきた何時天命を全うするや、もしれぬ「ガタガタのエアコン」を夏場前に買い換えないとなりませんし（勿論中古です）、
現在、事情があって電動自転車での宅配を余儀なくされている外国人従業員に安全と効率の為に運転免許もとらせなくてはならない。
その他にも「働き方改革」に合せての週休二日制への移行やら、なんやらかんやらで
「嵩（かさ）むは嵩むは投資が嵩む」
と、都々逸が出来る程、投資が嵩むのです。
しかも、待ったなしで。
夏場にエアコンがなければ商売になりません。
車を運転できる宅配員が居なければ、コロナ渦で唯一の「柳の下のドジョウ」であるテイクアウトと宅配のゴールデンコンビの一角に大穴が空いてしまう事になります。
現在自転車宅配の制約から、遠距離の配達は全てお断りせざるを得なくなっております。
「だったら、それこそ時機が来る迄、投資を控えたら？」
という有り難いアドバイスも戴くのですが、先にも申し上げました通り「時」は待っては呉れません。
もし、夏の真っ盛りにエアコンが壊れたら？
もし、外国人従業員が自転車での配達途中にケガをしたら？
もし、働き方改革を先送りにして、そのうち自分の方が意識の中からこの一件を忘れてしまったら？

生起する確率は五分五分かもしれませんが、以前の記事でも申し上げました通り、むしろ生起確率が「ほぼゼロに近い」様な事が「普通に起こる」のが世の常です。
なので、いずれの件も、どうしても「先送り」にする訳にはいかないと思っているのです。
これは曲がりなりにも3年間、しどろもどろに成りながらも辛うじて「商売をやってきた経験則」からの、自分（の都合）への「絶対的忠告」だという気がしているのです。

2021/5/10-2

（「三無い尽くし」の逆手取り）

コロナ渦になって２年目。
外出自粛や行動制限など「遊ぶ場所と時間」が大幅に減っています。
特にお金や道具を使った外での、且つ大勢での遊び場所と時間が。
こうなると
「お金がないと遊べない人」
「道具がないと遊べない人」
「一人遊びの苦手な人」
は大変困っていると思います。
一方元々の日常が
「お金がない」「道具もない」「仲間もそれほど居ない」などの人たちは
「お金がなくても、逆にないことを楽しんで出来る遊び」「道具がなくても代替品を見つけて出来る遊び」「一人でも楽しく出来る遊び」を工夫開発して、それなりに持っているので、なんとか凌いでいるのではないかな？と推察しております。
これが、何に効いてくるかと言えば「打つ手無しのギブアップ」や「ぶち切れのヤケクソ」になるまでの持ち時間の長さです。
もっと平たく言うと
「サバイバル可能時間」
お金も道具も他人様も、言ってみれば、もって生まれた「自分以外」のものは「自分の外のもの」です。なかなか思い通りにならないものです。
そこに行くと「自分の範疇」であれば、それは、より手の届きやすい、自分で何とかしやすい、より実現可能性の高い、使い勝手も良いものでしょう。
だとすれば、
それはそれで、結構言いチャンスなのかもしれません。
是までとは違った価値観を見いだす上で。
或いは
他に頼らず自分独自のものを見いだす上で。
そして
自分本来に立ち返る上で。
そういった意味で、
絶好のチャンスと言えなくもない気がします。
少なくとも、
上記「三無い尽くし」の自分としては
「現状の逆手取り」を成る丈するようにしております。

（追記）
意味的には「現状（三無い尽くし）の逆活用」と言った方が良いような気もしております。
只、題名としては「逆手取り」の方が耳になじみやすそうなので「逆手取り」を採用致しました。

2021/5/11

（今こそ「グローバル」―「遠き、を近きに」の感覚育成から）

暫く前のニュースで、某途上国海軍の潜水艦が遭難し、全乗組員の生存が絶望との話を耳にしました。
遠い国の話です。
潜水艦というのは、途上国にとっては大変防衛パフォーマンスの高いものだそうです。
相手に見つからずに移動でき、たった一隻で、大国の中心部へ艦搭載ミサイルなどを使って相当なるダメージを与える事が出来るからの様です。
ところが、小国では自前の潜水艦を開発できない事は当然として、財源が足りない為に老朽化した潜水艦を碌なメンテナンスもせずに多頻度出航させているものですから、当然事故発生確率も上がる訳ですが、任務優先の為にその危険を冒しても出航せざるを得ない様でした。
そうして今回の事故。
「水圧制御不能。艦、浮上できず」
そのニュースに一枚の添付写真。
艦橋下の操舵室の計器板前で、全員がマスク無しで集まっている写真です。
この写真は、国民アピール用活動報告ストック写真の引用なのか、それとも最期にマスクを外して、覚悟を決めた事実写真なのかは分りませんが、皆冷静な顔をして「微笑んでいる」様にも見えました。
しかし、もし後者だとすれば、それこそ彼らが味わっている生還の望みを絶たれた絶望故の恐怖と覚悟という「水圧」をありありと感じて、胸苦しくなりました。
一方、処変わって我が国。
少なくも自宅近隣の状況は
生活音さえしない「潜水艦生活」の如く。
物音、気配、存在すらも「捕捉・探知」されぬ様に息を潜める「潜水艦生活」
最近の潜水艦は「敵に捕捉される危険を回避するため、如何に長期間に渡って水面浮上せずに航行できるかに最重点が置かれ、酸素始め生活維持と作戦行動が隠密理に出来る」様に設計されて居るそうなのですが、将に我が住宅街は、是に等しく「如何に顔（実態）を出さずに内部生活を「敵」（将に敵なのです。周りが）から隠しおおせるか」の「隠密比べ」の如き様相。
自分が子供の頃はお隣さんのまな板をトントン叩く音や、お風呂での鼻歌が聞えるのが当り前で、それが世間の日常でした。

しかし同じそれがいつの間にか「近隣住民への気遣いの無さ」や「不快感」になってしまっている様で、戸惑いを覚えてしまいます。
そんな自分が思うに「同じ潜水艦生活」をしているのであれば、遠い他国の出来事とはいえ、想像力を働かせて記事の中に同一項を感じ取り、今コロナ渦だからこそ「同じ身の上」の話として捉えられる感受性や遠くの話も身近な事として捉えられる「スケール感（度量）」を養う事で、国際情勢にも目を向け、結果的に自らの生活をも顧みる。
それこそグローバルな視野で物事を見る癖を「鎖国 450 年、ガラパゴス島」の我々も、そろそろ身につけて良い様な気も致しております。
（追記）
どうせテレワークというなら
まずは「遠き、を近きに」感じる「その立場を想像してみる」感覚の育成が基礎ではないでしょうか。

2021/5/12

（「お金は使わなければ（お金は）入ってこない」）

「金は天下の回「り」もの」
という耳慣れた文言があります。
是を私共は
「金は天下を回「る」もの」
と無意識に思っている帰来がありそうです。
曰く
「（今は苦しくても）そのうちお金は回ってくる」
という、言ってみれば「天の助け」か「他力本願」
しかし、この文言の真意は
「金は天下に回「す」もの」か「金は天下「で」回すもの」
ではないのかな？と最近思うようになりました。
要するに「相互扶助」の為の「自力本願」か「自発始動」
そう思うに至ったきっかけは、在る数字を見たからです。
今コロナ渦で、額こそ違いますが緊急支援の給付金が
太平洋を東に挟んだ大国では、支給された国民によって消費に回され、期待（良い）インフレ率の目安とされる 2%を超え、2.3%になり景気が短期間で急回復したのに対し、
昨年国民一人当たり一律給付された「たった 10 万円程度の額」の内、可成りの額が貯蓄に回され、なんと貯蓄率が 35%も跳ね上がったという 2 つの記事の数字を目にしたからです。
全てはそのせい、ばかりとは言えませんが、我が国の中央銀行が目指す期待（良い）インフレ率 2%には遠く届かず、いつまでたっても「失われた 30 年」が延々と続くデフレ状態から脱却できずにいる。
要するに心理として、我が国では反射的、本能的に「まずは我が身の安全」確保を行って時間稼ぎをし、そのうち「回ってくる（回「る」）もの」である「お金」が、
天の助けで「自然に」または「自動的に」まわって来るのを待つ、
という「他力本願」中心思考であるのに対し、
海向こうの大国の国民心理は、資産に占める株の保有率の高さから見ても「投資しないことには、何も始まらない」
つまり「皆で使わないと景気は良くならない」という「自力本願」「自発始動」の気分が優先的である気がします。
大昔のギリシャ哲学者の
「お金は使わなければ（お金は）入ってこない」
即ち「回して初めて入ってくるものなのだ」
という金言が根底にはあるような気もします。

確かに角度を変えた物の見方をすれば、イソップ童話の「アリとキリギリス」の方が的確だ、とおっしゃる方もあろうかとは存じます。
要するに「勤勉は遊興に勝つ」とか「備えあれば憂い無し」とかの金言からです。
恐らく、それも正しいのでしょう。
しかしそれも程度次第。
唱えるタイミング次第です。
「度を超す」と碌な事にはなりません。
「タイミングを間違える」と却って逆効果にもなります。
度を「過ぎたるは及ばざるが如く」且つ、時機「過ぎたるは及ばざる、が如し」
（追記）
自戒を込め、平に申上げますと
要は
「たらい回しをせずに、誰が言い出しっぺになるか？その手を上げるか？」
という自問です。
右隣を見て、左隣も見て、様子見しながら「後出しじゃんけん」は、そろそろやめましょうよ、という自戒でございます。
なので、まずは
「自分が手を上げよう」
という決意でございます。

2021/5/14

（経済夜話）「この世は将に、ままならず」改題

以下は全て私見です。
「お金は使わなくては（お金は）入ってこない」
という記事を前回書きましたのは、我が国国民の過度の貯蓄性向を想定してのことでしたが、それに対してあるお方から
「それは明治時代の富国強兵という国策の名残だろう」
という趣旨のメッセージを戴き、そこから又先を考えて見ました。
「なんで、貯金が富国強兵に役立つのか？」
で、考えて見た処
「国債」
という「想定解」が出てきました。
詰まり、貯金を推奨する。貯まった処で無理矢理国民に国債を買わせて戦費を調達する。
しかし、国債と言うのは国民が債権者で国が債務者ですから、いずれ国は償還という形で、借金に利子を付けて国民に返さなくてはならない。
ところが、そこに敗戦。
国があるやらないやら、はっきりしない状態の上に、戦後のデノミで新円に切上がってしまった。最低金額一厘が 1 円に切上がったと言う事は、逆に言うと 10000 円が 1000 分の 1 の 10 円（の額面価値）になってしまった。
国債保有者は大損。
で、戦後はそれに懲りた国民は、今度は銀行に預ける様になった。
折しも戦後の朝鮮動乱特需や、その後の高度経済成長で銀行は企業に、国民が預けたお金をどんどん融資し、たんまり儲けた。そのお裾分けで国民も年率 7%位（確か自分が中学生の頃、そんな記憶があります）の利息を得る事が出来た。
1000 万預けたら 70 万円。1 億なら 700 万円。10 億なら、なんと 1 年で 7000 万円の利息が付く訳です。貯金すればする程、遊んで暮らせる。
ウハウハです。
しかし、是では預貯金は企業の融資には回りますが、国民の購買量は上がらなくなる。
是ではこの先企業もヤバイ、と思って、今度お国が言い出したのが「消費は美徳」の宣伝。
それで再び経済は伸び始めましたが、今度は環境汚染やら公害やらの副産物が。
で、そうこうする内に過熱気味の経済（実体経済より金融経済）のバブルが弾け、その後「失われた 30 年」が始まった。
最近では、更にマイナス金利というもの迄。
要するに銀行に 100 万円のお金を預けておくと、1 年後には増えるどころか 99 万円になって目減りする政策。

意図は、貯めておいても仕方が無いので「投資に回そう」という気持ちを起こさせ、お金の流れを良くしようとした。
ところが、是又々、その預金が引き出されて行った先は、実体経済ではなく株式や商品相場へ。
早い話、是が格差の元。
詰まり、お金持ちが株式や商品に投資をして益々儲ける反面、お金のない、又投資概念の希薄な「庶民」は単に預金が目減っただけ。
で、仕方なく窮余の一策として「タンス預金」が増える。
それが「今」
なので、少なくとも使わせる側は「経済原則」以前に、この世は、様々な層の「心理変数」の合成ミックスで動くのだと言う事を「まず」理解し、そして我々使う側は「蜘蛛の糸」のカンダタ行為を慎んだ上で、それぞれが、互いのズレを努力して縮めるべき気が致します。。

2021/5/14-2

（経済夜話　その２「能率・効率」の話）

「お役所さんには、来所者に対して、もっと効率や能率を上げて貰わないと困ります」
一方
「民間企業の上司さんには、部下に対して余り効率や能率を求めすぎないようにお願いします」
では、能率とか効率というのは、そもそも何なのか？
簡単に言うと「単位時間当たりの仕事達成量」即ち「コストパフォーマンス」の事です。
そして、この「単位時間当たり」というのが大切でしょう。
それを冒頭の二つの文言に当て嵌めて考えて見ると分かり易いかもしれません。
例えばお役所の出先窓口機関であれば、大方が「ルーティンワーク（定型反復業務）」で、1 クールの大体が割と「短時間業務」です。
なので、こういった言い方は大変失礼ですが「余り創造的ではない業務」は効率や能率を上げやすいですし、又それを求めるのは当然とも言えます。
簡単に言うと数をこなす必要のある業務だからです。
ところがもう一方の民間企業の、例えば開発部門。
これに対して余りにも能率や効率を求めるのは「木を見て森を見ず」や「慌てる乞食はもらいが少ない」様な結果しか得られない場合が多いような気が致します。
詰まり同じ能率や効率でも、それを測る基準となる「単位時間」の長さがまるで異なるからです。
一言で言えば「大変長い」
しかも結果や成果は「短時間業務」のように均等且つ連続的に発生しないこともままあるのです。
例えば「追い込み型ケース」や「大器晩成型ケース」のように、初めは散々失敗するが、その失敗という経験数のおかげで、最後になって果実が実る様なことの方が遙かに多いような気もします。
（是を一般には「非効率だが（非効率に見えるが）効果的」と言います）
例を言えば 5 回倒産した後に、成功した自動車王のフォードさんとか、100 回実験に失敗した後「後もう一回だけやってみよう」で、最後の最後でついに実験に成功し、発明王になったエジソンさんとか、です。
なので、同じ「能率・効率」でもタイプが全く異なりますので、その扱いや適用の仕方には十分注意が必要でしょう。
言い逃れのためにお役所さんが後者の適用をいいだしたり、同じく民間企業の上司さんが功を焦って前者の適用を強いたりするのは、厳に慎まなくてはならないでしょう。
勿論、我が国の「民」のために。

（追記）
このように、世を経（おさ）め、民を済（すく）う事を「経世済民（けいせいさいみん）」といい、その略語「経済」、という語の出自となっております。

2021/5/15

（それこそ「サバイバル」）

昨年 1 月から今日迄 1 年 5 ヶ月に渡り「ニューノーマル探索サバイバル日記」を書いてきて思った事があります。
それは
「我々というのは、平和や安心安全の中にいる事など殆ど無く、常に脅威に晒され続けている存在なのだ」
という事です。
脅威には「天災」と「人災」があります。
天災については、今コロナ渦や気候変動による風水害、台風、異常乾燥や熱波、2011 年以降多発している東日本大震災を始め熊本等の地震等で強く認識される様になりましたが、その他にも人災による脅威が増している様にも感じられます。
人災で最たるものといえば「戦争」が挙げられます。
しかし、現代に於いて戦争は何も武力衝突だけとは限りません。
何の事かと言えば、仮に「戦争」を「国民の生命財産を脅す最大脅威」と定義し直してみると分り易そうなので、その再定義を用いて少しご説明致します。
戦争と同様の生命財産を脅かすものとして、例えば、
医療、食料、エネルギーや水道、交通、金融資産等への脅威が同等の結果を引き起します。
具体的には、それらをコントロールしているサーバーがハッキングされたら？です。
医療サーバーが遣られたら、ICU（集中治療室）などは使えなくなります。食糧貯蔵倉庫の温度管理サーバーがやられたら、食物は皆腐ってしまいます。エネルギーや水道関係を遣られたらライフラインが崩壊します。交通制御サーバーが遣られたら信号機すら使えなくなります。そして金融資産関係のサーバーが遣られたら、ATM からお金が引き出せなくなりますし、悪くすれば他口座への移転や名義変更等で、預金全てが奪われてしまう可能性があります。
いずれも生命財産に関わる重大被害です。武力行使で空爆を受けたのと同等かもしれません。
（尚、今回は話がややこしくも成りますし、誤解も受けそうなので防衛関係の脅威につきましては、敢えて除外致しております）
イヤそれどころか、いつ開戦されて、いつ終戦を迎えるのか？すら、分らない終わり無き戦いでもあり、それが最も怖い処です。
以上は人災の話でしたが、冒頭の天災も併せ、我々は平和で安心安全な世界に居るどころか、明日何が起こるかさえ全く分らない「とてつもなく恐ろしい脅威に常に晒され続けている世界の住人」である事を痛感するに至りました。

仮に大渦であるコロナ渦が辛うじて平癒したとしても、それは数ある災禍の一つに過ぎず、他の災禍が常に存在し続けているのです。
それこそ「サバイバル」
これを凌ぐには、個々人、個々の家庭に依る、それらの事態を想定し、近隣との協力関係を築いた上での、日々の「意識的常時訓練」以外にはない様な気も致しております。
（追記）
「お上」にばかり頼りすぎて最後に泣きを見ない様にしたい、と心がける様になりました。
飲食業者であり且つ地元自治会の元防犯防災交通役員であった者という「限られた側面での経験」から、だけですが。

2021/5/15-2

（語学教育真姿「コミュニケーション」）

要するに今の我々年配世代に子や孫に教える「経験や経験則」がないのでしょう。
子や孫はインターネットで知識だけは持っています。
知恵とは「知識 X 経験」だとすると、年配世代が新しい知識の獲得も今まで培ってきた経験も殆ど無いとすれば、是はもう「恐怖のどん底状態」でしょう。
その恐怖から逃れる為に、矢鱈と体裁だけは繕う。
簡単に言えば虚仮威しの張りぼて状態。で、虚勢を張りまくる。
ところが、反面、子や孫へは、サービス、サービス、も一つオマケに又々サービス。
しかし中身がなければ、それは常に「ご機嫌を損じては一大事」のご機嫌伺い。
それが、それこそ常態化。
更に進めば、兎にも角にも「ご機嫌取り」
「ねっ、笑って、笑って。お願い。あっ、笑った、笑った。あぁ、良かった。笑ってくれた」
一体何なのでしょう？これは。
元を正せば「安心安全、是第一」で「失敗は絶対ダメよ」から始まった「何事も 100%の成功保証がなければ、それまで一切、手を出さない」事から始まった絶対的経験数と経験量の不足が原因。
これでは 70 年生きようが 80 年生きようが、子や孫に伝える知恵や経験等在ろうはずがありません。
「失敗を許し、経験として認める大らかさ」を得ない限り、この風潮はまだまだ相当年数、いや相当年代続くでしょう。
我が国国民は、それと同じ年代分だけ、「昨今、教育開始年次の繰り上げが決まった学校での英語教育」ですが、幾らソンなことをしても、教育理念と方法を改めない限り、使える英語を話すことは出来ないでしょう。
何故なら語学、いや語学の本来の目的である「コミュニケーション」とは、実は失敗の上に成り立ち、失敗無くしては深まらない事柄だからです。
それに則した教育理念と方法を改らためない限り、全ては徒労に帰するでしょう。
教育の目的を「語学習得」から「コミュニケーションの醸成」に変え、数多あるコミュニケーション手段の中の「可成り有効且つ合理的ではあるが、矢張り単なる其の一手段にすぎないのだ。他にもジェスチャーや表情、ハグやイラスト、図表などの手段もあり、それらを組み合わせるという自発発想に基づく手段さえもあるのだが」と「語学を位置づけ直した」教育方法を見いだすべきだと思うのですが。
皆様方は、如何お思いになりますでしょう、か？

二〇二一年六月の巻

2021/5/19

（図式「今」）

「朝顔につるべ取られてもらい水」
損得の絡まぬ話です。損得を絡めて言えば、むしろ損。
しかし、途方もない労（いたわ）りと譲歩がある。なんとも言えない奥ゆかしさがある。
「今コロナ渦のせいで」ではなく、実は「それ以前に」最も失われていたのは、お金ではなく、こういったもののような気が、ふと、致しました。
そうして、その累積の結果「コロナ渦による犠牲」という形で、その過誤に対する「実に高価な代償」を支払わされているのが「今」
そんな図式が、自然と浮び上がって参りました。

2021/5/19-2

（重たい事実）

二、三日前に、ちょっとした記事ではあったのですが、大変ショックを受けた記事がありました。
「感染拡大防止の優等生、台湾で、新たに 150 人の新型コロナ感染者が見つかる」
徹底した水際対策。禁止事項違反者には高額の罰金、IT を駆使した事前防止策の実施、そうして当然ワクチン接種などで、一時新規感染者ゼロにまで押さえ込んだ「あの台湾」ですら、コロナを防ぎきれないのかぁ、と。
それで蘇った記憶が 14 世紀だか 15 世紀に、当時総人口 1 億 5000 万人ほどだった欧州を席巻した「黒死病（腺ペスト）」で、死者の数が 3000 万だったとか言うお話。感染拡大が下火になるまで約 3 年を要した。
当時ワクチンや IT 等はあるはずもないので、平癒に向かったのは恐らく集団免疫が出来たからだと思います。
それで、極めて単純にこの事実をトレースするとなると、コロナ渦下火は今年後半ではなく、来年末かもしれないという、驚きの推測が生まれました。
ワクチンの有無に拘わらず、ウィルス渦は何時の世でも 3 年単位。
「と、なれば未だ折り返し点前。うちの店は、残りの復路、あと 1 年半、保つ体力があるのか？」
しかし、現実には
「最早人間はコロナの変異スピードに着いていけなくなっている」
この「残りたい」と「その確率は極めて低い」という、相反する「願望」と「事実に基づく推測」のせめぎ合い。
我が国の官民に渡るコロナ渦対策、イヤもっと言えば危機管理に対する認識欠如と能力不足はお粗末の極みですが、仮に我が国の官民が危機管理認識と能力に於いて、台湾並みに高度なレベルであったとしても
「それでもコロナとコロナ渦を押さえ込むことが出来ない」
という「この事実」
これには、大変重たいものがあるような気がして、しばし思考停止に近い状態になっております。
まさにサバイバル剣が峰で超弩級の強風にあおられ、立っていることすらままならぬ、
の感、是ありです。
（注）
ワクチン接種は「完全な解決策」ではありませんが、集団免疫の早期獲得という意味では「極めて有効」な手段です。
全ては時間との闘いです。

2021/5/21-2-1

（再び「大変は大機」）

「山を高くするには、底辺を拡げなくてはならない」
ところが
「OK を戴くには、タテヨコ僅か十数センチ四方の枠内でなければ、合格とは見なさない」
あとは全部ダメ。ゼロに等しい、と。
これが、我が国国民の指向性。
是では、
掬い上げられた筈の可能性も、是までに、どれ程取りこぼしてしまったでしょう。
又、失敗とやり直しの繰り返しである「経験」という「底辺」を広げるチャンスもどれ程失われた事でしょう。
是が我が国の国民的大損失である事は、間違いない様な気が致しております。
我が国は現在、今コロナ渦で、上から下まで、右往左往のぐちゃぐちゃ状態になっております。
さすがここ迄、取り繕い様がなくなれば、そろそろ
「是じゃぁ、ダメだ。今までのやり方を根こそぎ全部、見直さないと、とてもじゃないが、先がない」
となっても良い様な気もしております。
そういう意味では、多くの人々が共通して、そう思い始める可能性のある「現在の最悪の状況」は「大変は大機」が如く、最大のチャンスである様な気も、一飲食業者の自分には、致しております。

2021/5/22

（大損失）再び「大変は大機」改題版

「山を高くするには、底辺を拡げなくてはならない」
ところが
「OK を戴くには、タテヨコ僅か十数センチ四方の枠内でなければ、合格とは見なさない」
あとは全部ダメ。ゼロに等しい、と。
これが、我が国国民の指向性。
是では、
掬い上げられた筈の可能性も、是までに、どれ程取りこぼしてしまったでしょう。
又、失敗とやり直しの繰り返しである「経験」という「底辺」を広げるチャンスもどれ程失われた事でしょう。
是が我が国の国民的大損失である事は、間違いない様な気が致しております。

2021/5/23-3

（急告）

主文
テイクアウトをコロナ禍以前の元の価格 550 円に戻させて戴きます（6 月中旬より）
主訴
昨年 4 月、皆様への生活応援と言う事で「コロナ渦が終わる迄テイクアウト 550 円をワンコインの 500 円にさせて戴きます」とお約束致しましたが、
コロナ渦も既に 2 年目に突入し、当店が想定していた期間を既に 2 ヶ月余り超える事態となりました。
その為、この想定外の長期化によって「皆様とのお約束」を守る事が困難となりました。

つきましては、誠に恐縮ではございますが、ランチ及びディナータイムのテイクアウトをコロナ渦応援価格採用前の元の価格 550 円に戻させて戴きます。

当店亭主の力不足により、お客様への「お約束」を守り切れなかった事を、心より深くお詫び申上げます。

（ご参考）
想定を超える「コロナ渦長期化」下での、本年 4 月以降の主なコストアップ

一　国や自治体からの支援金　全くなし（コロナ禍前より、お客様ご希望価格帯受容路線で大幅赤字の為「原因はコロナ渦起因のものではない」とのお上の、貸付資金回収不能又は給付しても無駄との判断で、何度申請しても却下）

二　当店では、外国人従業員全てを日本人同等福利厚生、給与待遇としております。

その為

三　「働き方改革」（新３６協定）遵守で「外国人従業員、週休二日制」に移行
（ローテーション成立の為、パート 1 名を新規雇用。当店従業員の給与は現状維持のまま変更せず。大幅人件費のアップ）

外国人従業員子弟（妹）扶養家族手当、新たに 4 人分増加（同様に人件費、大幅アップ）
（外国人従業員が我が国永住希望の為、その最重要条件である給与を下げる訳には絶対に参らないのです）

四　天候不順と物流網寸断で食材が高騰（カレーソースとナンを作る基本食材、原料の 15%から最大５０％アップ。特にナンを作る為の基本食材。原料の全てが高騰）

＃質や量を落とす事は絶対に致しません。調理工程の手抜きも致しません。
＃宅配料金、その他価格は当面、据え置かせて戴きます。
（母国が感染爆発で、仕送り金額が急増している国々のお客様の価格は、可能な限り、当面据え置かせて戴きます。国内のお客様には、この価格政策をご理解戴きたく）

ナマステエブリバディ 亭主

2021/5/24

（「公私」）

歴史上、全ての権威集団の腐敗と、それに起因した凋落は「公私混同」から始まっている。というのが自分の認識です。
簡単に言うと「自分（私）の都合を公にとって意味のある事」だとすり替え、押し付ける事です。
その観点からすると、現在の世界、特に我が国に於いては官民共に「公私混同（すり替え、押し付け）」以上に「私（わたくし）が肥大化し過ぎて、公（おおやけ）を死滅させせつつある」様にも見えます。
確かに「公ばかり」では妙な世界が現出する事になりますが「私ばかり」の世界でも、それは同じ。
この「私ばかり」の世界を突き詰めていくと「分断」しか生まれてきません。
個々人に差があり、そればかりに焦点を当てると「たまたま隣にいる人」との「意思疎通が出来なくなる」からです。
「私」として許容されるのは、良い意味での差、即ち「個性」としてのみで、残りは矢張り「たまたま隣にいる人」との「共通土壌」としての「公」が必要な気が致します。
「公」は時として「堅苦しい行儀作法」のようなイメージで嫌われます。
確かに「礼儀（気持ち）」がないのに「行儀（見かけ）」だけ整っているのは、却って嫌みです。
だとすれば「礼儀（思いやり）」のある「公」に成るようにすればいいだけなのでは、ないのかな？と思ったりもしています。

2021/5/28

（他の記事を書く余裕がなくなった）

緊急事態宣言延長の話（決定ではなく）が出始めたのを機に、実行に移すはずだった
「エアコンの入れ替え」と「外国人従業員の自動車学校入学」を先送りにしました。
理由は、噂の段階で既に、支払いの前倒し依頼やらお客様単価の急減やらで、資金繰りが急激に悪化したからです。
新規投資の裏付けであった「前年比回復傾向」が完全に剥落し、
簡単に言うと「払うお金が消え失せた」
それに、何はさておいても、従業員の給与と家賃の支払いを最優先で確保しなくてはならない。
一方、当店はコロナ禍前からの不採算店で、お上も給付、支援、援助金を一銭も融通しては下さらない。
「それは、大切な税金をドブに捨てるようなもので、国民が納得しない」
というご尤もな理由から。
ですが、自分は１０年計画を立てていたので、当初５年は投資時期で利益がでない事は鼻から覚悟の上だったのですが、そんな計画は「言い逃れに過ぎない」と更にキツイお言葉。
それで、致し方なく、禁じ手の「商品の値上げ」（実際には、コロナ禍生活応援価格前の通常平時価格への戻し）を決定し、アナウンスを出しましたところ、更に売上が大幅ダウン。
アナウンスは、合理的と言える範囲の内容のみに絞り、その内訳も紙面や板面で、縷々ご説明申し上げた積もりだったのですが、矢張りお客様は
「ご自身は理解しても、財布さんの方が生理的に納得できず、口を開けたがらない」
ようで御座います。
それでも他に、収益補完分野等の育成を併せて進めておりますが、こちらも「期待発芽時期に対して芽の成長が遅すぎる」状態。
将に風前の灯火。
他の記事を書く余裕が全くなくなってしまいました。

2021/5/28-2

（大損失　その２）

文章に嘘があると直ぐに見抜かれてしまいます。
作ったり、飾ったりは勿論の事、逆にわざと控えめに書いたり、功を隠して書いたりして、それに後で読者が気づいた折りの、読者自身が自発的に付与するであろう「奥ゆかしさ」満点感が生み出す飛躍的波及効果まで読んだ様な「高等テクニック」を使っても、矢張り美事に見抜かれてしまいます。
それ程我が国国民諸氏の大半が「麻薬探知犬」又は最近の報によれば「コロナウィルス探知犬」の如き鋭い嗅覚を持っております。
ですが、観察するにそれが自分以外の人には誠に鋭く働くのに、自分自身にはどうも余り働いていない様なのです。
それが働く様になると、我が国はとても住み易い国になると思うのですが、働いていないとなるととても大きな損失を被っている可能性があります。
どうせなら残り半分を働かせて、自らの生活が、損失ではなく「得得（得を得る=えとく）」と成る様にしたいものです。
「人には厳しいが、自分に「も」厳しい」
又は
「自分は大切だが、ひと「も」大切」
で。

2021/6/1

（きっぱりと）

「同調圧力、此処に極まる」が如きかつて無い息苦しさ。
相手に対しては
「鵜の目鷹の目」
「微に入り細にわたって」
「重箱の隅をほじくる」
に始まり、
その目を自分が受けるとなれば
厳しい検閲に引っ掛かってボロを出すことを只管怖れ
「出る釘は打たれる」
「触らぬ神に祟りなし」、
「見ざる言わざる聞かざる」
となってしまう昨今。
全ての判断が物事の良し悪しではなく「皆と同じかどうか」「皆と違っていないかどうか」
そうして、相手に対しては文頭の
「鵜の目鷹の目で微に入り細にわたって他人の重箱の隅をほじくる」
へ、と再び繋がってしまう悪しき循環、即ち「悪循環」
これでは、我が国に於いてコロナ渦中に、当初は「異端そのものの姿でしかないスタートアップ」など育つわけがなく、今においてスタートアップが立ち上がらなければ、コロナ渦後の世界で、我が国は完全なる 10 等国以下になっていても不思議ではない気が致しております。
現下、この息苦しさの元と思われる国民自身の「一糸乱れぬ感」は、国に強要された戦前のそれよりも、対象が「気分」「雰囲気」という曖昧で特定できないものである分、遙かに複雑怪奇で酷いものなっているような気もしないでもありません。
本来、防疫分野の面で発揮されなければならないはずの「この一糸乱れぬ感」が、どうやら防疫分野以外の面で猛威を振るい、コロナ渦災禍以上の「不可視」な弊害を引き起こしている。
それは、何も今（こん）コロナ渦の故ではなく、コロナ禍以前からあったものがコロナ渦という偶然をきっかけとしてブーストアップ（増幅）して噴出しだしただけのような気がしなくもありません。
恐らくこの傾向は益々深まっていくでしょう。
そうしてその深みが、極まりきった処で
「いい加減うんざり」
してコロナ渦後は

「今まで囚われていた、この得体の知れない気分や雰囲気」
と
「きっぱりと決別する」
と
宣言したいものでございます。

2021/6/4

（ほとほとイヤになった話）

「ことある毎、一挙手一投足に対して微に入り細にわたり、これだけああだこうだ言われ続けたら、もう誰も何も言わなくなってしまうよな」
というのが昨今の実感です。
ちょっと遠回りした話し方になりますが、そう思ったのは徒歩で出勤の途中、朝のお散歩をしていたワンコが何故か自分に興味を示し、近づいて来ようとするのを飼い主が火の付いた様な仕草で慌てて手綱を引き戻したのを見たからです。
そういえば今から十数年前、リーマンショックの後の休日に、近くのターミナル駅のプロムナードを歩いていて、小さな子供が、見知らぬ一通行人である自分の目の前を遮ろうとするのを見た若い母親が
「危ないから、こっちに来なさい」
と、これまた火の付いたように幼子を引き戻した光景を思い出しました。
その時思ったのは
「おや？いつの間に「危ない」になったのや？「通行の妨げになるから」じゃなくて」
という違和感でした。
そうやってプロムナードをよく見ると、複数の若いカップルが腕を組んだり肩を寄せ合ったりではなく、皆手を繋いで歩いているのを見て、それにも違和感を覚えました。
「これじゃまるで、手を繋ぐことで、逆に二人の二の腕の分だけ防波堤を張ってちかづけないようにしているみたいだ」
あれから幾星霜が経ち、そして現在のコロナ渦巣ごもり生活。
それで思い当たったのが
「十数年前、当時小学生だった子供や大学生だった人たちが、今では社会人になっていたり小さな子供の親になっていたりする。その頃からネットに接し始めた彼らは、街の穏やかな流れや雰囲気とは全く反対にネットの中に荒れ狂う誹謗中傷や罵詈雑言、逐一チェックの「こんなことにまでケチが付くの？」という光景や言葉の群れを否応なく見せつけられた。そうしてきっと思ったに違いない」
何を？
と言えば
「皆仮面をかぶっている。周りは皆敵だ。スパイかチェッカーだ。気をつけろ。近づくな。関わるな」
と。
それが冒頭の散歩中のワンコの飼い主様の反応に繋がるのでは？
と思った次第。
なんだか、ほとほとイヤになってきました。

なので、最近、ネットでの人様の投稿は「たまに流し見する程度」になってしまいました。

2021/6/5

（副反応（作用））

「ワクチン接種、99.2%副反応（作用）なし」
という記事が在る一方
「ワクチン接種後、58 人が死亡」
という記事もあります。
いずれも我が国でのお話です。
この二つの記事を見て、高齢者枠で既に予約案内はかなり前に受け取ってはいるものの、呼吸器系基礎疾患が二つある自分はワクチンを接種しに行って良いものか、行かない方が良いのか分からなくなってしまい、未だ予約手続きを行っておりません。
一方、ワクチン接種の副反応（作用）は色々取り沙汰され、問題視されますが、インターネットやスマホ、SNS がとても便利である一方、可成りの副反応（作用）を産んでいる事には余り言及されておりません。
特にネットを含めた誘導型メディア（特に広告領域）に於いては。
そうして相も変わらずの、報道系メディアの同一媒体による時間差を置いた両論併記で、一体どちらが正しいのか益々分からなくなってしまいます。
かてて加えて、毎度おなじみのマッチポンプ。
即ち自分で焚きつけておいて、最後は火消しに回り「どうだ、スゴイだろう」と自らの手柄を誇示するのも十年一日の如く変わっておりません。
なので、この際ですからワクチン接種後の副反応（作用）の実質値がどうなのかをきちんと見極めるために、逆に情報提供媒体や道具であるネット、スマホ、SNS の視聴取を一旦手控え、様子見をしてみてはいかがかと思っております。
そうでないと、ワクチンを摂取の予約可否について、却って情報過多で判断が付きかねてしまいますので。
老い先短く、継ぎ接ぎ（つぎはぎ）だらけのオンボロとはいえ、たった一つしか無い命。
まだまだ「無駄には」落としたくはありませんもの。

2021/6/7

（ないない尽し）

今日は当店、定休日で給料日。
何とか振込ました。
此処で話は一転。
「水と共に生きる」で、今や健康産業のサントリーの名前の由来は
初代社長が「鳥居さん（とりいさん）」で「さん」と「名前」の鳥居（とりい）を反対にしてサントリーになったとか。
又
「お値段以上ニトリ」の社名も社長さんが「似鳥さん」だからだそうで。
その伝に従えば当社の社名も自分の名前が「宇都宮」で、その漢字の音読み、宇宙の「う」東京都の「と」宮殿の「きゅう」で「うときゅう」
表記は「うとQ」
を冠しておるのはダジャレ精神に於いて「完全完璧相似同一」ですので
「是はひょっとするとコロナ渦後には彼の「サントリー」や「ニトリ」に匹敵するような大会社に大化けしているかもしれない」
と経営学的根拠全く「ゼロ」のほぼ「妄想」
「こじつけも、ここまで来ると、最早何でもあり」
を糧（かて）として何とか今の苦境を凌いでおります、
が、
それを聞いた隣の識者さんが、小刻みに頭を横に振って一言
「絶句!!」
と。
まぁ、そんな戯れ言はさておき、今日は給料を支払ってどうにか一区切り着いたので、これから明日以降
「来月の資金繰りをどうやりくりするか？」
を、考えると致しましょう。
何せ、国、県からの資金援助は、上述の経営学的根拠同様
全くの「ゼロ」
なもんで。

2021/6/9

（絶句続き）

此処２、３週間の内に「絶句」という場面が続きました。
最初の「絶句」は、書き物のお師匠様と自分の腕前の差に自ら「絶句」
二番目は、自分の余りの脳天気さに隣の識者さまから受けた「絶句」
そうして今日、又々「絶句」してしまいました。
働き方改革の実施で従業員を週休二日にした事で、ローテーションが組めなくなり、自分のカリーのお師匠様であるネパールボスの奥さんにパートで働きに来て貰っているのですが、今朝の始業の前に四方山話をする中で
「本国のお母さんは元気なの？」
と訊くと
「ゲンキよ。でも、若い人、ドンドン死んでいる」
「えっ？コロナで？」
「コロナじゃなくてぇ、コロナで働くところ、なくなってぇ、家にばかり居てぇ、食べ物無くなってぇ、ミンナ、おなかすいてぇ、死んでいるよ」
是には、本当に何も言えなくなって、まさに「絶句」
以前自分が「ウチはコロナ渦でも支援金は全く貰っていない」と書いたことが酷く恥ずかしくなりました。
赤貧国の彼らは、我が国はじめ他の先進国で出ている支援金や給付金の存在すら知らず、ただ黙っておなかを空かして弱り、息絶えていった。
それは「売り文句」にも何にもならない、彼らの「常態（ノーマル）」
それを先進国の一角に居て、彼らより遙かに「安全」な自分が、「支援金を受けていない」と殊更ながらに店の「売り」につなげた事が、いたたまれないくらい恥ずかしくなったのです。
彼らの惨状に「絶句」すると共に、自分自身にも「絶句」してしまいました。
コロナ渦になって１年半余り。
「絶句続き」が自分の「ノーマル（常態）」になりつつあります。

2021/6/10

（「まるで違う」）

本日、SNS での投稿記事を見ていて、自分の書き物のお師匠様が小学校 4 年の時の学校の絵画の時間に「自由画題」で描かれた「松の木の絵」の話をされておられました。
ちょうど自分も同じ小学校 4 年の時に、学校での話ではないのですが、当時大好きだった絵をもう少し上手くなりたいという思いから親にねだって絵の教室に入れて貰う事にしました。
その入塾の初日、
絵の先生が、お師匠様の時と同じ様に
「何でも良いからスキな絵を描いてご覧」
と課題を出されたので自分は
「濃い灰青色の空をバックに、同じく極めて濃い焦げ茶色に太い黒で縁取りした大木がスケッチブックを所狭し、と埋め尽くす様な」絵を描きました。
それ迄周りから結構褒められ、幼いながらに絵には多少自信があったので、生意気にも
「ちょっと脅かしてやろう」
という気配から描いたのでした。
それを見た絵の先生は、案の定
「君、面白い絵を描くね。この歳でこんな絵を描く子には初めて会ったよ」
と、仰いました。
自分は内心「我が意を得し」とばかりに、心の中でこっそりと得意げに笑みを浮かべました。
ところがその後、絵の先生は
「面白い着想だが、この絵には救いがないね。見る者が暗い気分になってしまう」
そう言った後先生は、パレットの上に明るいレモンイエローの絵の具をチューブからたっぷりとしぼり出し、その真ん中に細めの絵筆を突っ込むと、水で薄めもせず、水彩で描いた絵の黒々とした木の枝の数カ所に、固まるとレモンイエローの絵の具が立体になる程盛り付けました。
ランダムな間隔で、多すぎず少な過ぎず、に。
「こうすると、もっといいかも、な」
葉っぱのない樹木に実がなる筈もなく、かてて加えて、この木はレモンの成る木ではない。
詰まり現実にはあり得ない絵なのです。
それは小学四年の自分のつたない知識でも分かりました。
しかし…
この瞬間に自分は、将来絵描きになる夢を諦めました。
「まるで違う」

そう思ったからでした。

2021/6/12

（「JY」）

五輪に関連して外国のある委員会の副会長が「KY(空気、読めない)発言をした」
とか言う記事を目にしました。
で
「あっ、またやってらぁ」
と。
そもそも、外国の人は概ね「周りの空気」というのはそれ程関係ないのです。大抵の人は周りがどうあれ「自分はこう思う」と言う事をはっきり言う傾向があります。例えそれが私利私欲に根差した欲得まみれの内容であってもその傾向は変わりありません。
どうも我々は海外寓話の「裸の王様」の印象が強すぎて外国でも「KY」が主流だと勘違いしている帰来がありそうです。
一方我が国の多くのライターは兎に角も自分が全く気づかない程「KY」まみれになっている様です。
読者の空気を読み、編集長の空気を読み、帰宅しても奥さんやお子さんの空気を読む事まみれの生活をしているので、ついつい「あの副会長はKYだ」という記事を全く無意識のうちに書いてしまったのでしょう。
無意識的論拠としては当然、上述の「裸の王様」
以前は
「ペンは剣よりもつよし」
というのが一般的でしたが、現在に於いては
「ペンはご機嫌伺いより、遙かにもろし」
が一般的なのかもしれません。
と、長過る前置きはこの位にして、この「KY（空気、読めない）」より遙かに困ってしまうのが当店始め外国人従業員の居るお店での、彼らの
「JY」
即ち日本語の「字が読めない」
（JK：女子高生に倣っての JY：女子予備校生ではありません。念の為）
確かにひらがなやカタカナが読める外国人さんは結構います。しかし漢字が入るとなると…
そもそもニュースのテロップやフリップでひらがなとカタカナだけで書かれたそれを見掛けること等殆ど在りません。
なので、折角覚えたひらがなやカタカナが少しも役に立たない場合が多いのです。
そうして漢字は当用漢字だけでも彼らからすれば「天文学的数（かず）」に昇り、大抵の外国人さんは此処で日本語の習得を断念してしまいます。

もし漢字、カタカナ、ひらがなという３ウェイではなくアルファベット１ウェイに絞られたとしてもそのアルファベットが 2000 文字以上もあったらどうします？
その感覚なのです。彼らは。
であるなら、同じアルファベット、我が国で言うローマ字を使った日本語読み（一種の発音記号扱での）市中看板、案内板表記やニュース、日常の筆談等を進めた方が、外国人さんの我が同朋とのコミュニケーションと日本語会話能力の向上には手段として遙かに有効且つ実際的だと思うのですが、如何でしょう？（ikaga de shou？の様に：音節区切で）
外国の方は英語に関してそれほど厳密な事を求めてはいないのですから我々も日本語に関して同じ許容力を示してもいい気がします。
それを
「日本に来て日本語を覚えないのは失礼千万」
と切り捨ててしまうのは余り得策ではないし優しくもない気がします。
仮に皆さんが外国に行かれて
「正しい英語以外は受け付けないぞ」
と言われたらどうします？
「…（絶句）」
そういう事です。

2021/6/13

（役に立つなら何でも使おう）

元友人が自分のベンチャーで新しいシステムを開発した際、自分に
「もちろん世界初だ」
といってきた事がありました。
最初は
「へぇーすごいなぁ」
と思いましたが、そのほんのゼロコンマ数秒後に
「んっ？」
と何か違和感を覚えました。
話は変わりますが、我が国では全くの無意識レベルで「新旧が良悪と混同視」されているような気がします。
守「旧」派と革「新」勢力等二代表される言い方に。
しかし冷静になって考えて見れば「旧い」中にもとても有用なものもあれば、確かに進化進歩の足を引っ張るものもある。
反対に「新しい」ものの中にもゴミの再生産みたいなものもあれば、未来に繋がるキラリと光るものもある。
であるなら大切なのは物事の「新旧」ではなく物事が今の我々にとって「有用か不用か」なのではないかな、と。
仮に「旧」の中の進化の足を引っ張るものと「新」の中のゴミの再生産部分を取り去り、今度は「旧」の中のとても有用なものと「新」の中の未来に繋がるキラリと光るものを抽出して組み合わせればとても良いものが出来るでは、とも思います。
一方新旧起算の世界初ならぬ「世界一」についても同様の事が言えそうです。
例えば世界一になったとして、なったその後はどうするのでしょう？
変な話遣る事と言ったら「王座維持」の守りだけです。
上ではなく下ばかり見る事になります。
言い方は悪いですが「蜘蛛の糸」の「カンダタ」になってしまいます。
又々話は変わって
「葛飾北斎」
当時北斎は浮世絵界において日本一。浮世絵が日本にしかなかった事を勘案すれば世界一でもあった筈です（今も、でしょう）
当然功成り名を遂げて「分反り返って」居てもいい身分だったでしょう。
しかし彼は 85 歳を過ぎて尚「鶏の絵一つ満足に掛けない」と悔し涙を流し、仕事場の板張りを拳を上げてドンドン叩きつけたとか。

恐らく北斎が見ていたのは世界初や世界一というレベルのものではなく「ただ只管納得のいく絵が描きたい」という「次元を異にする目標目的（情動）」だったのではないでしょうか。
相対的順位ではなく「自分にとっての絶対的納得（情動）」だったのではないかと思います。
世界初や世界一は、たまたまその過程で「結果そういうポジションになっていた」だけという将に数多ある通過点の one of them のエピソードでしかない。
自分がそう述べたのではなく周りが気づいてそう言っただけの話。
「自分の興味外」
こうしてみると新旧の違いや世界初、世界一であるか否か等の record 価値や誰の手柄かと言った名誉争奪の話は「我々」にとってはどうでも良い話で、それによって「今や未来が良くなるのか否か」の貢献度合いにしか我々は関心がありません。
有用であれば旧いものでも、世界 100 位でもかまわない。
「役に立つなら何でも使おう」
それを痛切に感じる現下「コロナ渦の日々」
「今渦からの脱出」を考えるに当たり益々その念を強くしております。

2021/6/13-2

（おしらせ）縦書

当店の google my-business での口コミに関しましては、評価１（最低）のものも含め、当店側では店の透明性や公正性のために一切削除せず、手を付けずに敢えてそのまま掲載しております。
もし、評価１の口コミがＨＰ上に見当たらないとすれば、それは当店の回答をお客様ご自信が納得されて口コミ内容を取り下げられたのだとご理解くださいませ。
ただ、評価点数毎の件数としては、事のいきさつが分からないまま評価１という結果だけがそのまま残ります事は、当店側の地道な改善努力内容が他のお客様（或いはお客様候補様）には見えない分、大変口惜しゅう御座います。

ナマステエブリバディ亭主。

2021/6/14

（コロナ渦後飲食業絵姿）

街中が嫌で渦中逆に滞在人口が増えた郊外に居た事。
店の規模が小さく売上高減少で員数人件費、家賃、リース費用等固定費のはみ出しが比較的少なかった事。
味だけではなくそれ以外の無形資産（話題の提供）にも開店当初から投資をし、継続してきた事で「この店にしかない」独自性が生れ「味以外の気になる何か」でご来店数激減を回避出来た等、
諸処の幸運から現コロナ渦の大波の中で未だ当店は辛うじて存続しております。
その発想の根底にあったのが
「お客さん（たまたま隣に居る人）との交流を第一目的とする」
というもの。
ここでいう「交流」とは何も「仲良し小よし」な関係だけではなく「時には言い合いをする」「時には一肌脱ぐ」「可能な限り本心の話をする」といった「手応えのある密な交流」を指しています。
大袈裟な言い方ではありますが、自分が最初に思い描いた言葉そのままを使って申せば
「良くも悪くも、こころの琴線に触れる」
でした。
そうした包含的な上位概念を持って運営してきた事がある程度「奥懐」となり幸いした様です。
そうして今、此れ等の考えを元に今後の飲食業界（接客業界）の在り方を描いてみると
まず
味だけではなく「味とスタッフ（人）」
を両輪とし、その舞台としては郊外型小規模多店舗展開を大前提とする。
具体的に申せば、
お客様に対しては
「調理場と客席が近い事での臨場感」
「人声と温度の伝わる距離感」
「次回来店時、常に何かしらの発見」
を重視し
従業員に対しては
お客様へのスタッフサービスの質の向上を目的として
「細かい就業規則の廃止。せいぜいあったとして「嘘をつかない」「ベストを尽くす」くらい」
「店舗、職務毎の独自性を重視した裁量権限の拡大」

「それを可能にする「失敗経験の前向き」評価」
の重視等です。
特に最後の策の具体例としては既に当店で採用しております
「失敗すればその翌月の給料は下るが、改善すればその翌月から給料は戻る乃至はもとより更に上る給与制度」
です。
我が国の大半の企業の様に一度失敗すると元の給与水準に復するのに何年も要する事のないよう「スープの冷めないうちに」直ぐさま実態変化を給与に反映させる仕組みです。
是により外国人従業員の向学心とチャレンジ精神がアップし明るく活発になり接客レベルがかなり向上しました。
以上を総合すると今コロナ渦後の飲食接客業のニューノーマルは決して「無人店舗」や「大規模店舗」では無い気が致しております。
それは予測と言うよりも「大規模無人店舗」等と言うお客様にとっては「面白くもおかしくも無いものがのさばる様な世界」になって不味かろうという思いに駆れ敢えて「大方のマーケティング・プロの「流されるまま」の予測」に「それは違うだろう」と竿を差したいというのが正直な処で御座います。
追記）
接客の充実は人にしか出来ませんので、雇用拡大により経済効果が人そのものに還元されもします。

二〇二一年七月の巻

2021/6/22

（ナマステ別館堂主人　あれから二年）

「馬鹿が戦車でやってくる」
「わだばぬほんのゴッホぬなる」と言った版画の棟方志功だったか、放浪の天才画家山下清がモデルだったかは忘れましたが、子供の頃のテレビ番組でそんな題名のドラマを遣っていました。
その「戦車」が当店にやって来たのです。
「馬鹿」は乗っておりませんでしたが代りに「脳天気」な自分の処へ。
戦車と言っても無論本物ではなくプラ模型の戦車と艦上爆撃機と全長50㎝はありそうな戦艦。
是は或ご老人の遺品でした。
いずれも大変手間の掛かった凝った仕上りの物で可成りの趣味人だった事が伺われました。

事の経緯は、自分の知り合いの「故人とバイク仲間の新聞屋さん」が或時配達に行くと新聞受けに数日分の新聞が溜まっているのを不審に思い、警察に届けたところ家の中で孤独死しているのが発見されたのだそうです。
その新聞屋さんは離れて住んでいる親族から遺産整理を頼まれ、その中で不用だと言われたのがそれらのプラ模型で、ならば捨てるのも何だからと自分が譲り受けたのでした。
最初は
「今のご時世、こんなものを店に飾って置くと軍国主義者だと言われかねない」
なので、子供の頃から模型作りが大好きな自分としては
「誠に残念だが仕方が無いので家に飾って一人で見て楽しもう」
そう思っていたのですが、チラ見をして行く通行の方々の様子を見るとはなく見ていると、結構面白がっているのが見て取れましたので、
「ならばこのままにしておこう」
と意を翻しました。
するとその数日後の夜、お店へテイクアウトをしに来られたお客様の一人がカリーの出来る迄の暇潰しにこのナマステ別館堂の方に入って来られたのです。
夜は「蔓延防止対策の関係」でお客様の入店を制限し、自分の「ぼんやりし処」になっているこのナマステ別館堂の方に。
そうして飾ってあった遺品のプラ模型を繁々とご覧になられて
「面白いものがありますねぇ。アメリカの戦艦ミズーリ。艦上急降下爆撃機のドーントレス。それとこの戦車は、多分陸自の 74 式」
「お若いのにようご存じで。
これは或方の遺品で自分も子供の頃よぅけ模型を作ったりしていたので船と飛行機の名前迄は分かったのですが、この戦車迄は分かりませなんだ」
「この戦車、大震災の原発事故の時、派遣された奴なんですよ。74 式というのは 1974 年式の事で当時米ソ冷戦真只中。水爆が落ちた後も行動できるように完全密閉構造で設計されていたので派遣されたんです」
驚きました。
いや魂消（たまげ）ました。
物作りをする時にそんな想定領域がある事に。
そうしてそんな事を知っている人が居る事に。
更にはそんな人が偶然にも当店を訪れた事に。
世の中というものは矢張不可思議で面白い。
ある日突然、全く関連の無いものが、想像やにしない理由で突如繋がる。
是だから自分はぼんやり座っているだけの別館堂主人を止める事が出来ないのです。
２年間色々言われ続けていますが。

2021/6/24-2

（本当の投資）

今コロナ渦の我が国。
株、商品先物「投資」市場や都心部での土地価格等「資産」価格は上がっているのに消費者物価や賃金はまるで上がらない現象が起きております。
諸外国も資産価格は上がっておりますが、物価や賃金も上がる中では全くの異質状態です。
なんで？
紙幅の関係で端折りますが
心理１
値上げ又は高価格は悪である。庶民の敵であると生産者側も消費者側もそう思っている。
ので、そこには手を付けない。
心理２
備えあれば憂い無し。経営者の第一の仕事は「備えを厚くしておく事」である。庶民の側もその防衛手段の最大は「貯蓄」であると思っている。
ので、ひたすら守りに徹する。
心理３
出る釘は打たれる。正しいか正しくないかではない。他と違っていないかどうかが何よりも大切。
なので、波風は立てない。リスクを取らない。
官民、お上、庶民共に。
以上の３心理を非常に大胆に纏めると「何より現状維持で、手厚ければ手厚いほどよしとされる安心安全指向」となります。
そうしてこれらの「触らぬ神に祟り無し」の「鳥の目を持たない井の中の蛙思考」
今風に申せば精神的「巣ごもり思考」が、もう一つの大切な経済学的事実に気づく視点を疎外してしまっているようです。
その視点とは
「生産者は同時に消費者でもあり、消費者は同時に生産者でもある」
という視点とそのダイナミズム。
このダイナミズムを理解した時に「消費者物価＝生産者の商品の値段」が上がりそれに比例して「生産者社員であり、給料を受け取って以降は消費者に転じる者の」給料も相似比率的に上がれば、社会、会社、従業員（＝消費者）共々happy cycle の win-win 関係になれる筈です（＝良いインフレ好循環）

諸外国は是を理解し「まず、自分が手を上げないことには」となっていますが、我が国に於いては官民、お上も庶民も「ただ（ひたすら）周りがすれば、自分もする」という「隣の芝生の育ち具合様子見」の習慣的姿勢から一歩も抜け出せずにおります。
「お金は使わなければ入ってこない。金は天下に廻してなんぼのもの」
「金を使うは、人助け」
と誰しもが思えば、結果自分が助かります。
（お金は絶対に自分の前を歩いては居ません。自分の為した事の後から結果として着いてくるものの様です）
それをせず「我が身の安泰＝損失のミニマム化」ばかりを考える狭い視野のままでいると、結果いつまで経っても世界の中で我が国だけがデフレ状態から抜け出せない事になってしまいます。
生産者の長、即ち経営者は率先して賃金を上げ、生産社の社員、即ち消費者も率先して消費を行う（お金を天下に廻す）
「資」産を保障無しで先に「投」出すリスクを取り、後はその結果を待つ、という意識変革と勇気ある行動。
それが本当の意味での「投資」です。
もしこの「本当の投資」を今から国民的に起こさなければ早晩我が国は、知らぬ間に誰も顧みない忘れられた存在になって居る気が致しております。

2021/6/30

（近況報告）

ここ数日、当コーナー「うとQ世話し」の記事がめっきり減っていることについて、近況のご報告を。
一つには「オマケの英語教室」を書く方が面白くなった事が挙げられますが、実はもう一つ理由が。
それは、手持ちのPCが二台ともまともに動作しなくなったからです。
現役のPCがこの1週間でノータッチなのに突然シャットダウン。しかも7回も。
そのせいで、書いている途中の「うとQ世話し」が7立てで吹っ飛んでしまったのです。
元々が下書きもせず、書いているときはとても集中してはいるのですが、書き終わったら何を書いたのかさえ、六すっぽぅ覚えていない事が多く、途中で寸断されるとストーリーもいっぺんに消えてしまうのです。しかも 7 本も立て続けに書いているとどのストーリーがどれだったのかがゴチャ混ぜになってしまって再現するのが不可能になり、早々に諦めて気分転換代わりに「オマケの英語」に切り替えてしまったので、結果、記事が少なくなってしまいました。
（何故かオマケの英語を書いているときにはアクシデントが殆ど起きないこともあって、です）
現在、現役 PC は修理に出して手元にはありませんが、今使っているこの PC も極めて不安定なので、いつ吹っ飛ぶかひやひやしながら書いております。
1台目は既に3か月前の前回、マザーボードを修理で完全入替えしているので、恐らくハード系ではなくソフト系のトラブルだと思われます。又 2 代目の旧機種も同じようなトラブル（こちらは突然ブルー画面になる）が起きておりますので、OSの更新とPCメーカーの、それに対応したファームウェアのアンマッチか、或いはそれより更に手前の各PCメーカーが独自に開発又は専業会社に委託して開発し搭載する BIOS（basic input and output system=要するに動作指示の入り口とその結果の出口）系に問題があるせいなのかもしれません。
兎に角、譬えとして「一日中二人羽織でものを食べるようなこと」をやっている」状態ですので、ストレスがたまる事この上なしです。
それで「うとQ世話し」の方はしばらくお休みさせていただいている次第。
以上近況報告でした。
追記）
ここまでは無事に書けましたので早速外付け HDD の方にこの記事をストックいたします。
自動保存も働いているのやらいないのやら定かではありませんので、消えてしまわないうちに。

2021/7/5

（うとQ世話し＋オマケの英語教室

Why does it happen?　前編）

叩かれることを覚悟の上で、一筆啓上仕ります。
オマケの英語教室を書いていましたら、幾多のご指摘を頂戴いたしました。
まぁ、大半がお叱りと訂正要求なのですが。
しかし、止めようという気にはなりません。
失うものより得るものの方が多いと思うからです。
こういったご指摘やお叱り、訂正要求が受けられるのも、自分が言葉を発したからです。発しなければお叱りを受けることや訂正要求を受けて「つらい思い」をすることもありませんでしょうが、同時にそれはご指摘を受ける「チャンスを失うこと」にもなるからです。
以前或るSNSで「早朝レストランに出社すると、バックヤードでカラスが錘代わりに置いておいたビール瓶のダースケースを押しどけてあさり、そこいら中がゴミだらけになっていたので「カラスは怖い」」という投稿をしました。
その折、名前からして英語が母国語ではない見知らぬ外国人女性の方から
「Yes, crows is very fear」（そうよ。カラスは怖いわ）
と有り難い事に思いがけぬメッセージを戴いたのですが、その同じ板に横から日本の方が「crowsで複数形ならare、isが正しいならcrowじゃないとおかしい。あなたは間違っています」とその外国人女性宛てに英語で「誠に正しい指導」をなさったのです。
余りに正しくて腹も立つし、女の人が可哀想だったので

「I noticed it at the time. But just at once I understood what she wants to say, then no said concerning to it」（直ぐに気づいたけれど、彼女の言いたいことはわかったので、そのことに関してはなにもいいませんでした）
と横から書き込みを入れました。
こういった心の中でひそかに自分を「相当レベルのインテリだ」と思っておられる方々は、英語をコミュニケーションの道具としてではなく、自分の有能さを見せつける、或いは相手を威圧する道具として無意識の内にも位置けて使っていないでしょうか。蛇足ですが、こういう方々は敢えて難しい単語を選んで使ったりもします。自分の高位を示し、相手をひるませる為なのかもしれません。
だとすればそういう観点を少しでも抱いている方々は聞く側に立っている人たちも含めて、英語と訊いた途端に気分が重たくなるのも当然の事でしょう。ちっとも楽しくなんかなく、疲れて当たり前です。それこそ外交交渉の時のように。
外国人は案外おおらかです。大抵の事は no problem（大丈夫よ）
文法的に間違った言い方をこちらがしても、意味が分かれば細かな指摘をしたりすることなんかしません。指摘するのは職業として英語を教えている外人講師で、しかもその英語教室での時間内にするくらいのものです。それは職業なので仕方がないでしょう。
それではいったい誰がチェックを入れているのか？と言えば間違い指摘は決まって日本の人たちなのです。
（中編へ続く）

021/7/5-2

（うとQ世話し＋オマケの英語教室

Why does it happen?　中編）

（前編続き）
英語を話すというのはインテリジェンスの証明、有能である事の証明、人格が高位である事の証明、いずれでもありません。
そんな意味不明な尾ヒレがついているのはわが国だけではないでしょうか。
以前にも申し上げましたが外国の人はわが国で英語を話す人に出会うと
「素晴らしい知性の持ち主だ」等とは一切思わず単に
「英語を話す人がいて助かるぅ（helpful）」
位の事なのです（逆に言うと彼らは助からずにいるのです）
ですので、自分が勧めているのは翻訳のプロになる事でも外交官になる事でもありません。
国内外によらず、たまたま隣にいる人とコミュニケーションを取ってみませんかと言っているだけなのです。
眼を転ずれば我が国全体の日常会話においてさえ外交交渉モドキの駆け引きに満ちた会話が溢れかえっております。そうしたお互いの読みあいや腹の探り合いをする様な生活ばかりしているから恒常的に疲れるのです。
なぜなら全ての会話に利害が絡み、相手全てが自分の事を植民地化しようとする列強諸外国に見え、自らも隙あれば相手を自分の属国にしようとする様な事ばかりしているからです。
どこにも友好関係が存在していないのです。
外国人は異国で同国人に偶然会うと直ぐに声を掛け合いますが、我々は外国で日本人に合うと避ける事が多い気がします。

折角監視の目から解放されたのに、またぞろ外国で外交交渉の真似事をしたくないからではないでしょうか。
例えば、交渉後に少しでもいいポジションを得る為の相手の様子見や出方待ち、より直截に言うと相手の失策を待ってから切り札を出す「後出しじゃんけん」姿勢。
又は「抜け駆けなしよ」の公平の名の元に強いられる横一線並び。それを破ると途端にどこからともなく同調圧力が掛かかり暗黙裡に横一線ラインに引き戻される息苦しくなる様な相互監視生活。
無論男女やご近所間も同様です。
外国で屡々日本人女性が騙されたり犯罪被害に遭ったりするのは、外国人男性が我が国の様に男女が腹の読み合いみたいな事をせずダイレクトな感情情表現や要求を出してくるので、女性も隠密潜航潜水艦生活の国内では決して出せなかった本来の欲求がついつい素直に出てカモられるケースが多い様な気もします。
そうした被害を未然に防ぐ為にも常日頃から「様々な経緯を持った人達とのコミュニケーションに慣れておく事」が肝要です。練習もせずにいきなりオリンピック競技場の真ん中に立つ様な無謀な事態を避ける事です。
その為には日頃から以下を意識するといいかもしれません。
「言葉を発しない限り何も伝わらない。
相手が声をかけてくれるのや英語でも程度が大学教授レベルになるのを待っていたら人生は終わってしまう」
こうなってしまった一因として
「振るい落とし（＝間違い探し）専門の厳密教育（就中英語）」
が悪い寄与をした事は否めない様な気が致しております。
（後編へ続く）

2021/7/5-3

（うとQ世話し＋オマケの英語教室

Why does it happen？　後編）

（中編続き）

２か月程前、ほんの短い瞬間

「そういえば、立花隆をしばらく見ないなぁ。どうしてどのメディアも彼をフォローしないのだろう」

と何の前触れもなくふと、そう思いましたが、先月訃報に接し、その後ついこのあいだ、テレビで４月の末に亡くなられた「知の巨人」（で且つ科学的実験者及び行為者：括弧内筆者付加）と称される立花隆についての特集を見ました（矢張フォローしているチームがいたのです）

今から 10 年程前の生前の映像がずいぶん流れたのですが、著名人にありがちな「作り」がありませんでした。表情も変に穏やかでもなく、敢えての険しさもなく、ありふれた普通のそれ。

それらの映像の中で、お名前は存じませんが、恐らく「相当のレベルの権威」と思われる「長年の友人である老人」と話している映像がありました。

場所は、その方の庭先。

立花隆が尋ね、その方が答える。すると立花隆は「ふーむ。なるほど」という顔になる。

変なへりくだりもなしに、唯々「なるほど」という顔をしている。
相手の方も権威であるにもかかわらず「どや顔」が全くない。
こうした場面によくありがちなお互いがお互いを牽制しあうこともなく、背伸びの仕合っこもない。地に足がしっかりと着いている。
或いは、その反対に権威の方が尋ね、立花隆がぼそぼそと答えるのですが、その場合も前述同様、牽制もどや顔もないのです。
お互いがお互いに「へぇ」と「成程」と「なんで？」だけ。
お互いに大変くつろいで話しているのが分かりました。
そうして、その時の会話に使われている立花隆の英語は発音も悪く決して上手いものではありませんでした。
しかし話の中身が濃く、受け答えに誠実さとお互いへの興味が深々と感じられました。
30 年ぶりに再会したのに、まるで昨日した話の続きであるかのように話に直ぐはいれたと後日その方がおっしゃっていたとのナレーションが入りました。
その話を聞くにつけ中身がないのに形だけ整える事のあほらしさ。
まずは中身を持つ教育。
次にそれを整理する教育。
そしてそれを相手に伝える教育。
中身がなく形だけ整っている礼儀無き行儀良さは、巧言令色少なき仁又は慇懃無礼にしかなりません。
話す英語は完璧なまでに正しいのに、聞く気にもならない話をされたら、恐らくこのお二人は、その場では何も言わないでしょうが、二度とその庭先にその人を呼ぶことはないような気が致しました。
最近我が国では、英語教育同様にプレゼンテーションノウハウやスキルアップの向上に関する教育は、そこまでやるかというほど事細かにされているようなのですが、肝心かなめのプレゼンテーションの中身の教育となると「お寂しい限り」のような気も致します。
なぜこのようなことになってしまっているのか？Why does it happen?
引き続き考えていきたいと思っております。
（追記）
最後に立花隆さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

2021/7/8

「何故我が国だけデフレから抜け出せないのか」1/4

命題：なぜわが国だけがいつまでたってもデフレから抜け出せないのか？
　　：換言すれば値上げも賃上げも起こらないのか？良いインフレにならないのか？
その原因を本日は自分なりに探ってみたいと思います。今日も叩かれる覚悟で。
「生産者は同時に消費者でもあり、商品・サービスの妥当な値上げが賃上げに連動すれば消費が盛んになり、結果消費者のもう半分の側面である生産者をも潤し、経済の好循環に両側面から寄与する」
これを一言で簡単に言うと
「お金は使わなければ入ってこない」
です。
雇い主である生産者は従業員に給料として、消費者でもある従業員は市場に商品購入代金としてお金を使わないと、消費者のもう片方の側面である生産者側にはお金は入ってこないという悪いスパイラルが産まれてしまう訳です。
諸外国では上述の傾向が顕著であるデフレを回避する為には「お金は使わなければ入って来ない」という考え方は働く側からの理解も得らえるのに何故わが国ではそれが許されないのか？
自分はこの「いかなる理由があっても値上げを許さない」風潮が、海外からの安い製品輸入による価格引き下げ圧力以上に大きな要因だと考えております。S
これをご説明申し上げるのに「江戸時代へ時を巻き戻すタイムスリップ」をしてみると分かり易そうなので是から試みてみようと思います。
まず「値上げ」と耳にすると我々が直ぐさま抱く感情は「善良な庶民（＝消費者）に対する弱い者いじめ」ではないでしょうか。
そうして、生産者はお上と結託して暴利を貪る悪徳商人「越後屋」
TV ドラマのあの有名なセリフ
「越後屋、お前も悪（ワル）よのう」
「いえいえ、お代官様程では」
そして二人「ガハハッ」の大爆笑、のあれです。
この時代劇を見て子供の頃は
「また今回もやってらぁ」
と呆れながらも笑っておりましたが、実はこのセリフが案外我々の脳裏深くに染みついて作用しているのではないだろうか？と思い始めました。
同じ時代、アメリカの TV ドラマ「パパは何でも知っている」の中に出てくる物わかりがよくてスマートで優しい父親像、フェミニストでインテリ。且つ家の中でも上品にカジュアル・ブレザーを着こなし、決してステテコ姿にならないその姿が、その後の時代の「母親か

ら見ても、そして父親自身も」父親の理想像は斯く在るべしと重々納得の上、決定づけたのと同じ程の作用があったのではないかと思っております。
（続く）

2021/7/8-2

「何故我が国だけデフレから抜け出せないのか」2/4

話を江戸時代に戻しましょう。
では先にお話しした江戸時代の、特に身分制度「士農工商」に焦点を当ててみましょう
江戸時代、我が国はまだ農業国だったので人口比率から申しますと階位二番目の「農」が最も多かったと推察されます。
何故「農」が階位第二位と高位だったのかと申しますと、階位第一位の「士」が「農」から年貢を納めさせるのに前向きなモチベーションを与える為、第二位という高い階位を授けた様です。是は同時に「農」の不満をそらす綬名誉褒章でもあったようです。
その「農」やその下の「工」から見て、階位最下位の「商」如きが階位二位、三位の上位階級を差し置いて「士」に取り入り暴利を貪る等もっての他である。
それには同じ「商」の中の豪商ではない「零細商」も同じ階位の同列地位者に出し抜かれた「近親憎悪」的な感情も関係して「お上と大商人」（今でいえば国や役所と超大企業）は庶民の最も忌むべき敵である」という感情の下地ができたのではないかと推測しております。
つまり諸外国で理解されている「生産者と消費者は 2 チームが別々にある訳ではなく、結局は公私の捉え方に起因した同じ人間の両側面である」という認識が我が国では「お上対庶民」「強者対弱者」「悪対善」の完全二項対立軸、即ちどちらか一方純度 100％の混じりけなしの存在、換言すれば一方が 100％完全悪で一方が 100％完全善、更に換言すれば、わが国民性によくみられる純粋「一」の思考、即ち「完全一方傾斜」として相いれないものになってしまった様な気がしております。
そうして事実又「最下位から抜け出した」一部の大商人とその後継者達が、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」の「カンダタ」の如き振る舞いをし続けてしまった事もその思潮に更なる拍車をかけたのかもしれません。
なので、値上げ→賃上げ→賃上げ分消費→経済好循環を淀む事なく実現させる為には、前者の方々は
「カンダタの様な優越的地位を利用して弱いものを切り捨てる態度」を改め、まずは賃金を上げる
（前回のバブル崩壊時に解雇した技術者が渡海し、彼の地で安くて良い商品を生み出し、それがブーメランとなって逆輸入され、その後のデフレ時代の端緒となった経験も踏まえてです）
又、後者の末裔である我々はまず上述のワンサイド思考を止め
「経済における同一人間存在の両面性に気づき、わが身可愛さから溜め込むばかりでは、結局自身の首を絞める事になる。ここは「自他ともに救わん」と、自分の方から手を上げる勇気を持つ必要がある様に思われます。

「それじゃ誰が勇気をもってやった事の保証をするんだ？」
「それは自分です。でないと今迄と何も変わりませんから。100％のお膳立てや保証の取付け完了を待っていたら、それこそ人生は終わってしまいますから」
それでも怖いなら最後に一句
「赤信号（デフレ再来）みんなで「使えば」怖くない」
（続く）

2021/7/8-3

「何故我が国だけデフレから抜け出せないのか」3/4

以下は、昔の自分とその周りの家庭から見た限られた世界の中での話で、すべてに当てはまるとは言えそうもありませんが、当命題に関する何かのご参考になるかもしれませんので、書かせて戴きます。

本稿でお話しいたしますのは、特筆すべき我が国固有の層によるデフレへの影響についてです。

昨今ではその層は、崩壊しつつあるようですが、当時はかなり幅を利かせていた様な気がします。

では、その特筆すべきわが国固有の層とは何か？

それは各国から見て抜きんでてその比率が高い「専業主婦」の層と一度就職すると終生、同じ公的、私的企業の同じ職場という労働流動性皆無というのが大方で、文理系比率から言うと圧倒的多数派の文系スタッフ職インテリ層の存在でした。しかも当時の序列から言えば営業、生産現場よりも圧倒的に本社スタッフの方が上と格付けられておりました。

その男女が「3 高」を軸に結婚をし、一時これらの夫婦層が我が国のオピニオンリーダー的存在であったインテリ家庭層の多くを占めておりました。

（注釈：スタッフとはラインに対する言葉で、御本社様と現場工場の比較イメージです。又 3 高とは高学歴、高収入、高身長を意味します）

斯くいう自分の出身家庭もこれを絵に描いた様な家庭でした。

父は法学部出身で、当時会社の中で出世コースの最右翼とされた総務部に属し、母は高等女学校の学徒動員により縫製工場で働いた以外は職場経験全くなしの専業主婦でございました。

只、他と違っていたのは、父は正論を述べて上司の怒りを買い「スタッフがラインに行ったらどういう事になるか」の目論見で、当時としては大左遷である製品事業部に飛ばされ、そこで「目論見通り」経営手腕を発揮できなければ「絶海の孤島支店御一人様店長の辞令必定」の苦労を味わった事と、母は専業主婦とはいえ、兎に角働く事が好きで、朝は 4 時から夜は父が帰宅する 12 時近くまで毎日働き詰めに働いていておるところでございました。まるで泳いでいないと死んでしまう回遊マグロみたいに働き続けておりました。昭和 40 年代の事です。

同じ昭和 40 年代の同僚世代の一般的な労務環境と言えば、上述の通り業種間はおろか社内労働流動性すら殆どなく、スタッフ（事務系管理部門）からライン業務（営業や生産などの現場業務）に職種変わりする事は皆無と言ってよく、その頃急速に広がり始めた中産階級の専業主婦は、当時の流行語でいう「有閑マダム」となって持て余し気味の時間を社会に向け始め、その中でも夫婦共々アメリカナイズする事を信条とする「有閑インテリ専業主婦」が

夫の立場を通して影の実効支配層となり世の中に隠然たる影響力を持ち始めた頃でもありました。
アメリカと言えば別称「訴訟大国」でもあり、そういった思潮もオピニオンリーダー的文系インテリ家庭層に流れ込んできていたように思われます。
（続く）

2021/7/8-4

「何故我が国だけデフレから抜け出せないのか」

4/4 終章

同じ会社にいながらスタッフ文系インテリ層は営業や生産の苦労、経済のメカニズムを、実感を伴うレベルでは全く分からない。
一方専業主婦は、消費はした事はあるが生産に携わった経験がまるでない。名付けて言えば
「生涯消費専門」更には「生涯ヒロイン役専門」の様な。
そうして夫が文系インテリの総務部勤務か何かで、妻が専業主婦オンリーの家庭では、当然育てられた子供も無意識にそういう感覚になってしまう。
そこで誕生するのが「生産者は同時に消費者でもあるという両面性」に全く気付かないまま「極度に消費者である、特に都市部の大企業就労家庭群」でした。
彼らの特徴としては、利害に関わる自社系列の製品は貶さないが、関わらないとなると信じられない程相手を叩きまくるというのがあった様な気がします。特に品質、とりわけ価格については、自社の現場がどれほど原価低減で苦労しているかを全く見ていないので、そういった歯止め作用が働かず「知に長けたインテリ」というエリート意識も手伝って「自分のやっていることは正義である」という自己付与のお墨付きから過酷な迄に容赦なく他の製品メーカーやサービス会社を叩いた訳です。
「自分はメーカーに勤めている。現場の苦労も知っている。それから見るとあんたの処はまだまだ努力が足りない。顧客の希望価格に沿った中で品質のいいものを出すのが当たり前だろ、あん？」
ピーター・ドラッガーやコトラーを読みはするが、決してその教えを自ら社内では実践せず、現場にもまず足を運ぶことはないので、実際には殆どその苦労を知りもしないのに、あたかも自分の苦労話で、発言の論理的根拠であるような言い方をした訳です。
そうしてその夫を働いた事のない専業主婦さんとお坊ちゃま、お嬢が更に煽る。
一方「パパは何でも知っている」が理想の、その実、実態は家庭内で完全にポチ化している父親の方も「女房子供のご機嫌取り」や自身の「頭のキレを見せたい」事もあって更に声音高く、そのレベルを上げていかざるを得ない。
かくして我が国の「正統な値上げ」とそこからもたらされる筈の「賃上げ」は、同業他社のスタッフ系インテリ家族の主導によって永久に潰された感が無きにしもあらず、でした。
学卒を皆インテリと呼ぶのなら自分もその「インテリ」の文系なのですが、どうも自らを顧みるに「事実を鑑みずに論を先に立てる」様な処が多々散見され、あまり「文系インテリ」である自分の事が好きではないのです。

文系に進んだのは数学、化学、物理の点数がクラスでトップレベルにひどかったからで、もしもう一度生まれ変わって大学に行けるご縁があるのであれば、今度は論理的思考の理系に進みたいなぁと思っております。
仮に進めなくても立花隆や自分のお師匠様の様な「事実に即する」文系だったらいいかなぁとも思っておりまする。

2021/7/9

「何故我が国だけデフレから抜け出せないのか」

4/4＋1「忘れていた結語」

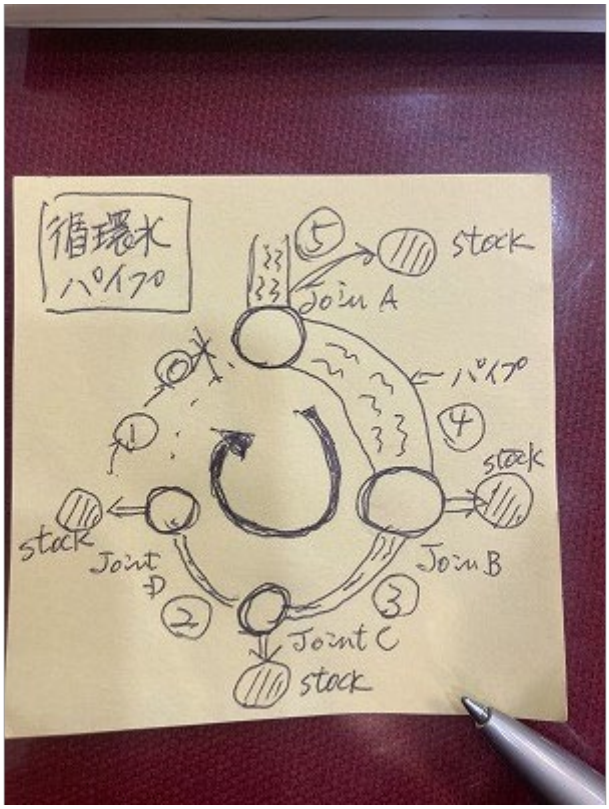
おっと、大切な結語を忘れておりました。立花隆の訃報の印象が強すぎて、ついつい話がそれてしまったようです。
では最後に、
賃上げをするにはまずその原資となるπを拡げなくてはなりません。
πとは何かと言えば、事業の最外周にある「価格の値上げ（=売上高」です。それが、その内側にある「実入りの拡大（＝賃上げの原資＝賃金のアップ）」となる第一条件です。
それをせずに例えば大手が賃上げをしようとすると、決まって下請にしわ寄せがいく事になります。我が国の大半が下請けに近い状態であるとすると、価格を上げないまま大手の賃金が上がると逆に大半の小規模な会社の従業員給与がそれに反比例して下がってしまいます。
ですので、ここは国民全体が、大手のみならず小規模事業者層迄の値上げが、その中で生きる従業員の実入りを増やす側面があるのだという点に気づき、認識を改める必要がある様に思っております。
これに気づき、その認識を新たにしないと再び「いつか来た道」
即ち30年前のバブル崩壊後のリストラ、人材海外流出、海外からの安くて良い製品の逆輸入等によって、我が国にデフレ時代の幕開けがもたらされたブーメランを再度ふたたび受けることになる気が致します。
今回はコロナ禍状況下という事もあり、一度ならず二回目のブーメランを受けた場合、到底我が国の大多数の人々の生活は持ちこたえられず、将来の我が国の絵姿すら描けなくなる「重大局面」に差し掛かっているような気がしております。
ですので、今こそお互い
「価格が上がらなければ給与は上がらない」
「給与を上げなければ逆に会社は持たない」
「お金は使わなければ入ってこない」
と認識を新たにし、最後は
「赤信号（デフレ再来）みんなで「上げれば」怖くない」
即ち
「赤信号（デフレ再来）みんなが「上がれば」怖くない」
にしたいとおもっております。
勿論既述の
「赤信号（デフレ再来）みんなで「使えば」怖くない」

も併せて。
その大前提となるのが労使ともに「お金は使わなければ入ってこない」という海外諸国労使との共通認識でしょう。
追記）
再度、立花隆さんのご冥福をお祈り申し上げます。

2021/7/9-2

「何故わが国だけデフレから抜け出せないのか」

譬え話版



一連の「何故我が国だけデフレから抜け出せないのか」の記事をもっと短くわかり易くできないものかと考えておりました。
自分としては皆様方にきちんとお伝えし、是非とも分かって戴きたいからです。
それで思いついた譬えが
「循環水パイプの目詰まり」
絵としてはリング状に繋がっている水の循環パイプです。
そこに水が流し入れられます。
次に、前のパイプと次のパイプのジョイント地点で目詰まりが起こり、次のパイプに流入する水の量が減ります。
更にその次のジョイント地点で同じく目詰まりが起き、その先に行く水の量がさらに減ります。
かくして先に行くほど先細りが起こり、ついには水が注がれた地点に戻ってくる水の量はゼロになっている。

それでも初めの地点で次々に水が注ぎ入れられればいいのですが、それがたまにしか入ってこないと、最後のブロックは干上がってしまう。
これを現在の我が国に当てはめてみますと、まず初めの注入口 A 社に 5 リットルの売上高が入り、その内いざという時の為にと社員の給与アップには回らない内部留保金 1 リットルが抜かれたとすると、社員は潤いません。
今度は次のパイプが社員の家庭だとすると、入ってくる給料という水の量は 1 リットル減っていますから、当然購買に回す代金という水の量も 1 リットル減ったままです。
となると、次のパイプが購買される側の会社だとすると、薄利多売にして何とか水の量を回復しようと値段を上げないよう、その会社の社員の給料という水を減らすか、商品の質という水の量を減らそうとする事になります。
そうしてその会社は、これまた内部留保用のお金という水を抜き、社員には回らないので、その会社の社員が購買しようとする水の量がさらに減って、次のジョイント部分の会社やその社員には水すら回ってこない事態にもなる。
要するに「お金」という水、我々にとっては血液ともいえるものが途中で滞って体内をスムースに循環していないのも同じなのです。これを放置したままにしておけば、いつか酸素や栄養不足を起こし、場合によっては死に至る可能性すらありうるのです。
もし、上流から流れてきた水をフルのまま流していたら、こういった惨劇は起こらないのではないか？という事です。
それでは、その考えに賛同したとして、この循環の中で何処のジョイント部分が水抜きを止めるか？
というと、まずは自分の処がしない限り誰もやってくれそうもないというのが現在の我が国の心理的実態でしょう。
なので、まず自分からするしかない。
しかし、それでは立ち枯れしてしまうので、周りはその「言い出しっぺ」を孤立させないように、みんなで赤信号を渡りましょう（お金を使いましょう）という事です。
譬えがジャストフィットで譬えになっておらず、うまく伝わらないかもしれませんが、その場合には又新たな譬えを考え出しますから。

2021/7/17-1

「差」を「異」とせず 1/ 7　マーケティングその 1

すべてを見通した上でのお話ではありませんが、身近なものを見渡してみて判断した結果
「現代の分断の元、それは何か？」
の自分なりの答えてとして浮かび上がってきたのは
「マーケティング諸理論」でした。
以下は全くの推論です。
自分が 40 年前に教わったマーケティング理論は、まず「その人の属性」から入りました。
その全体像把握ではなく、その人の部分、パーツ化から。
男か女か？親か子か。家族持ちか独身者か。そのほか、学歴、地位（ステータス）、年収、年齢、世代、居住地域、勤務先等など、今コロナ禍で文言出現率的にはダントツの「クラスター」でおなじみの「クラスター分析」やセグメント分け（セグメンテーション）
このあたりの根本的な考え方や手法は 40 年たった今でも余り変わってはいない様です。
ただ、その 40 年の間に
家電から個電、個電から場（面）電とさらに細分化し、バリエーションももの消費からこと消費、そしてシーン消費など多様化されてきました。
そうして最近ではビッグデータや AI を駆使して行動分析、パターン分析、心理分析、潜在意識深層分析など、あらゆる手法を用いて更に細かく、細かく、そこ迄やるかと言うほど細かく「一人の人間」をズタズタに切り刻み、分断していったその考え方や手法がいつの間にか日常生活や社会生活の全てに浸透し、相手を全体として一括把握するのではなく、まずは相手の属性、即ち肩書き、レッテル等で名詞化（静止固定化）して、部分として引き出さないと相手を把握できなくなってしまったのではなかろうか？と思い出しました。
相手に会った瞬間の
「あっ、こいついい奴だ」とか「まともだなぁ」といった直感、直裁的な判断は端っこに追いやられ、代わりに
「こいつは田園調布居住で国立難関大学出の大手 IT 会社勤務（名詞群の塊）の奴だから●●●」とかに変わってしまった。
では、何故突然にもマーケティング諸理論の中の「属性」という言葉に着目したかともしますと、つい最近あるきっかけがあったからです。
それと申しますのは、半月ほど前ある大学の「異文化研究会」（情報コミュニケーション学部内）の学生さんから、当店が「外国人従業員を雇って商売をしているお店」と言う事で、その店主である自分に「お話をお伺いしたい」との申し出があり、その際に何故か「異文化研究」の一文字である「異」の字が妙に気になり、ぼんやりと考えている内に「あっ」と思ったのです。
（ご参考：名詞の対極は動詞です。肩書きやレッテルではなく「今、何をしているか」です）

（続く）

2021/7/17-2

「差」を「異」とせず 2/7　マーケティングその 2

「異文化、異国、異人（外国人）
もうこういったネーミングの発想そのものが目の前にいる人の全体像をパススルーして、「外国人」という属性だけを切り出してパーツ化し、それにレッテル貼りをする、必然的に最後は分断に至る始まりなのではなかろうか？」と。
であるなら、その属性切り出しのパーツ化から無意識に名付けられた「異文化研究」という名前そのものが既に「ミス」ネーミングで、言い換えるなら、学部名から引用して「コミュニケーション研究会」とした方が的確ではないかとも思いました。
確かに我が国国内では「異文化研究」と言った方が、分り易いのですが、これを英語に訳して外国人さんに説明するとなると、いきなり「different culture」と different がでてきてしまい、相手に身構えさせる事にもなりかねないのでそう思った次第です。
そういえばそれに絡んで、今度は一人の人間の中のパーツ化分断化以外に、隣の人との分断化も進んでいるようです。
一つには、既にお話ししました様に分析過程での属性や特性分けによる「クラスター化」
実はこの英語のクラスターの語幹「クラス class」という言葉は既に「階級」や「等級」を表しており、既にその発想の中に「区分け、区分」から発展したクラスターという「純化指向」の裏にある「排斥指向」が生み出す分断正当化や美名化マジックが潜んでいるともいえるのです。
さて今度はマーケティング諸理論の分析過程の後に来る実践編としての「マーケット攻略法、生き残り戦略、勝ち抜き戦略」についてです。
こういった戦略は大抵「共通項」から入らずに「差」への注目から入ります。
差を増幅させ、際立たせる「差別化、差異化こそ肝要だ」と説きます。或いは煽り立てます。
そうして、論をインパクトあるものにする為、共通項があることは意図的に省いてしまうか、取り扱った場合でも「共通項に埋もれてしまうのは敗因の一つである」とばかりに最大マイナス要素として扱い、差ばかりにスポットを当てます。
そして更に、相手がひとめ見て匙を投げ出す程の差を付ける事が勝因であると、差だけに価値を持たせ、それを際立たせます。
恐らくこれは先にも述べましたようにインパクトを強める表現技法の話で、気持ちがわからない訳ではないとは思いつつも、それでも矢張り聞く側が正しい認識に至る為には、仮にインパクトを弱める事になったとしても、対極の「共通項」を同列扱いで論の中でも触れる必要性を感じます。

何故ならこの世に 100%はないからです。もし仮に 100 対 0 なりそうになっていたら、5 でも 10 でもいいので異物や対極物を挟んで、硬直化（此処の場合「差」こそ最重要アイテムだという事）を避けるべきです。
先の記事でも述べましたように、マーケティング諸理論は、個々人の全体像をパーツ化してしまいました。
また、この記事の前半で申し上げましたように「差」の強調とそれに「こそ」価値があると優位的意味を与える事によって人と人との間のつながりも分断してしまいました。
つまり人の内側も外とのつながりである外側、内外を「バラバラ」にしてしまいました。
そして今又、この文章の直前で述べましたように、訴求技法上対立項や対立軸を設けないことで、硬直化という名の最大の「偏り」に見舞われております。
硬直化、この「100%その傾向だけ」による硬直化とは別名なんと
「完璧」
とも言い換えられるのです。
完璧とは実は完成ではなく完了、即ち事の終わりでしかありません。
マーケティングがこの段になってビッグデータを取り入れ、深層学習や AI を得て完成に近づいていると考えているなら、それは完了、
再び即ち
「そろそろ終わりに近づいているようだよ。代わり時だ」
という
「事の終わりのお知らせ」
であるような気も致します。
（続く）

2021/7/17-3

「差」を「異」とせず 3/7　マーケティングその 3

今から 45 年ほど前、最初に勤めた会社で商品開発マーケティング部門に配属され、そこの商品企画部長から
「商品は武器である。努々（ゆめゆめ）その開発と営業前線への供給を怠るな。武器がなければ前線は殲滅される。弱い武器でも前線を突破される。だから強い武器を作れ。強い武器を作り供給して、前線を助けよ」
との訓示を受けて、魂消たことがありました。
その時、初めてマーケティングが軍事兵法から来ているのではないか？との着想を得ました。
「競合は敵。城壁をよじ上ってくる相手は蹴落とさなくてはならない」
その訓話を耳にして

「なんか、蜘蛛の糸のカンダタみたいでイヤだな」
と思った記憶があります。
そうして又、設計部出身のその部長は
「設計図に曖昧なところがあったら、製品は動かない。隅々まで具体的に描かれていなければ役に立たない。顧客一般などはないのだ。徹底的にクラスター分けして、セグメント化せよ。分析し尽くして顧客要素に分解し、核心を把握せよ」
とも訓示しました。
しかし、自分が在任中、分解作業はゲップが出るほど致しましたが、今思うと結果、顧客の核心には遠く至らず、分解しっぱなしで、最後は
「で、目の前にあるのは何？」
「そもそも自分は何をしようとしていたんだっけ？」
状態になり、答えの見つからないままその職場を去る事になってしまいました。
おおよそ 20 年以上前の事です。
その後、その商品価格部長さんの話をいろいろ考えた末、
「そもそもマーケティングとは、サバイバルの極地「軍事兵法術」の経営版なのだろうと認識するようになりました。
ところが今や子である筈のマーケティング諸理論が「ロスミニマム、即ちコストミニマムの効率化理論」に姿を変えるや親である「サバイバル実学」の軍事兵法をも飲み込み、結果、軍事兵法の中にも事を細かに切り刻む「セグメント＆パーツ化マーケティング」の概念や手法が逆流入し君臨し始めているようです。
その結果、戦争の姿そのものが「多大なコストのかかる」肉弾戦的ではあるが全人戦的武力戦から「圧倒的コストミニマムを求めて」人間を記号、数値化したパーツ・エレメント的に扱う情報戦に切り替わって行く事になった。
それであるが故に却って戦争の恐ろしさ悲惨さが見えなくなっている。全人的に見ないでパーツとしてしか人間を見ていないが為に実感できなくなってしまっている。
パーツ・エレメントなので当然交換可能ですしスクリーン上で記号と数値が展開されるだけなのでスイッチのオンオフ、画面切替えはいつでも可能なゲームと化して行く訳です。
AI の国家活用は「コストパフォーマンスの最大化」という意味で、その極地なのではないでしょうか？
ひょっとしたらそのせいで自分は商売をしながら「最早分断の道具と化した」マーケティング理論や「現実生活の中にあったら鼻持ちならない自分で自分を自画自賛するような」広告を嫌って敢えて重要視せず、AI の活用だの DX と聞くと鼻白んでいるのかもしれません。
この分断は「人種族的或いは階級階層的分断」と言うより、江戸時代、杉田玄白が著した「解体新書」における「腑分け」を思い起こさせます。
当時の腑分けは「目的も意味もはっきりしていた」のですが、現代の「腑分け」はそれが行き過ぎて、遠に当初の目的は見失われ、ひたすら細分化した分析に走る事が自己目的化し、

その暴走が「一人の人間の全人的人格の支離滅裂的破壊」をもたらしているという様な側面があるような気がしないでもありません。
子供の頃好奇心から「目覚まし時計の中身はどうなっているのだろう」と分解をし、仕組みが分かった後、再び目覚まし時計が鳴るように元に戻しておかなかったので親父から大目玉を喰らいましたが、言ってみれば「分解するだけ分解しておいて後はほったらかし状態」というのが近代マーケティングの姿の様に見えなくもありません。
「仕組みが分かったのはいいが使い物にならなくしたんじゃ意味がなかろうが、あん？」
そういった親父の言葉が妙にリアルに思い起こされました。
（続く）

2021/7/17-4

「差」を「異」とせず 4/7 コミュニケーションその 1

群の中の個々人を捉えようとしてそれが行き過ぎ、数値化、符号化、記号化などで個々人の内側迄分解してしまった為に、一個人内が分断され、元々の出発点が何だったのか、そもそも元の目的が何だったのか、や、余りに煩雑で多岐にわたったが故に分解手順すらおいかけきれなくなり、元の全体像に戻せなくなってしまったマーケティング。
一個人の中も分解されっぱなしでほったらかしのまま「バラバラ」
人と人のつながりも「隣はすべて競合する相手で敵同士」「クラスター化された顧客同士も優劣を争って反目し合う」状態となって「バラバラ」
あらゆる人の内外（うちそと）すべてが分解、分断されっぱなしのバラバラ状態。
いずれも差にばかり着目し、それを可能な限り細密分解してしまったために差の対極である共通項に目が行かなくなってしまった。
しかし、その「片手落ち（差の他に共通項があると言うこと）」を気づかせるのに、非常に手近な素材があります。
「手」です。
自分の手を見てみると、手のひら（掌）があって、その先に 5 本の指がついています。
人一人一人のお互いの差や個性というものは、この 5 本の指のようなものかもしれません。
5 本の指は自由勝手に動きますし、動かせる。
しかし、もし掌（てのひら）という共通部分がなかったら指はバラバラでものを掴む事すらできません。指同士纏まる事も出来ませんし、お互いの指が触れているものからどういう感触を得ているかさえ分かりません。
5 本の指、即ち差や個性も大切ですが、掌（てのひら）即ち共通部分もコミュニケーションのためには大切。
そういう事ではないでしょうか。

それが現代はどちらか一方に偏りすぎている。バランスを欠いている。ふらふらとふらついている。
以上、バラバラ、偏り、不安定。
というキーワードがでてまいりましたが、これを反対語に置き直してみますと
一致団結、均衡中立、安定
となります。
どこかで耳にした覚えのある言葉ばかりです。
そう、コロナ禍前までの我が国の職場や学校、家庭などに蔓延していた言葉達です。
ところが今コロナ禍で我が国の実相実態はそれと真逆の「バラバラでバランスを欠き不安定になっている」なっている事が、図らずも露呈してしまいました。
「日本よいとこ、一度はおいで、ぎっちょんちょん、あぁ、ぎっちょん、ちょん」
と草津節の替え歌もどきにほだされて我が国に飛来した外国人さんの中には
「見ると聞くとでは大違い」
とその差に愕然とし、中には
「今からでも遅くはないからコロナ禍明けに他国へ移ろうか」
等と真剣に検討し始めている方々もいると聞きます。
余談になりますが、
「外国人は日本語を覚えない。漢字が書けない。敬語が分かっていない」
と大騒ぎをし「日本語教育の充実を至急はかれ」といっているようですが、反対に
「何故我々は英語がいつまでたっても話せないのか？」
を考えたことがありますでしょうか？
例えば、英語が話せないまでも、外国人と意思を疎通するためにローマ字表記で日本語を読み書きするようにするとか、看板に使うなどするとか、そういった工夫をしてきましたでしょうか？
それなしに、つまりお互いの歩み寄りなしに、一方的に上から目線でものを申していたら、そのうち本当に外国人は我が国に愛想を尽かして富裕層の観光目的訪日以外は誰も来なくなってしまうでしょう。
（続く）

2021/7/17-5

「差」を「異」とせず 5/7 コミュニケーションその 2

何故我々は、それこそ我々が言うところの「異文化」に接するにあたり、欧米諸国以外の外国人に対して「異文化理解の妨げにしかならない」上から目線の態度が抜けないのか？
此処で話を少し振ります。
昔、アメリカの経済学者が書いた

「Japan as No1」
という経済学、経営学（マーケティング）書であり且つ社会学書ともいえる書物がありました。我が国でも大層売れた本です。
それで思ったのですが、現在の我が国の実相実態は、先にもお話し致しましたように
バラバラで、偏りに満ち、不安定この上ないのに
アタマの中だけはいつまでたっても「Japan IS No1」（Japan AS No1 ではなくて）
のまま、しかも「As」を「Is」に変えた形での認識状態になっていはしないだろうか。
（注：As は見立てで、Is は断定くらいの開きがあります）
特にその本を読み、中身はすっかり忘れていても、心理的には As を Is にすり替えた題名、即ち

「日本がトップ」
というフレーズだけ秘密裏に座右の銘としていた当時の現役最多層の方々が。
或いはその認識の下で育てられたその Jr.（ジュニア）達もが。
言い換えれば我が国の、特に文系インテリのオピニオオリーダー層の家庭全体が。
それが無意識に行う「上から目線」の正体であり且つ論理的裏付けなのではないでしょうか。
ところがそれに反して、現在の我が国の実態は産業、教育、科学技術力、起業数等においてアジアのやる気のある国々にたいしてすら後塵を拝する地位にまで落ち込んでしまっている。
特に問題なのは、それらを牽引する力であるバイタリティーやメンタル面でのパワーがハングリー精神に満ちた国々や、先進国に対してすら最下位レベルにまでなってしまっている事です。
まさに「気がつけば黄昏」の「この道はいつか来た道」状態。
であるにもかかわらずアタマの中身が目の前の現実を受け入れようとしない。
しないのではなく、思ってもみない「かつては一世を風靡した」が今となっては「黄昏でしかないオピニオンリーダー層」
亡くなられる前に三重苦のヘレンケラー女史が言った言葉があります。
「目が見えないことは不幸なことではない。目が見えるのにビジョン（現実を直視認識した上での、その先へと進む方向性）が見えない（を持たない）ことの方が遙かに不幸だ」
という意味の言葉。
我々はそろそろ目を醒ます時期に来ているようです。我が国の力の回復のためにも。
又、他の国から何かを吸収しようとしてわざわざ我が国を選んでくれた方々（敢えて異国人とか外国人とは呼びません。あくまでも方々です）の期待に応え、共に成長するためにも
「眠れる獅子」が「獅子」であるといっていられる内に。
これがラストチャンスかもしれません。今コロナ禍が。

（続く）

2021/7/17-6

「差」を「異」とせず 6/7 コミュニケーションその 3

冒頭の学生さんの話に戻りますが、自分はインタビューを受けてこんなことをお話ししました。
「どの国の人間が悪くて、どの国の人間がいいとか、男が偉くて女が偉くないとか、地位が高いと立派で低いと立派ではないとか言うのはおかしい。どんな国にもまともな奴もいればまともじゃない奴もいる。男でも女でも、年配者でも若年者でも、地位が高くても低くても、そうした区分とは無関係に、各グループの中にそれぞれ「まともな奴」と「まともじゃない奴」がいる。だから、まずは目の前のその人一人一人を見ないことには、始まらない。最初から決めつけや思い込みはよくない。一人一人はじめから見ていくので、ものすごく手間はかかる。しかし、それ以外に物事や人を見極める方法はない。お手軽簡単便利に鼻から属性分けして、レッテル貼りばかりしていると、結果何もつかめないことにしかならないよ。最後は目の前のその人がまともな奴かまともじゃない奴かの見極めだけしかないのよ、ね」
そう考えますと、異文化どころか人間一人一人には差異があり、それが面白くもあり又争いの元でもあるなら、まずは異文化、異文明、異国、異端という前に、我が国内に置いてすら日々生起している、自分とは異なる存在の「たまたま隣にいる人との差異」をどう受け止めるのか？どう扱うのか？
即ち「どうコミュニケーションするか？」
という「対岸の話ではなく日常的な此岸の話」として帰着し、そこから身辺問題として新たに出発するようなところ迄、その学生さんの発想が拡がったりすると面白ろいのになぁと思いました。
結局異国人とはいっても、多少の言語や文化、習慣の差を除けば生起する感情、即ち喜怒哀楽は我々と何も変わらないのです。
うれしければ喜び、腹が立てば怒り、別れが来れば悲しみ、楽しければ笑う。
全く同じなのです。そこに差はないのです。
何故そこにいの一番に着目せずに、差から入るのでしょう。差をはじき出して事細かに分析する。或いは外国人という事で、対岸に封じ込めて「出島扱い」してしまうのでしょうか。
そういった認識や発想をしている限り、そこから生まれるのは
「異を唱え」結果「異を排斥する」分断ばかりです。
これは何も対外国人に対してだけではありません。
我が国国内においても
「仲間内には見苦しいほど愛想よく相槌を打つ」
反面

「ちょっとの差で異を唱え、それを赤の他人と見なしたその他の人たちには極端なまでの無関心と見て見ぬふりの見殺し態度」
による同朋同士の合法内「排斥」が見られます。
ちょっとした差の誇大視。
ちょっとした差で異を唱える。
ちょっとした差が人生を異端コースへと導いてしまう。
「差」を「個性」として受け入れず「異」として排斥する。
そこに全ての間違いの元があるような気がしてなりません。
（続く）

2021/7/17-7

「差」を「異」とせず 7/7 コミュニケーションその 4

結語

これでは、何も生まれず分断と争いしか起こらなくても不思議ではないでしょう。
分断や争いを避け、或いは中和するためには正しい（本心からの）問題提起をすること以外はない気が致します。何故なら見せ掛けの本心（作り物）に対しては、絶対に「望んでいる答え（実質的な手応えのある解決策）は返って来っこないからです。
1 億年待ったとしても「聞いても仕方がない的外れな答え」しか返って来ないからです。
まず、本心から知りたい、解を得たい事を尋ねようという気持ちになる事。
そして本当にほしかった答えを得る、すくなくとも「そのチャンスを手にする」為にまずなさなくてはならないのが
「コミュニケーション」
だと思っております。
尋ねたら、正解ではないかもしれないが精一杯答えてくれるだろうと思える人の発見とその人との信頼関係の構築。
繰り返しになりますが、そのためには、何よりもまず
「コミュニケーションというキャッチボール」
を始めることが必要だとおもっております。
因みに、Communication の com(con)は英語では「共通の」「共同の」という意味を表していると聞いております。
もっと短く言うと「共に」「一緒に」「お互いに」だそうです。
つまり「差」を受け入れて「異」としない。
「まずは相手の話を聞く耳を持つ事」
そして

「相手の立場で耳を傾ける包容力や度量を持つ事」
そう言うことがコミュニケーションの真髄なのではないかなとも思っております。

（後記）
長話し、最後までお付き合い戴きまして、誠にありがとう御座いました。

以上

オマケの英語教室

先月の巻まで「オマケの英語教室」も本編同様、コロナ禍同時進行で書いて参りましたが、一週間ほど前に自転車運転中に急な下り坂で転倒し、左肘を損傷したため左手の何本かの指に感覚がありません。
そのため本編を書くのがやっとで、オマケの英語教室を書くまでには至りませんでした。
誠に申し訳ございません。
つきましては、同時進行にはなりせんが、二〇一八年に投稿いたしました記事の中から何編かを此処に転載し、勝手ながら、その穴埋めとさせて戴きます。

2018/1/22
新々連載
うときゅういっきの英語夜話

うときゅういっきの英語夜話（ことば夜話）を始めます。
といっても、学者さんでもないし、教員免許を持っているわけでもないし、留学したこともなければ、海外駐在したこともありません。
だから、難しい理屈ではなくて、こうやったら覚えやすいよ、楽しいよ、とか、自分でどんどん「英語は創れて」面白いよとか、そういうお話をしたいと思っています。
じゃあ、どこで英語を覚えたかというと「日本で」です。
だって、わざわざ外国に行かなくても、今の日本、そこいらじゅう、外国人だらけだし、街中、看板、ポスター、標識、表示板、英語だらけじゃないですか。映画館だって DVD だって英語てんこ盛りですし。
何も、英語が完璧になるまで話しちゃいけないとか、一個でも間違えるとみんなの笑いものになるとか、そういう事さえ気にしなければ、つまり失敗や我流、OK,OK であれば、いま

からでもしゃべれちゃうんじゃないかな？と思いますよ。
だから、もちろん受験英語ではありません。
それだけは、最初に断っておきますね。
因みに自分は、定年でお勤めを辞めてから、外国人の友達が出来て、その人と話したくて、あれこれやっているうちに自然と覚えたんです。
英会話学校にも一度も行ったことはありませんし、なんちゃらDVDも見たことがありません。
ただ、人と話したかった。その人がたまたまイングリッシュ・スピーカーだっただけです。
片言の日本語で一生懸命話かけてきたり、話を一生懸命聞いてくれたり。そういう人が日本人にはいなくて、はるばる海外から出稼ぎにきた、英語がかなりしゃべれるアジア人がその聞き役になってくれたのです。
僕にとって、アジア人の直角三角形みたいな英語の発音は、欧米人の巻き舌英語に比べて、聞き取りやすくもあったのです。
そんなわけで、相手が何人（なにじん）であろうと、こちらとあちらにお互い興味、関心さえあれば、すぐにも上達するんです。
もし、それが初めにないと、いくら学校で一生懸命英語を覚えようとしたって身につかないと思います。だって、いやいや、なんですから。
そうして、詰まんない質問に対する、とても立派な答え方を教わり、やっとこさ、志望校にはいりはしたものの、
「さて、何か訊きたいこと、どうしても話したい事って、あったっけ？」では、どうしようもありません。
まずは、どうしても訊きたいこと、話したい中身を持つことが一番、最初じゃないでしょうかね。
それを持つことが、すべての始まりで、自然とうまくなるコツだと思いますよ。
自分の経験では、ですけどね。
確かに他にもいろんな要素があって、それほど簡単ではないことは事実ですが、それを初回からやると、いやになられてしまいそうなので、敢えて初回は端折っておきます。
それは、今後の「お楽しみ」にしておきたいと思います。
もちろん「皆さんにとっての」お楽しみですから、ご心配なく。
それでは、最後に一言。
自分自身、まだ英語は完璧でも何でもありません。On the way 「途上」でしかありません。
語彙に関しては皆さんと大差ないのです。
でも、話し始める。怖がらずに。
そういうことでしかないんです、ね。秘訣は。
2018/1/23
うときゅういっきの英語夜話

お前の味方だ（I`m on your side）

「おれはお前の味方だぜ」
これを英語でなんと言うか？
基本的に僕の英語知識は中学までなので、当然「味方」なんていう単語はしりません。というか習っていません。
でも、お前の敵じゃないし、傷つけたり、邪魔をしたりしないから、安心してほしいという気持ちだけはどうしても分かって欲しい時がありました。
じゃぁ、それをどうやったら伝えられるか？
もちろん僕の知っている中学レベルの単語だけを使ってです。
余談ですが、なぜか僕はすぐに「ググる」のがあまり好きではないのです。
で、いろいろ考えてみたわけです。
まず「味方」という言葉のイメージを広げて、拡大解釈をしてみました。
「味方」ということは、つまり
「お前の敵ではない」で
I`m not your enemy
ん、エネミー（敵）？なんかちょっと物騒かな？それに消去法みたいでちょっと弱いような。
で、次は
「俺はお前の友達だ」で
I`m your friend
ん、これじゃぁ、なんかいつもの事実関係をいっているだけで、なんというか「お特別感」がないような気がする。
というように「味方」という日本語があらわす「状態」を、僕が知っていて、且つ「その状態」に近い言葉をいろいろ当てはめていったわけです。
で、最終的にこれがいいんじゃないか？と思ったのが
「味方」ということは俺の側に立つのではなく「お前の側に立つ」ということだよな。
なんか、一歩踏み出た感じで「ポジティブ感」があるし。

で、苦肉の策で
I`m standing on your side
「俺はお前の側に立っている」
としました。
でも、ちょっと長い感じがしたので、少しインパクトを持たせるために、端折って
I`m on your side
つまり「俺はお前の側（がわ）だぜ」
として、外国人に話したら、
Oh, thanks!! I`m on your side, too!!
「おぉ、ありがとね。俺だってお前の味方だぜ」
と返ってきました。
気持ちが伝わって、意味としても通じたみたいです。
ですから、何もその単語ズバリを知らなくたっていいんです。
要は、こちらの気持ちや思いが伝わればいいんですから。
「一種の状況説明」というか、なるたけ相手の目の前で「絵になりやすいポンチ絵もどき」を「描いて」あげればいいだけのような気がするのです。
それがわかれば、あとは、それを表現できる言葉を、知っている単語の中から探し出して、組み合わせて、話す。
それだけでいいような気がします。
ここでは、自分が車道を挟んで左側の歩道から出て行って、相手の右側の歩道に移って、立ったイメージを言葉にしただけなんですから。
これがぼくの言う、知らなければ「英語は創ればいい」という事の意味するところなのです。
お伝えしたいことの、ひとつなのです。

追記）
I`m in your side でもいいような気もしますが、”in”だと、”in”すなわち「の中」になってしまうので、どちらかというと「すでに相手にどっぷりつかり」運命共同体みたいな感じがしたので、”on” すなわち「の上にいる」を使いました。
その方がややその「どっぷり感」が少なく、縛りも少ないような気がしたからです。
しかし、逆に言うと、もっと強いきずなを表現したいときには、”In”を使ってもいいのかもしれませんね。

2018/1/24

うときゅういっきの英語夜話

王 貞治

(Sadaharu Oh)

よく聴いていると、東京（とうきょう）のことを外国の方はたいてい「トキョ」と発音していることが多いようです。
英語表記で書くと TOKYO です。
同じように東急百貨店も英語表記で書くと TOKYU department store と表記して「トキュ」と発音しています。
「ん？なんで、やねん」
常々不識義に感じていました。
TOKYO（とーきょー）とか TOKYU（とーきゅー）とかちゃんと書いてあるのに、なんで？
ところが、ある時、もう何十年も前のことですが、そのある時、テレビで巨人戦を見ていて王貞治の背番号１の上に「王」を「OH」と書いてあることに気づいたのです。
「王」は王と書いて、発音としては「おー」になります。
ということは、発音を延ばすときには「H」を入れればいいのかもしれないな？と思いました。
しかし、そのことは忘れてほったらかしになっていました。
ところが数十年たった現在、今から一か月前のある日、自分のビジネスパートナーの外国の人が東急スーパーマーケットの前で、「トキュ」と発音したので、そのことを突然思い出して、持っていた紙に
「Toh-kyuh super market」
と書いてあげたら、ちゃんと「とーきゅー」と発音してくれました。
それで、外国の方には、それ以降「Tokyo」なら「Toh-kyoh」と添え書きをして「発音の仕方はこうなんだよ」と教えてあげると、そののちは、自分たち日本人がお互い「東京」という地名を呼ぶときに耳にする発音と同じ発音が外国方からも聞かれるようになりました。
本当は、発音記号を使えば一番正しいのですが、外国の方だって発音記号なんて知りません。

外国の国語の先生でもない限り、はね。
それで、こういう方法を編み出したのです。
こうすれば、外国のひとが、日本の人から「変な発音をする奴だ」と思われなくて済むし、日本のひとも外国の人が日本語をちゃんと発音してくれたらうれしいし、親近感も沸くだろうから、いいのではないかと思ったわけです。
それで、このサービスをことあるごとに外国の人にするようになったんですが、外国の方にこうしたサービスができるようになるのに数十年もかかってしましました。
もう少し早く気が付けばよかったかな、と思っています。

2018/1/27

うときゅういっきの漢字夜話
船長

昨日、アスミタトピックスで「キャプテン」という記事を書きました。
最初、その文章の終わりは「キャプテン翼」で締めくくりましたが、思うところあって書き直し版は「キャプテン・クック」に替えました。
キャプテン・クックは日本語に替えると「クック船長」という事になります。
クックさんは世界の海を探検して回った「船乗り」だったからです。
実は自分の父親は元海軍の軍人で、船乗りでした。重巡洋艦「足柄」という軍艦に乗って、今のインドネシア領、ジャワ島近辺で戦っておりました。
その親父が
「船長というのは、乗組員全員の命を預かっている。みんなが安全に航海できるように指揮するのが仕事だ。
それが第一の仕事だが、仮に遭難するようなことがあったら、船長は、すべからく、速やかに全員を退艦させ、その安全を見届けた後、最後に退艦するのが習わしだ。
場合によっては、遭難の責任を取って、自らの体を縄で船に括り付けて、船とともに運命を共にすることもある。それが船長だ」
と。
その話を聞いていたので、自分は今の会社を興した時に「代表取締役」ではなく、CEO,すなわち「最高経営責任者」と名乗りました。
みなさんに「御大層な呼称をお付けになりましたね」と揶揄されましたが、別段「代表」より「最高」の方が上だと思ったからではありません。
重きを置いたのは「最高」の方ではなく「責任者」のつもりだったのですが、言葉足らずで伝わらなかったようです。
それでご説明がてら、再度申し上げますと「最高経営責任者」というのは「最後の責任は自分が一切合切取りますから、どうぞみなさん自由にやってください。安心してくださいね。

自分は逃げたりしませんから」という社内外に対する意思の表明だったのです。
そんな思いが「キャプテン翼」と書いた後に一気に湧き上がってきて、書き直した次第です。
船長の責任は重いのです。
それを、いま一度思い出しましたので、読み直しされる皆さんには、ご迷惑かと思いましたが、敢えて書き直させて戴きました。

2018/1/31-2
うときゅういっきの英語夜話
万年筆（fountainpen）

英語で、万年筆のことを「fountainpen」と言います。
学校では、万年筆は英語で、ファウンテンペンと言い fountainpen と書きます、とだけ教えて「みなさん、覚えてくださいね」というだけのようです。
しかし、なぜ、万年筆を英語で「Fountain-pen」というのかをその時、一緒に教えてくれると、もう少し面白いかもしれません。
因みに
Fountain は
汲（く）めども尽きせぬ、湧き出ずる「泉」の事です。
もちろん Pen はペン、筆です。
では、なぜ万年筆のことを汲めども尽きせぬ泉に当たる
Fountain と呼ぶようになったのか？
それは、ペンの歴史を紐解くとわかるんです。
昔ペンは、インクツボに入ったインクに羽ペンのペン先を浸して、書いていました。
羽ペンですから、つけた羽先にインクの溜め置きが出来ず、ちょっと書いては、インクツボにちょんちょん、ちょっと書いては、また、ちょんちょんと羽先を浸けていたわけです。
なので、とっても面倒くさかったのです。
ところが万年筆タイプができると、ペンの中にインクの溜め置きができるようになったので、この頻繁にしなければならなかった、羽先ちょんちょん作業が大幅に軽減されてとっても楽になったわけです。
それで、いちいち羽先をつけなくていい、この泉のごとく湧き出るインクのペンを
「泉のペン」すなわち「Fountainpen」と呼びならわすようになったという訳です。
そうして、その日本語の訳語が「万年筆」
つまり、泉ではないのですが「いつも」の「万年」、それと「鶴は千年、亀は万年」の「万年」を付けて万年筆と訳したのでしょう。
どうでしょう？少しは英語やことばに興味がわきましたでしょうか？

2018/2/21
うときゅういっきの英語夜話
マネージャー(manager)

以前、どこかで書いたはなしなので、いささか恐縮ですが、それを少しアレンジして、また書いてみます。
以前勤めていた会社でマネジメントノートという冊子がありました。邦訳は「管理者ノート」会社の総務部が管理職向けに発行していた冊子です。
そういえば日本では課長クラスの人のことを英語で表現する場合、名刺の肩書に「マネージャー」と書かれています。
部長さんの場合は、年配者や上級を表すシニアを付けて「シニアマネージャー」と書かれています。
その上の事業部長は、軍隊の大将を意味するジェネラルを付けて「ジェネラルマネージャー」と書かれています。日本ではジェネラルではなく普通「ゼネラル」と書くのが一般的なようです。
省略形で書くと、「M」「SM」「GM」です。どこかで見たことがあるでしょう。
しかし、いずれの場合も共通しているのは「管理者」「管理職」という考え方です。
平の管理者。上級管理者。管理者の大将。という訳です。
ですが、もともと「管理」ならコントロールの方があっている気がします。
コントロールとは「制御する」「操る」です。
マインドコントロールなんかはその最たるものでしょう。操り人形、つまりマリオネットみたいにしてしまうようなイメージです。或はリモコンのことをリモートコントローラーと言いますが、こちらは全く動かずに相手を動かす。そういったイメージだとも思います。
おそらく、本心は管理監督なのですが、海外ではコントロールではなくマネージという言葉を使っているから、それを使いはしたものの、手抜かりにも「管理する」という本音が出てしまい、妙な訳語になってしまったようです。
では、マネージとはもともとどんな意味だったのでしょうか？

紐解いてみると、原義は「いざというときに何とかする」とありました。
I`ll manage it
といったら
「俺がなんとかするぜ」（わたしがなんとかするわ）
ということになります。
ですので、
いざというときに何とかする「ひと」が、マネージャー。
いざというときに何とかする「事」が、マネジメントなのです。
「相手や部下」をどうこうのする、のではなく「自分」がいざというときに何とかする、ことなので、まるで反対に力点があるのです。
どうも、それを全く勘違いしたまま、気づきもしないし疑いもしない「管理者」「管理職」が多すぎるような気がします。
もう一度、よく考えてほしいものだと思っております。
仮にマネージャーを邦訳するとすれば「強きをくじき弱きを助ける」国定忠治や清水の次郎長さん、敢えているなら「任侠道の親分さん」と訳するのが妥当ではないかと、自分は考えております。
ですが、それは何も日本に限ったことではなくて、海の向こうからこの言葉を伝えた、当の外国ですら、これを全く反対に解釈して、取り違えて覚えこんでいる人が多々居るのには驚かされました。本当に。
ことばというのは、一度、原義が何であったか？紐解いてみることが大切だと思いました。
洋の東西を問わず、どなたでも。

（本記事のみ 2021/7/19 一部加筆）

二〇二一年八月の巻

2021/7/19-1

（「無名（肩書きなし）」でいるに越したことはなかったのでは？）

物事を探求するのに、つまり「それは何故そうなるのか？」を追いかけるのに肩書きは却って邪魔になるような気がします。
それというのは肩書きがあると無意識にも
「それとして振る舞わなくてはならない」
とか
「それとしての成果を出さなくてはならない」
と思って縛られてしまい、バイアスがかかって求める解とは全然違う方向にそれてしまう可能性があるからです。
自分は故立花隆を見ていて、誠に勝手な想像ながら彼はある時から「ジャーナリストとしての誇りや矜持」とは全く反対に「ジャーナリストという肩書きが却って邪魔になっていた」のではないかと推測しております。
物事を探求するに、物事探求の為の資金調達面以外では
「無名（肩書きなし）でいるに越したことはない」
彼はそう思っていたのではないか？
自分はそんな気が致しております。

2021/7/21

（どうりで（物事の道理からして）上手くいかなかった訳だ）

「かくあるべし」の背伸び起因による 12 年にも渡るうつ病生活に終止符を打ったその日
「もし自分が鼻から、特別な存在等では全くなく又そうなる必要も全くなかった事に早くに気づき、自分は単なる一介の市井人に過ぎないし又それで十分なのだときちんと認識していたら、まさか想像上の生き物であるとは思いもよらず、その肉鍋を食そうと追い続ける様な「12 年もの徒労」をせずにすんだのに。その時間を他の「実り」ある生活に振り向けられたのに。実に勿体ない。もうこれ以上無駄はご免だ。ありもしないスカを追いかけるのは止めだ」
と心底納得し長年の迷妄から解放されるのを感じました。
その時の経験から現在を眺め渡してみますと自分と同様な事例が周囲に散見されるのに気づきました。
例えば
「誰からも愛される」又は「誰からも嫌われない」
そんな事は有史以来今迄一度たりともあった試しがないのに、口では「その通り」といいつつ無意識界の中では性懲りもなく且つ執拗に追いかけ続けている。
というより「誰か一人にでも」嫌われる事を執拗に恐れて続けている。
そもそもそんな事はあり得ないので努力したり気に病んだりするだけ無駄でしょう。
非の打ち所がなければないで逆にやっかみからあら探しをされ、挙げ句の果てに「やっぱりそうでしょ。完璧なんてあり得ない。思った通りだわ」と嫌われる事もある訳ですから。
ならば「誰からも愛される」「誰からも嫌われない」なんて言う事はあり得ない（それがこの世の常態、即ち道理な）のだから「一人や二人に嫌われたって放っておけばいいんでない

の」位に肚積（はらづもり）を立て早くにその無駄な情熱に見切りを着けた方がよくはないでしょうか？
或いは又
「100%安全安心が確認される迄」
もあり得ません。
あり得ないものの、その到来を待っていたら却って「時期を逸し」てより安全安心レベルの低下した状態、即ち「より危険な状況」に陥る確率の方が上がってしまいます。
そもそも「100%の安全安心」とか「常に右肩上がりの成長」等と言うものは「人には求め易く、反対に自らが求められると途端に困ってしまう様なもの」に道理の有り様筈がありません。
それは道理でも正当な要求等では全くなく単なる「身勝手」でしかないのではないでしょうか。
再び「そもそものそもそも」道理（物事の自律的メカニズム）を無視して自分の都合を優先させたり、いくら欲しいからと言って無い物ねだりを執拗に続けたりする事は「結果的に全くする必要のない徒労（甲斐無き無駄な時間と行為）」を引き起こすだけでしょう。
だとすれば、その優位順を過たず且つ無い物ねだりに早々に見切りを着けていれば、或いは無理や自己都合を引っ込め道理（物事の自立的メカニズム）を優先させていれば、大方の人はかなりの確率で成功又は幸福になっていたのではないかなと推測しております。

2021/7/24-1

（人類史開闢以来の大難問 前編）

コロナ禍になってここ 1 年半ほど記事を書いてきて、その時々考えたり感じたりした事を振り返ってみると自分心の奥底に昭和、平成、令和と時が経つにつれ、何となく我が国から「熱気」の様なもの消え失せていったなという感想を抱きました。
熱気の由来は様々で、いい由来のものもあれば悪い由来のものもあるのですが、総じて活力、パワーがなくなってきている感じがしております。
恐らく自分はその事に焦りや苛立ち、もっと言うと悲しみを感じていろいろ書いてきたような気がしておりましが、此処にきて「はたと」大きな問題に出くわしました。
それというのは
「熱気や活気を取り戻そうとする事自体はいいのだが、それを排出熱量に換算すると、地球温暖化の歯止めと相反し、逆行する結果を導き出しはしないだろうか？」
という大疑問でした。
要するに「熱気や活気を取り戻す」という誰もが肯定的に捉える目標が、本当に疑いなく正しい目標なのだろうか？という疑問です。
活気や熱気は経済活動の温度そのもので、それは国民の給与水準そのものでもあります。（無論経営者が売上アップ分をまともに従業員各位に還元したとしてですが）
だとすれば、給与が上がり国民生活が充実すればする程、地球環境は逆に「消費の排出熱量の増大」によって今より「更に深刻な破壊」に見舞われてしまう、この絶対的矛盾と相反真逆性をどう止揚、解決するのか？どう折り合うのか？
恐らくコロナ禍後のニューノーマルの基準は、単に経済回復と国民生活の回復だけではなく、仮にこの課題を多大な努力の末、克服したとしても、それが地球の環境と整合するのか否か？言い換えれば多大な努力の末の回復が正しいのか否か？によるのではないか。
そして「得られるその答え」即ち難問「解」は、過去の大恐慌や経済危機の後と同レベルで「コロナ禍前経済指標、国民生活指標、回復」などと言うおめでたい話のものではなく、コロナ禍後の「ニューノーマルの解」即ち新基準は「その相反矛盾に対する答えに従ったもの」以外にはない様な気がして来ました。
そう思うとその「難問解」のハードルの途方もない高さと、そしてその海図のない果てしなき航海の長さに暫し強い目眩（めまい）を覚える只今現在でございます。
（続く）

2021/7/24-2

（人類史開闢以来の大難問 後編）

しかしそれを果たさなければ早晩人類は「太古の昔、地球上を闊歩し、時の栄耀栄華を極め、到底滅びる事はないと思われた彼の巨大恐竜」同様に環境変化に適応できずに滅びてしまう事は、まず間違いない事実の様な気もしております。
何故ならこの世の最終的な「道理」（左の道理という言葉は国語辞典的な意味で使っております）は
「人間の都合に則った「所謂道理」とされがちな、例えばピンチをチャンスに変えた成功話、新規需要開拓のトリガー発見物語や見えざる手に導かれた予定調和説」等に置き換えられがちですが、実際にはそれとは全く関係のない自然科学的な
「物事の自律的メカニズム」
に則ったものにある様に思えてならないからです。
世界の何処と言わず、それは決して今の人間界にとって「都合のよいもの」ではないかもしれません。
いや、自分の予測では逆に「現下の金銭経済（世を治め、民を救うという本来の意味である「経世済民」の略語としての「経済」ではない現下の世界やその世界観）にどっぷり浸かった今の我々のあり方からすると
我々には極めて「不都合（マズいことになる）且つ不利益（損をするような）」
ものであり、
更に又同じく、お手軽簡単便利な「快適さ」に慣れた今の我々からしても
「決して心地のよいものではない」
可能性の方が遙かに高い気がしております。
それこそ今までとは全く異なった、むしろ異質ともいえる感覚、感触、視点、発想に基づいた
「極めて不慣れな、ある種扱いにくい新基準とそのシステム運用又は運用システム」
になる可能性が大です。
しかしもう既に
「我々人類の永遠に続く右肩上がりの成長神話」
は虚妄だったとの結論が出かかっている。
なので、今までにない新しい目的や新基準を探さなくてはならない。
ではその新基準とは何か？
「適者生存」
適するためには今持っていて「価値あり」とされてきたことすら可なりの規模で捨て去らなくてはならなくなるかもしれない。それも半分か或いはそれ以上に。

このように今の人間界から見ると価値観の 180 度コペルニクス的転回を強いられるほどの大変革を要求されるような気が強くしております。
最後に
この「ニューノーマル探索サバイバル日記」の中間報告的な答えとしては、
我々の経済生活ではなく、我々自身が兎にも角にも最低限呼吸できる、その大々々前提である「地球環境にまずは適合」する
「適者生存こそがサバイバルの真髄」
であるような気もして参りました。
（続く）

2021/7/24-3

（人類史開闢以来の大難問　オマケの四方山話編）

昨日突如、レストラン機材の中で「生命線」ともいえる調理台兼冷蔵庫であるテーブル冷蔵庫の冷えが極端に悪くなりました。
どうやら気候変動によるあまりの暑さに、ただでさえ老朽化していた冷蔵庫心臓部のコンプレッサーがヒートアップして「いかれて」しまったみたいです。
先代の借主店主さんから数える事 19 年目の夏の出来事。
これではレストランを運営できない。
かてて加えて今は業者さんが 4 連休中。
更に、此が一番の問題ですが、急場の資金繰り手段が全く見えない。
現実世界でも我がレストランは完全に「サバイバルモード突入」と相成りました。
さてどうするか？
世界そして我が店、いずれの解も早急に見いださなくてはなりません。
最早待ったなし。
以前の記事でもこの言葉を使った記憶がありますが、今回も同じく完全コピペの
「待った是、全くなし」
という緊迫した顔つきを自分がしていたようで、それを見て恐らく心配になった外国人従業員が
「Shachou san, Daijoob(o), aruka?」
と訊くので、
「Sometime shiny, sometime cloudy, sometime rainy. Every day is changeable. Such is life」
(照る日、曇る日、雨降る日、いろいろある(日々変わる)。それが人生というものだ)
いった文言はおおげさですが、特にこれといって深い意味はありませんでした。
ところがそれを聞いて、哲学的思考に走るならまだしも、あろうことか外国人従業員殿は
「Shachou san, joke, joke, Hahaha, very omoshiroi」
と。
一体何処をどうとると、これがジョークに聞こえるのか？
毎度の事ながら、既に自分は一足お先にニューノーマルな「よく分からない世界」に突入している模様です。
そこで又一句
「不条理が人間を育てる」
（No-understandable situation makes a person grown up）
これまた、特にこれといって深い意味のない言葉でございます。
ですが、彼らが是を聞いて又、何を言い出すか分からないのでこの句は口には出さず、自分の腹の中にだけしまっておくことに致しましょう。

（おしまい）

2021/7/25

（キャッチャーミット）

とにかく、とにかく御難続き。
開店以来 3 年と半年、御難続き。
周りの人もあきれるほどの御難の連続、オンパレード状態。
「よくもまぁ、ここまで。
これだけ続くのも珍しい」
と。
「あんた、前世でよっぽど悪いこと、したん、ちゃうか？」
こうなってくると、
「コロナ禍なんぞは one of them。
数多ある内のたかが一つの災厄でしかない!!」
みたいな感覚になって参りまして、
「もう、こうなったら何でも来いや。どんな剛速球、変化球、見たこともない悪級でも受けたる、で!!」
と、半ばヤケクソ気味に開き直り、意識の上では、体全体が
「後逸ゼロ」
のエア注入アドバルーン、はたまた 360 度全方位型バックネットの如き
「巨大キャッチャーミット」
と、化しております。

2021/7/25-2

（エアコン余話）

盛夏の夕暮れ、扇風機。
小学生の頃を思い出します。
その頃は当然家にはエアコン（当時はエアコンと言わずクーラーといっておりました。冷暖兼用がなく冷専しかなかったからです）等というものはなく、あるとすれば扇風機。
しかも今と違って結構高かったのであってもせいぜい一家に一台。
家族がいない時は独り占めできましたが、いる時はその扇風機を首振りさせて皆で風に当たっておりました。
そのほか涼をとるものと言えば団扇か 10 円のカップアイス又は 5 円アイスキャンディ、それと裏庭の井戸水で冷やしたスイカを食べる位でした。
その後中学生になってから家にもエアコンが入ったのですが、入った先が親父の書斎兼応接間で自分たち子供は相変わらず居間で扇風機の回覧板状態、回しっこをしておりました。
ただ高校受験の前の年の夏だけは勉強の為にエアコンのある親父の書斎兼応接間にいる事が許され、大変涼しい思いをしました。
自分たち専用のエアコンを手に入れたのは結婚してアパート住まいを始めてからでした。
その後はずっとエアコンのある生活をしておりましたが、今コロナ禍の猛暑による冷房能力オーバーで、まずお店の調理台兼冷蔵のテーブル冷蔵庫がイカレ、続いて自宅兼本社である、この住まいのエアコンもイカレてしまいました。
しかも、悪い事に自宅本社のは、エアコンの頭脳であるマイコンがイカレたらしく修理を依頼すればかなり高額の請求が予想され、お金があればまずは従業員給与に充てなくてはならない身としてはおいそれと修理も頼めません。
そんな訳でここ数日「夏の夕暮れ、扇風機」状態なのですが、昼間帯びた熱が静まるこの時間帯になる迄が大変です。
例えば今日も猛暑日でしたが、本日の室内温度は 36.7 度にもなる始末。昨日が 34 度で、一昨日が 33 度。
そのせいで本日昼間、軽い熱中症状態になってしまいました。
幸いにも去年一足先にイカレた二階のエアコンがダメ元で動作させところ、なぜか復活したので、ただいま現在はそれで上がりすぎた体温を沈めておるところです。
まさにこれを書いている「今」です。
長々と昔話と近況報告を書いて参りましたが本日のメインのお話はこれからです。
それは何かというと
「気候変動で、例えば我が国もインドやアラブの砂漠地帯同様、外気温が 45 度とか 50 度にでもなれば、いくらエアコンを回したところで室内温度は 35 度から 37 度がいいところといったような日が来るかもしれないなぁ」

と、ふと思った事です。
そうなると今自分が、図らずも「見舞われているこの異常状態」は今後の「常態」となり、尚且つここ数日のそれは、その日の到来に備え、生き抜く為の「サバイバル予行演習」に既になっているのではなかろうか？という事です。
結構恐ろしい想像ですが、あながち想像のし過ぎでもないような気が致した次第。
さて温暖化対策の目標年限である 2030 年には何が「常態」となっているのでしょう？

2021/7/27-1

（「対応」への対応の仕方 前編）

昨日の記事で、自分が子供の頃のお話を少し致しましたが、今思っても小学校 4 年生までの毎日は本当に楽しかったです。
毎日遊び回っていましたし、学校に行っても自由研究発表やら壁新聞とか大きな壁画を描いたりする毎日だったので楽しくて仕方がありませんでした。
周りも学習塾になんかに行っている子は一人もおらず、勉強についての話をしたこともありませんでした。
ところが小学校 5 年になった時に、突如小学校の担任の先生が家庭教師として週 1 回来ることになったのです。
それは親父のこの一言で決まりました。
曰く
「友達は遊んでばかり。おまえも遊んでばかり。当家を背負って立つ長男としての自覚が全く足りん」
それにしても最悪でした。自分は「神経質そうでいつもイライラしているみたいな」この先生が大嫌いだったからです。
案の定毎週その日は家の中で怒られっぱなし。
多分親父が
「どんどん厳しくやってください」
とでもいったのでしょう、いくら自分が怒られていても誰も助けには来てくれませんでした。
しかし、そうまでしたのに自分の成績が一向に上がらないことに業を煮やした親父は、とうとう 5 年生の 2 学期に自分を越境入学させるべく他地域の難関大学への進学率の高い公立校への転校手続きをとってしまい、本当に 3 学期からその進学校に通うことになってしまったのです。
その進学校では前の学校とは違い、誰も下校時に寄り道して遊んで帰ったりしていないようでしたし、日曜日に全国対象の進学テストを受けないのは自分だけというような状況でした。
とにかく何から何まで違っていたのです。
前の学校にいたときは、大人になってから知った言葉を使えば「対応」などと言うことは考えたこともありませんでした。
「毎日がこの先ずっと、こんな感じの楽しい毎日」
多分そんな感じが無意識にしていたのだと思います。
ところが新しい学校では、そんな感じはまったくせず、どうしていいのか分からなくなってしまったので

「この全然違うものに対しては「備えなくてはならない」んだろう、多分」
それが大人語で言うと「対応」だったのだと思います。
それ以来大学卒業まで、大方の日々は真っ暗。
違和感と疲労感ばかり。
何かすっきりしないのです。不安と言うより落ち着かないのです。何か合っていない。チグハグで思うように動けない。
言ってみれば毎日が
心の「隔靴掻痒」又は心の「二人羽織」状態
でした。
（続く）

2021/7/27-2

（「対応」への対応の仕方 後編）

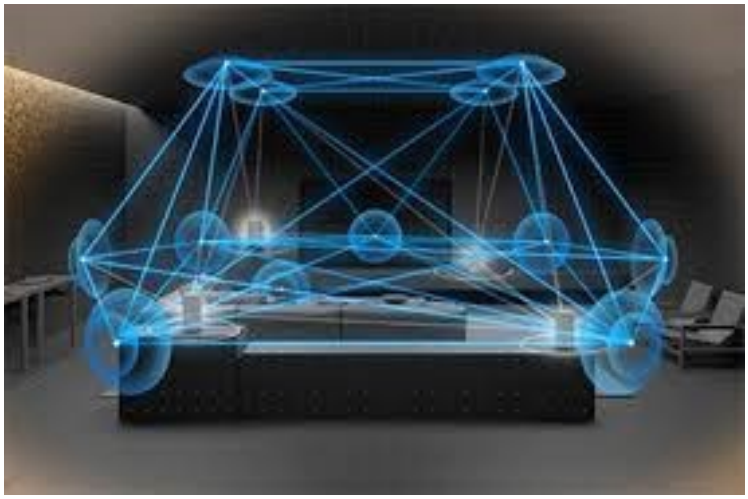
その後いろいろあって社会に出、なんとか人並みに勤め人になりました。
初めは、訳の分からない何かに兎に角も対応しようと上司の言われたとおりに仕事をしたのですが、結果は「ヒット商品の創出」という命題に対しては、全くの惨敗。
それがその後数回続いたので
「それじゃ、自分なりにやってみるか」
と思ってやったのが、周囲の予想に反して「ソコソコのヒット」
「ならば是で行ってみよう」
と続けたのが大惨劇の元。
「出る釘は打たれる」
のことわざ通りに、上司に打ちのめされて心の病を発症し、お払い箱への道、まっしぐら。
正確に書くと、左遷、降格、転籍、リストラの憂き目に。
しかしその中でも「自分なりのやり方で」というのは心の奥底に残っていたようで、子会社、いや孫会社に飛ばされても、その先でその姿勢を続けました。
というより、元々自分は、そういうやり方しか出来なかったのかもしれません。
思えば、規模の大小はあるものの、いずれどちらも宮仕えの身に変わりはなく、いくら孫会社と言っても又以前と同じ事になる気がする。
そして、これまた再びいろいろあって、
「どうせの事なら自分でやるか」
と見切りを付けての出発が今の会社の創業でした。
で、今現在はどうかと申しますと、以前に比べると信じられないくらいの「大変さ」です。
何しろ誰も用意をしていてくれるわけではないので鉛筆 1 本から自前で買わないとそろわないし「部長が言ったから」とか「予期せぬ自然災害が発生したから」とか、誰か。や、何かのせいにすることも出来ませんから。
ですが、一つだけ言えることは
「誰か、や、何かのせいには出来ないが、殺生与奪の権限は自分が持っている。それを人が持っていて、いつ使われるかと恐れているよりは、使いたくはないが使うならこの時、と自分できめられ、自分で予測が立てられる方がまだしも気が休まる」気だけはしております。
それでは最後になりますが、まとめて言えば
「どう対応したらいいのかで悩むより、こう対応するぞと決める」
つまり「自分のことは自分が決める」方が、とる責任という意味でのリスクは遙かに高まりますが「心安んじる」という点では後者の方が遙かに勝り、少なくとも怯えなくて済みます。

つまり前者の身の上よりは「少なくとも、自分に対して納得がいく」事だけは請け合えるような気が致しております。
（おしまい）

2021/7/27-3

（オマケの英語教室+うと Q 世話し）

Surround



Surround という単語を見ても何の事だかよく分らない方でも、サラウンドシステムと書くと「あっ、知ってる」という方は多いのではないでしょうか。
サラウンドシステムとはフロントスピーカとリアスピーカ、又は定位の為のスピーカシステム等で、よく映像と組み合わせて臨場感をもたらす音響システムの一種です。
サラウンド(surround）の意味は包み込む、囲い込む等の意味合いです。
ですが、今日はそのお話ではなくマーケティングの「囲い込み戦略」のお話をさせて戴こうとおもいます。
マーケティングで言う処の「囲い込み」に使われる英単語は corral が使われ
例えば
「その会社は会員制ポイントカードシステムで顧客候補を囲い込んだ」なら
The company corralled candidates of customer with the point card system of (or from) membership.
となります。
しかしこの coral という英単語は原義が羊などを「塀の中に追い込む」というニュアンスが強いので、自分は余り使いたくありません。無理矢理感が漂うからです。なので、自分が使うとすれば、より優しく緩やかな「包み込む」の意味合いが勝る surround がいいのではないかなと思っております。

がしかし、言葉だけ柔らかく人当たりをよくしても、中身が結局「顧客の囲い込み」強い言い方をすれば「顧客の家畜化」であるなら、是は矢張りやめた方がいい様な気がします。
顧客の囲い込み戦略の元々の目的は「自社ブランドへのロイヤリティ（忠誠度）アップと、そこからもたらされる収益の安定化、単価のアップ等」でした。
確かに利益を最大化するには理にかなった方法なのですが、欠点は「窓のない会員制秘密クラブ」と書けば連想して戴けると思いますが「閉鎖性、流動性のなさ、滞留、淀み」が発生しやすい事です。
窓を開いた「オープンな風通しの良さ」が失われるのです。
是が発生した場合、それ迄利点だった安定収益や忠誠心が一転、足枷や目の曇りとなって会社が「時代に取り残される」可能性があります。
又ポイントや優待、特典などおいしい餌で顧客を釣っているので、顧客側、会社側双方に癒着や不正が発生する温床にもなります。
顧客はもっと強い刺激や特典を求める様になり、会社側はそれを紡ぎ出す為に自転車操業になり易くなるからです。
囲い込みというのは例えて言うなら一回一回のお客様との真剣勝負の割愛とも言えます。
一種の「真剣勝負割愛、利益確保自動化システム」とも言えます。
双方の感覚を麻痺させる「麻薬」と言ってもいいかもしれません。
ですので、自分考えでは「収益の安定的確保と最大化」を敢えて求めず、一回一回勝負をしていこうかと思っております（その方が勝負勘も維持できますし）
その為、当店ではポイント制度を廃止し、又お客様データはとりますが、お礼状を出す以外、催し物の案内等は決して出さない様にしております。
ならば何の為の客データかと申しますと「スムーズな宅配」や注文回数に応じた「お礼のオマケプレゼント」の為にのみ使用しております。

2021/7/29

（オマケの英語教室+うと Q 世話し）

Sustainable

最近よく耳にする言葉「SDGs(Sustainable Development Goals=持続可能な開発目標)」
この中に出てくる sustainable という英単語は sustain（持続する、維持する）＋able（出来る、可能な）がくっついた言葉で「持続可能な」と訳されております。
もう少し言いますと sustain の「-tain」には「保持する」という意味がって「sus=super 超えて維持する」で「持続する」となり、メンテナンスでおなじみの動詞形 maintain なら「メイン(main-)を保持する」で「補修する」又コンテンツでおなじみの動詞形 contain なら「中身(con-)を維持する」で「含む、含有する、包含する」となり、荷物の運搬時の入れ物や未持置き場になるコンテナは「contain する物」となります。
余談はさておき、この sustain（持続する）という言葉は元々grow、growth「成長する、成長」との対比語として出てきた言葉です。
つまり（GDP 国民総生産に代表される経済的）「成長」よりも格差是正、公平分配、互恵相互扶助、共存共栄等を軸として「持続可能な」社会やシステム作りに主眼を置こうという意味です。
それというのも、経済的「成長」が人間社会や地球環境に「格差」や「破壊」をもたらすという悪い副産物の方が目立ち始めたからです。
「このままでは人間社会も地球環境もぶっ壊れて取り返しのつかない事になる」
という危機意識から出たのだと思います。

それで「多少快適ではなくなっても」「多少不便を感じても」元々の土台がなくなるよりはマシだから、ここは一つ「シェアしたり、控えたり、腹八分目の満足にしたり」しよう。そうしないと「全てを失う事になりかねないから」
しかし「成長概念」に慣れきった我々にはそれがどうも簡単には受け入れられなさそうです。
「今日より明日はもっと良く、今日より明日はもっと豊かに」の何処が悪いのよ？」
とか
「辛抱、忍耐、我慢しろっ、てこと？それじゃ欲しがりません、勝つ迄は、の戦前と一緒じゃないのよ」
というお話が出てきそうです。
しかし此処で疑問になってくるのは
「もっと良く」の「良く」って何を指しているのか？「もっと豊かに」の豊かさは内を指しているのか？
でしょうし、
「辛抱、忍耐、我慢」という古色蒼然たる言葉達は「どのような時代に使われていたのか」を一旦除外してみた上で、元々の言葉の原義は何だったのか？
（例えば「辛さを抱え得る耐性を持つ事と思い上がりや我が儘をセーブする事」と置き換えるだけでずいぶんと印象が変わっても来ますから）
それを今一度、上の項目と下の項目を一緒に考えてみる必要がある様な気がします。
もっと簡略化して申し上げますと
「何を控えて、何を伸ばせばいいのか？」
それをこれから考えていきたいと思っております。
それが「具体的なシステム」として見つかった時に我々人間社会や地球環境が相互扶助的にsustainable になれる様な気がしております。
それを「sustainable development goals SDGs」と言っているのだと思っております。

2021/7/30

（気候変動）

「夏草や兵どもが夢の跡」
や
「祇園精舎の鐘の声
諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色
聖者必衰の理をあらわす
奢れる物久しからず
只、春の夜の夢のごとし」
といわれるように、人間界は生々流転、その定まるところを知らぬのに対し、
悠久なる自然界の天地運行は「変わることがない」と思われていたのは今までの話で、今現在は
強烈台風の連続来襲、豪雨水害の多発、猛暑日の連続等に始まり、つい最近身近で経験したのは、例年に比べて早い梅雨明け後、7 月中頃の「これからが盛夏本番」と思わせる猛暑日の昼に、何と「夏の終わりを告げ、秋の始まりを知らせる」秋津（赤とんぼ）が群れをなして飛んでいる姿でした。
加えて外は猛暑なのに、室内には涼やかな風が入ってくる、これまた炎熱涼風の併存。
夏と秋が同時スタートの「不可思議」以上に「怪」又は「怪奇」
もはや悠久なる自然界の天地運行すら定かではなくなってきている「底知れぬ不吉な予感」
気候変動を甘く見てはなるまい。
一線を越えたが為の
「覆水盆に返らず」
「時、既におそし」
となる前に、そのことに気づいて認識転換をし、それに基づく行動を起こして
結果
「雨降って地固まる」
レベルに止め置くことが「後代への責務」
と思う今日この頃でございます。

2021/7/31

（ズバリ書いたら？）

何でこういう大切な事に限って我が国国民向けに英語の、しかも略号で SDGs とか書いたりするのでしょう？メディアは。
外国なら分かりますが、よりによって我が国国民向けに。
こう書いただけで
「あっ、自分には関係ない話だ」
と鼻から思ってしまう人が多くなる事くらい分かりそうなものなのに。
（事実、この社の電子新聞版の記事アクセスランキング 10 ではほぼ最下位でした）
思うに、この時点で書き手が余り「本気ではない」「どうしても伝えよう」という意思がない事が見え見えの様な気がします。
もし本気で、どうしても伝えようと思っていたら、もっと分かり易く、もっと興味を引く様な工夫や手立て、表現法やキャプションの選択に相当な気配りや気遣いをしている筈でしょうに。
それが全く見当たりません。
他にもコロナ対策だとか、気候変動「問題」
環境「問題」
危機「管理」
等と個別一品でバラバラ扱いしたりもしています。
是って根っこは一緒じゃないでしょうか？
「人類の我が儘勝手が余りに酷くなり過ぎた当然の結末」
とか
SDGs=sustainable development goals（持続可能な開発目標）と
英語略語最先頭で日本語訳が最後の括弧内等ではなく、ズバリ日本語のみで堂々と
「人類存続最重要事項」
と、きっちり書けば注目度も上がるし、アクセスランクももっと上位になるだろうに、と歯がゆい気持ちになってしまいます。
コロナ禍で大騒ぎをしている真っ只中、しかも自分自身飲食業で酷い目にしこたま遭っているのに、こんな「迂遠で的外れにも思える」事を考えるのは自分だけなのでしょうか？
少なくとも SDGs でどの銘柄が上がるか？とか脱炭素社会を前にして有望な銘柄は？等というレベルの「セコイ話」ではない事だけは間違いないと思うのですが。
注記）
因みに、上述の「人類存続最重要事項」の英訳は
（in the near future exist or not? We, human beings most important live matter）

で、言ってみればちょっと前に大きな問題になった BLM(black live matter)ならぬ HLM（human beings live matter）ですが、上の文章には敢えてくっつけませんでした。

2021/8/5

（「一般論」論考）

窮地に立たされている時にその解として一般論を言われること程虚しく且つ苛立たしい気持ちにさせられるものはない様な気がします。
又、何十年も前の成功体験から導き出された「当時の正解」を、何十年も経って時代が変化しているにも拘わらず、今に当てはめて「一般論ですが」と断りつつも、まことしやかに恭しく言われるのもどうかと思います。
更に又、男女間の話において個別カップルの話でしかないものに対して一般論を述べること程役に立たない事もない様な気もします。
それでは各人各様でしかない物に対して、或いは平時ならぬ戦時模様同等の時に際して「一般論ほど役に立たないものはない」と十二分に知りつつもそれでも尚我々が一般論を口にしてしまうのは何故か？
想うにそれは
「一般論しか持ち合わせていないから」ではないでしょうか。
どういうことかと申し上げますと
それこそ「一般的な」公理として
知識 x 経験 ＝ 智恵
という式が成り立つとすると、
経験が少ないと出てくる智恵の大きさや智恵の数が小さく又は少なくなります。
「智恵」というのはその場の状況やその状況の変化に適した「具体的な解」と言い換えても過言ではありません。
有効且つ的確な意見や指示を出すためには知識に経験を加えた智恵が必要なのです。
それがないのに、智恵を大きく見せたり多く見せたりするには上述の公式に於ける第一番目の項の「知識」を飾り立てたり、何度も同じ知識を口にするしかなくなります。
つまり経験が少ないと「具体的な解」からどんどん遠ざかり、一般論（経験の裏付けを伴わない未検証知識の目次だけのような物の集まり）がどんどん膨張する事になる訳です、公理公式からして。
（現に我々のアタマの中には無意識ながらこの公理公式があって知らぬ間にこのメカニズムに従って行動や発言をしている様です）
このような事情から知らぬ間にどんどん増殖し続ける「いざという時にまるで役に立たない一般論」をそれに抗して減らす為には、我々は上述の公式における第二項の知識の取捨選択の基準となり、その裏付けとなる「経験」をより多く積む必要がありそうです。
ところがそれを阻む物があります。
「リスクテイクしない文化」
もっと具体的に言えば

「自らが他人への失敗や異質異端を許容しない不寛容な姿勢であるが故に自ら自身が何かをする前に自分がしている不寛容さを相手も抱いている筈だと邪推し、己の抱いた不寛容さと同等又は倍返しの相手による逆襲を恐れて、失敗する事や異質異端になる事を極度に恐れる文化」
です。
そこから推察するに我々がこの文化を打破しないままでいると、十年も経たずして我が国国民は知恵の深みと奥行きのまるでない「一般論しか語らないとてもつまらない国民」そして「一般論故に話が何もかみ合わない国民」になってしまっている様な気がします。
これは
「大変マズイ事だ」
と陰ながら深く憂慮しております。

2021/8/6

（現状のご報告）

本日は 76 年前に広島に原爆が投下された日。
原爆ほどではありませんが、当店にとっては「それ並み」の破壊力を持つ事態がやって参りました。
以下お話申し上げます。
「値上げの秋」というのは聞いたことがあるような気も致しますが「値上げの夏」というのは未だかつて耳にしたことがありませんでした。
しかし、今夏はその大波が押し寄せてきております。
話は少し振れますが、元々我が国は食糧自給率の極めて低い国です。大方の食材が海外からの輸入に頼っております。
就中当店の様に外国料理をお客様に提供して生計を立てている店の海外直材調達率は極めて高いものとなっております。
極端に申せば鮮度優先の葉物野菜とお米以外は全て外国からの調達と言っても過言ではありません。
他にはナンや肉の焼き物をするタンドリー釜に使う遠赤外線効果の高い備長炭も海外から調達しております。

ところが今回のコロナ禍でその海外からの供給網がズタズタになってしまったのです。
まず農場で働く人たちが集まらない。
それでもなんとか出荷できたとしても今度は港で船に荷を積む港湾労働者が集まらない、という流れで食材が我が国に入ってこなくなってしまったのです。
その為購入価格はうなぎ登りに上がり、現在では主要食材が軒並み 30%から 100%つまり倍の価格アップとなっております。しかもそれが一回では済まずに二回、三回と短期間の間に波状絨毯爆撃のように繰り返されております。
最早当店の台所事情は、ぺんぺん草も生えないほどの焼土と化しております。
しかも、それを吸収するための価格値上げは我が国のお国柄、特にこの地域の特性としては極めて難しい訳です。
この状態を冒頭で、被爆者の方には誠に失礼ながら「原爆に模して」お話を切り出した次第。
メディアのニュースでは工業製品に関するサプライチェーン寸断の話はよく報じられておりますが、工業製品以外にも農産物畜産物製品も同じ事が起きているのです。
特にこの夏はワクチンによるウィルス感染（実効再生産倍率）抑制効果が低いデルタ株の急激な拡大で、当店食材輸入先である東南アジア諸国の生産状況が惨憺たる事態となっているようで、収束又は終息の気配が全く見えておりません。
さてもさてさて、どうしたものか？
「一難去ってまた一難」
等と言いつつもう 99 難くらいはクリアしてきたのですが、是がこの先 100 難で終わるのか或いは 200 難、はたまた 1000 難くらいまで続くのか？
当店の食材在庫のみならず、亭主の自分の「気力体力在庫」も底をつきそうな状態になって参りました。
追記）
最後に一言
No More Hiroshima & No More Corona Virus Crisis.

2021/8/6-2

（endless「安くていいもの」legend）

前の記事で食材の値上がりを商品価格に反映するのは
「我が国のお国柄、特に当地域の特性からして至難の業」
と書きましたが特に文系インテリ高年齢夫婦層の多い当地域では次の様な言葉に必ず出くわしいつも頓挫しておりました。
曰く
「いいものを安く、が当たり前よね」
とか
「いい物を安く提供するのが経営者だろうが」
とかです。
「いいものを安く」というのは「お値段以上●●●」に代表される様に価格対効用比アップ、即ちコストパフォーマンスアップという意味では文句のつけ様のない正しい文言です。
しかし実際には
「（絶対条件としてまずは）安くて（是も絶対条件として一点欠ける事なく）いいものを」
が実態。
要は
「いいとこ取り万歳」
確かにハイコストパフォーマンスな物の提供、それが 1 回や 2 回の事であるなら「あらゆる偶然のプレゼントを適応して」実現可能かもしれませんが、それが 5 回 10 回、いや毎回となると話がまるで変わってきます。
100 円の物に、500 円の価値相当が VA（価値分析）などでできた。OK です。
二回目も 100 円のものに更に 500 円、トータル 1000 円分の効果を盛り込めた。
あるかもしれません。
しかしその先 100 円のものに毎回 500 円分の価値効果が追加され続けるというのはあり得ない話です。
同じ柳の下で同じ様にまるまる太って脂の乗ったドジョウを 100 回捕まえるなんぞありっこないでしょう。
ありえない事を「ある様に見せかける」と何が起こるかと言えば
「不正」
です。
ステルス値上げ、ステルス手抜き、ステルス品質ダウン、ステルスインチキ検査等など。
「安くていいをもの」（いいものを安くではなく、です）

を殆ど挨拶代わり、或いは「取りあえずの枕詞として言うだけは言っておきましょうよ」態度で決まっておっしゃる方の多くが文系インテリ夫さんに嫁いだ文系インテリ「専業」主婦さんです。
あたかもそうする事が「専業」の外すべからざる役目であるかの様に。
そうしてそれが無言の大きな圧力や超えがたい壁となって立ちはだかっている。
しかしそのオマケの枕詞みたいなものがひょっとすると
「不正の遠因」
である気がしないでもありません。
このオマケの枕詞に対して
「いい物は手間や素材を掛けた分値を上げないと消費者以外に生産者でもある貴方のご主人の給与が同額減る事になりますがいいですか？
となったらさてその専業主婦さんはどう答えるのでしょう？
「安くていいもの」と「高くていいもの」どっちがいい？
と訊かれれば
「安くていいもの」
と答えるに決まっています。
しかしその誘導尋問と「安くていいもの」が無際限に提供されるという神話が
「不正の温床だ」
となった時、その不正を防ぎ本当にいい物を手に入れるには
「高くなるのが必定」
で
「それを認めてあげない事にはご主人初め共働きの奥さん単身就労のお兄さんお姉さんがやる気をなくしてしまう」
という事実に早く気づいた方がいいなと思い始めております。

2021/8/8

（極めて正しい英語じゃないと困るの？）

「正しい英語」
是を我が国において常日頃「必要として」いるのは誰でしょう？
直ぐに思いつくのは外交官や外務省のお役人さん。或いは企業の輸出入担当者さん。
それでは同じく我が国において常日頃から正しい英語を「要求している」のは誰でしょう？
こうなってくると直ぐには答えが出てきません。
それでも考えを進めてみると、お役所や企業の上司さん、そしてその方々に「正しい英語」を促してきたお役所、即ち「教育担当省」でしょうか。
そして更に正しい英語でないと「困る」人達は誰か？
これは意外と簡単で英語学習産業の方々や英語教育機関の方々でしょう。
平たく言えば英語塾、英語学校の先生、と言うより「その経営者さん」と高等教育機関の「教授や講師さん」等でしょうか。
此処で質問の向きを変えてみます。
では「英語を話せるようになりたい」と思っている人は誰でしょう？
恐らく老若男女を問わず相当数の方々がそう思っていたり想っていた事があったりしたのではないでしょうか。
こうやって見てみると何かがアンマッチな事に気づきませんでしょうか？
そう
「正しい」
の有り無し。
要するにこの一点で要求側と提供側にアンマッチが生じているのです。
要求側は「正しいか正しくないか」より「ペラペラ話したい（話せる様になりたい）」であるのに対して提供側は「正しくないと海外で通用しないぞ」と突き返して来ます。
しかし実際は「国の数だけ英語はある」と申し上げたのが実態です。
それでは彼らは何故そう言うのか？
「極めて正しい英語」でないと商売にならないからです。
例えば受験や TOEFL, TOEIC。
この時、提供側はまず落とす事を目的にトリッキーな引っかけ問題や外国では気にもとめない間違い探し問題を作り、次の過程ではその難易度が上がれば上がる程それをクリアするノウハウを高値で売れる云々。
つまりこの方々にとって英語は「極めて正しく」ないと「困る」訳です。
そして更に悪いのはお役所や企業の上司さん達が「このシステムに順応し且つ掻い潜れる様になってしまった」思考脳の持ち主である事です。
総本山である「教育担当省」も含め完全な一枚岩なのです。

これでは要求側の願いが入る余地等あろう筈もありません。
分厚いステーキを食べたいと言っているのに出てくるのはお上品な会席料理ばかり。
しかも逐一食事作法は寸分違わず守りなさいと言う耳タコ注釈付で。
「どうなってんの？」
と言いたくもなるのですが周りは何も言っていないので
「空気読んでないのは自分だけかも」
と「非」を自らに負わせて黙ってしまいます。
余談ですが、英語「も」話す外国の貧しい国々では子供に英語を教えるのは学校ではなく生活の中で周りの大人達が自然発生的に教えている様です。
そこで最後にご提案。
「だったら主要三科目や受験科目から英語を外しちゃえば？
その方が余程みんな喋れる様になる気がするんだけど。
どうかな？」

2021/8/11-1

（疑う余地がないと思ってやっていた事が最悪の結果を招いてしまった？　前編）

疑う余地がないと思ってやっていた事が結果的に真逆の方向に導いている場合があります。
例えば真夜中、海での遊泳。
背にしていた筈の岸の灯火がいつの間にか消え、一瞬方向を失った後に「確か岸はこちらだったはず」と、その岸に向かって泳いでいるつもりが実は正反対の沖に向かって泳いでいるような場合です。
前の記事の例で言えば寸分間違わぬ「正しい英語」を身につける事こそが「英語をペラペラ喋れる様になる唯一の道」だという考え方が逆に
「間違う事への恐怖、劣等感、或いは赤面や赤面恐怖と言った想像を絶するマイナス感情」を生成し、それが却って「話す事そのものを阻害している」様な場合です。
話す前から「是は正しいのか？正しくないのか？」にばかり気を囚われているので話をするタイミングを逸すると共に話をする回数も極めて少なくなるのは当然でしょう。
勿論それでは上手く、或いはペラペラ喋れる様になる筈もない訳です。何故なら話す機会、そして上達する唯一の方図である「失敗するチャンスすら持てない」からです。

オリンピック選手が技を上達させオリンピックに出られる様になるには、想像を絶する数の失敗経験とそれと同数＋1 回以上の改善をし続けてきたからである事を思い起こせば十分想像がつくでしょう。
或いはまた
しゃべった回数を分母（A）
正しい英語を話した回数を分子（B）
とすると、
正しい英語の出現率（C）
は（B）を固定した場合、話した回数が少なければ少ない程上がります。
しかしその逆、
正しい英語を話した回数を分母（B）
に、
しゃべった回数を分子（A）
とすれば当然ながら
上記の正しい英語の出現率（C）に当たるものは答えとして出てくるはずもありませんが、仮に
（C）を相手と仲良くなれる可能性率
とすると、案外
英語を話した回数である分子（B）
が多く、反対に
正しい英語を話した回数である分母（B）
が少ない方が、むしろ相手にリラックスを促し
仲良くなれる可能性率（C）
が上がるような事があるのかもしれません。
当然ですが、是はその場の雰囲気とそれに参加している人の心理領域のお話なので、あくまでも筆者の推測だけの話ではありますが。
（続く）

2021/8/11-2

（疑う余地がないと思ってやっていた事が最悪の結果を招いてしまった？中編）

ところで、此処で全く別のお話を致します。
ある意味上述のお話と一脈は通じているのですが、話の題目としては全く別となります。
それは、昨日のネットの記事に載っていたものですが、国連気候変動分科会(？)の科学者チームが行った緊急提言の記事で
「気候温暖化が今のままのペースで続けば、脱二酸化炭素達成度が最善の場合でも、産業革命以前と比して温度上昇が 1.5 度に達するのは当初予測の 2030 年から 2050 年ではなく、10 年前倒しの 2021 年から 2040 年の間になる。最早待ったなし。そうしてこの自然の変異の原因は人間の諸活動の結果である事はこれまた最早疑いようのない事実である」と結論づけておりました。
蛇足ではありますが、温度上昇がもたらす人類への災厄としては「海面上昇、都市水没」「熱波」「山火事」「風水害多発」等で
特に食料調達の面に関しての重大問題が発生する可能性です。
ここで、紹介文の中に出てきた「産業革命」以前と以降の変化に少しスポットを当ててみたいと思います。
産業革命は英国での蒸気機関の発明に端を発します。
その後都市、電気、大量生産等など様々なものが創出されました。
人々はそれ迄の労苦がかなり軽減され、これからは素晴らしい世界が常に右肩上りで永遠に続く様な幻想を抱いたかもしれません。

英語で言えばそれまでの heavy duty, danger から解き放たれ safety, amenity, comfortable, convenient な、邦訳すれば将に「安全で快適な世界」
その一部が現出し「これからの我々の生活はかくあるべき」と思うようになったのかもしれません。
しかしその「安全で快適な生活」の実現と維持、拡大には想定を遙かに超えるコストと物的エネルギーが必要とされました。
又産業革命以降特筆すべき大きな変化として「人口の増加」が有りました。
「安全と快適」がもたらした必然の結果でしょう。
是をグラフで見てみると
産業革命以前の世界の人口は、右方向即ち時間の経過に伴っても地を這うような動きだったのですが、
産業革命以降は短期間でほぼ垂直に近い形で激増したのです。
簡単に言うと「口」が矢鱈と増えたのです。
人々の口から吐き出される二酸化炭素の量も爆増したでしょうし、口から入り胃袋へ落ちて満足感や活動エネルギーの元となる食料の消費量も激増したと思います。
更にインターネット時代になるとその口々が一斉に声を上げ始めもしました。
一時経済学は
「色々あっても見えざる手によって予定調和的に軟着陸するから心配はいらない」
と説いておりましたが、昨今では人々も
「どうもそうではないらしい。誰も導いて等いなくて、自分達で何とかするしかないのかも」
と薄々は感づいてはいる様です。
只、色々な利害による内心の駆け引きによって自分からは言い出さないだけの話で。
（続く）

2021/8/11-3

（疑う余地がないと思ってやっていた事が最悪の結果を招いてしまった？後編）

この話を前編のお話と重ね合わせてみると
「産業革命はそれ以降の人類の永遠の成長と幸福への扉を開いたかに見えたが、200 年近く経った今から見るに、産業革命はその思いとは全く正反対の方向、ひょっとしたら人類滅亡への第一歩を踏み出した日だった」
という仮説も成り立ちそうな気もします。

即ち産業革命は、それまで眠っていた人類の「未曾有得の欲望」に「成長」という名で「これは善なり」というお墨付きを与えて火を付けた。
しかしその美名に隠された「むき出しの欲望」がエネルギーの過度な消費を産み、いつしかその欲望と過度なエネルギー消費をコントロールできなくなって人類存立の礎である環境そのものをも破壊するまでになり、それを止めようにも止まらなくなってしまっている。
「おかしいとは気づいてはいるが、多勢に無勢。大勢の流れに逆らってまで、自ら進んで止めることは難しい」
「成長をやめろというのか。経済に下押し圧力を加える様な事をしろというのか。安全で快適な生活を求めることの何処がいけないと言うんだ。えっ、言ってみろ、おまえ!!」
しかしそれでも困ります。それでも言うしかありません。
また、そこで引き下がって実際に「我々が生きていく上での共通コミュニケーションフィールド（語学的に言えば例えば英語）や共通土台（プラットフォームプラネット）」を失っては大変です。

ですので、此処は一番、後代をも担う視点に立った第二の、いやその後代に立った人類のこれからの長い歴史から見れば「こちらが本家で真性の産業革命」といわれるような、
「200 年前の産業革命もどきは、この本家、真性の産業革命を生む為のイントロにすぎなかった」
と言われるような、
換言すれば、今コロナ禍を機に、全く新しい概念を常態化させる、それこそ「ニューノーマル（新常態）」が必要になっているのではないでしょうか
なので、そのニューノーマル（新常態）を見いだし設立するまでの間、時間稼ぎではあるかもしれませんが各個人一人一人が声を上げ、何はさておき第一優先で一刻も早く
その各個人自らが
「温暖化対策を即断実行すべき」
だと考えております。

オマケの英語教室

2021/8/14

（a la carte）

本日は気の向くままに。
会話をしていて知っていると「繋ぎ」として結構助かる言葉があります。
例えば
Anyway（兎に角）
By the way（ところで）
Then(a)（それで、それから）※(a)は語呂を整える為に時々付きます（読みはゼンナです）
Oh my god（あらま）
At least（少なくとも）
What should I do（どないしょ）
Why（なんでやねん）
What happen（どったの？）
等です。
いずれも短い言葉なので覚えておくと便利です。

「短い言葉」といえば、日本の人は話をするときに割合と説明口調で、瞬間の感情表現をするにも話し言葉の一文が長くなる傾向があるのですが、外国の人は「後にも先にもそれっきり」みたいな感じで感情表現に関する一文の長さはとても短いことが多いように感じます。
例えば
Wow, cute!!（わっ、キャワイィ!!）
後にも先にもそれっきりとか。
あるとすれば後は表情やジェスチャー（一人大袈裟芝居）で表現することが多いみたいです。
言葉による説明はその後一切省略、見たような感じです。
後、日本語を英語に転換するときに注意しなくてはならないのが「直訳」です。
上述の wow, cute といった迄はいいのですが、例えばその後
「（かわいすぎて）アタマがぶっ壊れた」を
My head got broken
と英訳すると、相手は驚いて
（Oh my god!! What happen? ）Go to hospital A.S.A.P（直ぐ病院に行けよ）
となってしまいます。
ここは
My brain got jammed（脳みそがグチャグチャだ）
I already got fallen into crazy mode（もうキチガイモードになっちゃった）
You are too much strong poison for me（俺には毒過ぎる）
と漫画チックに言った方がいい（通じる）ようです。
因みに日本語で言うところの「頭（頭部）」ではなく「アタマ」は、英語では head を使わずに brain（脳みそ）を使うことの方が多い気が致します。
又、日本語で言う「分かった」つまり「分かる」の過去形での表現になるものは、英語では
英語の過去形の表現
I understood
と言ったり使われたりしたのは耳にした事がなく、大抵は現在形の
I understand（分かったわ）
で表す場合が殆どのようです。
直訳は物事を考える切り口としては使えますが、会話でそのまま使うのは一考を要する場合が多い気がしております。

二〇二一年九月の巻

2021/8/18

（直近近況報告）

1ヶ月間、外国人従業員のワクチン接種予約に奔走しましたが、地域や年齢制限の余りない自衛隊の大規模摂取会場での予約取りが毎回予約受付開始からたった 2 分で回線パンク状態となり、苦労賛嘆しているところに、当店のお客様情報から近隣のクリニックでワクチン接種が可能かもしれないと知り、早速昨日相談にお伺いしたところ、我が国国民に対してされた説明内容と外国人に対するのでは回答がまるで違っており「やっぱりそうか」と何も言わず引き下がって戻って参りました。
ところが同じ日の夕刻依頼していた弊社メンバー全員とその家族の PCR 検査結果がメールで来ており、チェックしたところ、自分と従業員の息子さん以外は従業員両夫婦とも陽性とのことでした。
ワクチン接種前に突如 PCR 検査の依頼をした件につきましては、8 月 13 日のディナータイム開始前に従業員の一人が体調不良を訴えたため、即座に店を閉め、PCR 検査を受けさせるべく各従業員家族全員を翌日早くに近隣の病院に向かわせたのですが、手続きがやたらと面倒くさく、仕方がないのでネットで自宅検査が出来るタイプの PCR 検査キットを探し出し、即座に取り寄せた後、使い方の説明や指導は電話では無理だと判断して、全員をお店の控え室に集めて検体を取り、それを送ったという経緯がありました。
そのきっかけとなった従業員は今では平熱。他の 4 人は全くの無症状ですが、だからといって当然お店を再開するわけにはいきません。
そうして再会したところで、もうどうせお客様は来ないでしょうし。
そうした食い扶持が狭まる一方、直近の解決手がかりである検疫や入院もこの時期、非常に困難な状況であることも当たりを付ける前から明々白々なので、どうしたものかと。
翻ってみれば、幾ら外国人とはいえ彼らとて同じ「人の子」
足下では、現在全員が恐怖と先行き不安に駆られ、絶望感からか家族によっては状況把握のための問いかけ電話にすら出ないものもおります。
又、お店を閉めているために幾ら売り上げがないとはいえ、最低限の給与は支給しなくてはなりません。何故ならこれまた矢張り「同じ」人の子だからです。
我が国国民だからとか外国人だからとか言う区別をしている場合でもありません。
飛行機で飛ぶと眼下に国境が見えないのと同様、長崎の出島みたいなところでずっと暮らしていると人種による違いというのも余り感じなくなっております。
人種によらず性根の「まともな人間」はなんとか助けたい。

それにしても、完全な八方塞がり。
進に進めず、引くにも引けない。
さて、どうするか。
動けるのは陰性の自分だけです。もう一人の陰性、従業員の息子さんは社外の人間ですし。
追記）
本日は文章を推敲している暇がありませんので、そのままアップさせて戴く失礼をお許しくださいませ。

2021/8/19

（（続）直近近況報告）

「よしっ、コイツらの為に!!」
といったその直ぐ足下で、橋桁を外されたか或いは後方から援護射撃の正反対「ダメ押しのトドメ射撃」を受けた様なものでした。
「PCR 検査はどうなった？ワクチンはまだか？医者の手配は？」
と散々電話をしまくってきておいて、こちらが走りに走ってやっとドクターとの繋ぎを見いだし、外国人患者との電話ヒアリングに向け事前の情報を可能な限り相手側に提供し、後はドクターが本人に電話を掛けて、5 項目ある質問の内、現在の状況と感染経路についてだけ答えればいいように絞り込み、その後者 2 質問も知っている範囲で既に医師側には伝えておいたので、本当に「後は電話に出るだけ」のところ迄になっているにも拘わらず、催促しまくっていた当のご本人様が、その連絡の電話に出ない。
全く出ない。
「緊急事態だから、外に出るな。外に出ないで自宅にいるんだから、いつも電話に出られるよう、スタンバイしておけ」
と何度も言って
「ハイ、ハイ。ワカタ。ワカテル。問題ナイ」
と繰り返し答えていたのに、全く出ない。
電話着信予定の時間がどんどん迫っているのに、全く出ない。
医者側が
「一応電話したがでない様だから、仕方ないよね」
で、ほったらかされたらどうするのか？保健所の検疫に繋がらなかったらどうなるのか？
こちらは相当レベルでヤキモキしているのに、恐らく相手は思わぬ有給でカリーのスプーンくわえての高鼾かマダム殿の膝枕。
しかも是が一度や二度ではない。家にいて昼間なのに全く出ない。毎回同じ事の繰り返し。
「てめぇ、こっちは男やもめで炊事洗濯家事掃除、全部独りでやって、オマケにこちとら無休で無給なんやぞ、アホんだら!!」
こうなってみると、従業員によくし過ぎるのもどうかと思ってしまいます。
「後ハ社長ガスル。マカシテオケバイイ」
と思っているのか「依存心丸出し」
「丸投げすれば全て事はオートマティックに進み後は結果だけ受け取ればいい」
というどこやらの大手企業の従業員も真っ青な程の、相似的態度。
こうなってくると
「一体自分は何の為に何をやっているのだろう？」
という疑問に満たされてしまいます。

一方、世の中では判で押した様に「雇用主は悪代官で従業員は善良でか弱い子羊ちゃん」の図式一点張り。
「前門の虎後門の狼」で板挟みのジレンマ状態。
或いはあちらに行けば鳥と言われ、こちらに来れば獣と言われる
「コウモリさん」状態。
本当にもう気が折れそうになります。
投げ出したくもなります。
はっきり言って半ばヤケクソ。
で、この先どうするのか？
正直言って全く分かりません。
なので、まず先の事は考えない事にします。
その上で、兎に角行けるところまで行ってみる。
完全総当たり戦を覚悟で、兎に角勝ち進める処まで勝ち進む。
といっても総当たり戦のその「総数」がどれ位あるのか？
たった今「入れた気合い」が抜けそうな程の数の様な気がしております。

2021/8/20-2

（オマケの英語教室+うと Q 世話し
ひまわり二毛作　一毛作目）

副題：背を向けたひまわり Sunflowers show their backs ）

毎日お店に向かう途中に通る墓地公園手前の畑に今年もたくさんのひまわりが咲きました。
ところが今年のひまわりさん達は何故かみなそっぽをして自分に背を向けています。
In this summer, all sunflowers are no facing to me, facing to opposite direction, somehow.

細かく言えば全く同じ場所ではありませんが、見ている方向は去年と同じす。
中にはひまわりには向日性があるから昼にでも行けばこちらを向いているのではないの？
という科学者の方もおられるでしょうが、自分が訪れる限り間違いなくそうなのです。
確かに訪れる時間帯がまだ太陽の位置が低い朝まだきだけ、という事は否めませんが。
最近、外国人従業員が PCR 検査の結果、陽性と判断されました。
現在自宅療養中で、当然ながらお店は休業中です。
人の口に戸は立てられません。
もう噂はそれこそ「蔓延」しているでしょう。
自分から記事の中で公開したのだからと申される方もいるとは存知ますが、後で一つ又一つと事実が判明するより、始めにいっぺんに事実を開かした方が言われる側にとっても言う側にとっても「それがむしろ better」である事を経験則上知っていたからです。
そうとは思いつつも
「ひまわりさん達にまでそっぽを向かれるとなると、流石につらい」
You are my sunshine, my only sunshine.
You make me happy when sky the gray
But now you are showing your backs to me.
I feel so strongly sad because of being rejected with facing directly even from sunflowers, anyway.
(I wanna cry)
偽らざる心境です。

2021/8/20-3

（オマケの英語教室+うと Q 世話し
ひまわり二毛作　二毛作目）

副題：太陽型自動追尾パラボラアンテナスタイルレーダー

Automatically catching up parabola style radar

日本語では「ひまわり」
英語では sunflower
英語では花の形が太陽に似ているのでそう命名されたのでしょう。
ところが日本語では花の形が太陽に似ていることのみならず、太陽の形に似たその花が向日性に従って太陽の方角を自動追尾するという特性にまで目が行き、むしろその特性の方に重きを置いた命名がなされたものだと思われます。
古（いにしえ）の我が祖先というものはスゴイものだなぁとつくづく痛み入ります。
ところでこの差は一体何に由来するのか？を少し考えてみました。
そこで浮かんできたのが
「観察眼（eyes of observation）」
です。

常に対象に目を向け、その中から変化やその兆しを読み取る眼力。
これが世界でも相当レベルな我が国の聖地精巧なる文化を築き上げる基となったのではなかろうかと推測致しました。
ところが現代の我が国。
世界でもトップクラスのスマホ長時間閲覧大国。
電車に乗れば七人掛けのベンチシートに座っている人の内スマホを見ていない人を探すのが困難なくらい入れ替わり立ち替わり座るどの組もスマホ、スマホ、スマホ。
是では当然観察眼の持ちようがありません。
観察眼の持ちようがないので、これまた当然周りの変化やその兆しに気づく訳がありません。
気づきやひらめきが訪れるはずもありません。
となればコペルニクス的大転換を生むような発明発見など有りよう筈がありません。
出来てせいぜいスマホ画面内に表示される内容の改善か革新に止まってしまいます。
確かにスマホは便利で有用です。
しかしそれは使いこなして初めて言うべきことで、それに飲み込まれてしまったのでは、最早我が国においてはコペルニクス的大転換をなすような発明発見は遠い過去の遺物となっているのかもしれません。
Observation brings imagination and after it, imagination brings creation and innovation,
I think.

2021/8/22-2

（オマケの英語教室+うと Q 世話し　photo taking）

自分の趣味はカメラです。
我が国でそう言えば写真撮影の事だと理解されますが、外国の人は camera machine 即ち機械としてのカメラを想像するみたいで、上述の書き方だとカメラの分解、掃除、調整等カメラいじりと捉えてしまうようです。
もし写真撮影が趣味なら photo taking とか taking photo とか言った方が間違いなさそうです。
ですがこの写真撮影に当たる英語も５０年前に自分が海外文通をしていた頃は taking a picture といっておりました。
こういった表現も時代の流れと共に変わっていくようです。
又、英語文化圏、即ち文法的に言うと S,V.O.C（主語＋動詞＋目的語＋補語）文化圏の人の場合は V.O の語順に倣って taking photo という人が多く、我が店の外国人従業員の母国ネパールの様に、我が国同様 S.O.C.V（主語＋目的語＋補語＋動詞（述語）語順の文化圏の人は photo taking を使う場合が多いようです。
更に photo taking の場合には言い方はそれだけのようですが、上の例の taking photo の場合には、ある人は taking photo といい、ある人は taking a photo 又は taking photos と言い方は人によってまちまちなような気がします。
要するに何が言いたいのかと申しますと、受験英語では答えは一つで他は全部×なのでしょうが、現実の英会話の中ではそんなことはなく結構融通が利くということです。
この差は何に由来するのかと申しますと、現実の英会話の中では
「まず相手を理解しよう」

というのが何よりも第一優先なのに対して、受験英語では
「まずあらを探そう」
というのが第一優先になっているという事に由来しているようです。
言ってみれば上の英語が
「民間外交（友好）」
であるのに対して下の英語は
「政府間外交交渉（駆け引き）」
とでも申しましょうか。
そう考えると我が国の英語教育は
「国民全てを外交官（駆け引き専門家）に仕立てるが如きマニアックでトリッキーなスキル推奨教育姿勢」
と言って言えなくもなさそうです。
是は教育全般に言えることですが、教育方法やその評価法が余りに厳密で細かすぎるとその思考態度や相手に対する評価基準、或いは又それに基づく相手への接し方が「極めて厳しく硬直的で寛大さの欠けたものなり、同質性の線引きや囲い込みばかりがはびこり、ひいては爪弾きや仲間はずれ、いじめや村八分の決定的な遠因」にもなりかねないような気がして深く危惧しております。
追記）
以前にも似たようなことを書きましたが、ますますその感を強くしておりますので、くどい事を承知の上で再度述べさせて戴きました。

2021/8/23

（オマケの英語教室+うと Q 世話し　broadcast）

Broadcast は「放送」という意味です。
BBC といえば British Broad Casting（英国放送（協会）の略です
「もうちょっとブロードでいいんじゃない？」
時々こんな会話を耳にしますが「ブロード」の部分の意味は「おおまか、縛りをキツくしない」等でしょうか。
一方キャストやキャスティングの方は「配役」
キャスターで有れば「司会役」です。
他には Dai was cast で「賽（サイコロ）は投げられた」とか。
共通しているイメージは「或ポイントに投げ込む」つまりキャストやキャスティング、キャスターであれば「適役」という感じで、Dai was cast であれば「時至りて投げられし」と言った具合です。
そうなると Broad Cast(Casting)というのは元々矛盾する概念の結びつきと言うことになりそうです。
「おおまかにピンポイントで的確に投げ込むもの」
なんか妙な日本語でしょう？
我が国国民は自分が使う場合は別として人がこの様な相矛盾した玉虫色の物言いをした場合、それを極度に嫌い責め立てます
推察するにその性向は、我が国国民感情の再基底部に存する「隅々に至るまで精緻に一貫した様式美への希求」に依るところのような気がします。

お役所の書式。教育の方法論。会社組織の縦割りの一貫性。そして放送での各局キャスト、キャスティング、キャスターのスタイルの異質性排除、将に様式化。
それは思うにお上が求めているというよりも、お上は我々国民全体が無意識に強いている「そのニーズ」を体現化しているだけのような気もします。
恐らく我々は何かを思考するに当たってまず様式化しない事には思考を始められない様な気がします。
そうしてその次は様式美の追求。
様式美のレベル追求。
果てはそれが最高になっていないと、全ては無意味と見做され消去又は排除されてしまう。
確かに様式無しで考えるのは大変難しいのでそれはそれであってもいいのですが、せめて最高峰以外は認めないとか意味がないと切捨てずに認めてあげてもいいのではないかなぁと思うのです。
そして次には様式としては未完或いは様式の体を為していなかったとしても、それが人々に感動、感銘、納得を与えるものであるならば
「その手も有るな」
位のおおらかさ、緩やかさ、いい意味での大まかさがあってもいいのではないかとも思うのです。
むしろ意識的にそうでもしない限り今の我が国の「細部に至るまで矛盾なく精緻な一貫性の様式美呪縛」で身動きがとれなくなっている「息苦しくなる様な逼塞、逼閉状況」からは抜け出せないのではないでしょうか。
Broadcast というのは何も「放送」という意味だけではなく、
「世の中何が役に立つか分からないので無駄を覚悟で敢えて広範囲に投網すること。
又は初めから敷居を高くして切り捨てるのではなく、初めのハードルは低くしてなるたけ多くを受け入れ最後は広範な中から出る、よりよい結果を待つこと」
我が国現代版用にそういう意味があってもいい様な気も致しております。

2021/8/25-1

（「分岐点」前編）

本日は少し大上段に振りかぶって「今後の人類と地球の共生」ついて書いてみようと思います。
先にお伝え致しました様に従業員とその家族ほぼ全員が無症状とはいえコロナ感染し
「もう先の事は何も考えない様にします」
と言っておきながら、何故突然全く相矛盾する地球全史的、超長期的な話が出てくるのだ？と不思議に思われる方もいらっしゃるかと思いますが、超零細風前の灯火企業とは雖も矢張り
「経営者は先を見て動かなくてはならない」
というのが鉄則であるという言葉を思い出したからです。
その「先を見て」の先のレベルですが直近に関わるものとしては
「従業員とその家族がめでたく全員快癒したとしても、戻ってくるお店がなければ快癒した意味がないだろう」
という事と
「ではどのようなお店に従業員達を戻すのか？」という「再開コンセプト」つまり「目指す方向」を規定するのに超長期的スパンで俯瞰した視点が必要だろうと思い始めたからでした。
と言うのも、この先どういう目的（着地点）を目指してお店を運営するのか？がクリアでないまま闇雲に再開を自己目的化することは、老人である自分の感情を引合いに出せば
「コロナ感染症が治おり生き長らえた。
が、生き長らえはしたけれど、どうしても生き長らえなければならない用事ってあったんだっけ」
みたいな。
ではどの位先か？と申せば、ざっくり言って今後 200 年位のスパン。
「200 年後に我々人類が生存している為には是からどういう方向を目指して進めばいいのか？」
それにしても
「何故 200 年なの？」
というと
人口が爆発的に増えた起点である産業革命が起こってから現時点大凡 200 年が経過している、という尺度を用いての設定です。
産業革命？人口？何それ？何の話？
と思われるかもしれませんが簡単に申上げますと

「産業革命以降の人間の数（人口爆発）とそれが生み出す活動エネルギーが地球環境の受容キャパを越えてしまい、減らそうとする地球側と完全に利益相反関係になってしまっている」
との認識からです。
なので、コロナ禍平癒以降は単に今迄と同じシステムで経済活動を再開するだけでは全く意味がなかろうと思い始めた訳です。
「潮が沖に向かって引けば引く程大波が返ってくる」
が如く自粛で抑えに抑えられた内在エネルギーは増大、増幅し、抑制の糸が切れた途端それを遙かに上回るエネルギーの発出も予想されます。
そうなると今迄「偶然にもコロナ禍による活動自粛で対地球環境との平衡を保ち始めていたその関係が再開によって又一段と悪化し、結果それ以前よりも悪い方向に人類の進む可能性が高い」事さえも予想されます。
在り方、進む方向性を考え直すいいチャンスだったのにそれを活かしきれず、逆に
「今迄通りの経済活動の再開」
に対して
「あぁ、是迄の日常が戻ってきた。ハッピー」
となって何も変わらなくなってしまうという予感。
それでは矢張りマズイのではないかと。
（続く）

2021/8/25-2

（「分岐点」後編）

話は少し飛びますが
此処でひとつ、ネットに載っていた或記事をご紹介します。
「地球温暖化により北極海では氷が溶け輸送航路としての価値が格段に高まった為、各国はその権益獲得の為に動き出している。
何故ならスエズやパナマ運河を利用しなくて済み、南アの喜望峰やチリ、アルゼンチンの最南端を回らなくても済む為に、前者は安全保障上、後者は輸送コスト削減上の効果が極めて高いからである」と。
記事を読んだ途端
「そこ迄考えるのか！そこ迄貪欲なのか！」
と驚くやら情けないやらでいたたまれない気持ちになりました。
ではここで話を記事のご紹介前に戻して
「何故我々は地球温暖化抑制の意味を真剣に問わず、直ぐに忘れ、人によっては金儲けの道具としてしか見ないのか？」
SDG s や脱炭素を「今後の有望株式銘柄」レベルでしか見られないのか？
それを自分流に推察すると、
「人間の地球に対する位置認識の仕方」
が原因しているのではなかろうか？と思っております。
即ち
「人間は地球上の生物の一種に過ぎない。他の生物と対等であり、又適者生存の法則に従っている」
という科学者的な考え方よりも
「人間は地球上で最高等な選民ならぬ特別な加護を受けた選種族である。故に、我々は地球や他の生物を支配し利用する権限を託されている。生存法則すら書き換える事さえ出来る存在である」
という専王的な考え方の方が勝っているからではないでしょうか。
それを平たく申し上げますと、要するに
「地位と名誉の権益権限、お金儲け最優先の社会になっている」
からではないでしょうか。
であるので、もし私共がお店を再開してもその轍を踏む様であれば再開が却ってマイナス方向に働いてしまいます。
しかし、だからと言って今起きている人口爆発のでっぱり部分を人類存続の為にと単純に200 年前の産業革命以前に戻せばいいのか？と言うとそれでは危ない考え方に陥ってしまいそうで怖くなります。

なので、ここはじっくり考えていずれにもならない「ちゃんとした新しい目的とその運営方法」を見出し、それに沿ってお店の再開にこぎ着けたいと思っております。
「でも具体的にはどうしようっていう訳？」
残念ながらまだその解に至るどころか、その方法論すら見つかっていないのが只、今現在の我々の位置で御座います、が
「大きな分岐点に立たされている」
事だけはひしひしと感じております。
（追記）
現在の弊社業務は感染 2 世帯の外国人従業員とその家族全員の全般的なサポート業務のみで御座います。
現時点、無症状でもある事から
「何時マデ、休ムカ？
家二イルノ、ツマラナイヨ。
ハヤクオミセ、イキタイヨ」
そういう彼らのはやる気持ちを宥めたり、透かしたりしながら押し止めるのが、結構大変な日常業務となりつつある昨今で御座います。
ですので、願わくは新しいコンセプトの元、十分ではないにしろ、成る丈いい形でお店を再開したいと念じております。

2021/8/26-1

（今時点分かっている範囲での「常態（ノーマル）」）

副題：ニューノーマル探索サバイバル日記中間報告

冒頭からいきなり申し上げますと色々ご意見を戴きそうですが敢えて記しますと

「色々と人類の存続なり永続を考えてきたが、そもそも人類の存続はともかく「永続」などと言うのはあり得ない」

と言う事です。

漢語的に申せば

「生者必滅、会者定（常）離」

それこそが

「常態（ノーマル）」

是道理。

「滅（ほろぶ）」と書くといささか反発をかいそうですが、この「滅」を「新陳代謝」と置き換えると少しはご納得戴けるのではないでしょうか。

つまり何も人間社会に限らず物事が「存続」するには「新陳代謝」による「入れ替わり」即ち「流動化、活性化」が必要だと言う事です。

「不動」ではなく「変化、変容、変遷」が必要でありそれが又「常態」であると。

古来ファラオのピラミッドに始まり現代に至る迄、時の王たちは我が世の春とその権勢を永遠に残さんが為にあらゆる画策を行ってきた様ですが、ひょっとするとそれらは全く無駄な愚行だったのかもしれません。

後代の人が事跡を称えると思っているのかもしれませんが、いずれかの日に人類とて例に違（たが）わず消滅するのが道理であるならば、その事跡を称える人そのものがいなくなってしまうのですから意味があるのかないのかは直ぐにも分かるでしょう。

万人が知る彼のレオナルド・ダ・ビンチの名とその事跡すら残らないのですから。

仮に自分とその事跡だけは例外だと思っているのだとすれば過去の王たちも例外なく皆そう思っていたと言うだけの話でしょう。

とすれば、この世にいる間はそんなものを求めず、追い掛けもせず自分が好きな事、楽しいと思う事、興味を引かれる事をやって暮らした後、静かに天に召された方が余程ましな様な気がして参りました。

そもそも「生きる意味」とか「生きるに値する価値」等と言い始めるから上下、高低、貴賤の階位序列が発生するのであって、過度の意味づけや価値評価を行わず

「何をしたいのか」

「何が面白いのか」

「何をしていると充実を感じられるのか」

即ち前者の肩書き尊重の「名詞主体の文化」からその時々の行為や中身を重視する「動詞主体の文化」に切り替えた方がいい様な気がしております。
今確かなのは「この世の生はこの一回限り」
と言うところ迄。
無論輪廻転生や天国の存在など色々な考え方があるのは存じておりますが、今時点で間違いなく言えるミニマム保証は
「今生の生はこの一回限り」
と言う迄でしょうから。
そうしてそれを承知した上で改めて
「それでは一体「自分は」何をどうしようと言うのか？」
ニューノーマル探索サバイバル日記シリーズの後半はその辺を探ってみたいと思っております。
追記）
今分っているのは
「肩書きに重きを置く名詞文化は他人の側に殺生与奪の権があり、行為、行動に重きを置く動詞文化には自分の側にそれがありそうだ」
と言う処迄です。

2021/8/29-1

（より現実的解かな？）

当店の今回の休業の経緯をちょっとお話し申し上げます。
8/12 夕刻、外国人従業員コックの一人が体調不良を訴える。
同日夕、即刻店を閉め自宅待機と翌日に最寄りの病院で PCR 検査をするよう指示。
しかし病院要求の手続きが外国人従業員には煩雑すぎる為、当店側で自宅検査キットを発注。
8/15 遠隔でのレクチャーが難しい事が判明、急遽お店に従業員とその家族全員を集合させ、自宅検査キットの使い方をレクチャーしながら検体を採取。発送。
8/17 PCR 検査の結果自分以外ほぼ全員「陽性」反応を確認。
感染経路は都内複数混雑駅通過と推測（店再開後経路変更予定）
検査機関に属する医師から各保健所に連絡。
8/18 以降保健所管轄下になる事を従業員に連絡。
それ以降管轄下での自宅待機療養開始。
8/27 保健所より 30 日以降全員外出許可の連絡あり。
しかし、当店側からは更に 1 週間自宅待機による経過観察をするよう再指示。
この間陰性だった自分は勿論、陽性者 4 名の内 3 名は最初から最後迄無症状。
最初に不調を訴えた 1 名については翌日の 37,8℃の発熱以外はほぼ無症状でした。
この 2 ヶ月間色々トライして参りましたが我々全員ワクチン摂取受入先が見つかっておりません。
当店陽性者は年齢的には今感染が最も多い 20 代から 50 代に属します。自分だけ 60 代です。
だのに陰性又は陽性無症状で中等症化、軽症化すらせずに済んだ。
何故だったのか？
と考えてみたのですが思い当たるのは只 2 点。
一つには「無い、無い尽し」の必然から「相当な活動量だった」事。
二つ目は経済的、時間的に余裕がなく「殆ど医者にかかれなかった」事
です。
以降は科学的データによる根拠がない中での推測にしか過ぎませんが上記二つが遠因となって、
恐らく
「基礎体力、基礎代謝、それに伴う抗体代わりの抵抗力が自然に獲得されていた」
からではないか？と。
好条件や医療に
「守られていたから」

助かったのではなく逆にそれらを得られず
「悪条件に晒されていたから」
こそ、耐性が出来て助かったのではないか？
との見立てです。
抵抗力や抗体は負荷が有る処に自然に生じます。負荷のない処に抵抗力は生じ得ない様です。
とすれば、過度の安心安全依存は、抵抗力醸成の観点からすれば却って逆効果になるとも言えます。
なので、過剰に安心安全を追い求めるよりは、ある程度悪条件に身を晒して事前に慣れておく方が得策のような気もします。
その方が、より現実的な解のような気がします。
（お詫び）
最近、熟考に欠けた浅慮が目立ち、書直し事例が頻発しております。
深く恥じ入る処で御座います。
読者の皆様へは、この場を借りまして、煩雑や混乱を招いてしまっている事を深くお詫び申し上げます。
相当恥ずかしいです。

2021/8/29-2

（まずは 70 でよし）

弊社のモットーは「Never give up」です。
ですが「頑張りの極地」みたいな「Never give up」
と
自分のモットーである
「ぶらり散歩旅」みたいな「兎に角行ける処まで行ってみようよ」
の両者。
一見全く性質が異なる様な 2 つの文言ですが実は弊社のそれ、自分のモットーの「従業員向け言い換え」版なのです。
会社のモットーが自分のモットーの上にある訳はないので、当然より深いモットーは後者の「兎に角行ける処まで行ってみようよ」です。
しかしそれでは外国人従業員に対してインパクトに欠け説明もいりそうなので世界各国何処でも一発で理解できそうな
「Never give up」
に置き変えただけ。
上述の「説明が必要になりそうな」のその説明ですが、要するに
Never give up に対して「エジソンを更に軟化した思考」の事なのです。
益々分からなくなったかもしれませんが、
エジソンは
「実験に 100 回失敗したら後もう一回だけやってみよう。それが成功の秘訣」という様な意味の事を申しておりました。
思うにこれは 101 回目に成功が待っているからと言う意味ではなく、101 回目をやってだめだったらその先どうなるのか。次の 102 回目をやって又だめだったら更にその先はどうなるのか？つまり結果が出るまでやり続ける。100 回目はその通過点に過ぎない、と言う意味だと考えております。
ではそのエジソンと自分の思考の差は何なのか？
何故わざわざ「エジソンを更に軟化した思考」と名付けたのか？
それは、自分の場合「成功」や「ゴール」明確な「目的」さえ置いていないからです。
何処に行くか分からない。どうなるのかも分からない。しかし兎に角駒だけは進める。今手近にある物の力を利用してその範囲で進める。目的達成の為に無理な道具の調達はしない。
そんな風に駒を進める理由は
「その先に何があるのか？どうなっているのか？知りたい、見てみたい。
或いはそれが来たらどうかわすか？どう切り抜けるか、試してみたい。

はたまた、もし自分の仮説を実際に推し進めるとどういう結果が出るのか？も試してみたい」
からなのです。
しかしそうなると冒頭の「Never give up」から位相差が益々拡がってしまう事に気づきます。
それこそ「ガッツ!!」で岩盤に正面切って体当たりするのと「好奇心」から夜の墓場に肝試しに行く位の違い。
全く位相が違う。
それもその筈
「元々の原動力が決意や意志ではなく探検、実験好きの子供の好奇心」
だからです。
しかし幾ら何でも「子供の興味」で「大の大人」に殺生与奪の刃を振うぞとは言えません。
又、従業員達は自分の事を勝手に「鉄人ルーテーズ」か「人間機関車ザトペック」に見立てている節も是ありで
「この際相手の分る範囲のモットーに止め置いた方がよかろう」
となりましたが、基本姿勢や概念は正に正反対。
「好奇心の連続が、外からは never give up に見える」
その好奇心の部分は全く触れぬ事にし分り易さを最優先。
まずは 70 でよし。
外した部分は後日折を見て皆へ、の積りです。

2021/8/30

（前記事「まずは 70 でよし」での大混乱の原因を探る）

毎日色々な事が起こり、それを日々頭の中で整理するのですが、整理が上手く付かないとイライラしてきます。
最近はどうした訳かその整理が上手く行かず、イライラのしっ放しです。
書き物も上手く纏まりません。
書き終えた後 1 日位経つと
「どうも腑に落ちない」「何かしっくりこない」「何か取り落としている」
等など。
公の場で自分の事を書くのは邪道だと言う事はよく承知しているのですが、余りに整理が付かなくなってきたので、番やむを得ず「完全なる自己都合」ですが緊張感を持って整理する為に敢えて皆様の御前で書いてみる事に致します。
例えば昨日の記事「まずは 70 でよし」
の中での会社のモットー「Never give up」と自分のモットー「兎に角行ける処まで行ってみようよ」の対比。
それを前記事では「正反対」と記したのですが、どうも今一つズレがある様な気がしていたのです。
「納得のいく対比になっていない」
それで自分のモットーの成り立ちを今少し点検してみると、元々は
「ダメだったらやり直せばいい。何度でもやり直せばいい。兎に角行ける処まで行ってみようよ」
であった事を思い出しました。つまり「前半部分を端折っていた」
となると端折っていた前半部分「ダメだったらやり直せばいい。何度でもやり直せばいい」が実は「never give up」を既に表していて後半部分だけがそれ以外の要素である事に気づきました。
換言すれば「会社のモットーは前半部分を取ったもの」だと。
前記事の混乱は、前半を省いていきなり後半部分から始めてしまった事による包含関係の囲い違いによる混乱が原因だったのかもしれません。
では後半部分の「兎に角行ける処まで行ってみようよ」に何故特段の光を当てたのか？
前記事既出の文言「好奇心」とはどう繋がるのか？
そこで更に過去の記憶を遡ってみると「兎に角行ける処まで行ってみようよ」の前に
「元々ダメ元、元気の素」
という自分の過去記事に思い当たり、更にその前には

「（何でやるかって？）そんなもん、やってみなけゃぁ、わかんない（から）でしょ」
と言うのに行き当りました。
此処で始めて前の記事最後半に記した「探検」とか「実験」「興味」「好奇心」に該当する概念が出て参りました。
恐らく自分の中では行動の原動力として「諦めない」事から得る力より「興味、関心、好奇心」から得る力の方が役立つ、或いは後者こそ前者の母体であると考えているからかもしれません。
もしそれが主旨であるなら前記事で「エジソン」も「鉄人ルーテース」も「人間機関車ザトペック」も敢えて出す必要は全くなかった訳です。
では何故この様な筋立てミスを起したのか？
答えは簡単。
従業員のコロナ感染で内心「カリー屋以外で存在感を発揮せねば」という気の焦りが生んだ「箔付けによる存在再喚起」
がその答え。
記事題名と「隠された真の目的」の完全なる不整合が巻き起こした大混乱でした。

2021/8/31-1

（企業の目的を問い直す）

昔から世の中で悪玉として名が上がり易いのが「数字」と「お金」です。
例えば業績や売上の「数字」を上げろのプレッシャーに負けて「不正に手を着けた」
要するに水増しや改竄です。
「お金」については枚挙にいとまがないので一々書きませんが、是も「悪」や「不正」「格差」等の温床としてしばしば扱われます。
しかしよく考えてみれば「数字」や「お金」そのものは無色透明で中立的な物です。
問題なのはそれらを手にした時、又は手にする前からの扱う側の「（真相）目的や運用の仕方」ではないでしょうか。
例えば「見た目の」数字を上げる事に拘ると質や継続性を無視して
「頭数だけ増やせばいい」
と言う事になってしまいますし、
「業績評価指数の分子と分母の数字を操作すればよく見える」
等と言う事が日常茶飯に起きてしまいます。
「見た目」はよくなり業績評価の面で責は負いませんが「会社の実力」は知らぬ間にどんどん劣化して下がり、ついには手の施しようがなくなってしまいます。
又、昔マーケティング等でよく珍重された「平均値」は、全体を総数で割っただけの数値なので、実際には「存在しないゾーン」を「これが全体の代表的な姿だ」と錯覚してしまいがちでした。
本来なら「中央値」即ち「最も頻度が高く現出するゾーン」を捉えていなくてはならなかったのに、です。
或いは気づいていながら企画を通すために敢えてその数値をすり替えて使う事も。
これらは全て無色透明な「数字」を扱い運用する側の問題です。
更にお金については扱う側、運用する側の問題点が「あからさま」に現れてきます。
端的に申せば「目的と手段」の大逆転です。
本来お金は或目的成就の為の一運用「手段」でしかないものを、全てを用いて獲得すべき「最終目的」と挿げ替えてしまう事態です。
「事業」とは元々前者を指していたのですが、最近では後者、即ち社会貢献や経世済民よりも「お金儲け」を事業だと勘違いする風潮が老若男女、国家民族を問わず、それこそ「グローバル」に蔓延している様に思われます。
これらは全て人間の側が数字やお金を使いこなす、つまり主体が人間にあって然るべき処、反対に数字やお金に使われている、弄ばれている「主体性の喪失」が原因の様な気がします。
「企業の最終目的は利益の最大化である」

と今から 45 年前、企画部門に配属された折、責任者からそう教わりましたが、今、これら数字やお金に、就中先進国の民が「ペットや家畜」の如く弄ばれ、使役させられている事態、矛盾がそこかしこで噴出する事態を目の当たりにするにつれ現在では、
「その目的の定義こそがおかしい」
のではないか？
「その定義こそが主体性の喪失や矛盾噴出の元凶概念なのではないか？」
と深い疑念を抱いております。
何故ならその定義には
「社会に対して企業が利益を最大化する意味の説明、即ち我々に対する存在理由が何も記されていない」
からです。

2021/9/1

（八方塞がる、も）

本日、震災の日。
何をどうしていいのか分からない。
兎に角も、あらゆる事が八方塞がり。
数え上げればきりがないから、やめておく。
さて、どうしたものか？
さっぱり分からない。
まるで分からなくなることを「八方塞がり」と言うのかも。
分かれば「八方全て」が塞がったことにはならないから。
さてもさてさて、どうしたものか。
再度の PCR 検査で陰性に転じ、所轄保健所から遠に外出許可を得ている従業員が、当社独自の経過観察期間も終えて、明日久しぶりに出社予定。
しかし、なんと言えばいいのか？
風評被害の嵐が吹きすさぶ中、どう舵を取ればいいのか？
資金援助もないまま、資金繰りをどうするのか？
書けば書くほど的外れになっていく書き物をどうするのか？
さっぱり分からない。
見当すら付かない。
地球もおかしくなっている。
我が国もおかしくなっている。
我が街もおかしくなっている。
当然、当店もおかしくなっている。
四方八方おかしくなっている中でどうするのか？
「気力、体力、時の運」
後者二つは既になし。
残るは前者一つのみ。
しかし、そんなものに実効性保証付き「科学的根拠」はまるでない。
「あっ、さて、さても南京玉簾（すだれ）」
の如く、千変万化、変幻自在に形を変えられるオペレーション方法があるのか？
しかし「窮すれば通ず」ともいう。
八方塞がったと言うことは
「此処が潮目。航路を変えろ」
という天の声かも。
そう思うしかないのかもしれません。

「着眼、発想、進路を変えろ」
と言う強いメッセージなのかも、しれませぬ。

2021/9/2

（お詫びとお店再開のお知らせ）

ネパール料理ナマステエブリバディは

●9 月 7 日（火）よりお店を再開致します。

●その前に、東京都中野区保健所、神奈川県川崎市保健所の担当スタッフの方々に対し、深い表敬を献じさせて戴きます。

●当店従業員感染後、少ない人数の中で、在日就労外国人に対しても公平且つ公正なる電話等でのフォローを戴いたことに対しまして、深く感謝申し上げます。

●幸いにも全員が陰性となり、フォロー終了のご連絡も戴き、当店独自の経過観察期間を付加した上で、全てをクリアー致しましたので、お店を再開することと致しました。

●感染経路につきましては、特定は出来ませんが、帰宅後極力外出しないよう常に依願し、本人達も遵守しておりましたので、恐らく通勤時、都内複数のターミナル駅を通過したことによる感染だと推測し、7 日以降は、都内ターミナル駅を極力通過しない経路に定期券を切り替えました。

●皆様方におかれましては、約 3 週間に渡りご不安とご不便、ご心配おかけ致しましたことを、心底より深くお詫び申し上げます。

●以上、上記に関する責任の全ては、亭主である自分にあります。

従業員達を責めないようひたすらお願いもうし上げる次第で御座います。

2021/9/4

（商いの道）

暫く前の自分の記事の中で
「ダメだったらやり直せばいい。何度でもやり直せばいい。兎に角、行ける処まで行ってみようよ」
と言う一文を書きましたが、今ふと
「辛抱強く、潔く」
と言う言葉を思い出しました。
何の言葉かというと、昔、モンゴル出身の「豪栄道」という力士が大関か何かに昇進した折、昇進の知らせを持ってきた使者に対して、謹んでお受けする旨「受け口上」で返した言葉の一部です。
是を聞いたとき
「日本人ではないが、この人は桜の散り際に喩えた日本の武士道に興味があるかもしれない」
と思った記憶がありました。
上述の豪栄道の文言を今少し分かり易い様に幾ばくかの言葉を付け加えさせて戴きますと
「頑張るだけ頑張ったのだから、その分見返りのご褒美があって当然でしょう」
と言う慢心を戒め
「出来ることは可能な限り全部やった。結果はどうあれ、納得がいった。それ以上は求めまい。それでよしとしよう」
という自らへの戒めの言葉との解釈。
相撲的に申せば
「力を出し切れば結果には拘らない」取り組み姿勢。
冒頭の自分の文章とは少し違うような気もしますが、似てなくもないかな？と思った次第。
従業員コロナ感染快癒明け、7 日からのお店再開を前に、従業員達は準備にいそしんでおりますが、亭主の自分はする事もないので手慰みにいい加減なことをほざいてみました。
追記）
因みに自分が追い求めているのは武士道等では全くなく、結果的に打ち込む羽目になっている今の「商い（飽きない）の道」だという事で御座います。
様式美の世界のお話しではなく「飯の種」の世界のお話しで御座います。

2021/9/4-2

（頼まれもしない解説）

再びこの一文。
「ダメだったらやり直せばいい。何度でもやり直せばいい。兎に角行ける処まで行ってみようよ」
前半が、弊社のモットーである「Never give up」の母体となったこの一文。
出る時は、するするっと出てきた自分のモットーであるこの一文。
読み手の方も違和感を覚えなかった様に思われるこの一文。
前半は結構力んでいるのに、後半は突如、力を抜いている、の感
前半については何となく道徳の時間を連想させるいわば「啓蒙ワールド」
方や後半は町内探検を思わせる「お散歩ワールド」
一見まるで違う雰囲気なのにそれが違和感なく繋がっているように見える。
一体何が二つを繋いでいるのか？
そこで思いついたのが或お方の言葉
「失敗はない。経験があるだけ」
と言う「あさっての方角」から飛んで来た様にも思える言葉。
その些か場違いにも思える言葉を、敢えてこの場に使った理由を、意訳を用いてご説明申し上げる事に。
その前に前置きとして「失敗も又経験」とか「失敗こそ成功の母」等と言う洒落た美辞麗句をもっともらしく説諭しているのではない事だけは述べたさせて戴いた上で、
「結果が失敗であったかどうかの評価の話ではない。評価を抜きにすれば全ては経験でしかない（大切なのは、それを行ったかどうか。その行為から血肉を得たかどうか、だ）＝括弧内筆者付加」
と。
であるとすれば
「知識量 X 経験量＝智恵の数と言う自分の定義から、経験量の多寡によって進める距離が変わってくる。
又、知識量も経験量も進みながら増やす事も出来る。
つまりそれらは常々変化するので日々進める距離も当然日々変わってくる」
であれば、
「どれだけ智恵を獲得して、その先のカオスを何処まで整理平定できるか。
それは自分たちの今後次第。
全ては現時点未知数なのだから、どれだけ進めるかは分からない。
でも、まずは駒を進めて、行ける処までは行ってみようよ」
と言う風に繋がるのではないかと。

その上で、どういう散歩になるかは「やり直し方」「やり直した回数」即ち
「経験量次第」
そこから得た
「智恵の質次第」
と言うことなのかもしれません。
チャラチャラしているようで結構「理」にかなっているのかも。
後半で述べたかったのは、それが前半の力んだ結果等ではさらさらなく、
前半で得た力が後半でその「後押し」をしている姿、
言うなれば
その後に続く各場面で、最も効果獲得確率が高そうな
「のりしろ部分（伸びしろ）の現れ様」
の話しを申し上げたかったのかもしれません。
以上、頼まれもしない解説。
大変失礼申し上げました。

2021/9/6

（お店再開直前の鬱憤晴らし）

明日から営業再開。
やっとこぎ着けました。
なので、今日は再開に当たりその前のガス抜きとして
日頃「言っている事とやっている事」の余りの違いにいい加減うんざりしている事例を書き殴る事で発散、鬱憤ばらしをし、再開後の活力にしたいと。
ご迷惑でしょうが
以下２編
お付き合いの程、宜しくお願い申し上げます。

では、その１から。
（二律背反事例「無理が通れば道理は引っ込む」編）
さんざん同調圧力掛けておきながら「早くイノベーション出せよ」
って、そりゃ無理でしょう。
さんざん同調圧力掛けておきながら「多様性がないじゃないか」
って、それも無理でしょう。
さんざん同調圧力掛けておきながら「型破りな人材を育てよ」
って、是も又無理に決まっているでしょう。
本件についてこれ以上ごちゃごちゃ言うのも何なので、
代わりに都々逸を一句、
分かっていながら「無い物ねだり」
分かっていながら「こじつけ強要」
相も変わらぬ「無理蔓延」
それが道理の「アリバイ社会」
道理で犯人（ホシ）にてこずる訳だ。
注）
ホシとは現在の我が国停滞の真因、元凶を特定する事をさしております。

次にその２
（二律背反事例「礼儀無き行儀は最悪」編）
行儀は外見（そとみ）
礼儀は中身（なかみ）
お行儀ばかりよくて礼儀がないのは
外見ばかりよくて中身がないのと同じ。

中にある意思やハートは、美事あっさりスルーして
見た目、肩書き、格、属性
此れ等ばかりが取り沙汰される昨今。
それが整っているか否かだけの昨今。
評価対象として大手を振っている昨今。
「よしっ、全ては完璧に整った」
此処に又ひとり「完璧な最悪」が誕生。
それを横で見ていたご老体がぽつり
「仏作って魂入れず」
と呟きをなすったとか。
「ダメだ、こりゃ」

「はぁ〜」
少しすっきりしました、
活力も少し戻りました。
ので
明日、又お店で。
言わずもがなですが、従業員一同、皆様のお越しを心よりお待ち申し上げております。

2021/9/7-1

（四文字熟語「義理人情」再解釈 前編）

「自分は義理人情を考えの中の一番上に置いております」
と言ったら、相手の人から呆れかえられました。
絶句して返答がかえってきませんでした。
現代に於いて「義理人情」という考え方よりも、言葉の扱いはそういった位置づけになっているようです。
曰く
古い
時代錯誤
講談、演歌の世界
昔の任侠映画の主題
下町店主の座右の銘
戦前の遺物
古くさく煩わしい
一銭にもならない
出世の邪魔
クっさぁ〜
等など、
数え上げたらこの言葉が呼び起こすマイナスイメージには切りがありません。
現代の我々が抱いている一般的イメージからは。
突然ですが、此処で話は打って変わって弊社の事業コンセプトなのですが
「国際間、世代間、たまたま隣にいる人との交流事業」
というのがコンセプトになります。
そのうち現在メインで行っている「国際間交流」事業の一環でネパール料理店をネパール人と運営する中で感じたのは
「当初、一番難しいと思われた国際間交流の垣根を意外にすんなり超えられた原動力は、異文化受容や相互理解なんかではなく、なんとこの「義理人情」だった」
と言うことです。
実は、この「義理人情」という一見「死語」のような四文字熟語が「本当に」表すところの姿勢が、国、年代、性別、階位を超えてさえ一番交流できるものなのだと強く感じたのです。
それでは散々馬鹿にされ、現代では古色蒼然どころか上述したように殆ど「死語」にさえなっているこの四文字熟語の「本当の」意味とは一体何なのか？
今日はそれを考えてみたいと思います。
「義理と人情、秤に掛けりゃ、義理が重たい世の中だ」（某歌歌詞）

「知に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくこの世は住みにくい」（夏目漱石）
これらの言葉に代表されるように、我々は今まで「義理」の事を、人情の機微を解しない無粋で強圧的な「世間様」「格式」「法体系」のようなものとして、換言すれば非人情或いは不人情なものとして無意識にも捉えていた帰来がありませんでしょうか？
或いは「人情」の事を「しがらみ」「非論理」「因習」「領界侵入」等と見なして。
しかしそれは「義理人情」という言葉の正しい解釈なのか？
（続く）

2021/9/7-2

（四文字熟語「義理人情」再解釈 後編）

まず、その疑問からスタートしたいと思います。
そこでこの四文字熟語を理解近接への試みに和文に邦訳してみたいと思います。
で、その訳文はと言うと
「正しい理（ことわり）即ち、物事の自律的なメカニズムに従い、人の又は人への情け（思いやりや気遣い乃至は相手からのそれの理解、及びお互いの立場に立とうとする）を重んじる事」
となりました。
次に、その理解をより深める為に今度はその正反対の漢字熟語を立ててみると
「不義理不人情」
となりました。
同じく、その邦訳はと言うと
「物事の自律的なメカニズムを完全に無視して置きながら、恰も自分の行為や発言がそれであるかの如く僭称し、その実自分の立場、都合を最優先して、人の存在や気持ちを全く顧みない事」
となりました。
後半の「正反対」の文章、何処かで見聞きした覚えがありませんでしょうか。
特に昨今、直近のいつか何処かで。
思い当たるのだとすれば、何の事はないその正反対、上述の不合理、不条理への「解」が「義理人情」の言わんとする中身だと言うことになります。
確かに「モラルや道理」の過剰要求や「的外れなお節介」の押し売りは迷惑この上ないでしょう。
しかし「過ぎたるは及ばざるがごとし」でもあります。
その度が過ぎると、理もなく筋も通らない事や、領界侵入をしない為という名の下に無関心や見て見ぬふりに依る見殺しばかりが横行する様になってしまいます。
それでは、いくら何でも堪らないでしょう。
そういった新たに生まれた逆矛盾の弊害をも含めたものが跋扈している事に薄々感づき始めた人々が「それだと気づかぬまま、言葉に出来ないまま」国を超えてさえ探し始めたもの。
それが
義理の執行、人情の復活。
厳しくも温かい。
経世済民（けいせいさいみん「経」世「済」民）
「世を経（おさめ）民を済（すくう）」が元々の概念だった筈の略語が「経済」

その元々の概念実現の為の、基礎理念を表して簡潔に記されたのが
「義理人情」
との再解釈。
であるのですが、
皆様方は、如何お思いになりますでしょうか？

2021/9/8-1

（ 自問 ）

まずは、会社員時代のお話しから。
会社員時代、小うるさい上司が部下の成長の芽を摘み、却って上司自身の評価を自ら下げる結果になっているケースを嫌というほど見てきました。
そして、どうせあぁたらこぅたら言うのであれば、ことある毎に一々耳元でグチャグチャ言うのではなく、一通り見終わって結果を待って後、最後に頭上からその結果に対する超弩級のお叱りを受け、責任を取らされた方が余程マシな気がしました。
かてて加えて、
「そうまでおっしゃると言うことは、当然ご自分は完璧に 100%おできになるんでしょうね。達成して当然。いや、達成しない限りくそみそに言われるお覚悟もおありなんでしょうね」
とも言いたい気分でした。当時。
そして余程
「バトンをお渡し致しますから、ご自分でやって見せてください、手本を見せてください。非の打ち所のない完璧なお手本を」
と言ってやろうかとも思いましたが、グッと我慢を致しました。
その経験以来、自分が反対にそう言われる可能性がある事に気づき
「もし、自分がそういわれたら出来るだろうか？」
と「言いたい放題相手に言う」前にそう自問をする事を覚えました。
そこまで出来そうもないなら何も言わない。
同じようなレベルでしか出来ないなら大抵のことは言わない。
もし、それ以上できる確信があれば代案を示して「ガツンとやる」
自分の事はすっかり棚上げしておいたり、そのお鉢は金輪際自分には回ってきっこないと高をくくったりして、言いたい放題相手に言うのはどうも好きではありません。
「笑ってごまかせ自分の失敗。あくまで罵しれ他人の失敗」
や
「自分がすればロマンス。他人がやれば不倫」
等の double standard を平然と立て、その矛盾には一切触れずに一方的に自らがその方面の一点非の打ち所のない「模範者」で有るかの如き態度に対して「恥知らず」と言いたくなる様な「無節操ぶり」が嫌なのです。
そうして「ならば、手本を見せてよ」と言われた途端、逃げたりそ知らぬ顔をしたりするその「厚顔無恥ぶり」も好きではないのです。
せめて
「それを言うからには自らの実力も知っておく」

自分の今の実態からして、相手にどれほどのレベルの要求をしているのか？
可能なことをいっているのか、無理でしかないことを言っているのか？
そう自問する事が大人として最低限の礼儀であり、且つ又実のある果実を得る建設的な態度だとおもうのですが。
どうなんでしょう。

2021/9/8-2

（ 逆 ）

最近「上級国民」と言う言葉をよく見かけます。
自分の解釈では「厚遇や優遇、又は見逃しにせよ特別扱いを受ける事」を「上級」と言っているのだと思います。
或いは単に「地位が高い事」の代用詞なのかもしれません。
しかし後者の場合、民間の著名人は別として政治家やお役人は国民の「公僕」ですから地位的には国民の下であると解釈するのが妥当でしょう。
詰まり国民諸氏が上で、政治家、お役人さんが下という位置関係。
次に数で言うと国民諸氏が圧倒的に多く、政治家、お役人さんの数は明らかにそれ以下です。
それを図で表すと逆三角形が出来ます。総理大臣一名を頂点としたそのひっくり返しです。
それでもし、この大多数の「上級（上位に位置する）」国民諸氏が一斉にその下の政治家やお役人さんに「個々人の千差万別な要求を全て満しているか」と事ある毎に逐一の細かいチェックを入れ始めたらどうなるか？
身近な例で言えば主任さん一人に課長が 100 人
「早く仕事をしろ」
「早く成果を出せ」
「机が散らかっている」
「誤字だらけだ」
等など一挙手一投足にお小言をたれる様な場合、皆さんはどう感じますでしょう？
いい加減うんざりするか怖くて何も手が出せなくなってしまうのではないでしょうか？
勿論主任さんの中には反対に「モンスター主任」もおります。
「業者泣かせ」や「リベート要求」主任さん。
しかし此処で申し上げたいのは「自分の属性上の位置」に関する再認識が必要なのではないかと言う事です。
例えば我々国民大多数の方が「上位、上級」で、その我々が自らの地位を無意識かもしれませんが乱用し、下僕（しもべ）である目下、格下の公僕にこうまで悪態をついたり、事細かにチェックを入れたり、人格破壊を起こしかねない様なレベルの言葉を吐きかけたりしたら。
それは上位者がする行為なのか。
少なくとも上位者であれば今少し長い目で「その下位の者の仕事」を見守る必要もあるのではないか？
というのも、する片端からこうも煩く言われると「行為者自身」が萎縮し却って大胆な手が打てなくなってしまうからです。

ひいては「萎縮によって人目やその評価を気にする余りその時期を逸する不手際」で我々国民に重大な不利益となって跳ね返ってくる様な気がするからです。
池袋での「上級国民」の行為とその後の態度は許せません。
過失もないのに亡くなられた方、残された方の無念を思えば怒り心頭です。
しかしその輩を「上級国民だ」と責め続けている我々も又ある時点の或人々に対して「上位位置者（国民上級）」である認識を持つ必要がある気がします。
「民の声は全て聞け」
というのは投げ手と受け手の「数」から言えば不可能です。
あり得ない解を求めて性懲りなく押し問答を繰り返していれば「機会損失リスク」が増大するだけの様な気がするのですが如何でしょう。
従業員感染時の保健所の方々の制約だらけの中でのご苦労に接し、そう感じております。

2021/9/8-3

（お店再開当日の感）

「店を開けたが、お客さんは一人も来なかった」
と言う悪夢にうなされて何度か跳ね起きたその前夜。
しかし、幸いにも昨日のお店再開では、いらしてくださったお客さんが予想外にいらっしゃったのです。
悪夢通りのゼロではなかったのです。
「是は嬉しかった」
ただひたすら嬉しかった。
ほっとし、安堵し、へなへなと腰が抜けました。
開店前、食材を買いに行った罹患当事者の外国人従業員達も「石持て追われる」事無くニコニコとかえって来ました。
これまたほっとし、安堵し、一気に気抜けビールになってしまいました。
三年と半年、この町で頑張った甲斐がありました。
何度か大変なこともありましたが、去らずにいてよかったです。
ですが、明日のことはわかりません。
一日遅れの悪夢で本当にゼロになるかもしれません。
しかし照る日、曇る日、雨降る日。
それこそが世の中の常、常態（ノーマル）なのだと言い聞かせて、明日から始まる次の三年と半年もこの地で何とか頑張ることに致しましょう。

2021/9/9

（お店再開理由のご説明）

副題：金看板「ニューノーマル」の「ニュー」取外しの顛末

暫く前の記事で
「先を見据えたニューノーマルが見つからないとお店を再開しても、同じ事の繰り返しにしかならない」
と言ったような主旨のことを書き、
前日最後の記事では
「照る日、曇る日、雨降る日と日々変化し、一寸先で何が起こるか分からないのが常態（ノーマル）」
だと言うような主旨のことを書きました。
いつの間にか「ニュー」を消しておりました。
そんな中で
「新しい指針が見つかった訳でもないのに何でお店を再開したの？」
当然そういう質問が帰って来るであろう事は予想しておりました。
それでお店を開けた理由を現時点での視点でしか有りませんが、それを承知の上で少しご説明申上げます。
まず自分はこんな事を考えました。
コロナ禍前と今とで何が変わったか？
今とコロナ禍以降で何が変わりそうか？
その前にまず、かなり以前から思っていたのが
「問題やリスクというのは常に存在する。成功というのはそのうちの一つがその時点でクリアー出来ただけで、その他同時進行しているリスクや問題が消えた訳ではない。成功は時としてその認識を自らの酔いで忘れさせてしまうので、却って成功は失敗の母にもなり易い」
そう思っていた上で第一番目の問いに対してはどうか？
「そう思っていたのは今考えれば人間界内の話でしかなかった。視野が狭かった。
では、視野を広くするにはどうしたらいいか？
人間を生物、種の一つに過ぎないと見た方が正しそうだ」
と言う認識に変わった。
では第二番目の問いに対してはどうか。
「上記同様に、視野を広げてみればコロナ禍が明けたからと言って特段のニューノーマルと言う様な何かがある訳ではなさそうだ。
格言を用いて言えば

「何が起きるか分からないのが世の中だ」
それが常態（ノーマル）
その言に従えば「新常態（ニューノーマル）」と名付けたそれは「繰り返し常日頃、毎回起こるリスクや問題を超えるための方策」の内の一つにしか過ぎない。
リスクや問題の元になる未知、未体験の突然の発生、即ち「変化」こそが、変わらぬ「実相」真の「常態」
とすれば「新たな常態」というのは常時生起の「変化」の事で何も目新しいものではない。
昨今話題の DX やテレワークにせよ変化の 0ne of them。
なので、以降は殊更「ニューノーマル、ニューノーマル」と言わない方が妥当の様な気がしてきた。
「すわ大問題発生」に対して「問題常在」
「人類は万物の長」に対して「人類とて一生物」
「声高な新常態」に対しては「騒ぐことなく淡々と」
以上をスルーして纏めると
「あぁ今迄、全て丸ごと勘違い」
それが「我々の今」の様な気が致します。
であるなら日々淡々とこの「勘違いを逐一修正」していけばいいだけの話なので、わざわざ大袈裟に「ニューノーマルという金看板」を掲げなくても
「お店を再開していいんでないの？」
と思い、再開するに至った次第で御座います。

2021/9/10

(「ニューノーマル」の「ニュー」外し理由、まとめ)

●是まで探索してきた「ニューノーマル」については
「改めてのニューなどない。
ただ変化こそノーマル（常態）だと弁えて、常なる変化に備えるだけだ」
と言うことでしかないらしい。
それは当初設けた問いへの答えの様な気もします。

当初設けた問いを以下に記します。
●「２年目に突入したコロナ渦での「ニューノーマル（新常態)」を探索する前に、大切なことがひとつ。
それは、自分にとっての「常態（ノーマル)」をどう認識しているか？です。
安心で安全。常に平時で「意のままになる」のが常態と思っている人と、
いつ何が起こるか分からない。常に不確実が常時で「意のままになること等ほとんどない」と思っている人。
その差は今回のコロナ禍、風水害、異常気象、経済の大減速に際して如実に表れました。
前者は「こんなはずじゃない。何とかしてよ」
後者は「また来たか。今回のはかなりデカいが、また超えるしかないな」
今回の件に関して「ニューノーマル」とメディアが騒ぐのは、どうも前者に立脚してのような気がします。
しかし、我々が認識を改めないといけないのは、後者へのシフトそのもの。
そうして、それを超えてサバイバルするためにはどうすればいいのか？や、大袈裟ですが、これから、どのような「世界観」や「価値観」を持つのが理にかなっているか？という認識の切り替えや深堀ではないでしょうか？それをここではマスコミやメディアの言う前者とは違った立ち位置で探り、サバイバルにつながる道を見つけたいと思っております（敢えて大風呂敷を広げさせて戴きます)」

そして今月より「ニューノーマル探索サバイバル日記」の表紙絵柄を変えた理由を付加しておきます。
●２年目の「ニューノーマル探索サバイバル日記」の表紙を今月から変えました。
「ひょっとして勘違いもいいとこの我々はそっぽをむかれているのではないか？
地球から
未来から
ここまで繋いできてくださった先祖から」
と言う暗喩（メタファ）として「何故かこちらに背を向けている今年のひまわり畑」の絵柄

に変えております。

二〇二一年十月の巻 最終巻

2021/9/13-2

（切なる願い）

「好きなことをやって食えるなら世話はない。好きなことをやって食える奴なんて言うのはほんの一握りだ」
その手の話をよく耳にします。
確かにその通りのようです。
しかしこういう言い方も出来ます。
「食えなくてもやりたいのが、本当に好きなことだ。食えないからと言ってやめるのは、本当に好きではないのかもしれない」
もっと平たく言えば
「貧乏してでもやりたいこと」
そう思うようになったのは、40 年の歳月を経て迄、あのとき同様アルバイトをしながら、としか考えられない状況下で、まだ芝居を続けているその人をテレビの時代劇のちょい役で見かけた時からです。
その折り、自分は
「とてもいいものを見た」
と思いました。
その後、昔からの大好物（こうぶつ）だった「起業」
にするすると自然に「箸」が伸びました。
今から 8 年前の話です。
手本は市井の中に在るや、も。
今もそんな気がし続けております。
ご健在であれば、齢（よわい）既に 70 代も半ば。
自分の希望通り、もしご健在であれば、
あのとき同様ご活躍されていることを
心底、切に願うところで御座います。
そう思うのも、今の自分がこの商売では
満足に飯が食えていないからでしょう。
なので、手本には消えてほしくないのです。
負けてしまいそうですから。

2021/9/20

（よぅ分らんが、暫く是で行くべさ）

「ゴール目指してまっしぐら」
よく耳にします。
昔は自分も余り考えもせずに口にしておりましたが、最近ふと
「そういえばゴールと云う時、無意識に直線を思い浮かべているなぁ」
と妙な事に気づきました。
紆余曲折だった五輪のせいでしょうか。
「何も全てがゴールへ向けての一直線ダッシュ 100 メートル走という訳ではないな。例えば 1500 メートル走では直線と曲線の組合せの先にゴールがある」
そして更に
「そういえば遊園地の迷路は、右に行ったり左に行ったり、先に行ったり後に戻ったりの先にゴール（出口）があるなぁ」
そして又更に
「迷路の曲がり方は 90 度や 180 度だが、迷路以外では自由曲線というのもある。それこそどっちに伸びるか分からない線。オマケにこの線にはゴールがありそうもない。勝手気儘にどんどん伸びていく」
話は変わって、かの坂本龍馬が
「道が一つと言う事はない。百も千もある」
と言ったとか。
この言葉を引き合いに出す方が結構います。
自分も時々使います。
しかしこの文言は取り様によって二通りに解釈できる様な気もします。
一つは
「（ゴールに至る選択肢）が一つと云う事はない。百も千もある」
今一つは
「（ゴールそのもの）が一つと云う事はない。百も千もある」
この時
「道が百も千もある」
と言った意味が前者を指すのならよくある話だが、もし後者を指しているならもっと世界が拡がる気がする。
しかし更に論を進めれば
「全ての道にゴールがあるとは限らない。ゴールがない場合もある」
と言うのも話としてはあり得る。
そうなると組み合わせとして、

「特段これと云ったゴールはない。ゴールがないのだから直線かどうかは無意味だ」
と言う事にもなる。
そういう視点で見ると「ゴールが在り」それに繋がるのは「全て直線」であるというのは修辞学的な「美しい飛躍」の産物で、却ってその美しさが我々の目から世の中の実態を覆い隠して居はしないだろうか？
此処に云う実態が
「紆余曲折」
「一寸先は闇」
「鬼が出るか蛇が出るか」
「行きつ戻りつ」
「再度紆余曲折」
であるなら、一層の事
「焦らずともよし」
「急がば回れ」で
「♫遠回りして帰ろぅ♫」
と力からを抜く手もある。
何かそっちをイメージした方がこの先余計な落胆をせずに済みそうだし、妙に力んで気色ばったりせずにも済みそうだ。
紆余曲折が世の中の実態（我々の都合に無関係な物事の自律的なメカニズム）であれば耳を済ましてそれに従う。それが何処へ我々を導くのかは知るよしもない故、ゴールの決め様もない。言える事はゴール迄残りあと幾らのその縛りを消して行けるける処まで行く、のでよし。言う迄も無いが常時右肩上りの一直線等在ろう筈もない。それが常態」
そう思えば
ハードルが下がって気が楽になる。
ダメ元でバッファが取れて余裕が生まれる。
結果、ダメ元、元々、元気の素が得られる。
三方よし、かも。
「よぅ分らんが、暫く是で行くべさ」

2021/9/21

（懲りない我ら）

「紆余曲折だらけで、世の中思った通りには行かないもんだ」
と前回の記事で申し上げたのは別に自分の独創的見解でも新規発見でもありません。
既に皆さん重々ご承知の経験則でしょう。
だからこそ「魔法の一振り」や「ドラえもんのポケット」に憧れて、勘所を疲れるとついつい信じ込んだり、だまされたりしてしまう訳です。
かく言う自分もどれだけ巻き上げられたことか。
小は数千円から大は 200 万円くらいまで。
勿論初動段階で気がついて難を逃れたものも数多ありますが「だましにおいでに来られる方の数」の方が圧倒的に多い関係上だまされる確率から云うと低いのですが、実際件数や一回当たりの金額、又はその累積額となると結構馬鹿にならない数字になっております。
この様に「やらずぼったくり」や「立派な門から入ったら直ぐ裏口だった」という様な場数だけは人一倍踏んできた関係上、最近の座右の銘は
「うまい話にゃ、気をつけろ」
となっております。
そうしてそれを更に補強する為に
「急がば回れ」
や
「ヒットを打つには地道な訓練」
「始めちょろちょろ、中ぱっぱ、赤字大でもズルするな」
或いはそのアレンジで
「始めちょろちょろ、中ぱっぱ、終わってみるまで気を抜くな」
更には又その再アレンジで
「始めちょろちょろ、中ぱっぱ、そこでやめとけ皮算用」
とかをとっかえひっかえ、心の中で運用しております。
しかしそれでもだまされます。
というのも「うまい話」でも何でも無いタイプのだましがあるからです。
そう、フィッシング詐欺。
大手のサイトそっくりの中で
「期限が迫っておりますので、速やかに更新してください」
といったような「不安を煽る」切り口で迫ってくる奴です。
魔法の一振りやドラえもんのポケットで見せる世界は「happy」ですが、こちらの方はそれとは正反対に「uncomfortable」や「loss」「miss the final help」をちらつかせる訳です。
観察したところ、此れ等だます側の人々に共通しているのは

「人間のこころは何で動くか」という心理学に極めて精通していることでしょうか。
即ち「自分だけ得をしたい」や「自分だけ損をしてはたまらない」という潜在意識内に存在する根源的心理（深層心理）につけ込んだものです。
「人間は心理の生き物である」という道理（善悪に関係ない物事の自律的メカニズム）を巧く利用し且つ悪用した例と云えるでしょう。
そう、今日も又
「分かっちゃいるけど」ふにゃ、らら、ら〜。
言わずと知れた
「世の中在住、懲りない面々」の私共で御座います。
（追記）
本編の様な詐欺事件には至らない迄も、それらを引き起こす温床となる我々各人が持つ「自分だけ心理」への自覚自制が進み、この「スケベ根性」に由来し発生する壮大な活動エネルギーとそれに伴う無駄な CO2 の排出量が減れば、今後相当の温暖化ガスが抑制される気もしております。
無論、科学的根拠はまるでありませんが、いいポイントを突いている様な気はしております。

2021/9/23

（予測外れの元？）

「人間は心理の生き物である」
と前の記事で書きましたが、これへ更に新しい文言を付加するとすれば
「世界の結果としての出来事は、短期的には科学的経済法則の結果ではなく、人間心理の集積体が引き起こした結果である」
と言うことです。
短く云えば
「世界は経済法則（事実由来）ではなく人間心理（気分由来）で動いている」
と。
それは欲望渦巻く「株式市場」を見れば一目瞭然でしょう。
実態以上の高揚感、万能感で買い、実態以上の先行き不安や恐怖心から投げ売りする。
全てがオーバーシュート気味、アンダーシュート気味でなかなか本線通りには行かず、上に増幅、下に増幅して、何事も「やり過ぎる」
しかも最近ではアルゴリズム取引と言ってコンピュータが勝手にメディア等に出現する文言を読み込み、1 秒間に数千回の売買をして、それを更に拡大増幅させています。
此処に実体経済との乖離が生まれます。
内閣府だったか総理府だったかが行う「街角景気調査」との差も生まれます。つまり数字と実感の差。
「タクシーの運転手さんは酷く景気が悪いと言っているのに、株価や経済指標はそんなに悪くはないと言うような差」です。
是には飲食業など「有形資産」分野がダメージを受けているけれど、IT 企業など「無形資産」分野が好調で、働いている人が少ない分野の成果が、働いている人が多い分野の人々が感じる実感以上に全体の数字を押上げているといったからくりもあります。
こういったことが原因で数字を駆使するプロの投資コンサルや経済学者、又はエコノミストの経済や未来予測がいつも外れ、思わぬ結果が度々生じるのは、この「心理部分（気分由来）」を十分に考慮に入れていないか全く見てもいない事が原因なのではないでしょうか。
平たく云えば「専門家の予測は当たった試しがない。見当外れが殆どである」と。
となれば、今後の世界の経済動向や未来予測（株式市場の動向や株価の未来予測ではありません）を読み解くには、生起する出来事に対して「人間心理がどう動くか」を、それこそ「科学的に」見ていく必要がありそうです。
此処で敢えて「科学的に」と釘を刺したのは、
「自分の都合、即ち「思惑由来」に立った色眼鏡で引き回しをする」事が推測されるからです。
そんなことをしたら更に益々「訳が分からなくなって」仕舞うからです。

是に当たっては「冷徹且つ厳正な取り扱い」が求められて然るべきでしょう。

2021/9/25-1

（「も」前編）

「何のことはない。人皆、本心は独り占めを願っている」
独り占めというのは略すれば「独占」です。
世の中では「独占」は悪い事の一つに挙げられております。
最も耳慣れた事例を引き合いに出せば「独占禁止法」です。
自由で公平、公正な競争を阻むからです。新しいものの萌芽を摘み取ってしまうからでもあります。
それが人々に不利益を与えると云うことで制定されております。
一方目を転ずれば、政治、経済、マーケティング分野などで「勝ち組、負け組」「勝者に敗者」から始まって「一強」、を超えて最後は「一人勝ち」等と盛んに云っております。
初めの「勝ち組、負け組」辺りから「一強」に対して迄は何処となく批判的論調が目立つのですが、最後の「一人勝ち」に迄至ると、何故か「褒め言葉基調」に転じてしまっているのを何度も目にしました。メディア上で。
しかし、この「一人勝ち」が長く続き、発言力や権限が度を超すと、それはもう「独り占め」即ち「独占」の始まりです。
そうしてこの「独占」が自画自賛をし始めると「独善」つまり「独り善（よ）がり」になります。
当然ながら独りよがり「独善」は腐敗の元になります。異論に耳を傾かず自分だけが正しいと云うことの必然的な帰結、即ち「道理」だからです。
こうしてみると「一人勝ち」という言葉だけが浮き上がって見えてきます。
他は叩かれるのにこの言葉だけは何処となく「褒めている」「憧れている」ニュアンスが漂っているように見えるのです。
何故か？
それは「独占」というと語弊があるけれど、実は我々が心底密かに願っているのはこの「独占」だからではないでしょうか。
それを巧く交わすために、その一歩手前の順番と一歩手前の表現で「一人勝ち」と言い換えているのではなかろうかと。
何故なら「常時一人勝ち」「常勝将軍」になりたいのが本心。
この無敵状態こそ結果的に「独り占め」のなせる技で、言い換えれば「独占」こそ「常時一人勝ち」「常勝将軍」への最短ショートカットなのです。
その秘めたる願望がばれる事を無意識におそれて「常時」や「常勝（将軍）」を除き、更には国語的には刺激が強すぎる「独占」も引っ込めて「一人勝ち」程度に抑えたものの、願望だけは消えずについつい周辺の文言から「褒め言葉」「憧れ」扱いが滲みでてしまったのではなかろうかと推測しております。

（続く）

2021/9/25-2

（「も」後編）

では独り占め「独占」が何を意味するかと云えば、心理的には安泰と安定安心、実務的には手間いらずの無競争です。お手軽簡単便利の権化みたいなものです。Automatic sustainability (system)です。
もしそれぞれの団体、グループ、組織、企業体等が「一時」の安楽ではなく本心から存続（sustainability）を願うなら、英文の最初にある automatic（自動的に手間いらずで）を排すべきでしょう。
此処で自覚的、意識的に切り替えなくてはならないのは
「一時（自分の時代）さえよければ」を「是からも（後代のために）永続的にするには」に切り替える事と
「自動的に手間いらずで」を「一つ一つ吟味して」に切り替える事、その「手間暇を惜しまない事」ではないでしょうか。
（蛇足ですが、滅亡の端緒は安逸と怠惰、変化に対する思考を厭う心理、即ち手抜きです）
この両者から見て独占の根底にあるのは「自分だけ楽をしたい」という心理です。
それはお上だけではなく我々の中にも、この「独り占め願望」即ち「自分だけ」願望がある事にまずは気づく事が大切でしょう。
もう少し平たく云えば
「我々が独占に対して怒っているのは、独占者が自分ではなく自分以外の者だったから、その者に先を越されたから。トンビに油揚げをかっさわれたから」
と言う深層心理に気づく必要があるでしょう。
換言すれば「独占のチャンスがあった時、果たして自分はどうするか？」と言う事です。
今の実力からすればあり得ない「独占という立場がもし、手に入りそうになった時に自分はそれを退けるだろうか？」という問いです。
もし同じ事をするなら、行為者が変わるだけで事態は一向に改善されない事になります。
それを変えるには、自分をその時の立場に置き換えて、自分ならそう言われてどうするか？
或いは相手がそう言われたらどう思うかという相手の立場をも想像して、その上で自分が相手の返答に対してどうするかを見極めた上で始めて発せられる言葉
「自分が大切なのは当然だが、他人「も」大切にしないと」と云う時の
「も」
に着目する事だと思います。
自分もひとも、老いも若きも、男も女も、you and me also
この「も」(also)の一語が
交流、対話、
シェア、半ぶんこ、

相互互恵、相互扶助、
多様性容認
を生むと思えるからです。
そうして家庭教育、地域教育、義務教育、高等教育を含めて、この「も」を我々大人が自ら実践して手本を示し、子供達が何かを感じてくれればいいなと思っております。。

2021/9/28

（心理は認識の産物である）

以前の記事で
「人間は心理の生き物である」
と書きましたが、心理というものはある意味「認識の産物」かもしれません。
と言うのも物事に対する認識如何によって我々人間の心理が大きく異なる事が見て取れたからです。
例えば
「自分の航路は常に右肩上がりの一直線だ」
と言う認識でいる人（それを口にするかどうかではなく、深層心理の中でそう思ってしまっている人）と
「自分の航路は行ったり来たりの紆余曲折が普通だ」
と言う認識の人とではコロナ禍の様な困難に直面した際の心理状態がまるで違ってくる。
前者に生じやすい心理は「苛立ち」「困惑」「不安」「大失望」そうして自分以外を呪ったり、奴当たったり、恨んだり。
一方、後者の心理は、勿論余裕など抱きよう筈もありませんが、意外に落ち着いていられる。
と言うのも、前者に比べて後者の方が、自分が日頃「認識している常態（ノーマル）」と実際今、目の前で起こっている事の落差がかなり少ないからです。下る階段の段差が、前者は足を踏み外してしまいそうな程急なのに対して、後者は緩やかだからです。
起きている事象は同じにも拘わらず、それ迄に抱いている「認識如何によって」心理状態にこの様な差が生じるのを何度も目にしました。
又、これはコロナ禍に限った事でもなさそうです。
卑近な例で説明しますと
家庭内でちやほや育てられた子供が突然、ちやほやしてくれる筈のない社会にでた途端に拒否反応を示すのと
家庭内で、時には叱られ、時には褒められた子供が、社会に出て「叱られる」と「褒められる」との比率配分こそ違え、叱られる事自体は想定内なので拒否反応迄には至らない、
との差。
つまり大きな災厄の場合にだけ起こるのではなく、日常茶飯にこういった「認識如何に依って生じる心理の差」は至る所で起こっているのではないでしょうか。
ではどのようにしたら、この自分が思っている「常態」と「現実に生起する事態」との段差、落差を減らす事が出来るのでしょう？
答えは「（自分の）常態を何処に置くか」です。
換言すれば「（自分の）常態は是である、と言う認識の仕方」です。

そしてその「認識すべき常態」は決して自己都合に基づいた希望的観測や背伸びしまくったものではなく、派手さはなく地味ではあるがしっかりした根拠を持った道理（物事の自律的メカニズム）に基づいたものでなくてはならないでしょう。
では、何故（自分の）側に置くかと云えば
殺生与奪の権利を相手側（現実側）に持たせるより、自分の側に持たせた方が安心、安定を図り易いからです。
又
「現実（生起する事実）」を変えるのは大変ですが、自分を変えるのはそれより遙かに実現可能性が高いからです。
この様にして得られた認識に基づく「常態」を押さえてさえおけば、その産物である「心理」はかなり落ち着かせる事が可能な様な気が致しております。

2021/10/1-2

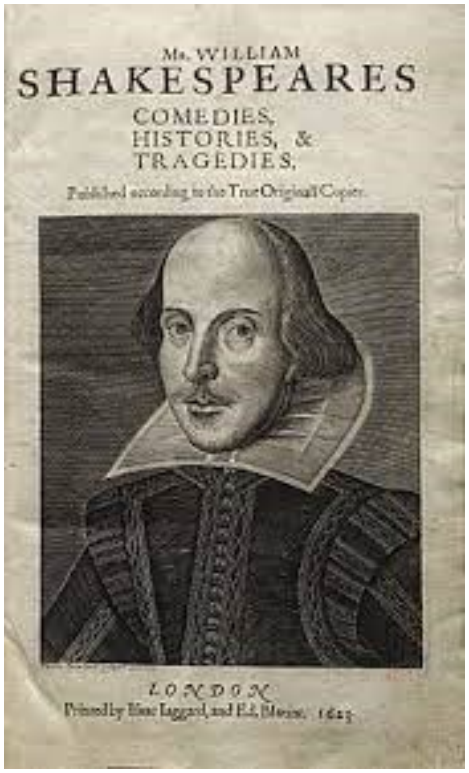
（答えに詰まる）

窓の外では雨と風が荒れ狂っている。
本日、今年何度目かの最大級の台風、16 号の接近。
数年前、在る地方での豪雨による土砂災害で多くの人命が失われましたが、その時はまだ「例外的な豪雨のせいで」という捉え方が大半でした。
しかし今では是までの学習効果により、既に我々の頭の中では地球温暖化が元で「毎年繰り返される恒例の事態」として認識されるようになりました。
又、コロナ禍をきっかけにお上になど幾ら訴えてもどうにもならないコミュニケーション不能の相手が存在することや、その対策に膨大なお金を矢継ぎ早に使い、最早いかなるパワー、国、中銀もその膨大なお金の偏った暴走を制御することが不可能になってしまって居ること、そしてこのお金の偏った暴走の行く付く果ての大国による「パワーゲームの影」が遠い世界の対岸の火事などではなく、既にもうすぐ隣に迄忍び寄っていることにも気づかされつつある昨今。
そんなお上から下々の我々に至るまで遍く「自分を万物の王」と勘違いした人間の我が儘勝手な振る舞いの中で、コロナ禍現下で発令されていた「緊急事態宣言」や「蔓延防止措置（令）」が解除されたと同時に「最大級の台風」が襲来。
本来開放感に酔う処、その出鼻をくじいたのは「傍若無人の振る舞いを諫める為に投げかけられた象徴的な出来事」なのではないかと自分一人かもしれませんが、俄に思い当たりました。
この自分なりの印象を「上述の出来事の擬人化」で述べますと
「このまま行くと、人間と地球の利害が決定的に相反してしまうぞ。人間にとっての善が地球にとっての悪になってしまう」
と。
更にキツイ言い方をすると
「改めぬまま、このまま行くと人間に取っての善である「成長（概念）」は地球からは悪と見なされて許されず、逆に人間にとっては負と見なされる「衰退」や「フェードアウト（退場）」するしかなくなるぞ」
と最大限の注意喚起を促されているのではないのかなと。
そしてもし地球と折り合いを付けようとするなら、最早上述のキツイ言い方の道をたどる以外になくなっており、それが「今後の我々の常態（ノーマル）」になるのだと云う仮説が当たってしまっているのだとすれば、一体我々はこの先どう考えれば希望を持てるのか？
何を原資にこの苦難を超えて進むパワーを得ることが出来るのか？
何か今、自分の眼前には何となく気づきながらもうやむやにしてきた問いが
「逃げるな」

とばかりにはっきりと明確に突きつけられて居るのをつぶさに感じて、答えに詰まってしまいました。

2021/10/7

（オマケの英語教室　To be, or not to be. That`s the question）



高校生の時、自分が哲学ごっこをしていた折、親父から
「自分の時代に旧制一高の学生で藤村操と言う奴が「この世とは何か」という大難問に直面し、最後には「この世は、曰く不可解」という「厳頭の感」という遺書を残して華厳の滝から投身自殺をした」
と言う話を聞きました。
親父は「曰く不可解」という前の長い漢文口調の全文を覚えていて何十年も経ったその時でさえ諳んじる（そらんじる）事が出来ましたが、自分は耳にした当時既に最後の部分しか記憶に残りませんでした。
そうして、その話を聞いたときに感じたのは
「そんなことで死ぬ人がいるんだ」
「なんか勿体ない」
でした。

そして少し時間が経った後に抱いた感想は
「遺書を全文漢文口調で書くなんて、ちょっと自分に酔いすぎているよな」
と言う意地の悪いものでした。
続いて同じく高校時代に喜劇も書いたシェークスピアの四大悲劇の一つハムレットを読みました。
その中で
「生きるべきか、死ぬべきか。それが問題だ」
という文章に接して「なんか変だな？」（と思いました。前後の筋と合わない気がしたのです。復讐を果たそうという人間が抱く言葉ではない様な気がしたからです。
それから幾星霜、最近英語に接する機会が増えたこともあって、この
「生きるべきか、死ぬべきか。それが問題だ」
の原語が
To be, or not to be. That`s the question.
である事を知りました。
その原語を見ると上記の訳が完全な誤訳である気がしたのです。
生きるとか、死ぬとか何処にも描いてないじゃないか。問題だとも書かれていない。
単に
「（今の状態が）然るべき状態なのか、そうではないのか。それが（自分の抱えている）疑問だ」
と書いてあるだけではないか。
もっと端折って云えば
「これでいいのか、よくないのか。よく分からない」
或いは
「自分のしている事はまともなのか、まともじゃないのか。悩んでしまう」
是なら復讐劇の中での前後との辻褄が合う気がしました。
それにしても何だって又こんな大袈裟な訳に仕立て上げちまったんだろう？
昨今、外国人と多く接してみると
「そうそう簡単に自殺なんかする奴はいない。大抵は相手を張り倒してでも生きるタイプが多い。「生きるべきか、死ぬべきか」なんて云うはずがない」
このハムレットの和訳にせよ、冒頭の藤村操の「厳頭の感」にせよ、
「我々日本人って、死にたがっているのかな？」
と言う気がしてしまいました。
と言うかやたらと直ぐ死を持ち出したがる。
表面おとなしく見える分、中身は結構「大袈裟な思考をする民族」なのかもしれないなぁとふと思ってしまいました。

2021/10/7-2

（オマケの英語教室 我々の「困った」気質）

冒頭まずは昨日の記事に関しまして
昨日の記事「オマケの英語教室 To be, or not to be. That`s the question」は文章中に英語があると云う事で余り考えもせず「オマケの英語教室」の方に掲載致しましたが、よく考えてみれば内容は明らかに「うと Q 世話し」ネタだった事に思い当たり上記題名を「うと Q 世話し＋オマケの英語教室 To be, or not to be. That`s the question」と改題したものを「うと Q 世話し」の方にも掲載する事に致しました。
又、昨日の記事本文に現出の
To be, or not to be. That`s the question
の邦訳が
「生きるべきか、死ぬべきか。それが問題だ」
であるのは誤訳ではないかと書きましたが、自分が上記邦訳から逆算して英訳するとすれば上記邦文は
To live, or to die. That`s the problem.
となります。
因みに to+動詞が文頭に出てくる場合は「〜する事は」とか「〜すべきは」という訳が一般的で動名詞でも済む処をこの形式にする事で格調を持たせたり強調効果を上げたりする場合によく使われます。
例えば
Loving is living
でもいいのですが
To love is to live.（愛する事は生きる事である）
とか。
又 problem（問題）と question（疑問）は全く別の事柄です。
After holding a question, it turned (changed) to a problem, I felt.
(疑問を抱いた後、それが問題に変わるのを感じた)
とすればお分かり戴けるかと思います。
前置きが長くなりました。
ではここから本日のお題。
昨日の記事の中で我々日本人の気質について少し触れましたがその続きです。
自らを省みるに、どうも我々日本人は様式美や想定の箍（たが）に縛られ易い傾向がある様な気がします。
時にはそれが悪さをして事実認識を誤らせるケースを何回か体験しました。
事実より期待値を優先してしまうせいです。

云ってみれば美味しい事だけを言って請け合い大衆を誘導する「ポピュリズム」に嵌まり易い自らの体質とでも申しましょうか。
こう書くと話が少しややこしくなってきますので今少し卑近な例でご説明致しますと、
テレビ番組中の「やらせ」
の例です。
一時此れ等は某国営放送、民放に限らず叩かれましたが、この「やらせ」を「演出」という言葉に置き換えてみますと実はテレビ番組というのは「やらせ」の塊みたいなものだと云う事が分かってきました。
「この方が視聴者に分かり易いですから」
とか
「この方が見栄えがしますからこのポーズで」
とか。
此れ等は「やらせ」とは云わず「演出」と云っている事は既に申し上げましたが要するに事実伝達よりも「見栄え」や「受け」狙い優先であると云う事に違いはありません。
「視聴者に分かり易くする為」はその実「視聴者の想定内に収める」為や「視聴者の期待値に応える」為の置き換えやすり替えでしか在りません。
無論是はテレビ局も悪いのですが、過度の様式美や想定内の箍（たが）を抱きすぎ、一方的な期待値の実現ばかりを求める我々にも原因があるような気がします。
自分を含めて「我々の困った気質」の様な気がしております。

2021/10/8

（裏腹）

古来、帝国や国家の崩壊原因として「格差の拡大」というのが結構あった様です。
構造的に見ますと中間所得層が減って国家運営の税収が減り民の要求を吸収できなくなる事が一つと、緩衝材としての中間層が減る事で差が顕著な富裕層と貧困層がダイレクトに衝突し易くなる事等が上げられます。
この見方はお金を介しての見方ですが是以外にも
「コミュニケーションの断絶」
と言うのがあるかもしれません。
何に起因するかは別として考え方、感じ方、暮らし方の違いに依って相手が何を考え、何を感じ、どう思っているのか補足できなくなる。
平たく申せば「意思の疎通が図れなくなる」と云う事です。
「金の切れ目が縁の切れ目」の諺の如くお金（利害）が先かコミュニケーションの断絶（心理交流）が先かを決めるのはなかなか難しい事ですが上位概念的に見ると矢張り「コミュニケーションの断絶、意思疎通の齟齬」の方が包含関係から見て上だと思われます。
そこで我が国で特に顕著な「コミュニケーションの断絶、意思疎通の齟齬」という現象の要因を考えてみたのですが、どうもお金に起因したものだけではない様な気がするのです。
というのも数値的に見て欧米、アジア、アラブ、中南米、アフリカ諸国より貧富の差が相対的にはかなり少ないからです。
勿論以前の我が国に比べれば現在の我が国の貧富格差は相当なレベルに拡大しております。
しかし上記の諸国諸地域程迄には至っていない。
なのに、観察する限り他の諸外国より遙かに国民同士の、しかも階層的な断絶と云ようよりも各個人同士の、換言すれば細胞レベルに迄細分化された断絶が拡がっている気がしますし
「コミュニケーションの断絶と意思疎通の齟齬」
が蔓延し常態化しているのを感じもするのです。
ところがそれとは裏腹に表向き「何の争いもなく、いとも和やかに歓談している様に見える」というこの不思議と違和感。
この状態に対する感想を以前自分は
「行儀が良くて礼儀のないのは最悪だ」
と表現しました。
「心がないのに外見だけ整っている方が却って始末が悪く手に負えない」
と言う意味です。
では何故そういった事態が全国民規模で且つ津々浦々に至る迄引き起こされているのか？
独断的で申し訳ありませんが、

自分の観察によれば
「極めて強い同調圧力下で
皆が頷ける様式美のみ。
それに対する
人目チェックを
一つの取り零しもなく
全てクリアしないと
仲間外れにされる」
と言う強迫（ほぼ脅迫）観念によって
引き起こされている。
「最低レベルですらここ迄重いと
怖くて何もできない」
となれば
「未達の実態を晒す危険を冒さぬ用」
仮面を被る
当り障りのない話に終始して踏み込ませない
距離を置く
逃げ腰になる
早々に立ち去る
密かに心の扉を閉じ
息を潜める
等が見た目の和やかさとは裏腹に密かに進行している
「コミュニケーションの断絶と意思疎通の齟齬」
の原因？
残念乍らほぼその様な結論に至ってしまいました。

2021/10/10

（現場からのレポート）

緊急事態宣言及び蔓延防止等措置（条例）の解除以降、酒類提供の最低条件（？）として飛沫拡散防止のためのアクリルフェンスがマストとなっております。
それで当店も 9 時までの営業及び 8 時までの酒類提供のためにかなりのコストと手間を掛けてこのアクリルフェンスを導入しました。
しかし。
とはいえ矢張りコミュニケーション上は却って疎外感を生んで仕舞う恐れが感じられましたので表に
「ご家族及び知己の間柄であれば、お申し出くだされればフェンスは従業員が撤去致します」
と黒板に板書したものを出しましたところ、昨日一日ですが 100％のお客様が撤去を希望されました。
この結果、明日からは逆に「希望があればフェンスをセッティング致します」に変えようかとすら思っております。
それにしても（余談になりますが）TV 番組の「飛び込み食レポ」なんかで、何処に行ってもアクリルフェンスがあるのを思いだして
「是って本当なのかな？」
と思ってしまいました。

と言うのも何処へ行っても同じタイプのアクリルフェンスなのは、お店側ではなく番組スタッフが撮影機材と一緒にバンに積んで持ち歩いているのを毎回その場でセッティングしている様な気もしますし、上述のようにお客様はほぼ100%
「フェンスは邪魔だ」
と思っているのが実態で、殆どどの店でもフェンスを外しているのが真実のような気がしたからです。
もし是（是というのはTV番組のフェンスのやらせではなく、100%フェンスが邪魔でセッティングしてもほぼ全てが取り外されている）のが実態であるならば、お店側にとってもフェンスのコストは全く無駄になりますし、保健所にも「フェンスを張ったからもう安心」と変な楽観を持たれては困ります。
もし是が実態であり且つ又変異株の変異の変遷100%追跡が非現実的取り組みであるなら、それこそ「コロナゼロ」から「ウィズコロナ」に戦略及び認識転換して、重点をむしろ
「罹患する事を前提」に
「感染後の」重症化抑制対策
「感染後」回復期の後遺症軽症化対策
等に移した方がより現実的な「解」なのではなかろうか
と思った次第です。
以上、
「横浜市青葉区すすき野
ネパール料理ナマステエブリバディ
現場からのレポート」
でした。

2021/10/13

（オマケの英語教室 Media）

外は雨。
今日も今日とて又言葉の謎解きゲームです。
「あんたも暇ねぇ」
とおっしゃらずにどうかお付き合いの程を。
英単語で且つ殆ど日本語化している Media（メディア）は外来語ではなく純然たる邦訳では「媒体」と訳されます。
それはそういうもんだとしてそのまま覚えてしまえばどうと云う事はないのですが、自分の感覚ではどう考えても media と言う語の中に「媒体」という日本語に当たるものが感じられなかったので、そもそも media の原義は何だったのかを考えてみました。
まず例によって語幹の引き出してみました。それで語幹は medi-。
Medium（ミディアム）肉料理の中くらいの焼き方の呼称。
Median（メジアン）統計学やマーケティングで使われる「中央値」の呼称。
Meditation（メディテーション）最近はやりの「瞑想」の呼称。
自分が知っている英単語の medi-はこのくらいでした。
サンプル数は少ないですが、以上を通見して得られる共通項は「中（なか）」又は「中くらいの」それと「中央」で共通項は「中」となりますでしょうか。
最後の「瞑想」がなんで「中」か、と問われれば自分なりの解釈では「瞑」の具体的中身が「頭中想」「心中想」「眼中想」だと思われたからです。なので、此処での共通項も「中」であるとすれば media の原義は「中」が源流にある事になります。
そこでまず前者の「中」を media に宛がってみると「媒体」は「亻（にんべん）」が付きますが「仲介役」の方がぴったりの訳語の様な気がしてきました。
発信者 A の言説や映像を視聴者 B に「差し渡すなかもち役」という意味です。
しかし「中」をよりブレークダウンした「中（なか）」や「中くらいの」又は「中央」を宛がってみても今ひとつしっくりこないと申しますか、薄ぼんやりしていてすっきりしません。
何のなか？
何が中くらいなの？
何の中央（まんなか）？
と言う訳です。
それで次には上記の「中」をそれぞれ別の日本語に置き換えてみる事にしました。
曰く
「なか」は「中身」「真意」
「中くらい」は「大多数」又は「一般的な」

そして最後の「中央」は「王道」「本流」
此処で、以前自分の記事の中で話題にした「中庸」という言葉を思い出しました。
中庸の原義は我々が普段思っている「ほどほど」とか「余り出しゃばらずに」等の「当たり障りのない」という意味とは全然違って「常に（是を表す語が「中」）偏らない努力（是を表す語が「庸」）」なのだそうです
と言う記事でした。
そこで又々思ったのが
「今のメディア（media）ってそうなっているんだっけ？」
でした。
「常に前後左右上下に偏らない努力をしている仲介役」
になっているんだろうか？
今日も又、朝っぱらから辛気くさい話で申し訳ありませんでした。
じじぃになると説教臭くなるのです。
是は自分の様な暇じぃさんによく見られる一般的な「常態（ノーマル）」なのです。
他意はなので悪しからず。

2021/10/14-2

（オマケの英語教室 本当に「勿体ない」really, truly “Mottainai story” indeed.）

受験で長文読解というのが在ります。
やたらと関係代名詞（that, which, whom 等など）や条件文（if）、時制と完了形を組み合わせた複雑な構文などがごちゃごちゃと入り交じった文章が出てきたりします。
そうしてそれを読解できないと試験に落ちる。
しかし、現実の会話やビジネス文章始め私的な文章に於いてもそんな話し方をしたり書き方をしたりすれば、まず間違いなく「嫌われ」ます。
ですからみんなそんな話し方はしませんし、そんな書き方もしません。
むしろそうならない様に気をつけているはずです。
これに関しては何も英会話に限らず、我が国国内で同朋同士話すときでも一緒でしょう。
書くにせよ話すにせよ「相手にわかりやすく表現する（伝える）」というのがコミュニケーションの大原則だからです。
ところが冒頭のような複雑でトリッキーな文章が外国では一般的で、それが話せたり書けたり出来ないことには何事も始まらないと勘違いしてしまうと英語を話そうという気力が沸いてこなくなります。
そういう意味ではこの「ふるいに掛けて落とすための引っ掛け粗探し英語」というのが、我が国国民が「英語を始めよう」という気力をそぎ落とす役割しか果たしていない様な気もするのです。
「言葉というのはコミュニケーションを円滑にする為の道具だ」と言う原点に立ち返れば直ぐにも分かりそうな事なのですが、案外教える側はそれに気がついていないようです。
話し言葉にしても書き言葉にしても長い一文である必要は全くないのです。
短い文章に区切って、それを続ければいいのです。極端に言えば単語だけの部分があっても何ら差し支えないのです。相手に伝わりさえすれば。
後の全ては定型や定式に合致するか否を判定する受験の様な審判ではなく、相手が自分の話を分かってくれるかどうか、興味を持ってくれるかどうかの「その場の運用」の問題でしかないのです。
定位や定式外のものがたまに混じっていたとしても、直上の目的にかなっていれば外国人は気にもとめませんし粗探しもしませんので、間違うことを恐れて自分の方から話しかけるのをやめる事程勿体ないことはないのです。
そもそもコミュニケーションとは往々にして「当初お互いが抱いている思い込みや情報不足によって知らぬ間に生じた誤解の訂正の仕合っこ」みたいなものです。

その訂正の仕合っこが出来ないというのは、実に実に大きなチャンスロスとしか言い様がない様な気がします。
本当に、本当に
「勿体ない」
話だと感じておるところで御座います。
Really, truly “Mottainai story” indeed.

2021/10/15-1

（そもそもの 前編）

9 月末に緊急事態宣言や蔓延防止措置（条例）等が解除されはしたものの、コロナ感染が終息したのかまだ年末に向けてぶり返しがあるのか誰にも分からない現在。
分かっているのは従業員の感染リーク以来（現在は既に復帰）それ以前との売上比較で 10%のダウンが続いていることとネット上で出している電子書籍が全くの鳴かず飛ばず状態で、それが売上減の穴埋め役としてまるで機能していない事態が常態化している事だけ。
それを踏まえて今後の身の振り方を
「さて、どうしようか？」
と考えることが多くなった昨今。
このような場合、自分がよくしてきたのは
「そもそも発端は何だったんだっけ？そもそも何をしようとしていたのか？何をしたかったのか？」
と言う自問自答を繰り返す脱出作戦の敢行。
ところが今回の様なビッグイベントは初めてなので、一体どの辺りまで遡ればいいのか見当が付きかねております。
起業時までいいのか？
それとも社会人になった辺りまでなのか？
はたまた物心ついた辺りまでなのか？
（自我が芽生えた頃という意味です）
さて、何処が一体「そもそもの発端」なのか？
こういう場合、つまり迷ったときには一気に大本の元まで遡りたがるのが自分の性分なので物心ついたときまで遡ることにしました。
で、直上の「性分」という言葉から思い当たったのが
「何でもゼロから始めないと気が済まなかった」なぁと。
それを説明するのに以下（次の記事）で記載を致しますが「こう言う書き方をしたらまず間違いなく読んだ人から反感を買うな」と思いつつも、それを覚悟の上で敢えてしたためてみたいと思います。
なぜならそれは事実だったからです。
反感を予測して無難に丸めて書いても仕方がないと思ったからです。
（続く）

2021/10/15-2

（そもそもの 中編）

まず、自分は子供の頃友達から「お金持ちの子」と言われるのが嫌でたまりませんでした。「何故貧乏な家の子に産んでくれなかったんだ？」と何度も心の中で親を恨んでいました。というのは、お金持ちだと「ゼロから始められない」からです。何をどんなに努力してやっても「お金持ちの子だから当然だ」と見られるのがどうしても納得がいかなかったからです。だったら鼻から「そんなハンディ」のない貧乏な家の子に生まれた方が良かったなぁと云う理屈でした。
社会人になった時も「偉いさんの息子」と言われるのが嫌で、身の上をひた隠しに隠しておりました。ところが直接の上司が隠している身の上を周囲に漏らしている事を知り、知った自分は新入社員にも拘わらず、その上司の机をドンドンと叩く程の猛抗議をしたこともありました。
コネで入っておきながら虫のいいこと言うなという非難を受ける自覚があるので先に申し上げます。
幾ら親が心配からした事とはいえコネで入るのは自分の性分が許さないし、第一そんな大組織の中に入りたくもなかったので親の顔をたてて面接だけは受けましたが敢えて落ちる様自爆モードで臨んだ最終面接で、あろう事か他の役員全てが反対したのを押し切って最上位の役員が「面白い奴だ」と採用してしまったのです。
そうして最後の起業時。
性分の合わない処でなまじ出世して仕舞ったのが誤りの元でした。
結果うつ病になり、左遷、リストラ、降格と転がる坂を転げきってお払い箱同然になりました。そうして最後に思い至ったのが
「今生は一回限り。ならば自分の性分に合わせよう」
そうしてそこから
「この大組織の金看板の外で出て、その目に見えない「マジカル後ろ盾」のない自分だけの素力、裸力でやっていけるんだろうか？
一社の為だけに役立つスケール観でいいのだろうか？」
という考えが浮かんできました。
それでその当時、何となくおかしくなりつつあるように感じられた「社会を変えてみたい」と思うようになりました。
その為には「多忙で耳を貸してもらうことが出来そうもない現役層」を第一ターゲット候補からまず外しました。
その代わり、その周辺や辺境にいる「現役社会に入る前の学生さんや、現役社会の檜舞台からフェードアウトした退職者、その時代にはまだ現役社会ではメインにはなり得なかった在日就労外国人、更には会社在籍期間中、まさに自分の身の上で起こったうつ病等で社会や

会社からドロップアウトせざるを得ないような我々辺境人達」の方がひずみを感じるアンテナが高い可能性があると考えの駒を進めました。
そして「起爆剤になるならこの層だろう」と予測し「であるならまずは自分の身の上を活かして」とメンタルヘルスのコンサルティングを始めたのが 7 年前の事でした。
それまで在籍した会社の分野とは全く何の縁もゆかりもない分野でのスタートでした。
（続く）

2021/10/15-3

（そもそもの 後編）

直近では在日就労外国人への支援と交流を目指す事業として、直前記事既出の 4 者を俯瞰した自説「就業期間社会」相関図から生まれた具体的な事業ビジョンである「国際間、世代間、たまたま隣にいる人とのコミュニケーション事業」の中の、当初一番疎遠かもしれないと思われた「国際間コミュニケーション」事業に、ひょんなきっかけが元で着手し、今ではそれにかかりっきりになっております。
但し、創業（設立時ではありません。下で説明）の取っかかりであり現在かかりっきりでもある生業（なりわい）は飲食店なのですが、その範疇に収まりきれないものとして、当座の最終目的を視野に、電子出版事業、教育事業、在日就労外国人支援事業の組み合わせという新しい形の業務形態の取っております。
しかしその芽が出ない。
会社「設立」以来 7 年。
飲食業「創業」以来 4 年。
電子書籍、教育、外国人支援「開始」以来 3 年。
これだけ色々トライし、且つ長期に渡ってもまるで芽が出てこない。
矢張り何かがおかしいに違いありません。
上記の時系列年表を見ると経過後 2 年でしかないコロナ禍のせいではないことがはっきり見て取れます。
「スケール観が大きすぎて的がぼやけている」からか。
「ゼログラウンドのゼロに未だまるで未達の中途半端」だからか。
狙いはいいが「機、未だ熟さず」というだけなのか。
或いは「全部が全部」そうなのか。
考えれば考えるほど混乱は増すばかり。
それで「こういう時こそ初心に戻って今一度」と思い
「そもそもの発端、目的はなんだったのか？」
「表出（当初）の目的と内心（現下）の目的に違いが生じていないか」
「当初の目的に対する現下の実際の振る舞いが合って居ないのではないか（途中から何かを勘違いし始めていやしないか）」
この問いをつかず離れず諦めず、執（しゅう）ねく問う事に致しました。

2021/10/17

（終了のお知らせ）

思うところが御座いまして「ニューノーマル探索サバイバル日記」の発刊を、今月 10 月をもって中止することに致しました。
その辺の事情につきましては明日 10 月 18 日の「うと Q 世話し」の 2 記事（前編、後編）でご説明申し上げさせて戴きます。
皆様に於かれませては二年に近い長い間のご購読、誠にありがとう御座いました。
心底より感謝申し上げます。

尚「前座の英語」につきましては今後とも発刊を継続する予定です。
又この記事の「うと Q 世話し」は別の形で単発に書くことを予定しております。

うときゅういっき

2021/10/19-1

（ 隠された目的の清算 上）

25 歳の時、生まれて初めて小説を書きました。
題名は「リーズナブル・アクター」
その当時、語彙がそれしかなかったのでそう名付けましたが真意は
「日常生活で無邪気、自然体を装いながら、緻密に計算し尽くした芝居を演じている役者資質の卑怯者物語」と云う意味でした。
幼い頃からそんな処があった「自分の不実」を題材にした処女作でした。
突然今になって何でそんな昔の事を書くのだと思われるかもしれませんが、自分の中ではそれ以来、いや生まれてこの方、常に「自分は本心を隠していつも芝居をしているのではないか」という疑念が頭から離れないからです。
あれ以来 40 年以上が経った今も同じなのです。
そんな眼で前回の記事を見返してみると、或いはこの二年近く書いてきた「サバイバル日記」を通観してみると
「大変な目に遭っているという話こそ実は「おいしい話」として仕組んできたのがこの日記だったのではないか」という疑念が湧いて来るのです。
もしそれが真実だとするとこの「ナマステエブリバディ劇場」で舞台装置として宛がわれた従業員は大迷惑この上なしです。
是だけでは何の事か分からないと思いますので今少し順序立ててお話し申し上げます。
まずアウトラインを抱いて戴く為に非常に簡単な喩え話をしますと
「人は他人の成功話としくじり話を聞いてどちらを喜ぶか？」
「頭のいい奴と多少脳天気な奴のどちらの傍にいた方が、気が置けないか？」
と言う事です。
それを第一の価値観とし、それがもたらす「最後にピークがやってくる 9 回裏逆転満塁ホームランや聾唖になってすら第九を生み出したベートーベンのそのテーマ「苦悩を通して歓喜に至れ」の壮大なる感動絵巻の完成」が「隠された真の目的」だとすればストーリー前段の「馬鹿な失敗」位おいしい話はなく、
「どん底だ、悲惨だ、いつ迄経っても芽が出ない」と言う裏で「着々と隠された目的を達成している満足感」から更に余裕が出、
その余裕が「この期に及んでのあの落ち着き。相当な大物かも」という副産物まで付いてくるとなると「おいそれとは成功出来なくなって」仕舞います。
それで成功直前で「敢えての失敗」を挿入して成功を先延ばしに。
すると又々「あそこ迄の不運も珍しい。だのに平然としている。益々持って大物かもしれない」と評価はうなぎ登り。
そしてそれを耳にして楽しむ生活。

しかし是は自分に取っては密かな大成功ですが成功を先延ばしにされて苦労している従業員は堪ったものでは在りません。
ボスは苦労しているのだと信じて疑わず身を粉にして働いてさえいる訳ですから。
是はもう完全なる裏切りです。
このボスは正真正銘「根っからのズル」です。
そうしてその不実者が自分だと気づいてしまった。
いや、薄々は気づいていたズルを目の前に突きつけられ、
最早これ以上見て見ぬ振りが出来なくなってしまったのです。
（続く）

2021/10/19-2

（隠された目的の清算 下）

しかし是はコロナ禍以前の自分の問題。
コロナ禍を経験した自分にはそれに加えて新たな問題が上積みされました。
問題がコロナ禍を挟んでの連立二元方程式になってしまったのです。
二元の内の第一、コロナ禍以前の問題は自分のストーリー優先だった点を改め、従業員の生活安定を最優先して「サバイバル日記」主体の生活を止め、経済活動に専念する事で解を得られるかもしれません。
しかし今回積み上がった二元目のコロナ禍経験以降に急浮上した深刻な問題は、
「コロナ禍を招いた主因であるそれ迄の経済活動に単純に復帰する事は、とりもなおさず更に地球環境を破壊する事になるという相反利害関係をどう止揚するのか」
という我々人類存続の可否に関わる超絶難解なものでした。
平たく申せば
「ボス、お遊びは止めて（コロナ禍前の様に）家業一筋に専念して下され」と発破を掛ければ済むと言う訳には行きそうもないと云う事です。
単純に元の生活に復帰や回帰するだけではどうも済みそうもないと言う事です
「儲けて元気を取り戻す為には活動エネルギーを最大限抑えないといけない」というとんでもなく妙な事態になっている訳です。
「成長するには抑制が必要だ」と是迄の常識概念からすれば無茶苦茶な事を言っている訳です。
「人間が力一杯活動して吐き出すのは二酸化炭素ではなく酸素にしなさい」
位のコペルニクス的転回レベルを要求されているのです。
こんな無茶苦茶な要求をされるのは人類史上我々が初めてでしょう。
彼のネアンデルタール人もアメリカ大陸のコロンブスも蒸気機関のワットも飛行機のライト兄弟もそんな事を言われた事はなかったでしょう。
兎にも角にも我々が初めてなのです。
当然誰も「解」を知らない訳です。
そういう意味では我々は平等な位置に立っているのです。
格差拡大の時代にこの「平等」は何という皮肉でしょう。
しかしそんな評論をしている暇はなさそうです。
将に今の我々にはそんな言葉遊びをしている暇は。
ですが「急がば回れ」にも一理あります。
無責任な評論はノイズでしかありませんが回り道であっても十分な議論（知恵を出し合い磨き合う事）は必要でしょう。
しかしその議論を主導する人達の内心の奥底に潜む「隠された目的」が、意識するしないに

拘わらずコロナ禍以前同様「自分の都合」からのものであれば求める「解」は決して見つからないでしょう。
代わりに
「成長するためには抑制が必要だ」
という無茶苦茶な要求を達成するには故事に倣い
「成長し伸びる（実る）程、地球に対して頭を垂れる稲穂になる」
が解の傾聴すべき重要なヒントになるかもしれません。
一介の零細企業主が何故こんな事を気にするのかと申せば、
夫々が「隠された目的」をきちんと清算して本来の目的に回帰しなければ、自分の身上にも地球上の人類の行く末にもこの先とんでもない災禍が待ち受けている絵姿がはっきりと見て取れるからです。

（著者プロフィール）

うときゅう いっき

本名 宇都宮一貴（うつのみや かずたか）

一九五三年東京生まれ。早稲田大学第一文学部ロシア文学科を二回留年の後、卒業。大手電機メーカー商品企画部に二十年間勤務。同子会社経理部等に十六年間勤務。四十歳から五十二歳まで十二年間重度うつ病を罹患。左遷、リストラ、降格、離婚、家族崩壊の後、生還。定年退職後、嘱託社員契約を辞して株式会社うとQを設立。趣味は観察すること、考えること、書くこと、カメラの四つのｋ。著者名は苗字、宇都宮一貴の音読みで、中学校時代の仇名に由来する。

宇宙の「う」

東京都の「と」

宮殿の「きゅう」

数字の「いち」を詰まり音便で「いっ」

貴族の「き」

で、うときゅういっき　となります。漢字にするとかなり御大層な名前に見えますので、敢えて音読みひらがな表記にしております。

ホームページ：http://utokyu.co.jp

（出版情報）

著　者 うときゅう いっき

発行人 宇都宮一貴

発行所：株式会社うとQ

〒二一五 - ○○一八

神奈川県川崎市麻生区王禅寺東５丁目３４番７号

電話：○四四 - 九八九 - 一六九八

発　売 株式会社 うとQ

編　輯 ナレッジフォレスト（大竹鉄哉）

カバーデザイン＆DTP 製作 ナレッジフォレスト（大竹鉄哉）

©Kazutaka Utsunomiya uploaded in japan 2020

発行日：二○二一年十月二十九日　初版発行

本書の一部または全部について、著作権上、著作権者の承認を得ずに、無断で複写、複製することは禁じられています。

（その他著書）

●「人生終わったなと思った時に読む本」（二○一五年刊 ソフトカバー在庫僅少）

●「人生終わったな」と思う間もなくトンネルの闇を抜けて広野原（二〇二〇年刊 amazon kindle）
●「コロナ禍 同時進行執筆 ナマステ別館堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記」二〇二〇年壱月の巻〜十二月の巻」（二〇二〇年刊 amazon kindle）
●「コロナ禍 同時進行執筆 ナマステ別館堂主人「二年目の ニューノーマル探索サバイバル日記」二〇二一年一月の巻〜十月の巻 最終巻」（二〇二一年刊 amazon kindle）
●コロナ渦 初年度 カリー屋ナマステ別巻堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記」（二〇二一年刊 amazon kindle）
●（初本）カリー屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「冬のひまわり」（二〇二〇年刊 amazon kindle）
●（改訂本）カリー屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「冬のひまわり」（二〇二〇年刊 amazon kindle）
●コロナ渦カリー屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「子、親を選べず」三部作（二〇二一年刊 amazon kindle）
●コロナ渦カリー屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集（合本）「子、親を選べず」新四部作（二〇二一年刊 amazon kindle）
●コロナ渦　カリー屋ナマステ別巻堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記」
二〇二一年 上半期（合本）
（二〇二一年刊 amazon kindle）
●ネパールカリー屋「ナマステ」別館堂＆英語教室「すすき野留学」主人
辞書を置かない考える英語教室「前座の英語」Pre & Prep. English 第 1 集〜第 4 集）
（二〇二一年刊 amazon kindle）